Ａｍａｒｙｌｌｉｓ

幼ゐこみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｍａｒｙｌｌｉｓ

【Ｎコード】
Ｎ４１４８Ｍ

【作者名】
幼ゐこみ

【あらすじ】
《恐怖》に支配されつつある大陸には、人の皮を被り、人を喰らう人狼が跋扈していた。魔女アマリリスは、魔物と《恐怖》の蔓延る土地をさまよい歩いていた。

【0】 AMARYLLIS

0.

――彼らに対抗するには、これしか方法がないんです。
涙であたしの手が濡れる。その涙はあたしの涙じゃない。ここから離れたくても、彼の手は絶対にそれを許してくれない。
――私達に出来る精一杯の事が、これだけ。
もはやあたしの表情なんて彼の目に入ってはいなかった。あたしの意思を汲み取る余裕なんて、残されていなかった。
――この村を守るためなんです。
彼の掴む服は千切れそうになっている。冗談じゃない。この服、幾らで仕立てたと思っているんだろう。この村を仮に救ってやったとしても、どうせ仕立て直す資金になんてならないのに。でも、彼にそんなことが分かるはずもない。
――お願いです。お願いです。もう私達は、犠牲を出したくないんです。
よく言うものだ。見つけられず、退治できないとあれば、疑わしいというだけで同胞を殺せるようなニンゲンどもが、今更何を言ったって、綺麗事にすらなりやしない。
――村が滅んでしまうなんて、今までの尊い犠牲者だってそうは思ってはいないはずです。
それはどうだろう。犠牲者には二通りいる。村の意向とは関係なく死んだ者。村の意向によって死んだ者。この二つだ。村の意向によって死んだ者が、本当にこの村の存続を願っていると思うのだろうか。理不尽にも、全の為に、生きるという権利を踏みにじられた者全員が、踏みにじった者たちを恨まずに見守っていると本気で思っているのだろうか。
――お願いします。報酬ならいくらでも払います。お願いします。

何でもしますから。
　頼む時だけ腰が低いのはこいつらの専売特許だろう。そうやって、願いを叶えてやったらやったで、後で追いたてるのだ。ニンゲンなぞ、一人ひとりはどうであれ、集団になれば、信じられないほど卑しい生き物となってしまうのだから。
――お願いです。倒してください。この村を救ってください。
どうする？　どうしよう？　見放す？　それもいい？
――お願いです。どうか、人狼を退治してください。
　義理なんてない。この村が滅びようと、あたしには全く関係ない事だ。この村が亡くなっても、あたしは何も困らない。あたしがこうやって息をしている間に、この大陸の数多の村が、滅ぼされているのだから。
――お願いです。人狼を、退治してください。
　あたしには関係ない。服を引き千切らんばかりの男の力だって、あたしの心を動かす要因になんてならないものだ。そう、あたしには関係ない。関係ないのだ。あたしの手は、あたしのこの意思に反して動くかもしれない。右へ、左へ、とゆっくり動くかもしれない。
　でも、それは何の関係もないこと。もし、この直後、村人に化けた人狼が引き裂かれて死んだとしても、あたしとは全然関係のないこと。
　あたしは人狼退治なんて、してはいけないのだから。

1. COUNT

1.

金色の髪を夜風になびかせながら、アマリリスは数を数えていた。歌っているかのような夜風にリズムを与えるかのように、もしくは、夜風にリズムを取らされているかのように、彼女はただひたすら、数を数えていた。

夜風の中で煌めくサファイアの目は、夜の空という海を泳ぐ星達を見つめ、静かに微笑みかける。それに答えるかのように、星たちもまた、アマリリスに微笑みかけてくるかのように瞬いている。彼らの光があれば、孤独なこの夜もまた、無難に過ごせるかもしれない。

夜風は冷たく、決して温かみを帯びていたりはしないけれど、その上空で瞬く星たちもまた、明るい輝きとはいえないけれど、アマリリスにはそれで十分安らぐことが出来た。どうしてかは分からないし、考えたこともあまりないけれど、アマリリスはこうやってたまに、独りで過ごす夜に星の瞬きを求めて空を見上げ、数を数えることがある。

そんな時、自分の中にどんな感情が芽生えているのか、もしくは支配されているのか、アマリリスは深く考えない。ただ、星を見つめながら数を数えていたら楽になるから、そうしている。ただ、それだけのことだった。

しかし、そんなアマリリスにも、大体の予想はついていた。

彼女がそんな事をする日は、だいたい、疲れている時なのだ。精神的だったり、肉体的だったりとまちまちだけれど、心にゆとりがない時に、ぼんやりと数を数えているような気がしていた。今だってそうだ。今日は心も体も疲れてしまった。

――あいつ、どこ行ったのかな。
ふと数を数えるのをやめ、アマリリスは考える。
今日はこの大陸の何処にでもありそうな平凡な村を通って来たばかりだった。ただ通るだけと考えていたのに運悪く喰らった足止めに、その事が呼び寄せる出来事のあれこれ。そして、さらにその出来事が呼び寄せる面倒な事態のあれこれ。
考えるのも疲れる。
――まあ、いいか。
アマリリスはもう一度星を見つめ、数を数え始めた。だんだんと眠気が襲ってきたけれど、数を数える口は止まらない。急に冷たい風が吹いて来て、傷を負ってしまった右太ももにやや沁みた。アマリリスは膝を折り、その場に座り込んだ。まだ、星を見るのを止める気はないし、数も数え続けている。
日が沈んでから、どのくらい経ったのだろうか。
これからアマリリスに出来るのは、寝ること。眠気が来るまで、数を数えること、星を見つめること。どのくらい続くのかは、アマリリス本人にも分からない。ただ、今できるのはこれだけという事ははっきりしていた。
「狼のにおいがする」
何も考えずに、ただ言った。それが、明日やる事に直結する。
アマリリスの身体の中で、高温の気が巡っていった。

2. LYCANTHROPE

2.

闇夜の中、静けさの中で、アマリリスは目を開いた。
いつの間にか星も見上げておらず、数も数えていなかった。けれど、彼女には、そんな事実に気を取られている暇なんてなかった。開いたままの目で見つめるのは、夜風も星光も届かない闇の中。木々に囲まれ、闇の揺り籠となっている空間だった。
そこからアマリリスを見つめる視線が、ひとつ。そして、殺気も、ひとつ。それが何者か、アマリリスは時間のある限り考えた。自分に襲い掛かってくる可能性のあるもの全てについて、思い出していた。そして、においから、気配から、少しずつ候補を絞っていく。こういう時、最後に残るのは、いつも違って、いつも一緒。
――今日の村でのいざこざの忘れモノか。
アマリリスはそう理解し、視線に向かって目を細めた。挑発じみた笑みだった。それを相手がどう取ってもいいように、身構える。得物なんてない。あったとしても、晴雨兼用のピンクのフリルのパラソルぐらいだ。それにお気に入りだから、あまり使いたくない。
そもそもの話、アマリリスには得物なんていらない。考える頭、感じる身体さえあれば、十分身を守れる。それが、アマリリスだった。
アマリリスを見つめる視線がぐらりと歪む。
――来るか。
闇夜に響き渡る咆哮。寂しげなその響き、それを聞く度にアマリリスの心は揺さ振られ、彼女の身体を内側から震わせる。
それが導くのは、血への欲求。欲望のままに力を放ち、目の前の化け物を滅茶苦茶にしたいという暴力的な欲求。そして、それらが

もたらす快楽への欲求だった。
満月の光が、アマリリスと、視線の主を浮かび上がらせる。
見つけた村では、たしか、スーファと呼ばれていた。小さな子どもや、友人、家族からは、スーと呼ばれていた。
魔女であるアマリリスでも、美しい青年だと思った。まるで、神話から出てきたような、森に住む精霊の血を引いているかのような、美しい青年、スー。
その美しさは、やはり、人間や魔女だけでなく、異形の者さえも引き寄せたのかも知れない。
――それとも、たまたま運が悪かっただけかしらね。
アマリリスはくすりと笑んだ。何にせよ、相手がこの青年（スー）を外皮としたことに、アマリリスは嘆くどころか興奮さえした。
――美しいものを引き裂ける。
そんな醜い悦びが、アマリリスの中に芽生えた。しかも、相手はしぶとく、逃げ足も速かった。
――簡単に潰せないということが、こんなに楽しいなんて。
気付けば、アマリリスは声を上げて嗤っていた。
月光を浴びてこちらを睨むスーは、単なる美しい青年ではない。その外皮を捲れば、すぐに、同じくらい美しく、どんなに低く見積もっても、いい値段で売り捌ける毛皮が現れる。
「……化け…物め……」
他ならぬスーに言われ、アマリリスは嗤うのを止め、青い目を向ける。
「化け物はお互い様だろう?」
「違う」
スーの目が鋭く光る。もう目の前にいる者は、生まれた時からのスーとは別人だ。
「我々は、化け物ではない。我々は、誇り高き狼。人間とも、貴様ら魔女とも違う、世の支配者《恐怖》に打ち勝てる唯一無二の生き物、ライカンスロープだ」

スーの目が光り、夜風に長い金髪が揺らぐ。敵意によって暴発しそうな力に、彼の表情は歪みきっている。けれど、アマリリスはそれを醜いとは思わなかった。

「あなたがライカンスロープでも、ルー・ガルーでも、ワーウルフでも、ヴァラヴォルフでも、構いはしない」

アマリリスの青い目は、どこまでも冷静だった。

「例えベルセルクだろうと、ウールヴヘジンだろうと、あたしには関係ない」

スーの荒い吐息が、アマリリスの闘争心を刺激する。

「あたしが求めているのは、あなたが人狼であること」

スーが飛ぶように駆け出した。しかし、アマリリスは、それをじっと見つめているだけだった。

3. METAMORPHOSE

3.

《恐怖》が包んでいくこの世の中にあっても、木漏れ日のようなやわらかな暖かさに包まれた小さなこの村を、ディアナは愛していた。

この村で生まれ育ったわけでもないのに、村人達は自分を受けとめてくれる。普通の人間じゃない不気味な力を持った自分を、村人達は受け入れてくれた。

その事が、ディアナには嬉しかった。

生まれた村では、ディアナは悪魔と呼ばれていた。黒い髪に緑の目、時折激しく身体が痛み、大きな雌獅子のような漆黒の獣へと姿を変えるディアナを、村人どころか家族ですらも不気味がり、長く教会の地下に閉じ込められた。

だから、生まれ故郷の村が人狼達に襲われた時、ディアナはこれをチャンスだと思った。

村人たちは真っ先にディアナを疑ったが、ディアナにそんな事が出来るわけもないとも知っていた。一方、人狼達も、あからさまにディアナを疑わせようと強く出てこなかった。そして、村人たちは一人、また一人と、内臓を喰らい尽くされた姿で発見されていき、疑いと殺し合いの果て、村はとうとう滅んだ。

ディアナが教会の地下からやっとの思いで抜け出せた時、村では屍が放り出され、生き残った者がいたのか、全て滅んでしまったのかすらも分からない状況となっていた。人狼達もすでに去り、墓場と化した絶望の場所。そんな中に一人残されていた。

その後、各地を放浪し、辿り着いたのがこの村。

ディアナは驚いた。どうして、村人たちが疑いもなく自分を受け

入れるのか、理解出来なかった。《恐怖》が世を支配しているという時勢にも関わらず、また、各地で人狼によって村だけでなく町すらも滅ぼされているという噂が飛び交っているにも関わらず、どうして村人たちが、自分を疑わないのか、ディアナには分からなかった。

その後、この村の村人たちの疑わないという特性に気付いたディアナは、決意した。

この村を、この村の人たちを、守るということ。

人狼が今までこの村に来なかったのは、幸運であったというだけ。村人たちは自分達の崇める神を信じていたけれども、ディアナにしてみれば、偶然でしかなかった。これから、いつ、人狼やそれに匹敵する者がこの場所に攻め込んでくるか分からない。

だから、ディアナは早いうちから自分の力を村人たちに示した。

思った通り、村人たちはディアナの姿を見ても、怖がりはしなかった。代わりに、獣に変身したディアナを「クーガー」と呼びわけたが、全く悪意は感じなかった。ディアナの黒髪を束ねる赤いリボンも、村人による贈り物だ。それどころか、服も、食物も、村での役割も、全て分け与えて貰えた。

このことばかりは、この村を守る神に感謝してもいい、とディアナは感じていた。

――だけど……。

数日前から、ディアナは不安を覚えていた。

少しずつ、村に近寄ってくる気配。足音。じわじわと確実に近くなってくる妙な雰囲気。村人たちはまだ気付いていないけれど、それは、もうすぐそこまで来ているような気がしていた。

――どうか、この地を守る神よ。

ディアナは祈った。

――わたしの勘が、当たりませんように。

4. HUNTING

4.

べっとりと腕を汚すエンジ色。

アマリリスはその味がとても好きだった。ほんの少しの快楽。そのために行う狂気沙汰。人間を襲うのは面倒な事態を招きやすいから、襲うのは人狼と決めている。ただそれだけのこと。

「あっ……」

アマリリスは真っ赤に染まった両手を見つめ、ふと我に帰る。

――まただ。

どうしてこうなるのか分からない。けれど、血と暴力への欲求が、アマリリスの心を歪ませて、恐ろしく醜い化け物へと変えてしまう。どんなにそうなりたくないと思っても、人狼といざ闘えば、自分でも止められなくなる。

「どうして、あたしは……」

赤。アマリリスの手にべったりとついて離れない赤。その足元に散らばる肉片は、ただの外皮。アマリリスが欲しかった毛皮は、そのまま残っている。美しい白狼だった。己がもともと美しいから、美しい人間を求めたのだろう。

――スーをばらばらに引き裂くのは、楽しかった。

「まただ」

アマリリスは自分が恐ろしかった。外皮は人間なのだ。そしてそれは、魔女と呼ばれる自分と同じ姿をしている。それなのに、それを引き裂くのに、なんの躊躇いも起こらない。どうして自分はこんなに非情なのだろうと思うのも、全てが終わりきった後のこと。

「狂ってる」

自分の中の全て、自分を包む全てが狂っている。自分がどんな方

法で、猛る狼の命を奪ったのか、覚えている。身体に秘められた力を一気に放出し、生まれた凍風で相手の身体を切り刻む。そして、弱った相手に近づくと、素手で、アマリリスは。

「駄目だ、思い出すな」

アマリリスは、人狼と戦っている時の自分と、普段の自分、どちらが本当の自分なのか分からなくなる。普段の自分だと思っているものが、本当に普段なのか、分からなくなっていく。そして、どちらの自分でいるほうがいいのかも、分からなくなっていく。

そんな時、アマリリスはまた、数を数える。

そうしていると冷静になれる。そうしていると忘れられる。そうしているとどうしようもないこの気持ちを抑えられる。

「さ……て」

段々と、アマリリスの中に芽生えていた、この白く美しい獣への罪悪感が、薄れていった。代わりに沸き起こるのは、更なる欲求。

「逃げだした人狼は、あと二匹いたはず」

獲物がまだいるという楽しみ。

足りない。人狼と戦うアマリリスには、まだ満足出来なかった。あと二匹の人狼も、追いかけなければ。捕まえなければ。そして、立ち向かってくる彼らを前に、力を思うままに放出し、思うままに切り刻んで、外皮を剥く。

獲物は遠くへ逃げただろう。

けれど、アマリリスはそれを捕まえるまで、追い続ける。

「待っていて」

赤に染まった手を拭き、アマリリスはパラソルを拾う。

「今、行く」

5. DAEMON

5.

その日の朝も、昨日の朝と変わらずにやってきた。

いつもと違うと言えば、明日、村をあげての婚礼の儀があることぐらいだろう。その前の日となるわけだから、ディアナは村の者達の準備を手伝っていた。この村に来てから、婚礼の儀を見たのは一回だけ。その時は来たばっかりだったから、何も手伝えなかった。

今回は違う。この村の暮らしにも慣れてきたディアナには、手伝う事が出来る。それに、主役となる花婿も花嫁も、ディアナと近しい人達だった。明日は、素晴らしき日になる、はずなのだが。

ディアナは緊張していた。婚礼の儀とは別の事で、身体が強張っている。何か、見落としてはいけないような気配が、この村に来ているような気がしていた。

――違うと思いたい。

朝からずっとディアナは思っていた。

だから、村の子ども達の悲鳴が聞こえた途端、ディアナは心臓がひっくり返ってしまったのかと思ったくらい、衝撃を受けた。悲鳴は、言葉にならないほど、酷いものだった。慌てて家を飛び出して、ディアナは外へと駆け出る。

すでに他の村人たちも、その場に駆けつけていた。悲鳴の原因を見る前に、ディアナは察していた。村人たちの顔が、血というものが無くなってしまったかのように、真っ青だったからだ。

ある者は泣き叫び、ある者は人だかりから逸れて、堪らずに嘔吐する。やがて風が運んできた匂いによって、ディアナの想像は裏付けられた。人だかりをかき分け、女は見るなという男の声を無視してその場所へと抜けだしたディアナの目に、それは映り込んだ。

最初、それが何なのか、ディアナには分からなかった。
けれど、次第に目からの情報を頭が解析していき、それが何なのかを解明してしまう。
悲惨な状況だった。いや、それだけの言葉で表せるものではない。そこは、小屋の中。小屋は木でできている。だから、木目こそあっても、こんな鮮明な赤の斑模様なんてついていなかった。そして、その床に散乱するのは、三つの死体。二つはこの村で飼われている豚だった。どちらも手足がばらばらにされ、腸を食い破られていた。そして、その二つの死体の間に転がっているのは、人間の死体。
この村の、豚飼いの少年だった。
どれも夥しい血にまみれ、判断が難しかったけれど、服の断片、そして、入口の傍に転がる豚の手足で分かった。
「この村に、人狼が来てしまったの……？」
ディアナの呟きは、誰の耳にも届かなかった。
ただ、婚礼の儀の前の日の起こったこの惨劇に、何が起こったのかを理解せず、怯え、嘆き、冷静さを失うばかり。ついにこの村も、《恐怖》に支配される日が来てしまった。
「皆、すぐに、広場に避難して！」
ディアナはそれでも叫んだ。
すぐにこの場から人々を遠ざけなければ。こんな場所では、誰がどこにいるか分からない。今日、誰がどこにいたか、覚えている限り聞かなければならない。相手は人狼なのだから。
ディアナの意を汲み取った数人の者が、同じように叫ぶ。
少しずつだが、村人たちは広場へと向かい始めた。
ディアナは全ての村人が向かったのを確認すると、小屋の中の少年だった遺体に目を向ける。
「ごめんね、一人にさせるわ」
そして、小屋の扉を閉めて、広場へと向かった。

6. ENCOUNTER

6.

アマリリスは血の匂いに誘われて、一つの村に辿り着いていた。
ここがどんな村かなんて知らない。知ろうとも思わない。ただ、彼女を引き寄せるのは、血の匂い。村全体に漂う、腐乱臭。そして、涎を垂らした人狼達の荒々しい吐息の音。
――見つけた。
アマリリスは歩く。彼女には、足元に散らばる屍なんて見えてない。見えているのは、隠れ潜む人狼の気配のみ。だから、彼女に背後から走り寄ってくる気配なんて、全く気付いていなかった。それにやっと気付けたのは、まさにその気配が飛びかかってくる寸前の事。
だが、アマリリスはずっと冷静だった。その誰かがぶつかってくる寸前に、電撃を走らせて、体当たりを跳ね返す。攻撃を損ねた誰かは、地面に叩きつけられ、屍にぶつかって止まった。アマリリスは青い冷静な目を、その者に向けた。
「綺麗」
彼女の目に映るのは、漆黒の獣。それが何と言う獣なのかは分からなかったけれども、それもどうでもいいこと。問題は、その獣の姿が綺麗であることだった。
黒く艶のある毛並みが光り、緑色に見開かれた目は、本当に宝石のようだった。そして、並みの者ならば圧倒されるだろうその大きさ。狼を大きくした人狼たちよりも、ずっと大きいだろう。真っ白な牙、真っ赤な口が開かれ、猫のようにアマリリスを威嚇している。
だが、アマリリスには、その全てが綺麗に見えた。
「ねえ、あなた、あたしのペットにならない？」

獣が唸る。何を言っているのかは分からないけれども、何かをアマリリスに問いただしているかのようだった。アマリリスはそこでやっと、今のこの状況を思い出した。

目の前の獣と、道端に転がる屍とを見比べて、彼女は獣に問いかけた。

「あたしを人狼だと思っているの？」

人狼、という言葉に反応したのか、獣の唸り声が強くなった。

「それとも、あなたも人狼の仲間？」

獣の唸り声が止まった。緑色の目が、詮索するようにアマリリスを見つめてくる。アマリリスはそれで理解した。屍は、獣の仲間。人狼は、獣の敵。そして、新たに現れたアマリリスがどちらかを、この獣は判断しようとしている。

「あなた、獣のくせに人狼が誰か分からなかったのね。妙ね。人間ならともかく、獣なら人狼を一発で見分けられる能力が備わっているはずなのに」

獣が身を低くした。

飛びかかってくるわけではない。この獣は、逃げようとしている。そう気付いた途端、アマリリスは両手を突き出した。殺意はなかった。殺して楽しいのは人狼だけ。この獣は生かして捕えたい。そう思ったからだ。だから、アマリリスの両手から放たれたのは、炎でも風でも氷でもなく、防御にも使った電撃。無意識にそう身体が判断し、放たれた。

電撃の鎖は、獣にじかに当たった。獣は驚き、悲鳴を上げると、呆気なく倒れる。同時に、その本性が現れた。

「やっぱり、ただの獣じゃなかったんだ」

アマリリスはその様子を淡々と見つめた。

7. DESTINY

7.

ディアナは全身の痛みと共に目が覚めた。意識は朦朧としていて、頭は重い。起き上がるのも億劫で、手を動かすのもやっとのことだった。

――何があったんだっけ？

ディアナはふと考えた。

確か、自分は「クーガー」の姿でこの絶望と化した村を歩いていた。どこに人狼が潜んでいるか分からない。どこで人狼に襲われている村人がいるか分からない。安全な場所へと戻れない村人のために、村を歩きまわっていたのだ。

――それだけが、今のわたしに出来ること。

ディアナは悔やんでいた。最初に人狼が入ろうとした時に、気付かなかったこと。そして、人狼の正体を掴めないまま、次々に仲間達を失っていったこと。生まれた村のように、この村もまた、墓場へと化そうとしている。それも、自分が守ろうとしているにも関わらず、だ。

目の前で襲われそうな村人は、片っ端から助けていくけれど、その日助けた村人が、次の日に変わり果てた姿で見つかることもあった。村人たちが注意を怠っているわけではない。人狼が現れてからしばらくは、村人たちは自分達の崇拝する神の聖堂で共同生活をしていた。彼らが襲われるのは、一人になる時。だから、極力一人にならないように、そうしていた。

けれど、様々な理由で、一人になる瞬間が来る。

そんな時、ディアナがどんなに注意しても、一人、また一人と犠牲者は増えていった。

もう墓場などない。埋める場所もない。
そして、ついに、村人たちはお互いを疑いあい、それぞれの家に閉じこもり始めた。
――これでは人狼の思うつぼだ。
ディアナはそう言ったけれども、誰も聞く耳を持たなかった。仕方なく、ディアナは「クーガー」になり、昼夜問わず、起きている間中村を彷徨い始めた。何処かで襲われている人がいないか確かめるために。怪しい人間がいないかを確かめるために。
――そう、そして、見つけたのが……。
ディアナは、はっと我に返った。そう、思いだした。自分がどうしてここで気を失っていたのか。どうして変身が解けてしまっているのか。何を闘い、何が起こったのかを。
「目が覚めたのね、子猫ちゃん」
甘い声に、ディアナは身を震わせた。手を動かすのが辛かった理由が、やっと分かった。拘束されているからだ。それも、非常にきつく。
「ごめんね、そうしないとあなた、話を聞かないでしょう？」
言葉とは裏腹に、全く悪びれる様子もなく、アマリリスは言った。
「だから、少しそうしていてちょうだい。無理するととても後悔する事になる」
「お前、何者だ！」
ディアナは人間の姿で唸った。「クーガー」だった時の感覚が、まだ残っている。だけど、期待する力も出なければ、覇気も現れない。威嚇しようとしたディアナの勢いは、すぐに廃れていった。彼女を拘束しているのは、金髪碧眼の美しい女だった。だが、その美しさこそが脅威だ。美しいものは、異形のものだとされるからだ。
「人狼じゃなければ、何者なんだ！　どうしてここに来た！」
「うるさい子ね。躾が必要かしら」
女の手が、ディアナの頬に触れた途端、ディアナの勢いは、さらに縮んでいった。

――何、この気配。
見た目には全く現れない妖気。美しい姿の奥に、グロテスクな感情を秘めている雰囲気。その全てが、今、圧倒的不利のディアナにだけ注がれている。
――抗えない。
勝敗は最初から決まっていた。
「ねえ、あなた、名前はあるの？」
女が言った。
女の手からディアナは必死の思いで逃れた。ずっと触れられていると、《恐怖》を植え付けられてしまいそうだった。ただでさえこの世に溢れているそれに、身体の中まで侵入されるなんて御免だ。
――この女、何者なの……？
「名前、教えなさいよ」
女の口調が強くなった。
その全てに脅されるままに、ディアナは答え、勇気を振り絞って訊ね返した。
「あなたは、何者なの？」
女はやっと笑みを見せた。
「あたし？　あたしはアマリリス。魔女と呼ばれるアマリリス。それ以上でも、それ以下でもないわ」
アマリリス。そう名乗る彼女の目を見て、ディアナは力を抜いた。しかし、警戒は解けなかった。この拘束が解けるまでは。

8. CAPTURE

8.

アマリリスにとって、ディアナと名乗ったこの娘の拘束を解くことは、まだ抵抗があることだった。

確かに、このままこうしていても、ディアナが信用してくれるはずもない。とはいえ、別に彼女の信頼が得られずとも、彼女を飼いならす自信はあった。だから、むしろ、彼女が屈伏するまでこのままでいてもいいとアマリリスは考えていた。

だが、そうも言っていられなくなってきた。

ディアナとの戦いで、人狼達が動き出したのだ。アマリリスの勘が鈍っていなければ、人狼は二匹いる。恐らく、前の村で取り逃がした人狼だろう。そして、彼らが余程うっかりしていなければ、彼らの外皮はこの村の者へと変貌しているはず。

人狼にとって、アマリリスも邪魔であれば、ディアナも邪魔であるはずだ。こうして無防備な状態になったディアナを狙わないはずがない。普段の冷静なアマリリスならば、ディアナを守る事が出来るだろうけれども、相手が人狼ともなれば、アマリリスには、人狼を引き裂いて遊ぶことしか見えなくなってしまう。片方を追いかけているうちに、片方がディアナに危害を加えたとしても、すぐには気付けない。人狼と戦っている間のアマリリスには、どうでもいい事として処理されてしまうだろう。

だから、ディアナには自分で自分の身を守ってもらうしかない。

アマリリスは、この獣には、まだ死んで欲しくなかった。

「拘束を解いてあげる。でも、誤解しないで。逃がしてあげるわけじゃないわ」

ディアナを縛っていた氷を溶かし、アマリリスはその細い首へと手をかける。ディアナがそれに気付いて逃げようとしたが、アマリ

リスは構わずに力づくでディアナの首を引き寄せた。
「ただの拘束の代わり。あなたには外せない」
アマリリスはそう言って、ディアナの首を、ルビーの光る首輪で軽く絞めた。
「何するの！」
「分かっているでしょう？　あなたは負けたのよ」
その言葉に、ディアナが言葉を失ったのが分かった。アマリリスは構わず、首輪をしっかりと締めた。ただの首輪ではない。いわゆる、魔法具というものだ。使用者の意思なしに外すことは絶対に出来ない。
「そんな、どうして……」
「あたしに襲い掛かったのはあなた。これは、あなたが引き寄せた未来よ。あなたは知らない内に、決められたすべての未来を引き寄せてしまう魔女なのよ」
ディアナは緑の目を大きく見開き、アマリリスを見上げた。だが、その表情も、アマリリスの心を動かすことはなかった。
「じゃあ……」
ディアナが小さく言葉を漏らす。その意識の先には、絶望の地と化した村と、あちこちに転がる躯が映っている。
「これも？」
ディアナの目からは涙が溢れている。どうして泣いているのか、どうして震えているのか、アマリリスには少しだけ分かっていた。ただ、無表情に見つめるだけのアマリリスは、ディアナを不安にさせるばかりだった。
「これも、あたしが招いたっていうの？」
アマリリスは無表情のまま、ディアナの頭に手を置く。とてもやわらかな髪をしていた。その髪を結っているリボンが、猫の耳のように揺れた。
アマリリスは静かに言った。
「あなたを貰う代わりに、仕返しを手伝ってあげる」

「え？」

ディアナの問い返しには応じずに、アマリリスは周囲の様子を探った。人狼は二匹。その気配は、遠くはない。少しずつ、少しずつ、アマリリスの心と体に、欲求と血の猛りが起こり始めていた。

9. DESPAIR

9.

アマリリスがやっと移動する気になれたのは、ディアナがやっと大人しくなってからだった。

ディアナにしてみれば、つまらない自尊心のために、憎らしい人狼達が大切な村の空気を少しでも長く吸い続ける事になるのに比べれば、いっそここで、その憎き人狼を退治してくれるというアマリリスにひれ伏すほうがましだと理解したのだろう。

アマリリスにとってみれば、ディアナの心の整理などどうでもいい事であったが、何にせよ、ディアナが大人しくなってくれたのは有難かった。誰にも邪魔されずに人狼を狩りたいのに、他でもないこの獣が邪魔してくるような事があったら、この上なく面倒だったからだ。

「さて、あなたが探しだせなかった二匹の人狼。見つけたわよ」

村を歩くこと数分、アマリリスはとある民家の前で立ち止まった。ディアナはその民家を見つめ、愕然とした。

他の民家と殆ど変らぬ平凡な作り。わらぶきの屋根に、土の壁。非常に作りやすいうえに、この村の気候に適している合理的な住まい。敢えて、他の民家との区別をつけるのならば、丈夫な木の扉にかけた、鈴の音と、個人的に育てていたひまわりの鉢だろう。

それは、ディアナの住んでいる家だった。

「ここに……？」

アマリリスがここをディアナの家と知って言っているのかは分からなかった。

だが、アマリリスの目は嘘を吐いていない。本気でここに人狼が隠れていると言っている。それがますますディアナを不安にさせた。

「待って、アマリリス。だって、ここは……」

ディアナの頭に過ぎるのは、家の中にいる者の顔。

そう、ディアナは一人暮らしではない。もともととある老夫婦とその息子家族と暮らしていた。というのも、村に来た日に、来たばかりで一人で暮らすのは大変だろうとこの家族が招いてくれたからだ。そして、そのまま、こうして居座っていた。この人狼騒ぎにあっても、家族だけは無事だったし、ディアナが外を放浪していても、警戒心の強い家族が人狼に襲われる事なんて少しもなかった。

今、この家の中には、ディアナ以外の六人の家族がいるはずだった。老夫婦、息子夫婦、息子の嫁の妹、息子夫婦の長女。そんな家族構成だった。

ふと、風向きが変わる。

ディアナはその瞬間、激しい嘔吐感に見舞われた。胃がひっくり返るのではないかというほど、身体の内部がうごめいている。そのせいで、呼吸すらも苦しい。彼女を苦しめるものの正体。それは、臭いだった。あまりに酷い臭いが、ディアナの感覚と精神を少しずつ蝕んでいく。

全てを吐き出す勢いと共に、ディアナは大声で叫んだ。威嚇ではない。村人を救うべく村を走りまわり、アマリリスにまで戦いを挑んだかの勇敢な精神は、一気にしぼんでしまった。ディアナの喉から飛び出していくのは、悲鳴。血と肉と内臓の生々しい匂いがもたらす現実への怯えと、拒絶の叫びだった。

ディアナの錯乱にも、アマリリスは全く動じず、ただ家の方向を見つめているだけだった。

やがて、渾身の叫びすらもかすれ、荒ぶった呼吸を整えようと肩で息をするディアナに、アマリリスは冷静に、ただ冷静に、まなざしと言葉を贈った。

「少しは落ち着いた？」

無機質な声は、だが、ディアナの心を逆撫ですることもなく、ただ、焦りと復讐心のみを生みださせる。

その緑の虹彩に包まれる瞳が、満月のように広がった時、アマリ

リスは少しだけ歪んだ笑みを見せた。

10. VENDETTA

10.

人狼達は、もはや人間の皮を被らず、本来の狼の姿で現れた。
二匹の人狼が現れた時、アマリリスとディアナの感じた印象は、相反するものだった。
ディアナは、今までこれほど醜い生き物を見たことがあっただろうかというほど、二匹の人狼の事が汚らわしく思った。特に、片方の黒い人狼が小さな腕をくわえている姿を見て、このままここに立ち止まっていられることが不思議なくらい、じっとしていられなくなった。
一方、アマリリスは違った。
肉を咀嚼しながら二人の前に現れた二匹の人狼の姿は、あまりに血を浴びているために、それだけでグロテスクな状態だった。また、もう片方は臓器を引きずっていたため、毛皮は血で汚らしく固まり、そうではないのに、まるで皮がめくれてしまったかのようにも見える。
アマリリスはそれを、美しいと感じた。
どうしてこんなに美しい姿があるのか分からないほど、美しいと感じた。そして、もっと彼らを美しく、彩ってあげたいという願いが、彼女を包んでいった。欲求は彼女の身体の奥深くを刺激し、力を流動させる。その流れを感じていると、抗えないほどの赤への欲求が、彼女の頭一杯に溢れていった。
「今……着飾って……あげる」
アマリリスの声が合図になったのかは分からないが、その途端、ディアナの姿が瞬時に変化し、肉眼では捉えられないほどの速さで飛び出していった。アマリリスは惚けたようすでそれを見つめ、目を細めた。黒いしなやかな肢体が、赤茶色にそまった二匹の狼めが

けて、飛び上がっていく。そのラインは計算されたように見事で、アマリリスはうっとりとしてしまった。そして、何のぬかりもなく、黒い毛皮のクーガーが片方の狼の首の根を捉えた時、アマリリスはやっと不平を感じた。

「だめ」

一撃で味方を捕えられ呆気に取られているもう片方の狼を尻目に、アマリリスはクーガーに言った。

「それは、あたしの」

指をさすのは、クーガーに捕われてもがく巨大な人狼。クーガーは緑の目でじっとアマリリスを見つめ、それ以上噛む力を強めるのをやめ、狼をくわえたまま制止した。それを見て、もう片方の狼が、慌てて動き出した。仲間が殺されることを理解したからだ。

アマリリスの矛先は、はじめからそちらの狼に向けられていた。彼女の指先から放たれるのは、極限に冷たくした、風。炎でもいいが、それでは毛皮がもったいない。外皮を壊す楽しみがないのなら、一撃で腹を裂くだけでいい。

だが、アマリリスの攻撃は、当たらなかった。

寸前に、助けに入ろうとした人狼が、アマリリスの目的に気付いたからだ。その人狼は方向転換し、アマリリスとディアナから十分距離を取り、そして、人間の外皮を被りなおした。

ディアナはそれを見て、はっとした。それは、人狼がやって来た日、その次の日に結婚するはずだった花婿の姉、オーロールの姿だった。

「仲間を放せと言っても、お前達は放すどころか、仲間の前でわたしを殺すのだろう？」

オーロールの姿で、その人狼は訊ねた。

「ウェアウルフは仲間を重んじる。でも、わたしには、お前達から仲間を奪い返す力なんてない」

オーロールの声で、その人狼は嘆いた。

「逃げることしか出来ないわたしを、許しておくれ」

オーロールの目で、その人狼は泣いた。
そのすべてが、ディアナには許せなかった。
だが、もう片方の人狼の言葉を聞くや、アマリリスにはもはや、ディアナの捕えている人狼しか目に見えていなかった。手間をかけて捕まえるよりも、今、すぐそこに用意されている玩具で遊ぶ方が遥かに楽だった。
「ねえ、ディアナ」
アマリリスは心から笑んだ。今からすることを考えると、楽しくてたまらなかった。
「その子ちょうだい」
その言葉には、今は味方であるはずのディアナでさえも、ぞっとした。

11. GRAND GUIGNOL

11.

ディアナは人の姿でその場に立ち尽くして、目の前にて繰り広げられる光景を、眺めていた。

ちっとも見たいなどと思わないのに、何者かがディアナの身体を縛り、見せ付けているようだった。

アマリリスの言葉は、要請ではなく、強制であり、絶対的命令。それに逆らうなど、ディアナには一生不可能だろうと自分でも分かっていた。

さきほどまでのディアナにあったのは、人狼への憎悪であり、嫌悪であった。しかし今のディアナにあるのは、人狼への悲哀ただひとつ。

たった今ディアナの前で絶叫し、彼を救う可能性のあるあらゆるものを請うように太く咆哮する生き物が、人狼として生まれ、人狼として生き延びようとし、人狼としてディアナ達に……いや、他ならぬアマリリスに出会ってしまったことは、いかに村を滅ぼした人狼を憎むディアナまでもが、思わず哀れんでしまった。

されほどまでに、アマリリスは化け物だった。

整った美しい顔立ちに浮かぶやわらかな微笑みは、この場には明らかに不釣り合いで、微かに聞こえてくる彼女の鼻歌は、命の瀬戸際に立たされ、ひたすら安息を求める人狼の悲鳴とは、まったく協和しなかった。

とんでもない魔女と出会ってしまった。

ディアナの心をざわりとした寒気が包み込んでいく。その寒気の根源は、首元をきつめに縛る首輪だ。手に触れた途端、全身に電撃が走った。

とんでもない魔女に捕まってしまった。

所詮自分は彼女の気紛れに生かされただけ。たまたま人狼ではなかったから、彼女の暴力への欲求を刺激しなかったというだけ。

その考えはディアナの思考に渦を巻くように浸透していった。

やがて、アマリリスが肩を落とし、空虚な目を地面に向ける。

「終わっちゃった」

その空虚な目に映るもの。もう、アマリリスの澄んだ声に、不協和する悲鳴は重ならない。

ただそこにあるのは、美しさとは本来不釣り合いなはずのグロテスクなモノが、アマリリスという存在を飾り立て、不気味な調和を生んでいるという光景のみだった。

「つまらない」

アマリリスの声は、もはや生き物ですらなかった。ディアナを打ち負かした時の、有りふれた強い生き物の声ではなかった。

空虚に包まれるアマリリスと、その足元に散らばる、ただの真っ赤な有機物と化した残骸。

そこにはディアナが憎み、哀れんだ人狼は、もういなかった。

物陰から、苦しそうに呻く声が聞こえた。それがオーロールの声だということを、ディアナはしばらく経ってから気付いた。

ディアナが振り向いた先には、オーロールの皮を被った人狼の姿はない。

けれど、啜り泣く声だけは、小さくこだましていた。

12. CONDUCTOR

12.

人狼が人間を狩るのだとすれば、魔女は人狼を狩る者なのだろうか。

ディアナは事を終えて冷静になったアマリリスが狼の皮を剥ぐのを見ていることしか出来なかった。得体の知れない生き物へ変身するディアナを、周囲の者たちは魔女と称した。けれど、それは正しかったのだろうか。いや、そんなわけがない。実際の魔女を目の前にして、ディアナは心から怯えていた。知らなかったとはいえ、アマリリスに一度でも戦いを挑んだ自分がとてつもなく愚か者にすら思えた。

「ディアナ。そろそろ行きましょ」

アマリリスが冷静な声で言った。

それは、人狼を前にしている時とは全く違う、生き物らしい声。剥いだばかりの狼の皮を抱えて、彼女は整った顔で笑みを作った。それが他ならぬ自分に向けられている事を思い出し、ディアナはうろたえた。

――行くって、何処へ？

冷たい首輪が、ディアナに現実を教える。

「どうせ、もうあなたの居場所はないの」

アマリリスの言葉が、ディアナに突き刺さる。

「だから、あたしと来なさい」

仮に拒否できるとしたら。自分が拒否していたかどうか、ディアナ自身疑わしく思った。たった今、惨劇を見せ付けられたばかりだというのに、逃げていいという言葉に反応できるなんて思えない。

それでもディアナは動けなかった。

例え死の村と化したとしても、愛すべき村人が、まだ生き残って

いるかもしれない。もしかしたら、姿の見えぬディアナを求めて、怯えているかもしれない。そう思うと、動くことが出来なかった。

「アマリリス……わたし……」

勇気を振り絞るしかない。アマリリスに、自分の気持ちを伝えるのだ。

「わたし、あの……」

「オーロール」

そんなディアナの言葉を、アマリリスは遮った。

アマリリスは、ディアナが一緒に来る気のないことを知っていた。だが、そんなディアナを手放すわけにはいかなかった。

手放さずに済む方法。それは、ひとつの名を口ずさむことだとも、アマリリスは知っていた。

「あの雌狼が被った人間、ずいぶんな美人だった」

ディアナの表情が凍った。アマリリスの狙い通りだった。あとは彼女に嫌われようとも、殺意を持たれようとも、アマリリスにとっては構わないこと。

「きっと中身も、美しい毛皮をしているかもね」

アマリリスが横目で見つめたディアナは、俯いていた。飛び掛かってくるかもしれないと思ったが、そうではなかった。

彼女は泣いていた。

微かに漏れる嗚咽が、アマリリスの冷たい耳に、入り込んでいく。

「いい姉さんだった」

嗚咽混じりに、ディアナは言った。

「弟の結婚を誰よりも喜んでいて、準備を手伝うわたし達家族に、いつも親切にしてくれたわ」

ディアナはまっすぐアマリリスを見た。人形のように血の通わない表情がそこにある。

「わたしがここへ来たばかりの日、わたしを見つけて、受け入れてくれる家族を紹介してくれたのが、オーロールなの」

――この村の連中はみんなバカがつくほどお人好しさ。

ディアナの頭の中で、オーロールの言葉が蘇ってきた。
――世の中は人狼だの吸血鬼だので裁判だの処刑だの物騒だね。信じられないよ。
「オーロール……」
食い殺された家族。皆、血の繋がりも、契りもないディアナを、快く受け入れてくれた。それなのに、守れなかった。
「もうオーロールはあなたのお友達じゃないの」
アマリリスは無表情で告げた。何の思い入れもない。ただ真実として、ディアナに伝えただけだった。
「オーロールは人狼になってしまった」
「違う！」
ディアナは反射的に叫んだ。アマリリスの言葉が、やっとディアナの怒りを刺激した。
「あれはオーロールじゃない！　オーロールは死んでしまった！　奴はオーロールの生皮を被ってるのよ！」
自分で放った言霊に、ディアナは苦しめられた。
目眩ましとしてオーロールを選んだ女人狼。その瞬間を思うだけで、ディアナの心がぐにゃりと変形する。込み上げてくるのは、変身の瞬間にも似た苦痛。
「オーロールは……」
ディアナのこともあり、家族ぐるみで付き合いのあったオーロール。注意深かった家族が、どうして人狼の侵入を許してしまったのか。
アマリリスが引き裂いた方の人狼が、誰の皮を被っていたのかは、もう分からなくなってしまった。だけど、もう片方のオーロールの姿だけで、十分だった。
――助けて、ここを開けて！
聞こえるはずのないオーロールの切羽詰まった声が、ディアナの耳にしみ込んできた。
――お願い、入れて、みんな！

その時、ディアナは初めて、「復讐」の二文字を自分のなかに感じた。

「どちらにせよ、同じことよ」

アマリリスはディアナの変化を見つめ、目を細めた。

「どちらにせよ、あたしは逃がした獲物を追い掛け続けるの」

もはやアマリリスには、ディアナを支配する言葉なんて、必要なかった。

13. RUBEUS

13.

バステトという名は、彼女の母が、命と肉体を他として、唯一彼女に贈ったものだった。

バステトの母はバステトを産み落とすと同時に召されてしまった。父は知らない。そもそも父なんて言葉自体、バステトが知ったのは、祖母の元でどうにか十歳を迎えてからのことだった。

母はどういう思いでこの名を贈ったのだろう。

バステトはその疑問を抱えながら、祖母が亡き人になってからも何度も空を見上げた。

――死んだ人は輝くものになるんだよ。

バステトの祖母はそう言った。

――なら、宝石にもなれるの？

幼いバステトに、祖母は笑いかける。

――魂とは輝くもの。宝石も昔は、魂だったのかもしれないね。

優しかった祖母の笑顔が、バステトの目蓋の裏で再生される。

「おばあちゃん、わたし、会いたかっただけなの」

母は燃えるような赤毛に、宝石のような赤い目をしていたと祖母は言った。それならきっと、母の魂は赤く輝いているのだろうと、バステトは思った。

素晴らしい輝きを放つ赤。

ぶつかるつもりではあった。突き飛ばすかもしれないと気付いていた。でも、赤く輝くそれだけを摺って、母に会えても会えなくても、後でちゃんと返すつもりだった。

だから、返す相手がそのままいなくなってしまうなんて、バステトは思いもしなかった。

よろけた老紳士が転んだ先。そこを通ろうとしていた馬車は、急

には止まれなかった。
そう、彼は馬車にひかれて死んだ。
確かにそれはバステトのせいであり、その原因が盗みを働いたことによるとも分かっていた。
処刑されるとしたら、その理由は盗みによる殺人。それでも、バステトにとってみれば殺意はなく、過失致死だと反論したかもしれない。
そう、バステトが罰せられるのは、盗みと他人の命を失わせてしまったことによる罪についてのはずだった。だから、「この準備」は間違っているし、「この罪」も間違っている。
自分のやったことと、昨日の人狼騒ぎは、全く関係のないことだ。いくらバステトが訴えても、そもそも盗人の話など聞いてくれる人がいない。
バステトは明日の朝、人狼として処刑されることになっていた。人狼処刑なら、よく知っている。もう、何回も、この目にきちんと焼き付くように、見せつけられた。
だが、その主役が自分になるとは、思いもしなかった。
「おばあちゃん……お母さん……」
夜が明ければ、バステトは吊し上げられ、銀弾を受け、まだ息の根も止まらぬうちに、焼き殺される。
うまくいけば、銀弾で死ねるかもしれないけれど、大抵は火を点けられてからもしばらく生きている。
心臓を一発で撃ちぬくなど、難しいことなのかもしれない。
「わたし、人狼じゃないんだよ」
独房から見える星に向かって、バステトは呟いた。
明日には消される、その命を抱き締めながら。
今もどこかで息を潜める人狼を、心から呪いながら。

14. SACRIFICE

14.

ある村の街角で、アマリリスは新しい獲物を見つけた。
新しい獲物は、ルー・ガルーと名乗った。
でも、アマリリスにはそんな事どうでもいい。このルー・ガルーが、一体何匹目のルー・ガルーかも分からないのだから。ともかく、目の前に折角現れた獲物を、逃すわけにはいかなかった。だが、ディアナはそんなアマリリスを言葉で止めようとした。
「待って、あれを止めなきゃ！」
アマリリスにしてみれば、ペットのくせに生意気なこと。だが、まだ人狼を見つけたばかりで興奮しきっていなかったアマリリスは、ディアナの言っていることに賛同出来た。どうせ、人狼を追えば、また自分でもどうにも出来ないほど、醜い気持ちに支配されてしまうだけだ。
行われようとしているのは、公開処刑。今から一人の人間が吊るされ、各地に従来伝わる人狼殺しに乗っ取ったやり口で殺されるところだった。
殺されようとしているのは、アマリリスと同じくらいの年の女。赤毛の美しい、アーモンドのような茶色い目をした女だった。アマリリスは人間達による人狼の処刑の仕方を知っていた。彼らはアマリリスのように人狼を仕留められない。多くは、恐れるあまり、そんな事が出来ないのだ。
だから、彼らの多くが悪魔にもたらされたと信ずる火の力を使う。
「全く笑えるわね、悪魔と呼ばれる者を、悪魔に貰ったもので殺そうとするなんて」
アマリリスはくすりと笑ったが、ディアナはちっとも笑わなかった。ディアナの無言の抗議に、アマリリスは溜め息混じりに言う。

「冗談よ」
全く、自分のペットはくだらない人間の心をしっかりと持っている。アマリリスはそのことが、少しだけ気に喰わなかった。とはいえ、悠長なことを言っていれば、彼女はあっという間に撃たれ、燃やされてしまうだろう。
――あの赤毛、塵にするのは惜しいな。
アマリリスは群衆に歩み寄って行った。
流れ者の出現に、誰しも一度以上アマリリス達を振り返る。まだ、女は吊るされていなかった。「構うな吊るせ」という声があがったのだが、吊るす者達が、アマリリスの正体にいち早く気がついた。
「狼狩りの魔女だ……！」
アマリリスはいつも思う。意外と人間というものも、なかなかの感性を秘めているものだと。それは他の動物に劣るものだが、日頃の人間のイメージからすれば、感心できるものだった。アマリリスの青い目が、群衆と、今日の狂気の生贄となる女の姿を見つめた。
「お前達人間は、同胞を丸焼きにして酒を交わすの？」
その言葉に、誰もがはっと息を呑んだ。魔女による審査。この者は、人狼ではないというお告げ。だが、それを鵜呑みにすべきかを、人間達は悩んでいた。一方、処刑される女は、目を丸くして、アマリリスを見つめていた。助けられるなんて思わなかったのだろう。
「魔女よ、お前が真実を言っているのなら、どうして我々を止める？　魔女は人間の行く末なんてどうでもいいのだろう？」
すぐ近くにいた村人が、アマリリスに訊ねた。アマリリスはそれを鼻で笑い、じっと女の顔を見つめた。
「そいつに万一気付かれでもして、何故、人狼でないことを知っていたのに救ってくれなかったのか、って亡霊になって纏わり憑かれたら迷惑じゃない」
アマリリスの言葉に、村人たちは何も言い返せなかった。
「……その人はどうして人狼だと疑われたの？」
ディアナは傍にいる村人に訊ねた。人狼の処刑なんて初めて見た

し、本当に信じられなかった。生まれ故郷ではやっていたのかもしれないけれど、自分を受け入れてくれた村では一切なかったからだ。

「あいつは盗みを働いて、人を死なせてしまった。だからです」

傍にいた青年が、ディアナの問いに答える。アマリリスは不敵に笑んだ。

「ほう、つまりは些細な理由で疑われることはまだないということかしらね」

アマリリスはそう言って、何かを握るような動作をした。その途端、女を縛っていたロープが、ずたずたに切れた。ロープが地面に落ちると共に、群衆も二つに割れた。

「何があったかは知らないが、人狼でない以上、お前達の感覚だと、魔女への生贄にするのも十分極刑になるんじゃない？　その女、あたしが貰っていくわ」

誰も反論しなかった。

15. PET NAME

15.

女の名はバステトといった。

自分を何故救ったのかと、バステトは何度も訊ねてきた。が、ディアナには答えられなかったし、アマリリスも答える気もなくただ、風を読みながら村の道を進んでいた。

「じゃあ、せめて、あんた達の名前を教えてくれないか？」

バステトがそう訊ねた時に、ディアナはやっと、そういうことに無頓着なアマリリスだけでなくディアナ自身までもまだ名乗っていない事に気づき、慌ててバステトに名を告げようとした。が、その瞬間、空気を切り裂くようなアマリリスの声が、放たれた。

「ディアナ」

呼ばれたのかと思い、ディアナはびくりと身を竦ませた。アマリリスとの立場は決して対等ではない。ディアナの心は常に張りつめていた。

「それが、その娘の名前」

アマリリスは振り返り、整った顔をバステトに向ける。

「クーガーに変身するの。あたしの大切なペットよ」

その異様なまでの無機質さに、バステトは一瞬圧倒されていた。が、すぐに苦笑いを押し出して、アマリリスとディアナを交互に見つめた。

「使い魔、にしちゃあ、随分と高位な魔獣じゃんか。魔女ってやつも達が悪いね」

そう言いながらバステトは服の隠しに手を突っ込み、折りたたみナイフを取り出して遊び始めた。それを見てディアナは、あんな事があったというのに、よく取られなかったものだと感心すると同時に、そんなもの持っていても逃げる事が出来なかったのか、と疑問

にも思った。
「で？」
バステトはアマリリスを見つめた。
「あんたの名は？」
凛とした目がアマリリスを見つめる。アマリリスの血の通っていないような気配に対して、燃えるようなバステトの気迫が、覆いかぶさっていく。アマリリスはだが、それにも全く応じず、じっとバステトだけを見つめていた。アマリリスにしてみれば、世界そのものがバステトのような熱さに溢れているため、そんなに不思議でも、物珍しくもなかったのだ。
「アマリリスよ」
彼女のお気に入りのパラソルが、軽く揺れる。
その軽めの声に、バステトはやや捕え損じたかのように身じろいだ。
「アマリリスねえ……」
バステトは頭を抱え、その名を繰り返す。せっかちな彼女にとってディアナはともかく、アマリリスは舌がもつれそうな面倒な名前だった。他人の名前に失礼だとは彼女も思ったが、呼ぶたびに言い淀むよりも、もっといい方法で未然に防ぎたかった。
「アリスって呼んじゃ駄目かな？」
アマリリスは少しだけ意外そうな顔をした。その表情は、すでに幾らか長く一緒に居るディアナも、見たことのない表情だった。そして、アマリリスが見せるという事自体が意外な表情だった。
だが、アマリリスにしてみれば、自然な反応だった。今まで、アマリリスはそういう風に呼んだ人なんていなかったからだ。アマリリスや魔女以外で呼ばれるなんて、初めてだった。
「いいわよ」
それに、別に否定する理由もない。
「じゃあ、わたしもたまにアリスって呼んでいい？」
アマリリスにとってはペットのディアナまでそう言い始めた。だ

が、悪い気はしなかった。一旦アリスと決まった以上、いちいち長ったらしくアマリリスって呼ばれるよりも、省略してもらうのも別に嫌ではなかった。

「いいわ。好きに呼びなさいな」

アマリリスは快諾した。

16. LOUP-GAROU

16.

アマリリスが立ち止まるとすぐに、ディアナは寒気を感じた。アマリリスから漂ってくる気配が変わったのだ。そこにいるのは、さっきまで少なくとも話が通じているという感覚を持てたアマリリスではない。ディアナが感じたその気配は、少しばかりだがバステトも感じ取っていた。瞬時に、バステトですらが言葉を発し難い空気になった。

アマリリスの気配が変わった理由を、ディアナは知っていた。

「いるの？」

ディアナは返答を期待せずに答えた。

アマリリスが振り返る。その目を見て、バステトも思わず身構えた。

「ルー・ガルー」

アマリリスは呟いた。だんだんと彼女の中の狂気が、枠をぶち壊すかのように増幅していく。

「あたしに殺されたがっているのかしらね」

もはやアマリリスは、辛うじて理性を保っているという状態だった。それも、本人が我慢しているのではない。本人もただ、正気という檻を狂気がぶち壊していく瞬間を、待っているだけだった。ディアナは覚悟した。アマリリスの狂った舞いが始まる。空間そのものを縛りつける強烈な舞いを、アマリリスが始めようとしている。

「バステト……」

ディアナは突然の事に固まったバステトに話しかけた。

「しばらくアリスに近づかない方がいいわ」

ちょうどバステトが当然のように頷いた時、アマリリスの醸す雰囲気が一変した。

獲物――人狼が現れたのだ。それも、愚かにも獲物となることに気付いていないかのように出てきてしまった。太刀打ちできると信じて止まないのか。それとも、死を覚悟して、自棄になっているのか。どちらにせよ、アマリリスにしてみれば有難く、ディアナやバステトにしてみれば、迷惑な話だった。

「いらっしゃい、狼さん。あなたの毛皮は何色なの？」

アマリリスの声が、少しずつ蝕まれていった。

ディアナはアマリリスと人狼の対峙を見つめ、その場の空気の流れを読んで、すぐさま変身した。ディアナの変身に驚くバステトに頭をぶつけ、どうにか意思を伝える。順序が逆だったと後悔している暇も惜しかった。

「ディアナ、お前……」

ディアナはクーガーの声で唸る。驚いている場合じゃないと言いたかったが、うまく伝わらない。言葉を発しようと、口を動かすが、唸り声しか出てこなかった。

だが、バステトは懸命だった。驚愕に支配され切らず、ディアナが何か伝えたがっていると判断し、それが何かを把握し始めたのだ。

「なるほど、この場はちょっとわたしらには辛いね」

ディアナは静かな唸り声でそれを肯定した。

「よし、ちょいと避難しよう。分かってる、自分の身は守れるさ。あとは、アリスの邪魔をすんなって言いたいんだろう？」

ディアナは安心した。バステトはちゃんと状況を分かっている。身を守る得物がナイフだけというのは頼りないけれども、そこはディアナがフォローすればいい。

その時、人狼が吠えた。

「五月蠅い！　俺をバカにしやがって！　俺は誇り高きルー・ガルーだぞ！　ひれ伏せ！」

彼の雄叫びは、アマリリスにとっては仔犬の鳴き声のように可愛く思えた。それを愛撫するアマリリスの方法は逸脱している。アマリリスの目線を浴びて、人狼は急に雄叫びをやめた。

「お前は……」
興奮して思慮が足りなくなっているかのように見えた人狼だったが、ぶつかっていく直前で、それにやっと気付けたらしい。
「くそっ」
アマリリスの身体から風が流れ出していく。狼を切り刻むための風だ。人狼はそれをいち早く察知して、バステトの居る方向へと逃げた。
「切り刻めるものなら切り刻んでみろ」
人狼は高く笑いながら、バステトへと飛びかかった。
「人間め、肉塊にでもなっちえまえよ！」
口が裂けるように笑う人狼の姿はディアナから見たら醜かった。けれど、その姿すら、アマリリスから見れば、美しいものなのだ。
バステトは鋭い目で人狼を見つめている。一撃で仕留められると確信した人狼は、さらに歪んだ笑みを作った。だが、人狼の一撃を、バステトはひらりとかわした。その姿は、クーガーの姿のディアナにも匹敵するかのように鮮やかだった。外した人狼の腕は、土を空しく掴んでいた。人狼は外した一撃を見つめ、呆けたように呟く。
「逃げるなよ、せっかく内臓取り出してやろうと思ったのにのよう」
ディアナは気付いた。この人狼、恐らくまだ若い人狼だ。力があり、身体能力にも優れるけれども、経験も浅く、思慮がもともと足りないのだ。
だから、いちいちまぬけな行動を取って不利になる。
だから、接近するアマリリスに気づかない。
「おまえ、いつの間に……！」
すぐ後ろにアマリリスが来たとき、やっと、自らの危機に人狼は気付いた。

17. GREEDY

17.

アマリリスはまるで、遊ぶためのあらゆるアイデアを出しつくして事も退屈な子どもが、スコップでひたすら砂場の砂を掘り起こしているようだった。

もちろん、彼女はスコップなんて持っていなかった。彼女が持っているのは、風の手綱を引く魔力のみ。そのことは、ディアナも、まだ会ったばかりのバステトですらも、すでに分かっていた。

だけど、アマリリスの様子は、まさに遊び飽きて退屈な子どもだった。

見つめている二人の耳に時折届くのは、数を数える声。時計の秒針を遅めたような、ゆったりとしたリズムだった。アマリリスがどんな気持ちで数を数えているのか、ディアナにも、バステトにも想像すら出来ない。

ただ、彼女が数を数えながら、無心に引き裂いている獲物。ずたずたになり、毛皮ももはや塵のようになってしまった獲物に対しては、そのどす黒い感情を隠せてはいなかった。いや、隠そうとも思っていないのかもしれない。

とにかくディアナとバステトは、アマリリスが完全にその行為に飽きてしまうまで、何も出来なかった。バステトとしては、早くこの地を去りたかった。こんな光景、村の者にでも見られたら、人狼狩りどころの騒ぎじゃなくなる。

村の中には人狼狩りに魔女の手を借りる村もあれば、その魔女すらも狩ろうとする村もあるのだ。この村は後者。人狼に困っている時は魔女なんて放っておくけれども、いざ人狼がいなくなってしまえば、村人たちは次の獲物として魔女を標的にし始める。

それが、人々を癒す力しかない魔女だとしても、同じこと。

バステトは身体についた痣や傷を感じていた。
ただの盗人ですら、こんな目に遭うのだ。アマリリスのような、ディアナのような力を、村人がどう見るかなんて容易に想像できる。それも、あんなに村人たちが手間取っていた人狼を、あっさりと捕えてみせた。普通の村ならば、アマリリスを戦いの女神と祭るだろう。けれど、ここは違う。この村は、血に飢えているのだから。
バステトはその時、遠くより何かが近づいてくるような気配を感じた。
「ディアナ……」
バステトの震えた声の理由を、ディアナは察していた。
ディアナの気持ちも同じだった。この村が、もしも彼女の生まれた村のような場所だったら、この光景を村人がどう見るのか。村人が、自分達をどう扱うのか。ディアナとて、生涯をささげようと思っていた村がごく少数しか存在しないことぐらい知っていた。大半が、生まれ故郷と同じような場所であることを、知っていた。
「アリスはどうやったら元に戻るんだい？」
バステトの緊迫した声と、近づいてくる気配が折り重なる。
非常に味の悪い感覚だった。
「分からないわ。でも、段々と正気に戻っていってる気はするのだけど……」
ちょうどその時、アマリリスは数を数えるのを辞めた。
急にとまったため、いささか不気味な空気が醸し出されている。不安定な闘争心の牙が、こちらに剥かれるのではないかという疑いと恐怖が、瞬時にディアナとバステトの身体を駆け巡った。が、二人を振り返るアマリリスの目は、澄んだ青だった。
「長居は無用、か」
その声は、あの冷静なアマリリスの声に戻っていた。

18. ESCAPE

18.

村人に知られずに村を出ることがこんなに難しい事だなんて、バステトは思いもしなかった。

そもそも、今までバステトは、いつ誰がどのように村に入り、村を出ていくかなんて、全く考えた事がなかった。一度だけ意識したとすれば、まだ祖母が生きていた頃、近隣の村にて盗賊が現れた時ぐらいだった。この村にも現れるかもしれないと思うと、夜も眠れなかった。

そう、今の村はその時と同じ。いや、それ以上だった。

散々村人たちを恐怖させた人狼はもう生きていない。けれど、村人たちにとっては新たな脅威とも言うべき者が現れたのだ。それが、アマリリスとディアナ。

ただの魔女ならば、村人もそこまで恐れなかっただろう。この世に存在する魔女と噂される多くの者は、実はただ医学や薬学の知識に秀でているだけだったり、確かに摩訶不思議な力を持つけれども、その力は占いぐらいにしか役に立たないほど小さいという者ばかりなのだ。

しかし、二人は違う。特に、アマリリスは大きく異なる。彼女は本当に人狼を殺してしまった。大いなる力を以て、人狼を八つ裂きにしてしまった。人狼を退治しただけでも、村人に喜ばれるのは最初だけだというのに、アマリリスは、その最初すらも村人を畏怖させるやり方で、人狼を仕留めてしまった。それも、殺戮行為を楽しむかのように、肉と肉が引き千切れる音を深く味わうように、アマリリスは人狼を仕留めてしまった。

彼女はもはや、この村にとって、女神でも何でもなかった。

新しい魔物。
人狼の無残な遺体はすでに村人に発見されている。村の中で起こったあの惨劇に、気付かない方がおかしい。冷静になったアマリリスに言われてあの場を去って、少しも立たない内に、村で飼われている犬達の吠える声と共に、村人たちの悲鳴が聞こえた。
あとは、この村を一刻も早く出ていくだけ。それだけなのに、村人たちが何処もかしこも存在していて、村を出る事が出来ない。村人は皆、武器になる者を持っている。恐れに縛られた人間ほど恐ろしいものはない。こちらがいくら危害を加えないと言っても、通じるわけがないのだから。
バステトは段々とむしゃくしゃしていた。
何処へ行ってもいる村人たちに、段々と殺意を覚えてきた。
「一人二人犠牲にしてもいいんじゃないか……」
ついにそう口走ってしまった。バステトが後悔した時には遅かった。だが、意外なことに、アマリリスは首を振った。
「人間を殺す事はお勧めできないわ。さらに面倒な事態を招くだけだもの」
アマリリスのその言葉に、バステトは「魔女狩り」の言葉を再度思い出した。
魔女の中でも人間に危害を加えたと伝達のあった魔女は闇の魔女と呼ばれ、何処へ逃げても「魔女狩り」の戦士達に追われる羽目となるという話だ。戦士はここよりも大きな町や、城下町などから排出され、この世の人間を脅かす闇を払うために旅をしているという。どの戦士もみな、類稀な力を持ち、魔女にしてみれば、万が一敵対でもすれば面倒なことこの上ないというわけだ。
バステトもまた、この戦士について子どもの頃からよく話を聞かされていて、盗賊や魔物、人狼や闇の魔女など、人間を脅かす存在を想像しては怯え、そのたびに、その時には必ず戦士が駆けつけてくれるのだと自分を安堵させてものだった。
「戦士……」

バステトが呟くと、アマリリスの表情がやや動いた。
「戦士からみれば、あたしもディアナも、何もしていなくても、人間を脅かす闇に他ならないでしょうね」
アマリリスの言葉に、ディアナも俯く。その言葉にバステトは何か反論しようと思った。が、何も言えなかった。人狼を思うままに切り刻む危険人物。そして、その人物と共にいる猛獣に変身する女。危険じゃないと何を以て言えるのだろうか。
そう、ただでさえ彼らは、人間から拒絶される者なのだ。
この上人間を殺すとなれば、大陸の中でも名上の戦士が駆けつける事になるだろう。
「そうね、でも、危害さえくわえなければ、言い訳の余地はあるわね」
アマリリスはそう言ってディアナを見た。危害を加えずに道を開く方法。脅しもせずに、人々を避けさせる方法。それは、ディアナになら出来ることだった。
「二人も乗せられるかな……」
ディアナがぽつりと言ったが、アマリリスの視線は外れなかった。
「乗せられるようにするの。いつもよりも大きなクーガーになればいいじゃない」
いとも簡単に言うアマリリスに、ディアナは困惑した。が、頷く事しか出来なかった。
「やってみる……」

19．BROWBEAT

19.

巨大なクーガーが目の前で自分に向かって牙を剥いている。

そんな経験をすれば、誰だって冷静にはならないだろう。例え死闘を戦い抜いた剣士であっても恐れは感じるはずだ。それに恐れではなく胸の高ぶり、或いは、恍惚とした快楽を感じる者がいるとすれば、そいつはアマリリスのような狂った奴だろう。

少なくとも、バステトはそう思った。

獣に姿を変えたディアナの大きさは、バステトとアマリリスを背に乗せてもまだ余裕があるところからして、かなりのものだった。こんな獣、地にいるとすれば、獣ではなく間違いなく魔物だろう。そんな魔物が他ならぬ自分に向かって吠え、突進してくるのだ。それも、鍬や斧ぐらいしか手に持っていないという状態の自分に向かって。

村人が声にならぬ悲鳴を上げて道をあけるのも、無理はなかった。全ては速さがモノをいう。漆黒のクーガーの駆け出しは、村人が自棄になって捨て身で反撃してくるという隙すらもなく、ただ避けなければ死ぬという考えだけを村人たちに植え付けていた。

物音に駆けつけてきた村人たちもまた、クーガーの地を轟かすかのような吠え声に圧倒され、誰も飛びかかってこれる者などいない。この村には勇者も猛者もいなかった。いるのはごく普通の村人達。ただ平穏に暮らしを続けていくことだけが願いの、普通の村人達だけだった。

クーガーはアマリリスとバステトを乗せて、悠々と駆けていく。そのテンポは馬よりも軽く、そして、荒い。時折聞こえるのは、猛獣独特の唸り声と、何かを追い払うための吠え声。耳を劈くような

それらを聞きながら、アマリリスとバステトは村を後にした。
そう、バステトは村を後にした。この世に生まれ落ちて、祖母に育てられたこの村を。身寄りがいなくなった後も、ずっと居座っていたこの村を、後にした。
――居座っても、殺されるだけ。
バステトは静かに、故郷へ別れを告げた。目的もなにもなく、アマリリスとディアナという二人の怪物の旅に加わる。そんな彼女を送り出してくれるのは、ここまで彼女を育てた想い出だけだった。
バステトは目を閉じて、クーガーとアマリリスにしがみついた。もう戻らない。二度と戻ったりしない。だから、振り返らない。そう自分に言い聞かせて、クーガーが進んでいくのをただ待った。当てもなく広い海原を彷徨うだけと分かっていながら、この船から降りなかった。
クーガーの咆哮が、響き渡る。
追い払っているのは、獣か、人間か、魔物か、それとも人狼か。
バステトはしがみ付いた。何匹もの人狼を引き裂いた魔女の背中に。その魔女に好かれ、飼われる魔獣の背に。それは、人間との決別。人間として、彼らを恐れる心を捨てるという決別。
もう村はとっくに出ているだろう。
けれど、バステトはまだ、振り返る事が出来なかった。
何故なら、別れはまだ終わっていないから。

20. WERWOLF

20.

谷を越えた向こうへ行こうと言い出したのはディアナだった。谷を越えた向こうに何があるかを見たいからという単純な動機だった。

バステトは、何も考えずに賛同したし、アマリリスもまたそれに異論は唱えなかった。だから、その後起こった事は、ディアナにとってもバステトにとっても、予想外のことだった。いや、むしろ、アマリリスがすんなりとディアナの意見に賛成した事を疑うべきだったのかもしれない、とバステトは思った。アマリリスが、その存在に気付いていなかったとは思えなかった。

そう、谷を進む最中に、人狼に出会ってしまったのだ。

その人狼は谷間に住む者で、集落に寄生する人狼とは少し違う者だった。人間の傍に近寄らず、ただ気高く生きる存在。人狼というだけで、他はただの狼と何ら変わらないという生き物。

ディアナもバステトも放っておこうとアマリリスを諭した。が、諭すのが遅すぎた。人狼を前に、アマリリスの人格はすでに魔物と化してしまっていた。その気高さが、アマリリスの体内に巣食う欲望を強く刺激したのだろうか、それとも、人狼の中でも数段美しいその姿に、心惹かれたのだろうか。

ともかく、そんなアマリリスの欲望を大きく爆発させてしまったのは、他ならぬ人狼の忠告のせいだった。

「人間ども、ここは天空と地を結ぶ聖地だ。《恐怖》を運ぶ貴様らが土足で踏みにじってよい場所ではない」

人狼は女の姿をしていた。

女の人狼というだけでも、ディアナはいつかのウェアウルフを思い出し、身体の奥で身勝手な反発心がこみ上げてきた。だが、ディアナから見ても、美しいのは確かだった。真っ白な髪を風に靡かせ、

澄んだ青の目でこちらを見つめている姿。透き通るような白の素肌を襤褸切れで纏っているだけの姿。

「バラバラにしたい」

アマリリスの声に、ディアナもバステトもぞっとした。人狼の女もアマリリスの異様さに気がついたが、忠告は止めなかった。

「ここを立ち去れ。この私、ヴァラヴォルフのせめてもの情けだ。登れば後悔するだろう」

だが、獲物の忠告など、アマリリスには聞こえていなかった。

「ヴァラヴォルフ、あなたの本当の名は何？」

ヴァラヴォルフはいよいよ警戒し始めた。人狼を進んで襲ってくる魔女など、アマリリスぐらいしかいないのかもしれない。もしくは、襲ってくる中に、アマリリスのようなタイプの者がいないのかもしれない。

「お前、何者だ？」

明らかにヴァラヴォルフは恐れを見せていた。

「アリス……やめよう……」

ディアナの言葉が届くわけもなかった。アマリリスの両目が、赤く光った。見つめているのは、ヴァラヴォルフのみ。何かが彼女を捉えて、放さない。ディアナもバステトも、気持ちは同じだった。ヴァラヴォルフと名乗った彼女が逃げてくれればいい。彼女は他の人狼とは何かが違う。殺す必要なんてない、そんな気がした。だが、ヴァラヴォルフが逃げる事が出来なくなっていることも、察していた。

やがて、アマリリスの甘い声が、静かに響いた。

「そう、ツバキっていうの……」

アマリリスが一つの名を口にした途端、ヴァラヴォルフの様子が一転した。彼女は身を翻し、雪のような毛並みの狼となって逃げていく。アマリリスはそれを見越していたかのように追っていった。

「アリス、駄目！」

ディアナの声なんて、アマリリスには聞こえていなかった。

「どうしよう、あのままじゃあの人……！」
「ディアナ、変身して！　アリスを追おう！」
バステトに言われるままにディアナは変身した。が、その間に、白い狼とアマリリスの影はかなり遠くなってしまっていた。バステトは素早くクーガーになったディアナに乗った。
「ディアナ、頼む！」
バステトの一喝と共に、クーガーは走り始めた。

21. CAMELLIA

21.

ツバキ。その名前はツバキ自身が忘れていた。

――そう、私はツバキ。

ツバキは逃げながら思っていた。

追いかけてくるのは、間違いなく魔女。魔女の中には人狼を殺せる力を持った者がいるというのは知っていた。けれど、人狼を執拗に追ってくる魔女なんて聞いたこともなかった。そう、目があった時から気付くべきだった。アリスと呼ばれていた魔女。そいつは、他の魔女とは何処かが決定的に違った。

――もう逃げ切れない。

ツバキの足は限界だった。

(あなたは人狼)

追いかけてくるのは魔女。けれど、人間とよく見間違える。

(情けは身を滅ぼす)

この地で生きていくと決めた時、誰かにそう言われた。何も知らず近づいてくる人間達に忠告を与え、それでも破る者は、襲い喰い殺してきた。それは、単なる食物としてでなく、一種の情け。ツバキが放っておけば、その人間はもっと酷い目に遭う事になる。

生きながら少しずつ身を裂かれるのと、一瞬で楽になるのと、どちらを選びたいかという話だ。

それを今までしてきた。今日も変わらずしようとしていた。

――相手を間違った?

遠目では、人間と魔女の区別は難しい。

「ねぇ、ツバキ……」

魔女の声が正面からする。そんなはずはないとツバキは思ったけ

れど、間違いなく、あのアリスとかいう魔女の声は前方からした。
ツバキは立ち止まった。その瞬間、あの魔女が何処から迫ってきているか分からなくなってしまった。
「来ないで！」
ツバキは信じていた。集落に入りこんで人間を襲わなければ、平穏に暮らせると。人狼と言うだけで殺されるなんてことはないと信じていた。
魔女が人狼を殺す時は、集落というものが関わっていると思い込んでいた。
それなのに、違った。特別な例に巡り合ってしまった。
「やめてよ！　私に近づかないで！」
魔女がそんな事、聞いてくれるわけがないとツバキだって分かっていた。けれど、叫ばずにはいられなかった。このままでは確実に殺されてしまう。
「人狼を殺したいの？　闘いたいの？」
姿は見えない。けれど、確実に潜んでいる。魔女はツバキをじっと見ている。血走った目で、ツバキを捉えている。
「私は他の人狼とは違う！　お前が求めているモノなんて、きっと手に入らない！」
次第にツバキを取り囲む空気は濃くなっていく。視線の向こうから漂ってくるのは、欲。それが何の欲なのか、ツバキは知っていた。
ツバキには覚えがあった。
「アリスって言ったわね？　お前、暴力からのスリルと流血を求めているんでしょう？」
ツバキに纏わりついてくる欲。それは、ツバキが放つこともある欲に酷似していた。
「抵抗する私が一瞬にして消えていくのを見たいんでしょう？」
この感覚には、覚えがあった。
「お前、人狼と同じ心を……――」
「いいえ」

ツバキの首筋を、白く柔らかい手が触れていく。ツバキの背筋が凍る。冷たい汗が全身から流れていく。耳元で聞こえたはずの声が、何度もこだまして、ツバキの全身をすっぽりと包みこんでいった。うなじで感じるのは、静かな吐息。もう片方の手が、内臓の詰まったツバキの腹部に宛がわれた。

「あたしはただ、あなたを壊したいだけなの」

喉元と腹部に爪が食い込んだ途端、ツバキの頭の中は真っ白になった。

耳から入ってくるのは、魔女の声のみ。

「あたしは、あなたのすべてを手に入れたいだけ」

そう言って、アマリリスは笑みを浮かべた。

22. ZIZ

22.

アマリリスの手に力がこもる。

今触っているこの薄い皮膚の下に、アマリリスの求める生温かいものが秘められている。美しい外皮を少しずつ剥いていって、この声が痛みによって捻じ曲げられていくのを聴くのはどんなに官能的なものなのだろうと考えると、アマリリスの手はさらに食い込んでいった。その残忍な欲望をさらに刺激するのは、他ならぬツバキの呻き声。恐怖と緊張から来る痙攣が、アマリリスを誘った。

――美しい外皮の下には、どんな美しい毛皮が隠されているの？

高まっていくツバキの鼓動は、アマリリスを更なる深みへと導いていった。この鼓動が流すもの、この皮膚のすぐしたに詰まっているもの。アマリリスの欲は、そちらへと向かっていった。

「食べてしまいたい」

ゆっくりとツバキの左腕を引きよせて、アマリリスは静かに口づけをした。ほのかに触れる汗の味。そして、薄っぺらい皮膚のすぐ下を流れている血潮の感覚。アマリリスはそれを求めて、ゆっくりと歯を喰い込ませていった。

ツバキは微動だにしない。

できない。

「おいしそう」

アマリリスでさえも、こんな感覚は初めてだった。人狼を殺したい、手に入れたい、バラバラにしたいという事は何度もあった。けれど、「味わいたい」というのは覚えがない欲求だった。この人狼がとりわけ美しいからなのか、この人狼があまりに愛らしいからなのか。アマリリスは自分でも不思議だった。それは、ひと目惚れに

近い感覚。ひと目見ただけで、身体の髄まで欲しくなるという不思議。

「ツバキ……」

アマリリスの歯が、ツバキの腕に喰い込んだ。途端に、濃い血の味が染み込んでくる。血の味が、アマリリスの身体の中へと吸収されていく。ツバキの震えが、アマリリスの狂気をさらに増幅させる。求めるのは、ぎっしりと詰まっているこの肉。

だが、アマリリスの欲は、それ以上満たされなかった。

アマリリス達を見下ろす空が異変を生じたのだ。雲が集まり、稲妻が走り去り、暴風が小高い岩を越えて吹き荒れる。アマリリスはそれでもツバキの肉を味わおうとしたが、やむなく口を放し、異変の元を睨みつけた。ツバキはまだ、呆然としていた。だが、小さく動く口からは、呟きが漏れていった。

「ジズ様……」

ツバキの呟きに反応するかのように、雲が晴れていく。太陽を何者かが覆い隠している。

アマリリスは注意深くその雲の向こうに居る者を把握しようとした。だが、それは、大きすぎて、把握しきれなかった。把握できた時。それは、雲が綺麗に晴れ、元の大空が現れるはずだった光景を再び目にした時だった。真っ青に輝く空。だが、何処か岩肌にも見える。何者かの集合体。雲に隠されていたそれは、空じゃなかった。

――羽毛？

アマリリスはその時初めて、自分が見るべき場所はもっと隠された太陽に近い場所であることを理解した。目で追うその先。二対の鋭い眼光が、ちっぽけなアマリリスを睨んでいる。

「怪鳥……？」

そこにいたのは、真っ青な鳥だった。空の一部がそのまま鳥になったかのような巨大な姿。何もかもを包み込んでしまいそうな翼を広げ、ゆっくりと、岩で出来た止まり木に止まる。アマリリスとツバキの見上げる先は、その鳥で一杯になってしまった。

「ジズ様、お許しください」
ツバキが呟いた。崩れ落ちるようにアマリリスの手を離れ、彼女はジズを呼ぶその怪鳥にひれ伏した。
「《恐怖》を止められなかったことをお許しください。この者は、《恐怖》に支配されずとも、《恐怖》を引き連れてやってきてしまったのです」
ツバキの言葉に、アマリリスは段々と落ち着いて来た。もうツバキを食おうなどという気持ちは起こらなかった。ただ目に映るのは、鋭い光を宿しているジズの目だけだった。
ジズは少しだけ首を傾げ、鋭いくちばしを開けた。猛禽特有の高い声が、谷中に響き渡った。こだまが治まると、ジズはもう一度アマリリス達を見降ろし、穏やかな表情を浮かべた。
「そしてその《恐怖》とやらは……」
アマリリスの頭が一瞬ですっきりするほど、暖かい声だった。
「お前の中にも埋め込まれたようだな、ツバキ」
ツバキは息を呑み、さらにひれ伏した。
ジズは目線をアマリリスに戻した。
「魔女よ」
その目は色を定めず、ぐるぐると渦を巻くようにしている。アマリリスはその渦に目を奪われていた。
「ツバキはわたしに使える者。どう足掻いても、お前のモノにはならぬ。そこに隠れているクーガーと人間を連れて、立ち去るがいい」
ジズは再び鳴いた。その声が空間を振動させる。再び大きな風が起こり、アマリリスの目を一瞬だけ奪った。風はすぐに止んだ。が、アマリリスがもう一度目をあけた時には、すでにジズも、ツバキもいなかった。

23. SPIRITUALITY

23.

少女にランという名をくれたのは、巨大な樹木だった。

彼女の生まれた町では、羊の耳を持っていようと、幼い頃から不思議な癒しの力を持っていようと、不気味がられたりはしなかった。何故なら、その町ではそういった存在は当たり前のことであり、今更気味悪がるようなことでは全くなかったからだ。むしろ、彼女の持つ力は、重宝されるべきものだった。

だが、彼女の両親は、彼女に名を贈ってくれなかった。彼女は捨てられ、生まれてすぐに、町の外れに佇む樹木の子どもとなったからだ。ランという名を町の者が聞いたのは、本人から。彼女には、町の者達には聞こえない、樹木の声が聞こえていた。

「わたしの名前はラン。お母さんがくれた名前なの」

ランは初めて会う者には、必ずそう言った。母が樹木のことであるのは、彼女の様子から明らかだった。

いつしか、町にはランを知らぬ者はいなくなり、ランは樹木に当たり前にいる存在となっていた。ランの持つ癒しの力は特に評判がよく、ランはさまざまな物品と引き換えに、さまざまなモノを癒していった。そしていつしか彼女の力なら、魔物の瘴気や猛毒ですらも無効化出来ると言われるほどの存在となっていた。

だが、彼女の存在とその力は、町全体の秘密でもあった。外部からの侵入者を防ぐためだ。噂は怖いもの。世の中数多の価値あるモノが引き起こした争いは、いつも悲惨な結果を生み出している。町の者たちはそれを知っていたから、部外者にはランの事を隠し通していた。

ランもまた、争いを避けるために、部外者の前では極限の癒しの

力を封印し、樹木に寄り添うひ弱な魔女として振る舞った。
こうして、ランの住む町は均衡を保っていた。
だが、そんな努力は、ちょっとした偶然によって軽々と崩されてしまうものだった。
「どうやらこの町に人狼が巣食ったらしい」
初めにランにその情報を持ってきたのは、河原で転んで酷い擦り傷を作った青年だった。
「肉屋のおやっさんがやられたそうだよ」
ランはその時初めて人狼という魔物の存在を知った。いくらランでも、死んだものを甦らせることは不可能だった。だからそれは、この上なく恐ろしい知らせだった。
「まだ誰が人狼に乗っ取られてしまったか、分からないそうだよ。君も気を付けて、夜道はこの樹木から離れない方がいい」
そう忠告してくれた青年は、数日後に些細なことから人狼と疑われ、町人達に殺されてしまった。
段々と、ランには治せなくなってしまったモノ達が増えていく。人狼の手によって、そして、町人達の手によって、ランの極限の癒しを使っても治せない身体となった者たちが、どんどん増えていく。
人狼は巧みに姿を隠し、町人たちを狂気へと駆り立て、一人、また一人と、罪のない人間達を吊るし上げていく。
ランはそれを樹木の傍から感じていた。
この狂気が、自分に牙を剥くのは、いつになるだろうか。
樹木に寄り添いながら、「その時」を恐れ続けた。
いつの日からか、毎晩、狼の遠吠えが聞こえるようになっているこの町で、母である樹木の声を唯一の癒しとして、ランは祈りながら眠りについていた。
「お願い、誰か、この町を助けて」
人狼はまだ生きている。今夜も罪のない者が、吊るされている。
「お願い、誰か、みんなを救って」
今夜は誰が餌食となるのだろう。

今夜は誰が、極限の癒しを受け付けない身体となってしまうのだろう。

24. FRUSTRATION

24.

アマリリスは歓喜を抑える事が出来ないほど、冷静さを失っていた。

笑いがこみ上げてくることはなかったけれど、それでも微笑まずにはいられない。その場が微笑んでいいような状況ではないのに、アマリリスは嬉しくて仕方なかった。

人狼がいる。やっと次の人狼を見つけた。人々を食い荒らして《恐怖》と《嘆き》にまみれた人狼に、やっと出会えることが出来る。アマリリスはそれしか考えていなかった。

一方、ディアナとバステトは町の不穏さに愕然とした。ディアナがかつて暮らしその後崩壊した村も、バステトが処刑されそうになった村も、村人たちが皆、《恐怖》による狂気に苛まれて、もとの平穏さの欠片もない状況を創り上げていた。けれど、この町はもっと酷いように思えた。

すでに、十数人もの人が人狼と疑われて処刑されたあとらしく、それらの死体は吊り下げられたまま、町人たちはその下を死人のような顔で歩いている。誰かが処刑による犠牲者に目を向けているとしたら、恐らく彼らの身内と思われる町人だけ。彼らの悲鳴が、《嘆き》を生んでいた。

この町はとっくに崩壊しているのに、町人が多いばかりにまだ町として生きていた。だがそれは、屍に命が宿っているようなもの。《嘆き》を生む人と《嘆き》を生ませる人が、この町を支配する《恐怖》をさらに増幅させていた。

ずっといるだけで、こちらまで絶望の淵へと追いやられてしまいそうなほど病んだ町。ディアナとバステトは、さっさとこの町を抜

けたかった。
だが、アマリリスが不敵に微笑んだのを見て、泣く泣く覚悟を決めるしかなかった。
この町に入ったのは、アマリリスが何かに引きつけられるように進んだ結果だった。その何かというものが、二人に分からないわけがなかった。
また、危険な人狼と戦い、憐れな彼らがアマリリスの犠牲となる瞬間を、見なければならないと思うと、今から憂鬱だった。しかし、だからと行って、アマリリスと別れるわけにはいかない。魔術で縛られているディアナはもちろんだが、そうでないバステトにとっても、アマリリスの存在は重要だった。この大陸において、一番の脅威は人狼。その人狼を見境なしに殺してしまうアマリリスの傍に居れば、人狼やその他の魔物に怯える事なんてない。だから、アマリリスが行くという場所について行くしかなかった。
「アリス……居るのか？」
バステトが意を決してアマリリスに訊ねると、アマリリスはゆっくりと頷いた。
「居ルわ。あタしを待っテルの。アタシに殺さレるノを楽しミに待ッてル」
アマリリスの声は異様だった。もはや彼女は堪え切れなくなっている。人狼の気配さえ感じ取れば、ディアナとバステトのことなんて忘れて、駆けだしてしまうだろう。
アマリリスの目が、血走った。
「ミツケタ」

25. EPHEMERAL

25.

樹木の近くにさえいれば、ここだけは絶対安全で自分だけは助かるのだという想いが少しもなかったといえば、嘘になる。

少なくともランが思いつく限り、狼たちの咆哮や犠牲者たちの噂を耳にし、狼検めによって殺される人々の≪嘆き≫とそれの産み出す≪恐怖≫を感じているうちに、何度もそう思ったという自覚はあった。

そう、いつも、そう思う側だった。全く根拠のないことだが、ランはこの場所に人狼が踏み込んでくることなんて決して考えていなかった。

目の血走った狼が、自分の周りをぐるりと取り囲むことなんて、全く考えたことがなかった。

だから、この状況がいまいち理解できなかった。

村人が怪我をしたから癒してくれという話だった。それは覚えている。五人来た内に知らない者なんていなかったし、最近会ったばかりの者だっていた。だから、疑いようがなかった。そもそも、どうして疑うに至れるかすらも、ランにとっては難しい問題だった。

今、こうして、一人の人狼に取り押さえられている間も、ランの頭は整理できていなかった。

「急げ。あの女、ここをかぎつけるかもしれんからね」

たくましい体つきの男がランを取り押さえたまま言う。

ランの記憶が正しければ、この男は鍛冶屋の亭主だったはずだ。

それだけではない。ランを覗きこむように目の前に座っている女は魔女の血を引いていると噂される薬屋の娘だった。外の様子を窺っている少年や青年はそれぞれ町を守る兵士の家の者だったし、ま

だ幼い少女も権力者の家の令嬢だったはずだ。みんなたしかに町で各々の家庭にいる者だ。

「早いとこそいつを食ってずらかろうぜ」

心底面倒そうな顔で少年が言った。その声も、顔も、たしかにあの少年なのに、その様子はまるで別人だった。薬屋の女がさらにランを覗きこみ、その頬に手を添えた。そのあまりの冷たさに、ランは針で刺されたかのような衝撃を覚えた。

「あたし一人だったら、ゆっくり時間をかけてぜーんぶ食べれるのになぁ」

にこりと微笑むその表情は、ランを凍らせた。

「おいおい、一日一匹じわじわと狩るほうがスリルがあっていいとか言ってたの、お前だろ？」

青年にそう指摘されて、女は「違いないわね」と、くすくすと笑った。

ふと、空気が重くなった。人狼たちの表情が変わっている。呼吸をするだけで命を削られているかのような感覚が、ランを包み込んだ。自分はあと何分生きることができるのだろう、そう思うと、今ここにいるということ自体が不自然なものにすら思えた。

これが悪夢だったらいいのに、と考えるランの意識は、もはや、自分をどこか別の場所から見ているという不思議な感覚に包まれていて、今の状況はまるで、別の誰かが人狼に捕まり、食べられようとしているかのようだった。

死ぬのは自分じゃない。きっとこの町の不幸な誰か。

ランの頭の中で、そんな考えが、急速に深く根付いてしまっていた。

「さて、と、そろそろいただきましょうか？」

女の冷たい声が、どこか遠い場所で聞こえた。ここではないどこかで、ランの知らない誰かが食べられようとしている。

「あたしからで文句はないでしょう？　女を食べるときは女からって昨日言ったものね」

女が掴んでいるのはランの肩だったけれど、ランはそれが自分だと気づかなかった。

どこか遠い場所で、自分によく似た少女が、人狼の女に食われようとしている。助けられるわけもなく、ランはただそれを見ていることしかできない。そう、いつものように。そのよく似た誰かがいくら助けを求めるような目でランを見ても、ランは駆け寄ることすらできなかった。

――もうこんなとこ、立ち去ってしまおう。

ランは涙を浮かべるその少女を見ながら思った。

――どうせ、助けられないんだから。

心の中で発したはずの声は、空間の中をこだまし、責めるようにランの耳の中で暴れまわった。

26. OBLIVIOUSNESS

26.

今のアマリリスにとっては、人狼こそが大切だった。
それ以外は、とるに足らないこと。彼女にとっては、本当にどうでもいいことだった。どうでもいいと思うことすらしない。存在しないことに等しかった。
人狼の潜んでいる独特の感覚。人狼からただよう極わずかな匂い。人狼の吐息。そのどれもが、アマリリスの五感を刺激し、その足を急がせる。やがて、彼らの生きている気配が、アマリリスを導き果たした時、アマリリスは美しい人狼の姿を目にし、心の底から興奮を覚えるのだった。
――たくさん。
満足を求めているのではない。満足など求められるわけがない。ただ、目の前にいるから、奪うだけ。その全てを手に入れて、その全てを取り入れて、体の隅々まで、彼らを感じること。斬って、浴びて、そして食べることとして、アマリリスはその欲求を満たそうとしていた。
そんな彼女に、人狼以外の者が見えるはずもなかった。
「誰？」
はじめに人狼の女がアマリリスに気づいた。
だが、もはや手遅れ。アマリリスから逃れるには、遅すぎた。狼たちもアマリリスを見た瞬間、それを悟っていた。悟ったからこそ、彼らは混乱しはじめた。見張りをしていた人狼が、仲間に言い逃れをしようと振り返った瞬間、さらに狼たちを恐怖に貶める事態が起こった。
誰もが、何が起こったかなんて分からなかった。

ただ、仲間の人狼が、突如自然にバラバラになったようにしか見えなかった。

見張りが立っていた辺りが真っ赤な肉片と血で汚れていくのを見つめながら、狼たちは完全に我を失ってしまっていた。

誰もが言葉すら発せない状況の中で、ひとり、またひとりと、人狼たちがバラバラになっていく。

悲鳴をあげる間もなく、自らの身に何が起こったかを把握するまでもなく。アマリリスによって、吸収されていく。

やがて、人狼があと一人となってから、アマリリスはやっと言葉を発した。

「オいシイ……狼ノ……血」

残されたのは、アマリリスに最初に気づいた、人狼の女だった。

捕まえたばかりの獲物を抑えていたはずの仲間が、いつの間にか肉片になっているのを見つめ続けて、彼女は次第に今ここで起こっていることを把握し始めた。そして、アマリリスの発した声を遅れて理解し、血まみれで同じく呆然としている獲物を引き寄せて、その場をすぐに逃げようとした。が、足に力が入らず、獲物もろとも転倒してしまった。

逃げなければ、という想いを、恐怖が邪魔する。

「あなタ……残しタの……」

アマリリスの声は、少しずつ穏やかになっていく。辺りにただよう血だまりと生肉の匂いが、アマリリスの心を安らげてくれた。恐れと混乱に引き攣った人狼の女の顔を、アマリリスはじっと見つめた。

「一番、綺麗だっタカラ……ゆっクり、食べ…タ…い」

アマリリスの歩みが、人狼の女の心拍数を急上昇させた。彼女と取り囲む仲間たちの屍が、さらに彼女を追い詰めていく。

仲間が殺された。自分も今にこうなる。その事ばかりが、彼女の冷静さを奪っていく。もはや彼女にとって、食べるはずだった獲物は、ただ恐怖から逃れようとしがみつくだけの存在となっていた。

アマリリスが、やっとその獲物に気づいたのは、その時だった。
すでにある程度の冷静さを取り戻しつつあったアマリリスは、その獲物が人間の亜種であり、人狼からすれば極上のご馳走となるだろう事も想像できるほど落ち着いてきていた。だが、獲物は所詮、人狼にとっての獲物。アマリリスにはその亜種が可愛いと思えても、取って食おうなどとは思えなかった。
ともかく、これで目の前の人狼を十分楽しみながら味わえる。そんな想いが、落ち着いてきた彼女をさらに冷酷にした。
人狼の女は今や、小動物のように震えていた。獲物を抱きかかえながら、死への恐怖から逃れようとしている。否、むしろ、≪恐怖≫に恐怖して、どうにか逃れようとしていた。
アマリリスには、そんな人狼の女が愛しくてたまらなかった。

27. DRYAD NYMP

27.

ディアナとバステトがやっとアマリリスを見つけたのは、全てが終わった後だった。厳密に言えば、全てが終わっていると信じたい状況だった。

辺りはもう十分すぎるほど血で穢れていたし、人狼らしき者など、影形ない。特に、獣となったディアナの感性には、ふんだんに赤が塗りたくられたの空間にぽつんと立つアマリリスの姿は、全く興奮していないように映っていた。

しかし、アマリリスはディアナにも、バステトにも気付いていなかった。不思議そうに見つめる先にいるのは、血に塗れた少女。羊のような耳を持つ、人間の亜種と言われる異形の娘だった。

「あなた、だれ？」

そよ風のように漂ったその言葉は、他でもないアマリリスのものだった。

「狼の匂いはするのに、狼じゃない」

狼よりも厄介な者を前にしてしまった絶望的な相手にじっと睨まれているという状況。羊の耳を持つ少女は、本物の子羊のように震えていた。

「……アリス」

見るに見兼ねたのだろう、バステトが落ち着いた声で声を掛け始めた。

「その子は狼じゃない」

「……狼じゃない」

アマリリスはその言葉を繰り返し、少女の頬にべったりとついた血を拭い、それを舐めた。少女の潤んだ目が、じっとアマリリスを見つめている。

「あの子たちの最後のご馳走」
アマリリスがそっと呟いた。
ディアナとバステトは、その「あの子たち」を、もう見ることができない、もしくは、もうちらりとだけは目にしていることを各々で静かに受け止めて、アマリリスの心が静まるまでじっと待った。
「あなたは、この樹の娘ね……」
アマリリスの声は、段々と安定していった。少女の小さい体が、どうにかアマリリスから離れようともがいている。
しかし、それをさせないのがアマリリスの視線だった。
「この樹は死ぬ」
アマリリスは少女を見つめたまま、淡々と言った。
「町に漂った《恐怖》を吸って、町に溢れた《嘆き》を吸って、それらは次第に《恨み》へと変わって、あなたのお母さんを蝕んでる」
アマリリスの声は、ぞっとするほど優しかった。
「あたしがあの子達を《捕まえた》とき、たくさんの《恐怖》がその樹を汚した。《恐怖》は時間が経ったら変化するの。《嘆き》、そして、《恨み》」
じっと少女を見つめたまま、アマリリスは言った。
「そうしたらどうなるか、知りたい？」
アマリリスの目は、冷たい色をしていた。少女の動きを縛る、妖艶な目にも見える。
「名前を言いなさい」
アマリリスが少女に言った。唐突で、命令的な声。従わねばならないのかどうか、少女はその瀬戸際で狼狽えた。
「名前を言いなさい」
アマリリスがもう一度言ったとき、少女は息を呑んだ。
ディアナは、名前を言わないように、と願った。この状況で名前を言うことがどういう事か、分かっていたからだ。
一方バステトは、名前を言うように、と願った。この状況でアマリリスを怒らせれば、どのような状況を引き起こすか、分かってい

たからだ。
　少女はアマリリスから目を離すことなく、どこか人間離れした円らな瞳を潤ませながら、そっと口を開いた。
「ラン」

28. SURVIVE

28.

ランはアマリリスのことをアリスと呼べなかった。そう短縮して呼ぶだけの心の力量がまだ足りなかったのかもしれない。

いくらディアナとバステトが、アリスとばかり口にしても、ランだけはそう口にすら出来ない日が続いていた。

初め、ランは出来るだけバステトの傍に寄り、道中もアマリリスの方から話し掛けられないかぎり、バステトにしか話し掛けなかった。

ディアナを恐がったのは、彼女が猛獣であることを最初から知っていたからだろうし、ディアナの方もまた、ちょろちょろと動くこの小動物を見ていると、頭のどこかが刺激されて、居ても立ってもいられなくなりそうになるため、あまりランのことは見ないようにしていた。

そんなわけで、この新しいペットの面倒を見るのはバステトとなってしまい、バステトは内心うんざりとした。が、ランのいとおしさも手伝って、次第にその役目を厭わずに、呼吸をするぐらい当然に担うようになっていった。

また、ランの方も、アマリリスよりもはずっと人間らしいディアナへの恐怖が薄れていき、二、三週間も経てば、一言二言ぐらいは会話を交わすようになっていった。

ディアナも、ランに話し掛けられたときは、ちゃんと対応できるようになっていき、段々とその距離は縮まっていった。

だが、アマリリスとだけは、いつまで経っても縮まらない。

ランはいつまで経っても、アマリリスにだけは話し掛けられなかった。アマリリスの目もまた、いつまで経っても、ランを食える生

き物を見る目で見ていた。そのたびにランは、人狼に捕まったときとは違う、不気味さを感じた。突き放したようなその目線は、ディアナに向けられるものでもなければ、バステトに向けられるものでもない。人狼に向けられるものとも何か違った。

しかし、ランはアマリリスについて行くことを厭わなかった。厭ったとしても、どうにもならないという事もあったけれども、何故か厭う気にもならなかった。たしかに、故郷に居座りたくないという事もある。これからもたくさんの者がランの力を求めてきただろうことを思っても、やはり、喰われそうになったというショックが、ランに強く圧し掛かり、ずっとねぐらとしていた樹との別れすらも決意させるほど強かった。

だが、それだけではなく、根本的に何か放っておけない理由が、ディアナでも、バステトでもなく、アマリリスにあるような気がしたのだ。それは運命とでもいうべきなのだろうか。とにかく、それは、不自由で強制的なものだった。

だから、道中で見つける人狼を次から次に叩きつぶすアマリリスが怪我をつくる度に、ランはその傷を治していた。アマリリスに頼まれたわけでもなく、時にアマリリスが拒否しようとしても、ランは治療をした。これは自分の意思だった。どんなに恐ろしいと思っても、彼女を支えることは続けようという意思。役立ちたいという意図。

たとえ、アマリリスにとって、ランは非常食ぐらいにしか考えられていなかったとしても、癒すという力でどうにか関係を繋ぎとめるのに必死だった。

29．CANNIBALISTIC

29．

サファイアという名を貰ったのはどうしてだろうと彼女は何度も考えていた。

生まれたのは裕福な家。教養を身につける事に関して口うるさいが、そのくせ、召使いなどの目下の者の扱いは最悪であったろう家庭で育ち、命をつなぐことに関しては何一つ苦労せずに済んだ恵まれた環境だった。

だが、それが決して狂わないなんていう妄信はなかった。いつか必ず狂うだろうという覚悟はあった。しかし、目線はいつも狂った後にあった。狂わないように努力するなんて、サファイアに出来るわけがなかった。また、それに対する罪悪感も持ち合せていなかった。それが悪いことだと知らなかったからだ。だが、知らないという事が許されるほど甘い事ではなかった。

沢山の墓碑を前に、そして、人狼検めのために吊るされ、燃やされ、バラバラにされた家族の躯を目にし、サファイアは故郷を逃げるように去った。

問題は、その後だった。森にあった廃屋に住んだはいいものの、また、元より狩猟に関しては才があったはいいのだが、もはやサファイアの舌は、鹿だの鳥だの狐だの兎だのの生肉で満足できはしなかった。求めるのは、もっと濃厚なもの。生きたままかぶりつける、あの感触。

いっそ、人狼に生まれればよかったとサファイアはいつも思っていた。このサファイアという名も、昔大陸を彷徨っていたという伝説の女人狼の名前。力強く、人間を含めた全てを無に帰そうとした悪魔と戦い、この世を救ったとされる人狼の中の賢者。両親はその

女人狼から名前を取ったと言っていた。
では、何故、人狼に生んでくれなかったのだと、サファイアは今になって恨んだ。人狼であれば、もっと力がある。人狼であれば、もっと好物に近づける。人狼であれば、開き直ることが出来る。
好物を思い出すたびに、サファイアは自分は何者なのかという思考に捉われ、錯乱しそうになった。
生まれ故郷に居た頃は本当に幸せだった。
あの頃、あの町には年頃の者たちがたくさん生き場を失って彷徨っていた。青年もいたし、娘もいた。サファイアは同じ年頃の娘が好みだった。娘の肉は柔らかく、血は赤ワインのように濃く、今際の時にあがる悲鳴と嬌声は、サファイアの欲望を満たしに満たした。それまで散々尽くして、気を引いて、心を食い尽くした後に、命を喰い始めるという過程が、サファイアには堪らなかった。
狩りで得た獣の肉を一人廃屋で喰うたびに、サファイアは思い返す。
あの頃は、幸せだった。欲望のままに好物にありつき、楽しんでいたあの頃。
サファイアはそれらを思い出しながら、何度も何度も嘆息した。
「……ニンゲン食べたい」
その呟きは誰にも聞こえなかった。

30. TAGGING

30.

ランが居ない事に最初に気付いたのは、意外にもアマリリスだった。ディアナもバステトも、てっきり自分達のすぐ後ろに居るとばかり考えていて、ランが逸れてしまった事に全く気付かなかった。

アマリリスが気付けたのは、一旦振り返ったためだ。

里から外れた森の中には漂わなさそうな得体の知れない気配がした。人狼のものではない。アマリリスにはそう断言できた。人狼に漂う欲望の気ではない。もっと別の、禍々しい気配。それは、狂気。人間独特の狂気だった。ヒトでありながら、ヒトでない何かになってしまった者の発する、狂気。アマリリスにとっては、不快なものだった。

その気配が森に入ってからぴったりとついて離れない。段々と濃くなっていくそれが何なのかはっきりとさせようと思って、アマリリスは振り返った。そして、ランが居ない事に気付いたのだ。

「今夜は羊を食べるつもりなのかしら」

アマリリスは冷静な声で言ったものの、内心穏やかでなかった。自分とよく似た気配を、ただの人間が放っているという事への嫌悪。そして、自分のモノに手を出したかもしれないという怒りが、彼女の心を乱している。

「ラン？」

アマリリスの言葉に、バステトとディアナがやっと気付いた。全く気付かなかったという驚きと、この森で居なくなるという絶望に、二人は愕然としていたが、アマリリスはそれよりも、木々の向こう側からじっと貼りついている気配の方にしか注意がいっていなかった。

「アリス、何か分かるの？」
ディアナの問いに、アマリリスは答えなかった。代わりに、アマリリスは、木々の向こう側へと声をかけた。
「ねえ、返してよ。それ、あたしのなの」
木々の向こうの気配に、バステトもディアナも気付いていなかった。それほどこの森には気配が溢れていたし、その中に紛れる人間の気配なんて、取るに足らないものだと無意識に判断していたからだ。しかし、それが決して放っておいていい気配でなかったことは、目にしたら明らかだった。
木々の間に潜んでいたのは、女だった。赤い長髪を伸ばした、異様に青い目を持つ女。じっと見つめるその姿は、神秘的な彫刻のようで、バステトもディアナも思わず息を呑んだ。しかし、すぐに我に返った。その女の腕に、ランが居たからだ。口を塞がれ、震えながら、こちらを見ている。まさに盗人に盗まれる子羊そのものだった。
「聞いてるの？」
アマリリスの問いに、女は答えなかった。代わりに、女はくるりと身を翻すと、そのまま木々の向こうへと姿を消してしまった。アマリリスはじっとその光景を見つめながら、静かに嘆息した。
「面倒な人ね、狼でもない癖に」
「アリス、追うんでしょう？」
ディアナの問いに、アマリリスは今度は答えた。
「うん、あの子、痛い目にあわせてあげなくちゃね」

31. A STRAY LAMB

31.

さらわれた瞬間を、ランは覚えていなかった。ただ、気が付いたら離れた場所からアマリリス達を見ていた。そして、アマリリス達の姿が、自分の視界からだんだんと遠ざかっていくとき、やっと、ランの全身が《恐怖》を包み込んだ。

わけが分からないという混乱から、本物の《恐怖》への変化だった。

やがて、アマリリス達の姿が完全に見えなくなると、ランの心は《嘆き》で満ちあふれた。

自分を抱えるこの女が、ただ者でないことを本能的に悟っていたからだ。

口を塞がれて運ばれる間、ランは自分の命のともしびが消え入る寸前にあることを感じていた。そして、焦らしに焦らした上で消されるだろうことを、予知していた。

女が走ることしばらく、アマリリス達の気配はすっかり消えてしまっていた。ランはもはや助けだとか、逃げなくてはだとか考えられる余裕がなかった。

ただ、追っ手の気配が消えたことに気付いた女が、余裕の笑みを浮かべて、腕のなかのランに微笑みかけた瞬間、ランは頭が真っ白になってしまった。

何も考えられないし、何も思い浮かばない。ランの頭の中は黒ではなくて、白に支配されていた。

女がランを抱き直し、耳元で囁いた。

「もうすぐ着くわ。あなたの名前を教えて」

名前を要求されたのがこんなに恐ろしいのも、アマリリスを省くならば、初めてだった。

それも、アマリリスとはまったく違う、粘着的につきまとう甘い誘惑に満ちた恐ろしさ。蜘蛛の糸のようなそれは、ひっかけた獲物をなかなか離そうとしない。

それでも、ランは耐えた。せめて名前だけは、洩らしたくなかった。

女はそれを見越してか、ランを抱いたまま、再度囁く。

「あなたのすべてを知りたいの。心も体もすべて。あなたの名前くらい、あたしの力だけで引き出せるけれど、あなたの口から聞きたいの。名前を教えて」

最初よりもきつい口調だった。

ランはますます震えた。名前なんて教えてやる義理はない。むしろ、教えてはならないはずだ。しかし、そんな思いも打ち砕かれるほど、ランは追い詰められていた。

「ねぇ、教えてよ」

女の甘い声が、ランの頭を鷲掴みにする。ランは身動きがとれないまま、一瞬だけ全身の力を抜いた。急な脱力に、女の力が弛んだその隙に、ランは急に力をこめて、体を地面にぶつけるように落下していった。

鈍い衝撃がランを包み込んだ。同時に、解放されたという安堵も、ランの体を刺激する。地面から跳ねとばされた勢いで起き上がると、ランは真っ直ぐ走った。

女が追ってきているのか、まだ動いていないかなんて関係なかった。ただ逃げなければというはっきりとした理解が、ランを動かしていた。

前へ、ただ前へ、ランは走り続けた。

32. SCRAMASEAX

32.

森の中で見失うほど厄介なものはない。ましてや、人狼とは違い、体の底から求める相手ではないのだから尚更だった。

しかし、アマリリスは探し続けた。人狼を追う自分と、今の自分は違う。そう信じて、ランを奪っていった女を捜した。

アマリリスには分かる。あの女、明らかに人食いの目をしていた。かけがえのない食料として、ランを攫ったわけだ。

「なぁ、分かれて捜すほうがいいんじゃねぇの？」

バステトがそんなことを言ったが、アマリリスは何も答えずに進み続けた。

落ち着いてランを食べたいというのなら、女がどう動くか、少しだけ予想があった。

「このまま進むべきってことか？」

バステトがほぼ独り言のようにそう言った時、アマリリスの思ったとおりの事が起きた。

「来るわ。一人かしら」

木々の影から見つめてくる目。何かを手に持っているその姿。女の方からこちらへとやってきた。

剣だろう、とアマリリスは睨んだ。

ただの剣だといいが、そうでなければアマリリスの魔術を跳ねとばすかもしれない。

アマリリスは警戒して、女が近寄るのを待った。

「邪魔しないでよ。余所者のくせに……」

女はそう言うと、剣を振るった。

「ここは私の場所。私の新しい住居。やっと食べ物を見つけたと思ったのに、とんでもなく面倒臭い相手だわ」

剣を振るうたびに、空気が妙な音を立てて振動する。やはり、ただの剣ではないようだ。

「この私の手を煩わせないでちょうだい。魔女どもめが」

「そんな大切なご馳走、あなたはどこへやったのかしら？」

アマリリスは冷静に訊ねた。この女の苛立ち気味に少し引っ掛かるところがあったからだ。

「まさか、あなた程の御方が小羊ごときに逃げられたわけではないでしょうよ？」

アマリリスの言葉に、女は眉をひそめた。その変化は、ディアナとバステトにも伝わるほど顕著なものだった。

「うるさいわね」

女は低く唸るように身を潜め、剣をしっかりと握った。

「どうせお前たちとは話なんてしたくないの。私に口を聞いていいのは、この剣だけ」

女の深い青の目が、サファイアのように輝いた。

彼女が剣を振るうと、空気と大地が裂け、ディアナへと刃の波が襲い掛かってきた。

しかしディアナは透かさず跳んで、黒いクーガーとなって女に襲い掛かった。女はクーガー姿のディアナを見て、落ち着いた声で言った。

「綺麗。漆黒の毛艶が堪らなくいいわ」

女が剣を払うと、再び衝撃がディアナを襲う。今度は直撃だった。ディアナの毛皮を、細やかな風が痛め付ける。

「安心して、傷はすぐ治るわ」

ディアナの変身は、地面に倒れると同時に解けた。右足の筋を深く斬られてしまった。その痛みは、呼吸すら荒くなるくらい酷いものだった。

「あなたの肉は美味しくなさそうだけど、毛皮は最高ね」

女はディアナに言うと、残りの二人を見つめた。

「なんだ。美味しそうな子は一人だけじゃない」

女はバステトを見つめた。
「あの小羊よりは美味しくなさそうだけど、それでも十分よ」
女が動きだしたとき、バステトは一瞬動けなくなった。
今までとは違う、異様な恐怖感が一気に攻めてくる。人狼とも違うし、アマリリスとも違う。はたまた、疑われて処刑されかけた時とも違う、一瞬だけの恐怖。
ほんの数秒遅かったら、きっと呆気なく止めを刺されていただろう、とバステト自身ひやりとした。
女は剣を叩きつけるようにしながら、バステトを狙い打つ。ディアナの時とは違い、確実に斬ろうとしている。
バステトは急いでナイフを探したが、ナイフごときであの剣を受けとめることは出来ない。結局身軽さを利用して避けることしか出来ない。
しかし、女が力をこめて、二発三発と打ち込んでこようとした時、女の行く手を氷柱が覆った。
アマリリスだ。
「あたしを無視してその子たちを獲られるわけがないでしょう」
女はアマリリスを見つめると、黙って氷柱を叩き割った。
アマリリスはきつい目を柔らかくして女を見つめた。
「面白い剣なのね。あたしにもよく見せてよ」

33. BEHEMOTH

33.

はじめ、ランはそれが小山だと思った。

それは緑の苔を生やし、よく見れば小さな木の芽までも生えている。様々な色の花も咲き、蝶や小鳥がまとわりつくという様は、まさに小さな野山そのもの。それが野山ではないと証明するモノは、頭、尾、そして、四足だった。小さな耳に、鼻先に伸びる角、がっしりとした四足でのっそり歩くその姿は、見るからに重厚なもので、それでいて、緑の苔に覆われる目は円らで、優しげで、ひと目しただけのランですら、心落ち着く印象を受けた。

苔の下に見える皮膚の色は灰色。姿形こそ野山のようになってしまっているが、元々はサイか何かの姿をしていたようだ。ランがぼんやりとその者を見つめていると、あちらから声をかけてきた。

「羊かと思ったが、人間のようだねえ」

穏やかな老婆の声だった。

「里から迷い込んだのかえ？　道案内出来る程、この場所を知らんのだけどねえ」

呆然とその巨体を見上げるランを、老婆は微笑ましく見つめる。

「そうだ、名前を言い忘れたね。妾はベヒモス。この地の獣たちにはよくして貰っているよ」

ベヒモスと名乗ったその老婆の背中に居る小鳥たちがランに対して何か意見しているかのように鳴き始めた。ランには彼らの言葉は分からなかったけれど、何処となく心穏やかでない事を言われている気がして、居心地が悪くなった。ベヒモスは、目をちらりと動かして、小鳥たちのいる方向を見つめたまま静かに言った。

「これこれ、言葉は通じなくとも心は通じるのだよ。妾がいつも言い聞かせているだろう？」

ベヒモスの言葉に、小鳥たちは首を傾げ、さっきとは違う調子で囀り始めた。
「この子らには悪気はないんだよ。ただ、思ったことを隠すのが下手なだけでねえ」
ベヒモスの声を聞いていると、ランも少しは緊張が解けた。と、同時に、はっと思い出した。自分を追ってきていた女の気配がない。辺りをきょろきょろと見渡しても、それらしい殺気などはなかった。
「どうしたのかえ?」
ベヒモスの声に、ランは答えた。
「追われているんです。人間の女に。仲間ともはぐれて、迷ってしまったのです」
ランは嫌な予感がしていた。アマリリスが自分を捜してくれているのかは分からない。バステトやディアナがそう仕向けてくれるだろうけれども、ランが不穏に思っているのは、そういう事ではない。アマリリスとあの女の衝突の方だ。もしもアマリリスが人狼狩りに似た状態に陥ってしまったら。もしもその事が女を逆上させ、バステトやディアナへと危害を加えていたら。そちらのほうが、恐ろしかった。
そう思うと、居ても立ってもいられなかった。
「人間の女にかい?」
ベヒモスは非常に不思議そうに訊ね、ランはそれに頷いた。
「やっぱり人間は理解に苦しむ生き物だねえ。お前達、ちょっと様子を見て来てくれないかえ?」
ベヒモスのゆっくりとした言葉に、さっきまで囀り続けていた小鳥たちが、一斉に飛び立っていった。後に残る蝶たちが、代わりにベヒモスの周りを飛び回り始める。ベヒモスはじっと遠い場所を見つめ、のんびりとした口調で呟き始めた。
「魔女と人間が討ち合っている。獣の血を引く女が倒れ、人間の女が倒れ、魔女がそれを守りながら闘っているようだね。可哀そうに、怪我をしているようだよ」

ベヒモスが見ているものは、まさしくランが気になっていることだった。

「それは何処ですか？　今すぐわたしが駆けつけられる所？　わたしはそこに行きたいんです」

ベヒモスは落ち着いた眼差しで、そんなランを見つめていた。

「場所は小鳥たちが知っているよ」

ベヒモスはそう言って、身をふるふると震わせた。

「妾の背中に生える白い花を一輪持って行きなさい。悪鬼に取りつかれた女を大人しくさせる魔力の秘められた花だよ」

白い花からの甘い香りが漂ってきた頃、小鳥の一羽が戻ってきた。ランは一輪だけベヒモスの背中から花を摘むと、ベヒモスの頭に止まる小鳥を見上げた。

「さあ、お行きなさい」

ベヒモスの声とともに、小鳥は再び飛び立ち始めた。

34. CORANDUM

34.

ランが駆けつけた時、ベヒモスが言っていた通りの光景がそこにはあった。

ランを案内した小鳥はその異様さに脅え、飛び去っていってしまった。一輪の花を手に、ランは動揺していた。自分を攫っていった女が、アマリリスと闘っている。その傍らで、ディアナとバステトが倒れている。目の色を変えたアマリリスが、彼らを守るように女と対峙していた。

女の目は深く鋭い青。冷たい炎がゆらゆらと揺れるように光っていた。そして、その目は新しく現れたランへと向いた。青い眼光がランの背筋を凍らせようとしたけれど、ランは必死に耐えた。手に持つ花を落とさないように気をつけながら、じっと女のサファイアのような目を見つめ返した。女の持つ剣が、がたがたと震えている。女の目線はランの手元、白い花へと向いていた。

ランは、はっと気づいた。

女がこの花を嫌がっている。この花を拒否しているように思えたのだ。そう思うと、急に勇気がわいてきた。ランは女をじっと見つめると、走り出した。女が透かさず剣を構えたが、ランは動じなかった。ただ花を散らさないように、散らさないように、とだけ心がけて、ランは女の体にぶつかるように飛び込んだ。

アマリリスはその様に唖然とした。ついさっきまで小羊以外の何とも認識していなかった少女が、自分ですらてこずる女相手に物怖じせずに飛び掛かったのだ。感心よりも驚きのほうが勝り、しばらくじっと見つめていることしかできなかった。

ランの方は、アマリリスが驚いていようがいまいが構ってられな

かった。

とにかくこの花を、女に近付けることしか考えていなかった。

そして、花びらが少しだけ女の皮膚に触れたとたん、女が金切り声をあげた。痛みからの叫びというよりも、もっと違う苦痛を表す叫び。それは、嘆きにも似ているし、恐怖からあがる悲鳴にもよく似ていた。ともかく、花による女の悲鳴は森中に響き渡っていき、唐突にその響きは止んで、耳が痛くなるほどの静寂が訪れた。さらにその緊張に満ちた静寂を震わせたのは、剣が地面に落ちる音だった。微かな音であるはずのそれは、ランにとっては、鼓膜をぶち破るかのような暴音だった。

一方、剣を落とした女は、悲鳴を上げた時の格好のまま、しばし制止し、やがて、崩れ落ちるように倒れてしまった。剣のすぐ傍で伏せる彼女は、泣いていた。哀という感情が色になって醸されているかのように、女の目からは涙が溢れていた。

ランはしばらく恐れのあまり、動けなくなっていた。ただ、悲哀という色に染まる女を見つめていることしか出来ない。しかし、それを打ち破ってくれたのは、アマリリスだった。アマリリスはそれまでの荒々しい気迫の一切をしまいこんでしまっていた。そっと女の傍に近寄り、しゃがんで女の顔を覗きこむその姿は、ランが初めて目にする《優しさ》が籠っているようにすら見えた。

「あなたは悪くないわ」

アマリリスは女に向かって言った。

「あなたは悪くない。悪いのは、あなたに取り付く欲だけよ、サファイア」

アマリリスの目が細められる。

その目を見た瞬間、ランはぞっとした。それまで《優しさ》すら感じていたその姿が、全く違うものに見えた。アマリリスが静かにサファイアと呼んだ女の額へと手を置くと、女は震えを止め、そのまま寝入ってしまった。

アマリリスは乳飲み子の母のようにその姿を見つめ、甘い声で呟

いた。
「眠りなさい、しばらくの間は」

35．ASMODEUS&BEELZEBUB

35．

アマリリスが名前を読み取ったことで、サファイアは随分落ち着きはじめたが、それでもランに向かう欲求は消滅してはいなかった。意識を取り戻したディアナとバステトもまた、サファイアに対しては気を抜かず、警戒心顕わに様子を窺っていた。

しかし、アマリリスは、大人しくなったサファイアに対して、警戒するどころか、サファイアもまた連れて行こうとし出した。それに対して、とやかく口を出せる者などいなかったが、その事がさらにラン達を不安にさせた。

サファイアはそれを十分理解していたようで、いまだ警戒を解かないディアナ、バステト、ランに対して、静かに告げた。

「あなた達のように私よりも弱い者が警戒心を解かないのは賢明なことよ」

悪びれた様子一つせずに、サファイアは異様に青い目をじっと三人に向ける。

「だって、私、あなた達が食べ物と毛皮にしか見えないもの」

宣戦布告ともとれるその言葉に、いよいよサファイアの存在が疎ましくなってきたが、アマリリスが連れていくというのなら反対は出来ない。それに、こんな場所で独立する事なんて出来ないし、独立出来る場所があったとしても、この世の中を独りで生きていく事に対しては大いに不安があった。

だから、いかにサファイアに食人の気があったとしても、いかに自分達が不安定な捉われ方をしているとしても、あからさまに彼女に拒否を示す事なんて出来なかった。

「安心なさいな」

サファイアは面白がるように微笑む。
「私があの魔女に逆らって、あなた達を襲うなんて事、出来るわけがないじゃない」
そう言って、手入れをした剣を仕舞った。そんなサファイアを見つめ、ランは少しだけ、その姿にアマリリスの姿を重ねた。似ていないけれど、似ている。そんなややこしい感覚が、彼女の中にぽつりと浮かんできた。
「あの子は悪魔憑きなのよ」
また、サファイアが寝入ってから、アマリリスが呟くように言った。誰に話すわけでもなく、独り言のように、彼女は口を開く。
「食欲と色欲の混じった、不安定な状態。悪魔が生まれ落ちる前より彼女の中に巣食い、彼女の精神と融合し、切っても切れぬ特性となって、今に至っている。あの子を満足させるのは、肉欲が最後に手にする崇高な快楽。人間の娘を生きたまま食すことで、それを味わえるというのは、とても不幸なことよね」
機械的に途切れ途切れで言うアマリリスの言葉は、ランの心に深く圧し掛かった。そして、あと少しで自分もその肉欲を解消させる道具となろうとしていた事を思い出して、すでに寝ているバステトに縋り寄った。
「そんな悪魔憑きをアリスはどうするつもりなの？」
アマリリスにそう訊ねたのは、獣姿のディアナだった。サファイアは、そのディアナの毛皮に埋もれるように寝ていた。
「わたしのように、僕にでもするつもり？」
ディアナの問いに、アマリリスはゆらりと目を向ける。その目は、何かを強制するような脅しの念が籠っていた。
「あなたのように、ではないわね」
ただそうとだけ言って、アマリリスは寝そべった。そして、それ以上、会話は起こらなかった。

36. SHOOTING

36.

先に自分のペースを乱した方が絶命するだろうことは、プシュケもよく分かっていた。

段々と集中力も途切れ、意識も朦朧としてくるたびに、ここで死ぬために生まれてきたのだろうか、という想いが頭の中を過ぎり、その度にはっと我に返るという事を繰り返しているうちに、時は刻々と過ぎ、気付けば半日以上は同じように過ごしていた。

疲れているのは自分だけではない。相手も同じ。数も一対一。性差もない。ただ、種族の差は越えられない。相手は人狼。女とは言え、人間の男よりもずっと体力も腕力も持久力もある。捕まれば、それが最後。群れでなかったことを有難く思うしかないだろう、と、プシュケは苦笑した。捕まって死ぬのだろうか、それならば、あの相手なら、それも本望かも知れない、そんな想いすらもプシュケの中には生まれていた。今、プシュケの身を守ってくれるのは、愛する人の残した弓矢しかなかった。何年も共に過ごし、プシュケの中に眠るあらゆる魔力を封じ込めたこの弓。

弓で倒せる相手でないことは十分分かっていた。だが、目くらましにはなった。プシュケの生き残りたいという気持ちが作り出す炎、電撃、冷気を帯びる矢は、人狼の警戒心を呼び起こし、それ以上深く近寄らせないといった効果を持っていた。プシュケは近寄られるたびにこの弓を放っては逃げ、放っては逃げていった。近寄られ過ぎれば、全てが間に合わなくなる。だからこそ、ペースが大事だった。

人狼の方は何度追い立てられても、かつてその美貌を褒め称えられただろう女の顔で笑みを作り、その都度名残も惜しまずプシュケ

から離れていった。まるで、今だけの余興を楽しんでいるかのように見えて、そのたびにプシュケは焦らされた。遊んでいるかのような人狼のその姿は、状況を忘れていれば見惚れてしまう程、美しいものだった。

――いけない。

プシュケは自分に言い聞かせた。

人狼は心を惑わす。それにまで捉われてしまえば、もう逃げ道はない。待っているのは、惨過ぎる死。人狼の持つ無数の欲に、たった一つの命を吸い取られるという苦痛。死ぬまでの幾時間、まだ生きている事がこの上なく恨めしいと思う程の状況に陥れられる。

――いっそ、楽に止めをさして欲しい。

プシュケは願った。しかし、相手の人狼がそんな生温いことを好むような者でないという事は、半日以上も相手をしているプシュケにとって明確だった。戦いが延びれば延びる程、この女にだけは、捕まってはならないという気持ちが高ぶり、一層に緊張してしまう。プシュケは首を振り、息を殺した。再び人狼が動いている。その思念を手のように伸ばし、プシュケの身体に掴みかかろうとしている。プシュケはすぐに移動した。その見えない手に捕まれば、さらに不利になる気がしたのだ。

移動しながら、プシュケは人狼の潜んでいそうな場所を探したが、知らず知らずに焦りに取りつかれていっている彼女には、見つけられるはずがなかった。

「いっそ、楽に死なせて」

気付けばプシュケは呟いていた。

37. PSYCHE

37.

町が近いらしく、辺りには民家が目立つようになってきた。では、行き交う人も多くなるだろうと思われたが、不思議なことに、通行人は全くいなかった。

否、不思議でもなんでもないという事は、アマリリスの様子を見れば明らかだった。それに、サファイアまで、この場所に立ちこめる血と肉の匂いに中てられて、周囲が警戒するほどの殺気を放っていた。その矛先は、容易く手に入る獲物の方に向いているはずなのに、ランは逃げ出さないでいられるのが不思議なくらい、居心地が悪かった。しかも、今この場でサファイアが発狂したとしても、アマリリスは守ってくれないだろう。今のアマリリスは、ラン達よりもずっと優先的なものを抱えている。そんな彼女が自分達を放って飛び出していくのは、もう数秒先の未来だろうとランは踏んでいた。

その未来予知は見事に当たったが、飛び出していったのはアマリリスだけではなかった。アマリリスに続くようにサファイアまでも飛び出していった。二人が飛び出していったのにつられたのか、ディアナも瞬時にクーガーとなって追いかけていく。その三人に置いて行かれるのはさすがに困るとばかりに、バステトはランを促した。ランも勿論、同じ思いだった。何処に何人の人狼が潜んでいるかなんて分からない。アマリリスが飛びついた人狼の他に、別行動をしている人狼がいないとも限らないのだから、ここで二人だけになるのは非常にまずいと思った。それも、ここにいるのは、この辺の民家を静まりかえらせる程行動力のある人狼だ。バステトとランを狙わないわけがない。そう分かれば、走りだしていった彼らから引き離される前に、追いかけていくしかなかった。

一方、アマリリスの方は、心の底から欲する人狼の匂いのほかに、妙な気配を感じ取っていた。芳しく、心安らぐ匂いではあるが、同時に全てを想いのままにしたいという強い欲望を刺激される不思議な匂いだった。それらは同じ所にいるらしく、進めば進むほど、アマリリスの頭を刺激してくる。

すぐ後ろを走っているサファイアもまた、この匂いを嗅ぎ取っているのだろうか、とアマリリスはふと考えた。否、サファイアが走っているのは、寧ろ、この匂いの為かも知れない。彼女が人狼なんかに興味を持つはずがないのだ。彼女からすれば、人狼なんて所詮食えないモノ。人肉を愛する彼女が、狼肉なんて食べるはずがない。それは、人狼の悲鳴を愛するアマリリスが、人間の悲鳴なんかに興味を持たないのと一緒だった。だとすれば、アマリリスは安心出来る。邪魔さえしてくれなければいい。サファイアの邪魔は、アマリリスにとっては脅威なのだ。力もほぼ対等で、それを制するだけでも結構な労力を使うのだから、当然だった。

しかし、アマリリスとサファイアの求める者達の姿が見えた時、アマリリスの考えは変わった。恐らくサファイアが求めているであろう者は、アマリリスにとって壊すには惜しいタイプの美しさを秘めていたからだ。それはサファイアにとっても同じだったらしい。一瞬だけ、互いの冷静さが蘇り、二人は互いに見合す事が出来た。

「勿体無いわ、あんなに綺麗な娘を食べようだなんて」

「あれほど美しい獣を殺すつもりなの？」

お互いの言葉は、お互いを反発させるものだった。アマリリスは自分が求めていた人狼の姿を見て、その反発心をますます深めた。その人狼は、初めて見る人狼ではなかった。その時点で、今すぐにとびかかって過去に解消できなかった欲求を今ここで激しく解消してしまいたい程だった。アマリリスは彼女の呼び名まで知っている。名前は、オーロール。オーロールという女の皮を被った、美しい雌人狼だ。

「あれはあたしの獲物。前に取り逃がしたあたしの獲物なの」

アマリリスの言葉に、サファイアは目を細める。
「奇遇ね、それなら私も同じよ。あの娘を私は知っているの。あの娘はプシュケ。私がまだ貴族だった頃、いつか食べるつもりで可愛がっていた娘」
「嫌な運命ね。あの娘を食べさせることは出来ないわ。諦めなさい」
「なら、私も人狼殺しを妨害してやる。プシュケはもともと私のものなのよ」
ディアナがやっと追いついた時は、アマリリスとサファイアが同時に戦いの場へと飛び出した時だった。ディアナはその瞬間、二人が向かう先にいる者達へ、そのうちの、人狼に目を奪われていた。
「オーロール？」
厳密に言ってそうではないという事は、しばらく経たないと分からなかった。それが誰かを理解した瞬間、考えよりも先に、身体が動いていた。自分の大切な人を奪ったままでいる人狼が、目の前にいる。
――返せ。
ディアナは大きく吠えた。

38. MENACE

38.

プシュケは突如の乱入者の一人に目が行くや否や、全ての意識を攫われてしまったかのように動けなくなってしまった。それが誰か分からないなんて事、あり得なかった。短い期間ではあったが、かつて心から敬愛していた者がそこにいる。初めて本当の意味で愛した相手がそこにいた。今や、その愛した分だけの恐怖を、その者に対して持っていた。

「サファイア……」

プシュケはその者の名を呟いた。サファイアはゆっくりとプシュケを見ると、雀を見つけた猫さながら、目を細めて笑った。一気に力が抜けてしまった。今この状況で、人狼云々などと考えられない。もしもこれが人狼の見せる幻想であったとしたら、完敗だった。しかし、幸か不幸か、これは幻想などではなかった。

「久しぶりね、プシュケ」

サファイアの声が、プシュケの耳をくすぐる。その恐怖は、人狼の比ではなかった。もう一人の方が、はっとプシュケを振り返った。金髪に碧眼の整った顔の娘。赤い服が異様に似合うその娘は、咎めるようにサファイアを睨んだ。その様子だけで、すぐに分かった。あの娘は味方だ。

「助けて……」

気付けばプシュケは、娘に向かって叫んでいた。

「お願い、助けて！」

サファイアはくすりと笑むと、姿をすっと消した。あまりに突然だったため、プシュケには何処にいるのか把握できなかった。しかし、すぐに金髪の娘が駆け寄ったため、不安にはならなかった。娘

はプシュケの傍から周囲を注意深く窺いながら、口を開いた。
「あたしの名前はアマリリスよ」
　このような状況の為か、刺々しい口調だった。
「あなたを襲っている人狼はあたしの獲物なの。それに、あなたを死なせるなんて勿体無いから、守ってあげる」
　プシュケはふと人狼を見つめ、はっとした。それまでプシュケを喰らう事ばかりを考えていたはずの人狼が、アマリリスと名乗ったこの娘を目にし、動揺していた。
「オーロール……」
　不意に、違う者の声が聞こえた。人狼の声でも、アマリリスの声でも、況してやサファイアの声でもないということは、プシュケには分かった。置かれている状況も忘れて辺りを見渡してみると、そこには黒いライオンのような生き物がいた。目をぎらつかせて見つめている先は、人狼ただ一つ。プシュケ達の姿は目に入っていないようだった。
　魔物の類かもしれない、とプシュケは思った。ただ、魔物だからといって、それが無害な獣なのか、有害な獣なのかは分からない。それに、この獣の狙いははっきりとしていた。少しだけ、自分の方が有利な気がした。
「ディアナ、ああ、ディアナじゃない」
　人狼がひきつった笑みをつくって黒い獣を見つめた。
「やっぱりこの女と一緒にいたんだ。物騒な子。自分の村を守れなかった責任から逃れたいの？　だからわたしを追っているの？　ちっぽけな復讐心で……」
　人狼の言葉の途中で、アマリリスが獣に言った。
「ディアナ、あなたは下がってて。邪魔をしないで」
　しかし、双方にディアナと呼ばれたその獣は、低く唸るだけで、下がろうとしないまま、じっと人狼を睨んだ。
「へえ、ディアナも相手になるの。でも構わない。そんな弱い獣が相手になったって、全然苦しくなんてないもの。むしろ、狩りの増

えてが増えて、楽しいだけ」
サファイアはくすりと笑み、そして人狼に言った。
「ねえ、狼の方、もしもアマリリスが怖いなら、わたしがサポートしてさしあげますわ」
サファイアの言葉は、人狼の気持ちを拗らせない完璧なものだった。プシュケには、サファイアならば、人狼と共に渡り歩けるそんな気さえした。
人狼はちらりとサファイアを見つめ、目を細めた。
「なるほど、ヒトでありながら魔に生まれ堕ちた者か。ただ人ならばお前を喰らうところだったが、それならいいだろう。一時的にサポートさせてやる」
サファイアが人狼に味方した事で、ディアナはサファイアにも牙を剥けた。大きく咆哮するディアナを見つめ、サファイアは青い目を細めて、恍惚とした表情でぽつりと呟いていた。
「綺麗」

39．ARBITRATOR

39．

バステトとランがやっと駆けつけた時、事態はもうすでに始まっており、取り返しのつかない所まで来ていた。

これを止めるなど、自分達に出来るわけがないとひと目で思う程、いざこざは激しく、二人共々近づく勇気すらも奪われてしまったのだ。それも、ディアナまでもが我を忘れて果敢に狼に挑んでいくという状況に、バステトもランも一気に居場所がなくなってしまった。

このまま飛び込むなんて出来ない。止めるなんてもっと出来ない。そんな事すれば、ディアナに獲物と間違われて喰い殺されるか、これ幸いと人狼の獲物になるか、サファイアの獲物になるか、アマリリスに石ころのごとく消されるかのいずれかだろう、そうバステトは思った。

しかし、そこで、バステトはふと気付いた。よく見れば、もう一人、あの凄まじい状況に相応しくない者が紛れている。巻き込まれているのか、あの状況のそもそもの原因であるのかは分からないが、驚くべきことに、アマリリスはその者を守りながら闘っていた。人狼もサファイアもその者を果敢に狙うが、アマリリスの放つ旋風に阻まれ、手出しが出来ないでいるのだ。バステトはこれがアマリリスらしくないように思えた。普段のアマリリスならば、その者を囮にしている隙に人狼を捕まえようとするような気がしていた。酷い誤解かもしれないけれども、バステトにはそちらの方がアマリリスらしいと思っていたのだ。一方、ランもまた、アマリリスの守る者について、奇妙に思う事があった。

「あの人……」

じっと見つめ、羊の耳を震わせる。サファイアが狙い、人狼が狙

う娘。春という季節そのものを娘にしたような人物だった。美しい中に可愛さを盛り込ませた華やかな娘。サファイアの青く冷たい光に対して、仄かに薄紅に輝く光をその目に宿している。それは、確かに薄っぺらくて仄かではあるけれど、じっと見ていると、生き物の命を繋いでいる血潮を思わせる輝きだった。

ランは直感で分かった。

「あの人……」

あの見覚えのない娘。人狼とサファイアの両方に狙われている奇妙な娘は……。

「人間じゃない」

「え？」

ランの呟きに、バステトは空かさず振り返った。他の誰かが言ったとしても、迷信深い人だとしか思わなかったかもしれないが、なんせランが言うのだ。それが亜人の言葉だと考えると、どうにもそれらしく聞こえてしまう。バステトは改めて娘を見やった。言われてみれば、少々人間離れした雰囲気を有している。それに、あの場にそぐわないという事も納得できるような気がした。人狼だけでなく、サファイアが固執するのもなんとなく分かるかもしれない。

「人間じゃない何かってこと？」

バステトの問いに、ランは表情を固くした。

「分からない。でも、あの人を死なせてはいけない。そんな気がするの」

「どうして？」

バステトは訊ねたが、ランからの返答は期待できないと分かっていた。というのも、バステトも少しは感じていたからだ。あの不思議と人間離れした娘を今ここで死なせてしまえば、とても後悔する事となる。もしも彼女が人狼かサファイアに喰われることがあれば、とても困る事が起きる。

直感だが、無視できない程の力を持っていた。

バステトは意を決して、ランの手を握った。その無言の行動に、

ランは、はっと息を詰まらせた。バステトが何を決心したのかが、瞬時に分かったからだった。

バステトは大きく息を吐くと、じっと争いの場を見つめた。

40. EPICUREANISM

40.

サファイアの強さは厄介だった。

アマリリスはここまで苦戦するとは思っておらず、その上、オーロールにこれほどのしぶとさが備わっているとも露程も思っていなかった。だから、隙をつかれてディアナが気絶させられた事に気を取られているほんの少しの間に、プシュケをサファイアに奪われた時は、悔しさのあまり、思わず唸ってしまった。サファイアは勝ち誇ったようにアマリリスを見つめ、呟いた。

「私とあなた。強さは五分五分なのね。今回は私の勝ちよ。プシュケは私のモノ。この狼さんはあなたのモノじゃない」

オーロールはそれを耳にし、ふんと鼻で笑い、アマリリスを見つめた。

「なんだ。今日はあの時のような異様さはないのね。この娘に大切な意味合いでもあるのか？　私の大切な連れを殺してくれた時は、誰の死なども目に入らないくらい私達の身体を壊すことしか考えていなかったのに」

アマリリスはそっと目を細め、ぐったりと動かないディアナと、平静な様子でこちらを窺うオーロール、そして、青と赤が絡まっているかのようなサファイアとプシュケをゆっくりと見回した。

アマリリスはまだ冷静だった。だが、その冷静さが揺れ動かされようとしている。動かされ切ったらよくないとアマリリスはよく知っていた。これ以上、揺さ振られてはいけない。人狼はたった一匹。たった一匹ごときに影響されてはいけない。そう自分に言い聞かせ、頭の中で闇雲に数を数えていた。数さえ数えれば、混乱が整頓されるとでも感じていたのだろうか。アマリリス自身、それは分からな

いけれども、とにかく今は、数を数えなければ落ち着けなかった。
プシュケは殺してはいけない。綺麗だから。自分が気に入ったから。いや、それだけでない気がしていた。プシュケを死なせてはいけない何かがあるような気がしていた。
「駄目よ……」
アマリリスはサファイアに呟いた。
「あなたの食べていい人は、その娘じゃない」
人を食べるなとは言わない。自分が狼を殺すからだ。アマリリスは、人狼を殺す事に捉われる余り、邪魔をする人間を殺したことだってある。だから、サファイアの食人を辞めさせようなんて考えは、アマリリスにはなかった。だが、プシュケだけは駄目なのだ。プシュケだけは、殺させてはいけないのだ。プシュケが今に食べられそうな状況となって、アマリリスは改めて、その想いを強く感じていた。
「でも、どうしてなのかしら……」
アマリリスは自分に問う。
「どうして、その娘は駄目なのだろう？」
サファイアもオーロールも、もはやアマリリスの様子に動じたりはしていなかった。ただ、じっとアマリリスを見つめ、低めの声で告げるだけ。
「私達の勝ちでいいわね？」
その言葉は、アマリリスに同意を求めていた。アマリリスが同意すれば、今すぐにサファイアとオーロールはプシュケを喰らい始める。しかし、アマリリスが拒否したとしても、どうせこの二人はプシュケを抱えて逃げるだけだろうとアマリリスは分かっていた。
「駄目よ。駄目」
アマリリスは唸る様にそう呟き、じっとプシュケを見つめた。プシュケは顔を蒼ざめさせたまま、死人のように突っ立っていた。サファイアとオーロールは、アマリリスが認めないことを悟ると、その場を去ろうとし始めた。プシュケを食べるには、アマリリスから

の邪魔を防がなければならない。だが、二人共々、そのタイミングをうまく外してしまった。

ディアナが目を覚まし、新たに、バステトとランが駆けつけてしまったからだ。

バステトと目を覚ましたばかりのディアナはすぐさまサファイアとオーロールの逃げ道を塞いだ。敵の増えたことを悟ると、サファイアもオーロールも険しい顔をしてみせた。後、オーロールの方は低く唸り続け、狼の姿となって、ひと跳ねしてみせた。

逃亡だった。

サファイアはプシュケを抱いたまま、突然のオーロールの逃亡を呆然と見送った。アマリリスは唯一の獲物の逃亡に慌てて対処しようとしたが、それは叶わなかった。

41. SIXTH SENSE

41.

オーロールが逃げようとした瞬間、ディアナはすぐに勘ぐりそれを追おうとしたが、その直後、留守になっていたディアナの理性が、いきなり帰ってきたため、ディアナははっと立ち止まった。その間に、オーロールは無事に逃げ果せてしまったが、今のディアナはそれどころではなかった。

狼に気を取られている場合ではないという気がした。

その考えを肯定するかのように、突如豪雨がその場を襲った。全てを水浸しにしてしまうのではないかという程の豪雨。ディアナには、それが、捨てておけないほどの強大な力を持つ何かの代弁をしているような気がした。いつの間にか追いついていたランとバステトが、ディアナに駆け寄る。ディアナが平静になったことを悟ったのだろう。ディアナは変身を解いた。サファイアはプシュケを抱えたままだったが、獣姿で脅す必要はないと感じたからだ。

「サファイア、その子は駄目。その子は離して」

ディアナにはこの豪雨の原因が分かっていた。そして、その意味も。だからこそ、早く伝えなければという想いが、言葉を焦らせた。

「その子は駄目なの」

「何が駄目なの？」

サファイアが訊ねた。

ディアナには分かっている。どんなに反論できない完璧な理屈でその訳を話せたとしても、サファイアは納得こそしても、従いはしない。分かった上で開き直ってすぐにこの娘を連れ去ってしまうだろう。それではいけない。この娘だけは、食べさせてはいけない。オーロールは恐らく、娘が捕まった時になってやっとそれに気付いたから逃げたのだろう。サファイアは気付いていないのだろうか。

それとも、気付いていても、彼女の欲は構わないと言っているのだろうか。

ディアナはふと、ジズに仕えていた人狼ツバキを思い出した。ジズを前にしていても、アマリリスはツバキへの執着を抑えられていなかった。欲への執着が強すぎて分からなくなっているのか、それとも、分かっているのに自分ではどうすることも出来ないのか。

「サファイア、抑えられないのね」

アマリリスが口を開いた。

「あなた、本当は分かっている。よくないってことも、意識の根底では分かっている。けれど、抑えられないのね。この人、と思った人を口にしない限り、あなたの気持ちは治まらないのでしょう？」

アマリリスの声はさほど大きくもないはずなのに、この豪雨の中でもかき消されることはなかった。サファイアは少しだけ表情を歪ませた。しかし、プシュケを抱える腕は緩めない。ぎらついている異様な青の目は、豪雨で薄暗くなっている中でも光っていた。アマリリスは落ち着いた声で、サファイアに呼び掛けた。

「あたしだって、人狼を前にしたら誰の声も届かなくなるわ。数を数えても、一向に冷静になれないし、ほんの少し、普段の《あたし》が起きそうになっても、すぐに人狼を殺したい《あたし》に抑え込まれてしまって、結局人狼を殺さないと元に戻らなくなってしまうの」

アマリリスの目も、豪雨の中で輝いている。

「だからあたし、あなたのこと、少しは分かるわ」

その淡々とした声に、ディアナは寒気を覚えた。

アマリリスはふとランを見やった。

「ラン、あなたが前に使った花はもう枯れちゃったの？」

ランは思い出したように懐に手を入れたが、出てきたのは萎れてすっかり変色してしまった枯花だった。花弁もぱらぱらと散り、使えそうもない。ランが少し気を抜いただけで、そのみじめな枯花は地面に落ち、空しい姿をさらした。サファイアはそれをじっと見つ

め、拾い上げた。花弁も少ししか残っていないような枯花を、サファイアは大事そうにその懐にしまった。しかし、その間も、プシュケを捕まえる手の力だけは抜かなかった。

どうしようもないかもね、というアマリリスの冷静な呟きが雨の間をすり抜けていった時、大きな雷鳴が響き渡った。

42. LEVIATHAN

42.

雷鳴が声に聞こえたという事は、その場にいた誰もが同じだった。プシュケを喰らうという狂気に苛まれているサファイアでさえも、その声にはっとした表情を見せた程だった。

アマリリスはその声を少し耳にしただけで悟る事が出来た。この声こそ、自分達がずっと感じていた重たい気配であると。プシュケを食べさせてはならないという意識を持たせた張本人であるという事を。その者の姿はない。きっとこの場にはいないのだろう。ただ声だけが、アマリリス達の耳へと訴えかけてくる。

サファイアはこの気配を警戒していたが、それでもプシュケを放そうとしなかった。

豪雨と雷雲しか持たない空から、突如、何者かの視線を感じるようになった。その視線はまっすぐサファイアを睨み、プシュケを放さないという頑なな欲求を罰しようと唸り始めた。だが、サファイアは、睨み返すばかりで全く恐れていなかった。

アマリリスは自分がツバキと対面した時を思い出した。あの時とは対峙している者の覇気の強さが比べ物にならないほど強力だが、だからといって、それだけがサファイアにプシュケを諦めさせる効力を持っているとは思えなかった。自分がジズに対峙してまでツバキを欲しがった時のように、この欲求というものは無双の魔力を持っている、とアマリリスは思っていた。

――だから、他人がやめさせなければ。

「アリス……」

ディアナが不安そうに呟いた。アマリリスはちらりとディアナを見るだけに留め、すぐにサファイアへと振り返った。

「サファイア、聞こえる？」
豪雨と雷雲の中からの唸りと視線を盾に、アマリリスは落ち着いた声でサファイアに呼び掛けた。
「その娘はあなたのじゃない。この方のものなの」
サファイアの視線がちらりと雷雲の中へと向く。その目には恐れも戸惑いもなく、ただ、そこにあるものを認識しているだけの気持ちが宿っていた。
アマリリスはそっと肩に手を置くように、サファイアに言った。
「プシュケを放してあげて」
アマリリスの言葉を受け取りつつも、サファイアはまだプシュケを放さない。
大きな獣が唸る声が、空全体に響き渡る。やはり、ジズとは格が違う。
「ヒトでありながら魔を宿す汚らわしき者め、我が贄を放すがいい」
聞く者を圧倒させるその声は、水辺の生き物を思わせる不思議な響きを宿した音色で一声鳴いて、再び言葉をつないだ。
「我が名はリヴァイアサン。大海の者、最強を冠する事を許された者。我が贄は精霊の娘、そこにいるプシュケは海に捧げられし供物。ニンゲン如きが口に出来る代物ではない」
やはり、とアマリリスは思った。
最強の怪物、リヴァイアサン。プシュケはその加護を受ける精霊の娘。もしもサファイアがプシュケを喰らってしまえば、リヴァイアサンの怒りが世界を殺すだろう。しかしこの言葉に一番驚いていたのは、プシュケ本人だった。
「わたしが、海の供物？」
アマリリスは意を決した。サファイアからプシュケを奪うのは、今しかない。

43. OFFERING

43.

アマリリスがサファイアからプシュケを引き離した途端、豪雨も雷雲も消え、それまでこの場を縛っていた鋭い視線も消えてしまった。

サファイアはプシュケを奪われてからも暫くは呆然としていた。いきなり静寂に包まれた周囲を見つめ、惚けた表情で突っ立っている。自分が心から欲した獲物を奪われていると気付いても、すぐには奪い返そうとしなかった。

「プシュケがリヴァイアサンの供物？」

サファイアが呟いた。共学も含まれているその様子に、アマリリスは深く頷いた。

「大いなる生き物の供物を勝手に触ればどんな事になるか、あなたならお分かりでしょう、サファイア嬢？」

アマリリスはわざと言葉を改めてサファイアに問い掛けた。サファイアの意識が、狂気から解放されようとしている。そこにいるのは、もはや、《恐怖》に操られるままに残虐な欲望を獲物にぶつける魔物ではなかった。

「ヒトでありながら魔を宿すもの」

アマリリスは静かに言葉を続けた。

「あなたはそう呼ばれているけれど、あたしにはそう見えない。あなたとあたしは同じで真反対の者。あなたが欲望に捉われる気持ち、少しだけ分かるけれど、あなたは所詮、ニンゲンなのよ」

サファイアの目から、闘志が消えていく。

ふと彼女は、ついさっきまでリヴァイアサンの声がしていた場所を、丸々とした目で見つめていた。その表情には、たった今、リヴァイアサンという絶望的なほど絶対的な生き物を前にしているかの

ようなものだった。
ヒトとして正常な意識に戻った証拠だろう、そうアマリリスは思った。
「プシュケ……」
しばしの沈黙の後、サファイアは絞りだすように言葉を発した。
「お前は私を軽蔑するだろうね」
返答を期待していない捨て台詞のような口調だった。当のプシュケは、何も言い返せずに、ただ下を向くばかり。だが、サファイアはさらに続けた。
「私は……たぶん、お前を諦めてはいない……のだと思う……私の口がヒトの血肉を好むかぎり……最初に襲うのは、お前だろう」
プシュケは答えない。サファイアは、静かに無言のプシュケに促した。
「再び私が欲に支配される前に、私の元から逃げてしまいなさい。私は人食いなんだから」
少なくともそれは、今のサファイアではない。そうプシュケは信じていたのかもしれない。そして、アマリリスはそれを少しだけ羨ましいと感じていたかも知れない。
――これが、ヒトに生まれたものと、魔に生まれたものとの違い。
アマリリスは承知していた。
「サファイア、あなたは確かに恐ろしい人食いだわ……」
プシュケはか細い声で呟いた。
「でも、わたしがもし本当に海の供物なのならば、わたしにはもう行き場がないの」
プシュケは縋るようにアマリリス達を見やった。
「わたしの本来の天敵は、人狼でもサファイアでもない。人間の群れよ」
プシュケの中の《恐怖》が、一気に《嘆き》へと変異する。
「人間の群れは供物を恐れてる。大いなる生き物達を恐れているから、当然かもしれない。でも、彼らには常に悪魔が宿っているの。

彼らは、大いなる生き物の持つ力を手に入れたいという身分不相応な強欲に負けるぐらい、愚かな群れなのよ」

プシュケの今までの《恐怖》は、吐き出しても吐き出しても底を突かなかった。

「わたしは嫌だ。たくさんの身勝手な思いに巻き込まれ、醜く死んでいくなんて嫌。人間の群れに押し潰されたくなんてない。それなら、サファイアに食べられたほうがましよ！」

プシュケの《嘆き》に、サファイアの表情が歪んだ。アマリリスはじっとプシュケを見つめ、一瞬だけランに目線を移し、すぐに戻した。

「そう、つまり、あたし達にくっついていたいという事なの？　宛てもない、ただの放浪よ。あなたの主人となるリヴァイアサンに会えるかも分からない流浪の旅にくっついていたいというのね？」

アマリリスの問いに、プシュケは目を潤ませながら頷いた。

44. RUMOR

44.

嫌な噂が耳に入ったのは、プシュケが泣きながら旅路に加わった日から数日後、アマリリス達が森を抜けた先の集落に辿り着いた時のことだった。森の中の集落とはいえども、そこは商人達の旅路の真ん中であり、大陸をめぐる様々な噂が、様々な商品と共に流れ込んでくるような所だった。

そこでアマリリス達が聞いたのは、大陸の中央に位置する王都の噂話。《恐怖》に支配され、さらに人狼などの魔物達に脅かされつつも、変わらずに栄え続ける町から流れた噂話だった。人々を襲う《恐怖》は、魔術の為に《嘆き》を求める魔女たちが放った呪いの結果であるという噂話。

アマリリスが最初に聞いた時、それはそれであり得る話ではあるとは思った。実際、アマリリスは興味がないからやっていないだけで、もしもそれをしたら楽しいというのだったら、迷わずにやっていたかもしれないような事だからだ。つまりは、人々を陥れるなんて、魔女にとっては簡単すぎること。魔女たちが疑われるのも仕方のないことだった。だが、人間というものは単純な生き物であり、その疑いの目は、一部の魔女ではなく、魔女全体にかかってしまうから油断できない。

「あなた達、魔女ではないと思っているだろうけれど、人間の定義する魔女なんて、人間社会にいないだけで当てはまってしまうものなのよ」

アマリリスは村人たちが近くにいない時に、他の者たちにそう零した。

「特に、魔女でないのに人間達に魔女扱いされる人々は、不幸以外

の何者でもないわ。魔女と呼ばれ、畏怖されるだけの力はないから、迫害され、裁きをうけてもろくに抵抗出来やしない。せいぜい、十人ほど道連れにするだけが限界でしょうね」

「集団相手に十人も道連れになんて出来ないわね」

ディアナがぽつりと零した。

ここにいる者達はアマリリス以外、魔女ではない。魔女ならば、群がる人々を一気に片付けることなど簡単だろう。何の痛みもなく、それをやってのける残忍さも秘めているだろう。しかし、ディアナ達にはそれは出来ない。深い意識の中でそれが許さないという以前に、不可能なのだ。ほとんど意識の制約を受けないサファイアでも、あまりに多くの人々を敵に回しては上手く動けないだろう。

「そうね、あなた達は魔女ではないもの。人間か、人間に属するものばかり。暴漢や魔物から身を守るので精一杯の人達。でも、こんな噂を聞いたの。王都から、勇士が送り出されたって。世を≪恐怖≫に染めようとする悪しき魔女たちを討伐するために、討伐軍が送り出されたって。彼らが狙う獲物は、あたしだけじゃない。あなた達も同じよ」

「わたし達も、殺されてしまうの？」

ランが恐る恐る訊ねた。ランには想像出来なかった。人間にとって人狼は魔物の中でも最も悪とされるもの。その人狼を喜んで倒すアマリリスこそ、人間にとって好ましい存在であるはずなのに、魔女に生まれたというだけで攻撃されてしまうなんて思えなかった。そして、幾ら自分達が人間社会の中心から外れた所で生きているからといって、魔女扱いを受けて殺されるなんて思えなかった。

しかし、この中で澄ました表情をしているのは、サファイアだけだった。

ランはその事もショックだった。

「所詮わたし達はいい子にしていようと、欲望のままに生きようと、同じようにしか見られない」

サファイアが澄ました表情のまま呟いたその言葉が、ランの心に

深く突き刺さった。

45. POTHUNTING

45.

集落では幸い、噂こそ耳にせよ、村人たちに危害を加えられたりすることはなかった。

まだ商人達が噂を持って来たばかり。感化されていないだけのこと、とアマリリスは言ったが、ランは信じていなかった。サファイアはそんなランを嘲笑うように不可思議な発言を繰り返すし、ディアナとバステトは直接的なことは言わないが、不安は隠せていなかった。ただプシュケだけが、ランに賛同する形でこう言った。

「アリスの言うことだけじゃまだ分からないもの。それに、噂は噂でしょう?」

その言葉に対して、アマリリスは何も返答しなかった。

そして、集落を去る日。ついに村人たちからは何もされないままだった。村人たちは、アマリリスの事を赤の客人と呼び、魔女である事を理由に尊敬しているようにさえ見えた。この集落ならば、村人たちの気持ちは変わらないのではないだろうかと思う程、ここは穏やかな所だった。きっと、人狼やその他魔物も迷い込んだことはないのだろう。世を支配する《恐怖》の色も、ここだけは薄かった。

しかし、村人数人に見送られながら集落を後にしてから暫く経って、集落が完全に見えなくなってから、アマリリスは不吉なことを言った。

「死臭……あの人達は、もう、諦めているのでしょうね」

「死臭?」

問い返される言葉に、アマリリスは不敵な笑みを浮かべる。

「そうね、あと数カ月したら風の便りで分かるかもね」

そう言って、突如彼女は不機嫌そうな表情で一点を見つめた。

「狼ではないわね。美しくないもの」
その言葉に、全員がそちらを見やった。
旅の一団だ。それも、全員が高価な武具を身につけている。どうみても、豊かな場所から出てきた者たちだった。逞しい身体付きと闘志に燃える目が印象的な、戦士たちの一団。
「赤い魔女、お前の噂は聞いている。狼を破り捨てる美しい悪鬼のような姿。見る者を凍てつかせる青い目。輝く金の鬣は禍々しい力の証なのだろう？」
五人いるうちの全てが同じ武具を付けている。誰が言葉を放っているかも分からない程、彼らの顔は鎧に隠れ、見えている皮膚も死んだように白く、血の通わぬ人形のようだった。どの口元も結ばれたままなのに、言葉は聞こえ続ける。
「六人。お前達の心臓を持っていけば、それだけの報酬が手に入る。生け捕りなら倍だ」
「ええ、それで？　あなた達はあたし達を使って、たんまり報酬を貰うってわけね」
アマリリスの言葉に、戦士たちが身構える。
「分かっているじゃないか。その通りだ。さあ、お望みはどちらだ？　ここで死ぬか、王都で見せものとして死ぬか」
「どっちも死ぬんじゃねえか」
バステトは呆れ顔でそう言うと、すばやくナイフを取り出した。
「人間相手だと気が引けるとかいってる場合じゃねえしなあ」
軽く空を斬って、バステトは五人の戦士たちを睨んだ。
ディアナもそれを見て、深い溜め息を吐いた。
「出来るだけ手加減したいわね」
そう言って、黒いクーガーへと変わった。
闘う気を見せた二人を見つめ、ランはおずおずと引き下がった。
もっとも戦いを恐れる彼女は、この雰囲気そのものが《恐怖》に見えたのだ。そんなランを守る様に、プシュケが前へ出る。
「後ろにいて。わたしが守ってあげるわ」

ランはその言葉に甘えて、そっと身を隠した。
「その代わり、誰かが怪我したら力を貸してよね」
ランは小さく頷いて、プシュケの後ろから、戦士たちを見つめた。
アマリリスを初め、ほとんどの者たちは戦士たちの攻撃に備えたが、サファイアだけは剣を構えずに、ぼんやりと戦士たちを見つめているだけだった。しかし、その目には、闘気とは違う異様な不気味さがこめられていた。
真っ先に飛び出した戦士は、そのサファイアの不気味な気配に気づかなかったのだろうか。それとも怪しいからこそ先に叩こうとしたのか。真っ先にサファイアへと切り込んでいった。

46. SUBJUGATION

46.

サファイアに斬りかかった者は、すぐ先の未来、己の持つ剣にこびり付くのは、サファイアの血と肉だろうと思っていただろう。無意識的にも、意識的にも、それ以外の者の血肉が付くなんて、直前まで、或いは、直後ですら思わなかっただろう。しかし、現実は違った。違ったという事だけが、明らかになった。

その場に転がるのは、サファイアではなく、男の方だった。サファイアが魔の剣を抜いたとは誰も気付かなかった。ただ、抜いた形跡のみが、転がって動かなくなった男の身体についている。サファイアの方は、口元を血で一杯にして、薄っすらとした笑みを浮かべているだけだった。大量に浴びた返り血は、すぐに鉄の生臭さとなってその場に充満する。

サファイアはさっきまで男だったものの欠片を踏み、ゆっくりと刀を振るった。赤く染まる彼女の周辺で、刀だけが白く光っている。いや、赤くないのはそれだけではない。サファイアの目もまた、真っ青に光り輝いていた。

「美味しくない。ニンゲンなのに、美味しくない」

サファイアは呟いた。

「どうして？　あなた達、ニンゲンなのに、駄目になってる」

そこにいるサファイアに、プシュケは一瞬怯えた。ヒトの肉を好む魔物。今のサファイアは完全にそれだ。かつてニンゲンの皮を被ってプシュケを騙して喰らおうとしたその時と同じ目をしている。本当なら逃げ出してしまいたかった。

しかし、後ろにはランがいる。自分よりも力なく、その場に蔓延する《恐怖》に弱々しく抵抗する生き物が、すぐ後ろにいる。プシ

ユケはそっと後ろ手にランの頭を撫でた。ふわりとした暖かさが、ランの手を包んだ。

「さっそく一人死んじゃったわね。あたし達に構わなかったらこうならずに済んだのに」

アマリリスが今日みなさげにそう言った。

「でも、もう遅いわ。闘わなきゃ、あなた達、この場にいる女全てを殺すのでしょう?」

アマリリスの言葉に、戦士たちは反応できなくなっていた。目の前で一瞬にして死を迎えた仲間の姿を、じっと目に焼き付けている。しかし、その表情は、単に仲間の死に驚いている人間の表情とも違った。わなわなと彼らの身体を震わせるのは、恐れではなく、怒り。

「よくも、よくも我々の仲間を……」

ディアナもバステトもこれは意外だった。普通の人間ならば、アマリリスやサファイアの異常性に怯えて逃げるのではないだろうか。それとも、それだけ彼らの仲間意識が強いということなのだろうか。いや、そうは見えない。彼らを戦いに導いているものは、仲間を思うという事ではないような気がした。

他の戦士たちが一斉に躍り掛かってきた。その先は、アマリリスでも、仲間を殺したサファイアでもなかった。ディアナ、バステト、そして、一番戦いから離れた場所にいる、プシュケとランだった。ディアナはクーガーの声で唸り、その場を回避したが、バステトは回避しきれず、そのまま戦士の一人ともみ合う形で地面に叩きつけられてしまった。

「貴様ら、人間じゃないな?」

もみ合いながら、バステトは襲いかかってくる戦士に問う。戦士は何も言わず、ただバステトの息の根を止めることしか考えていないかのように攻撃を続けた。

「何なんだよ、仲間の敵っていうのか? お前らが仕掛けてこなかったら、あいつも死ぬことなかったんだぞ!」

バステトは抵抗しながら、不利を感じていた。自分の持っている

のはナイフ。それに引き換え、相手は剣に鎧の戦士だ。勝てるはずがない。攻防が長引けば長引くほど、バステトの表情に焦りが表れていった。

47. DISQUIETING

47.

男女という力の差の上、長剣に対してナイフだけで暫く抵抗できただけでも大したものだろう。

バステトの力はすでに限界だった。ナイフを握る手も痺れ、次第に握りが緩んでくる。そもそも、バステトには持久力がないのだ。力ではなく、素早さで蹴りをつける彼女にとって、この状況は最期の足掻きでしかない。それでも暫く持ったのは、死にたくないという気持ちからだったのだろう。

しかし、足掻けたのはそれまでだった。わき腹を蹴られ、手の力が緩んだすきに、ナイフを飛ばされてしまったのだ。無防備となったバステトは、自分にのしかかってくる戦士をじっと見上げた。戦士の数は一人減って四人だっただろうか、五人だっただろうか。どちらにせよ、彼らは襲う相手として、ディアナとプシュケとランを迷いなく選んだ。この状況を真っ先に助けてくれそうなディアナも、今頃戦士の一人と戦っている頃だろう。プシュケとランもそうだ。下手すれば、彼らも危機に陥っているかもしれないというのに、助けなんて期待できるだろうか。

戦士が剣を構えた。

「お前が人間だろうと、魔物だろうと、構わない」

戦士が低い声で呟いた。

「死んだ奴だって、本当はどうでもいいのさ」

唯一見える口元がにやりと笑みを浮かべる。その瞬間、バステトには見えないはずの彼の目線が、脳裏に刻まれた。赤く鋭い目線が、ヒトとは思えない輝きを放っている。至上の悦を前にしたその男は、狂気という言葉では語りつくせないほど、気味の悪い声で嗤い、剣

をバステトの首元に突き付けた。この男こそ、まさに《恐怖》そのもの。かつてヒトだった事もあっただろう、得体の知れない何か。その者に取り押さえられる自分の未来は、《嘆き》どころか《絶望》しか取り巻いていない。そうバステトは思った。

「俺がするべきことは、討伐。世を救う正義を貫くための、討伐。世の為にお前は死ななくてはならない。俺が望んでいるのは、ただそれだけのこと。ただそれだけのこと。ただそれだけのこと。ただそれだけのこと。ただそれだけのこと。ただそれだけのこと。ただそれだけのこと。ただそれだけのこと。ただそれだけのこと。ただそれだけのこと。ただそれだけのこと。ただそれだけのこと。ただそれだけのこと。ただそれだけのこと。ただそれだけのこと。ただそれだけのこと。ただそれだけのこと。ただそれだけのこと。ただそれだけのこと。ただそれだけのこと……」

男の声が、バステトの耳から頭へと沁み込んでくる。その気持ち悪い感覚に、一度枯れてしまった逃げたいという感覚が、再び蘇る。戦士は剣をバステトの首元に突き付けて制止したまま、ずっと呟き続けている。もみ合っていた時とは違って、そんなに力を込めているようには見えないのに、バステトはそこから抜け出す事が出来なかった。このままこの声を聞いていたら、何か取り返しのつかない事になってしまうのではないだろうか、バステトの不安は最高潮に達していた。

しかし、その不安は急に緩んでいった。

バステトにかかっていた重しが、突然消えたのだ。はっと起きあがり、見渡すと、そこには黒いクーガーがいた。

「ディアナ……？」

クーガーは声に反応して、振り返った。バステトは思わず肩をすくめた。クーガーは何かをくわえていた。赤い液体のしたたる何か。それは、戦士の首だった。

48. EMACIATE

48.

一人のみならず、二人仲間を失った戦士たちは、さらに闘志を燃やしていた。

しかしどの戦士たちも失った仲間に対して悲しむそぶりを見せない。ディアナは戦士の首から口を放した。低く唸りながら、じっとバステトの後ろを睨む。

「バステト、後ろに気をつけて」

ランの声が響き、バステトは振り向くと同時にその場から回避した。袖を何かがかする。剣だ。さっきまで相手をしていた戦士のものと同じもの。ディアナを追ってきた戦士なのだろうか。息を切らしながら、じっとディアナを睨んでいる。バステトに危険を教えたラン達は、別の戦士と戦っている。生き残っている戦士の数は、三人だ。ディアナを睨んでいるのが一人、ランとプシュケへと迫っているのが一人。あと一人。あと一人いたはずだ。

バステトがそれを確認しようとした時、ディアナが吠えた。戦士が動き出したのだ。

「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね……」

戦士の姿は異様だった。何かに取りつかれたように呟いているが、攻撃は適度で、冷静さすら感じる。機械か何かにしては、生き物の生身を感じるし、魔物の類にしては、生々しさが足りない。戦士の動きは美しい程に完璧だった。重そうな剣を持ち、重そうな鎧を纏っているとは思えないほど、軽やかに斬り込んでくる。バステトはさらに彼から遠ざかった。解放されたばかりの彼女は、もはや戦士の相手が出来る程体力を残していなかったのだ。

代わりと言わんばかりに、ディアナが戦士に襲いかかっていった。バステトを追い詰めた戦士の首を取った時のように、鋭い牙と鋭い爪を剥いて、戦士に飛びかかっていく。しかし、さすがに一発では倒せなかった。元々ディアナと戦っていたその戦士は、ディアナの動きを把握し始めていたのだ。執拗なディアナの攻めを、回避し続ける戦士。

「ディアナ、駄目だ」

バステトの声は力なく地面に落ちていく。それでもバステトはディアナに呼び掛けた。

「いけない。奴にチャンスを与えてしまう」

それでも、バステトの声はディアナに届かなかった。段々と、ディアナの動きに切れがなくなっていく。それに引き換え、戦士の動きは乱れることなくずっと変わらない。このままではどうなってしまうか、そろそろディアナも気付き始めたのだろうか。ディアナは急に攻撃を止め、戦士を睨んだ。戦士は剣を構え、ぴたりと動きを止めた。

「どうした、魔物。お前の身体にはもっと禍々しい力が宿っているのだろう？　それをもっと解放してみたらどうだ？　俺達の同胞を殺した時のように」

ディアナは牙を剥き出し、唸り続けた。だが、その姿には、何処か弱々しさが見え隠れし始めていた。

49. SILLY MORTAL

49.

三人の戦士たちはそれまで、一番警戒すべき者の存在を忘れていた。

もともと後回しにするつもりだったとはいえ、その者自身が己の気配を闇の中に包み込んでしまっていたからというほうが正しいだろう。

その者が気配を現したのは、戦士たちがやっとの思いでディアナとバステトを抑えた後だった。起き上がる力を失った彼らの息の根を完全に止めてしまおうと、戦士たちが走りだした瞬間のことだった。急な冷気とともに、戦士たちの頭に重石のような威圧がかかった。

「結構」

それまで存在を消していた女の声が、戦士たちの背中を痺れさせる。

「あなた達の心に揺らぎなんてないってよく分かったわ」

この声こそ、彼らが倒すべき者と教えられた魔女の中の魔女だ。しかし、その魔女がこんなにも恐ろしい声で啼くなどと、教えられていなかった。狂信的な彼らの闘争心ですら、静かに怒り始めたアマリリスの前では、悲しい程にひ弱なものだった。

彼らの瞳を通して、その魔女、アマリリスは戦士の中に巣食い始めた《恐怖》の様子を見つめ、険しい表情を見せる。アマリリスの周囲に常に漂っているその気配は、彼らの中においてだけ、微妙に変化していた。それは、人狼と人の群れが作り出す《嘆き》によく似ていた。

――取り憑かれている……？

身体の中を《嘆き》で一杯にした彼らはもはや、ヒトとは言えない存在となっている。耐えきれないほどの《嘆き》で身体を満たした者たちが辿る、虚構の世界。彼らの意識はすでに、原始的な感情のみを残された、生きた機械のようなものだった。その原始的な感情すらも、今やアマリリスを前にして、恐れ慄き震えている。

「怯むな……行くんだ……」

やがて声を絞り出した戦士たちが、弱々しく闘志を燃やし、アマリリスへと突っ込んでくる。

アマリリスは自分にかかってくる生き残った三人の戦士、一人ひとりの姿を見つめた。どれも、見分けがつかず、どれも、生き物らしくなく、どれも、アマリリスにとってはどうでもよかった。

――おいで、人形たち。

戦士たちの剣が、アマリリスを切りつけようと迫ってくる。アマリリスはしかし、動かなかった。《恐怖》に狂わされ、誤作動を起こしたその機械達を見つめ、そっと右手を横に振った。その直後、鮮血の雨がアマリリスの頬を真っ赤に染めた。赤い血を流して壊れていく機械を見つめ、アマリリスは冷たい青の目を光らせる。

――つまらない。

もう一度、右手を握りしめて、機械達を見つめる。凍てつく冷気が彼らを包みこみ、一瞬にしてその動きを止めてしまう。アマリリスの耳に障っていた機械音も、すぐに消えてしまった。アマリリスは青く凍りついた三人の機械を見つめ、最後に、握りしめていた手を放した。

凍った機械達が、粉々に砕ける。赤い氷片と化したそれらは、地面に叩きつけられて粉々に砕け、きらきらと輝きながら、空気中の塵となって消えてしまった。

アマリリスはその残光をじっと見つめながら、呟いた。

「人狼じゃないと、つまらない」

50. SEDIMENT

50.

――世界が淀んでいく。

何となく世の中全体が違和感に包まれていると気付き始めてから、ゲネシスは何かに急かされるように剣の稽古に勤しんでいた。周囲から見て異様なほどに、まるで、止めを刺すべき何かがすぐ目の前にいるかのように、周囲の者たちが疲れ果てて動けなくなっても、ゲネシスだけはいつも最後まで稽古を止めなかった。

――世界が淀んでいく。

その妄想染みた考えが、ゲネシスの頭に沁み込み、一層、休むという道を閉ざしてしまう。ゲネシスが剣の稽古を止める時は、いつも、半ば意識を失ってからの事だった。しかし、いやだからこそ、ゲネシスが修行場で有望視されることはなかった。

力のみが強さではない、己の事をもっとよく頭に入れるように、とゲネシスは常々叱られた。

しかし、自分ではどうしようもないのだ。どうしようもないほど、稽古をしている時は夢中になっていて、周りどころか、自分すらも眼中に入らなくなってしまう。剣を震わすゲネシスが見つめるのは、異次元の何か。ここにはいない、何か。それが何なのかはまだ分からない。けれど、ゲネシスは、その何かこそ、自分を奮い立たせているものだと信じていた。

――世界が淀んでいく。

それを止められるのは、自分しかいない。そう信じ、ゲネシスは稽古に打ち込んだ。

魔女狩りの話を耳にしたのは、そんな最中の話だった。

魔女は人狼と繋がりがある。世が人狼に喰われ、《恐れ》に支配

されていくのも、そして、世から《嘆き》が堪えない原因の一つが魔女である。よって、ゲネシスの暮らす大陸一の国を治める王は、これら魔女の駆逐を決定した。

世の中には魔物や魔女が人に紛れて暮らしていることは、勿論ゲネシスもよく知っていた。しかし、今まで魔女が害をなす可能性については考えた事はあるものの、魔女こそが憎むべき敵であると考えたことはなかった。

しかし、国王が言っているのだ。もしかしたら、自分の感じている違和感も、魔女たちと何か関係があるのかもしれないではないか。そう思い立ったゲネシスの行動は早いものだった。修行場から飛び出し、剣と最低限の荷物だけを持ち、そのままの足で城へと向かったのだ。

驚いたのは、修行場の者たちだった。

あれほど修行を欠かさなかったゲネシスが、姿を見せないのだ。修行場の者たちは何度もその理由について語りあい、暫くはその話題で持ちきりだった。だが、修行場に置いて、突然誰にも何も言わずに姿を消すものがいるというのも珍しい事ではなく、ゲネシスが居なくなった事実も、次第に影が薄くなっていった。

一方、ゲネシスは、修行場の仲間たちが自分の事を忘れ始めている頃にはとっくに大国の国境を越えてしまっていた。この不思議な焦りを解消できるやもしれない魔女たち。討ち込むべき相手を見つけ、ゲネシスは燃えさかる弓矢のように大陸を巡り始めていた。

51. REALIZATION

51.

ほんの少しだけ華やかな町についた時、ランとプシュケの体力は限界だった。

というのも、この町に来る道すがらで、人狼に出会ってしまったからだ。厳密に言えば、アマリリスが人狼を見つけてしまったと言った方がいいかもしれない。ともかく、そのせいで、アマリリスの欲が現れ、ランとプシュケのような体力の少ない者を考慮しない速度で人狼を追いかけ始めてしまった。

アマリリスとともに人狼を追うという持久力ついて行けるのは、変身したディアナか、サファイアくらいのものだろうとバステトは思っていた。そのくらい、アマリリスに人狼というのは、他の者たちにとっては厄介なことだった。

結局その人狼の最期は、無残なものだった。そもそもアマリリスに目を付けられた時点で、終わっている。彼女に目をつけられて生き延びているのは、バステトの知る範囲では、二人だけだ。大いなる空の者ジズに仕えていたツバキと、異様な印象を与えてきたオールとかいう者。二人とも、アマリリスの好みそうな美しい女性だった。

ともかく、前の人里からこの町に辿り着くまでに、人狼に二回は遭遇した。遭遇するのがただの魔物だった時と、人狼だった時との肉体的、精神的疲労は計り知れない。自分は全く闘っていないはずなのに、アマリリスの狩りにつきあわされ、見せつけられる度に、肩を大きく裂かれるよりも苦しい疲れが、バステトを襲ってきていた。バステトがそうなのだから、他のものだってそうではないとは言えない。

ランもプシュケもバステト以上に限界なはずだ。
「なあ、まずは休む所を探そうぜ？」
バステトの声に、アマリリスもサファイアも答えない。聞いているのかいないのかすらも分からない程の無言ぶり。しかし、バステトはもう慣れていた。ちらりとディアナを見つめ、返答を待った。
「そうね。疲れを癒したいわ。いいでしょう？　二人とも？」
アマリリスもサファイアもやはり答えず、それぞれ何かを考えているようだった。しかし、返答がない時は、異論がない時とほぼ等しいと行動を共にしてきた中で、二人は学んでいた。
「ラン、プシュケ、あなた達を休ませるのが先ね。宿を探しましょう」
ディアナの言葉は、バステトやラン、プシュケだけに向けられているようだった。
プシュケは内心その言葉を待っていた。自分が一番体力のない事を理解していたし、そのために無理はしないと考えてはいたが、さすがに全員に置いていかれるのも、サファイアとだけ残されるのも嫌だったため、ランやディアナ、バステトとは離れたくなかった。
その結果が今の疲れである。
自分より体力のあるランすらも疲れているこの状況、プシュケが寝台で思う存分横になれることを思い描いていても何も不自然なことはなかった。
「泊まるなら、この指輪を換金したら？」
ぼそっと呟いたのは、さっきまで、空虚な様子しか漂っていなかったサファイアだった。
彼女が見せたのは、赤い石のはめ込まれた指輪。宝石に疎いディアナには、それが何か分からなかった。
「換金場所は、町のもっとも中心より。換金屋が詐欺師じゃなければ、この人数でもしばらくは町でも困らない」
「でも、いいのか？　なんだか貴重なもの見たいなんだが……」
バステトが指輪に触ろうとした途端、サファイアは指輪を拳のな

かに隠し、険しい表情を見せた。
「安易に触っては駄目。これはただの指輪じゃないんだから」
そう言って、一人先に歩きだした。

52. HEART

52.

この町も例外なく《恐怖》に包まれている。

そんなこと、ゲネシスにはよく分かっていた。何処へ行っても、《恐怖》は人々に取り巻いている。いや、人々だけでなく、その他の動物、そして驚く事に、魔物や魔女すらも例外ではなかった。魔女の討伐の命を受けて旅を続けるゲネシスの前には、当然、魔物や魔女自身が立ちはだかったが、そのどれもが《恐怖》を支配しているようで、《恐怖》に支配されている。

では、この《恐怖》の根源は何処なのだろう。

それが《嘆き》だとしても、その前に《嘆き》を生み出す根源の《恐怖》があったはずだ。

それは、誰が、生み出したのだろう。

「それは勿論、私達の仲間……」

ゲネシスの目の前で息絶えようとしている老魔女が、力なく嗤った。

「私達の崇める御方の力さ」

「それは誰なんだ？」

ゲネシスの問いに、老魔女は嗤うばかりだった。

「答えろ」

ゲネシスの剣が、老魔女を貫いた。しかし、それでもなお、老魔女は嗤いを止めなかった。自らが死に絶えるまで、この嗤いを止めないつもりらしい。結局、動かなくなるまで、魔女はそれ以上言葉を発しなかった。ゲネシスは怒りに身を震わせた。

たった今、息絶えたこの魔女は、ゲネシスが町の者に頼まれて退治したものだ。昔は善良な仙女で、町の者たちの病を薬草と魔力で

治してくれたらしい。大陸が《恐怖》に支配され始めた頃に、町で発生した奇病への対策にも、この魔女は人々に力を貸してくれたのだが、同じ頃に起こっていた大量殺人の犯人がこの魔女だと分かったらしい。どうやって分かったのか、どうやってそんな事をやってのけたのか、ゲネシスは知らない。だが、重要なのは、この魔女が自供した事。

犠牲者の心臓で、奇病の薬を作っていたという事が分かったことだった。

「奴らには抗体があった。だが、奴らは他の者たちの事など虫けらほどにも思っていないような卑しい心の持ち主たち。だから、私が回収してやったのさ」

老魔女はそう言っていた。

ゲネシスはもう言葉を発しないこの老魔女の亡骸を見つめ、しばし老魔女の言葉を反芻した。この町の、《嘆き》はとても濃いものだろう。

犠牲になったのは、いずれも子どもたち。権力のある家の子ども、並みの家の子ども、商人の子ども、兵士の家の子ども、身分の低い家の子ども、そして孤児。その子ども達の心臓で、薬は作られた。それを呑んだ者達は、全員、病の魔の手から逃れる事が出来たという。

ゲネシスはじっと老魔女を見つめると、その首を切り落とした。

――これでもう、復活はしない。

53．AFFAIR

53.

「心臓泥棒……？」

ランとプシュケが問い返すと、質屋にいた男は不敵ににやついた。サファイアの指輪の鑑定がなされている間、男が急に持ちかけてきた話だ。

「どうして心臓泥棒なの？」

プシュケの問いに、男は答える。

「いい質問だ！　理由はそのまんまさ。そいつぁ他人さまの心臓を失敬しちまうってわけだよ」

「心臓……？」

「ああそうさ。お嬢さんのような可愛い子どもが夜道を一人っきりで歩いているとねえ、暗闇から闇のような真っ黒いローブを纏った婆さんが話しかけてくるのさ。そんでもって、話しかけられた子どもはあっちゅう間に心臓を奪われて死んじまうっていうわけさ」

「何それ、すごく怖い」

ランはその話を聞いた途端震えあがった。プシュケも内心は怖かったけれども、ランの手前、それをぐっと自分の中に押し込んで、笑い飛ばした。

「ただの怪談ね。いまどきそんな作り話、怖くもなんともないよ」

だが、プシュケのそんな冷めた言葉にも、男はくっくっくと意地悪そうな笑みを浮かべた。

「ところがよ、作り話じゃねえんだこれが」

「どういうこと？」

ランが訊ね返した時、ディアナの声がした。

「終わったわ。プシュケ、ラン、行きましょう」

「おっといけねえ、長く話しちまったな。ともかく、夜道は何があ

るか分からねえから出歩くんじゃねえぞ」
男はそう言うと、さっさと店を出て行ってしまった。男は何を言おうとしていたのだろう、プシュケはそれがとても気になった。
「二人とも、来なさい」
ディアナの声に、渋々プシュケは動き出した。何であろうと、きっとあれは余所者をからかった性質の悪い冗談。きっと余所者を見ると、言わずにはいられないのだろう。
――それにしても、不気味。
心臓泥棒。これもまた、人狼によるものなのだろうか。それ以外の魔物によるものなのだろうか。
それとも、とプシュケはちらりとアマリリス、そしてサファイアを見つめた。黒魔術のなかには、人間の臓器を使ったものも多々あるといわれている。また、心臓をこよなく愛し、食べてしまうという性癖を持つ者も世の中に入るという。まっさきに思いついたのが共に旅をしている者という時点でプシュケにとっては気が狂いそうな事態だが、仕方のないことだろう。
どんな者がやったにせよ、悪趣味極まりないとプシュケは思っていた。
それに、プシュケはこの噂の背後に不穏を感じていた。このような話の中には、町の人々の偏見と恐れが隠されてはいるものだ。もしも、心臓泥棒とやらの話も町の人たちの心を忠実に反映しているとしたら。心臓を奪うかもしれない者へ対しての、恐れと侮蔑が含まれているのではないだろうか。
プシュケはそっと横にいるランの手を握った。

54. COURAGE

54.

「心臓泥棒？」

宿の主人は訊ね返し、ああ、と頭を掻いた。

「思い出したくもないね。あの婆の話は」

そう言って、新聞に顔を隠してしまった。プシュケとランは首を傾げた。宿の主人の様子から、何も知らないはずはないと分かる。それも、心臓泥棒の話をしてくれた人よりもずっと詳しいことを知っていそうだ。プシュケは思い切って、もっと触れてみた。

「あの……」

それ以上の言葉は見つからなかった。

だが、宿の主人は、思い出したくないと言いつつも、話を続けてくれた。

「昔は本当に仙女様だと思っていたさ。病で苦しむ人がいたらすぐに駆けつけて病を治してくれた。薬草を煎じて、ちょっとだけ自分の魔法をかけてやるのさ。そしたらどんなに恐ろしい病もあっという間に治ったもんだったよ」

しかしなあ、と宿の主人は溜め息を吐いた。

「十年近く前だろうか、町に黒い風が吹き抜けていったんだよ。酷いもんだった。体が石のようになっていく病気でね、沢山の人が石化して、最後にはぼろぼろに砕けちまうんだ。悲惨なもんさ」

世の中には呪いよりもずっと恐ろしい病気があるということを、プシュケは知っていた。細胞が少しずつ分解されていく病、全身から血が滲み出る病、体中が痣だらけになり少しずつ壊死が進んでいく病。どれも、決して多いわけではないが、珍しいわけでもない病。

「この町を統治する御方ですら頭を抱える事態だった。だが、大国のお偉方は、我々の味方はしてくれなかった。奴らはこう言った。

『穢れの病は裏切りの証。魔に加担する者どもの刻印。神聖なる我が国に、そのような町は不要だ』とね」

迷信深い人は、患者が苦しみぬく病について、それが魔女の仕業であり、魔に加担した証であると本気で信じていることがある。

プシュケはそんな迷信に寒気すら感じるのだが、人間の世界というのはややこしくて、その迷信深い者の身分次第で、簡単に他人に迷惑が及ぶ。

これは、まさにその例だとプシュケは思った。

「いざとなれば大国などそんなもんさ。だが、かといって、統治者すらお手上げだ。奴らは奴らで自分達の命を守るので精一杯さ。だから、俺なんかは、ただただ怯えて、泣き暮らしてばかりだったなぁ」

ところがだ、と宿屋の主人は新聞を畳み、プシュケを見つめた。

「そんな悪魔のような日も、たった一日を境に終わっちまったんだ」

「一日で……？」

宿屋の主人は深く頷き、顎を掻いた。そして、ぶっきらぼうに、告げた。

「勇者がお出ましになったのよ」

55. LIFE-AND-DEATH PROBLEM

55.

アマリリスはふらりと宿を抜け出して町を歩いていた。

何処かへ行く時は声をかけなければいけない。何時までに戻らなくてはいけない。そんな決まりは、全くなかった。ただ、勝手に町を抜けて、独りで行方を暗まさなければ、後は本人の自由。本人の責任。アマリリスはそう思っていた。だから、誰にも決まりなんて押しつけないし、誰からも決まりなんて押しつけられなかった。

半ば徘徊のように町を歩いていると、普通に歩くよりもずっと、その町の中身が見えるものだとアマリリスは常々感じていた。

町人たちが余所者になかなか見せない顔が、驚くほど簡単に見せつけられてしまうのだ。そして、その顔は、余所者がフィルター越しに見ることのできる安定した整った顔ではなく、もっとドメスティックでがさつな、でこぼことした現実的な顔なのだ。

だから、アマリリスは町を歩く時、いつも客観的に町を見つめていた。

――人間っておもしろい。

一歩一歩ふらつくように進み、辺りをさり気なく目に映していくアマリリスは、人々の作りだす世界を感じていた。この世界は、《嘆き》に満ちあふれている。《嘆き》は《嘆き》を呼び、段々と膨れ上がって、《恐怖》となっていく。

この《恐怖》こそ、アマリリスがよく知る魔物たちにとっての酸素のようなものだった。

「一、二、三」

アマリリスはとあるアパートの前で、数を唱えた。そして、その青い目の色をすっと深めて、アパート全体を目に宿した。

「三匹……ね」

自然と笑みが浮かぶ。やはり、ここにもいた。この町に入った時の違和感はともかく、アマリリスにとっては彼らさえいてくれればそれだけで十分な程だった。

じっとアパートを見つめるアマリリスの姿に、次第にアパートの住人たちは気付きだした。彼らの様子は、まさにただ事ではなかった。アマリリスの正体について薄々感づき始めた住人たちが、わらわらとアパートから抜け出してきたのだ。人数は、十六、七人くらいいた。アマリリスが思うに、これはここのアパートに住んでいるほぼ全員だろう。しかし、傍で遊んでいる子ども達の何人かはこのアパートの子どもかもしれないので、本当はもっと多いかもしれない。

ともかく、その十六、七人がアパートの住人であることが分かったのは、話しかけられた時だった。

「あなた、もしかして、我々のアパートにて気配を感じるのですか？」

そう訊ねてきたのは初老の男だった。

アマリリスは流し目で男初めその場にいる全員を眺め、もう一度アパートに目線を戻した。しかし、口は閉ざされたまま。すぐに開く気配はまるでなく、住人たちとアマリリスの間に、冷たい一筋の風が吹き去っていくのが分かる程だった。その緩やかで息長い風がやんだ時、アマリリスはやっと口を開いた。

「そうね」

住人達の目の色が変わった瞬間だった。

「……お願いだ。お願いがあるんだ」

住人達に取り囲まれる瞬間、アマリリスはぼうっとアパート全体を見つめていた。

56. WHIM

56.

アマリリスは、彼らが何を求めているのか、何に困っているのかを分かっていた。

頼まれるというのは珍しいことではないし、頼む側がどんな状況にあろうと、アマリリスにとって、それは、至福さえ感じる遊びの誘いでもあった。

しかし、アマリリスは面白くなかった。

人間は困っているときはこうして、アマリリスの性癖と力を頼るくせに、いざ、怖いものがなくなった途端、どんな大胆な行動に出るか判らない。

特に、討伐軍を名乗る魔女狩りの連中に下手に影響を受けていれば、頼みを見事に遂行してみせたというだけで厄介ごとにもつれるという可能性はおおいにあるのだ。

だから、アマリリスは、目の前で苦しんでいるだろう人々、三匹の人狼を含む彼らと関わりたいと思わなかった。

――変ね。

血が騒がない。確かに目の前のどこかに三匹も人狼が潜んでいるのに、全く追う気になれない。

意識的に人狼へ対する欲望を爆発させようとしても、体の力が抜けて、面倒な気持ちしか湧いてこないのだ。

人狼の体に留めなく流れている血も、いつか自分に裂かれるのを待っている肉も、アマリリスの冷静な判断力を打ち破り、その濃厚な味の虜にするには、魅力が足りなかった。

アマリリスは目を細め、住人たちに告げた。

「あなた達のなかに、狼はいるわ」

三匹を含め、住人たちが皆、動揺の色を浮かべている。アマリリスの言葉は、その動揺をさらに深めるものとなった。

「でも、頼みはきいてあげられない。今のあたしに狩りなんて出来ないわ」

「待ってくれ……」

アマリリスが言い捨てて去ろうとした時、住人の一人が悲痛な声で呼び止めた。

「お願いだ、狩らなくてもいい。せめて、せめて、狼が誰なのかを……！」

アマリリスは再び振り返り、住人たちを見つめた。今ここで言ってしまおうか。しかし、今すぐに人狼が他人の手で狩られるというのは、何だか癪な話だ。それよりも、しばらく経って、また人狼を狩りたいという気持ちになるかもしれないじゃないか。

アマリリスは彼らを見つめたまま小さな声で呟いた。

「ヒントをあげる」

うっすらとした笑いを浮かべ、続ける。

「目立たない。頼れる。冷静。それが人狼というものよ」

告げおわると同時に、アマリリスは歩きだした。今度は誰に何を言われても、振り返りはしなかった。

後は、彼らがたくましく生き残るのを待つだけ。

「気が向いたら迎えに来てあげる」

アマリリスはぼそりと呟いた。

あんなに人狼を前にして、自分の暴力的欲求がおとなしいまま動きださないというのは珍しいことだった。疲れているのか、満たされているのか、今のアマリリスにとって、彼らなどどうでもよかった。

どうして自分があんなに人狼を求めるのかすら分からないくらい、今のアマリリスには興味の湧かないものだった。

「いったい何日後のことかしらね」

アマリリスの呟きは、もちろん、彼らには届かない。

57. INVOLVE

57.

独りきりで外出しようとしたのに、とプシュケはランを見つめた。ランが心細いという事もよく分かる。ディアナもバステトも優しいけれど、二人とも個人主義ですぐに何処かに行ってしまう。本来、プシュケもその二人と同じなのだが、歳が近い上に、何処か行動に抜け目があるのか、必ずいつもランを看る係りとなってしまうのだ。そういう時は大抵、アマリリスは不在。残っているのはサファイアだが、彼女にランを預けるなんてプシュケにはとても出来ず、結局、ランを連れて外出というのがお決まりとなっていた。

しかし、今回は、ディアナとバステトを見つけ出すべきだったかもしれないとプシュケは思っていた。というのも、向かっている先が、近づけば近づくほど物騒な噂の濃くなる場所であったからだ。

それは、質屋や宿屋で聞いた、少し前の事件の話にまつわる場所。犯人である老婆の住んでいた場所と、犠牲となった子ども達がそれぞれ住んでいた場所である。

プシュケが向かったのは、好奇心だけでない気がしていた。何か、その場所に引き寄せられるものがあったような気がしていた。だが、それが何なのかは分からない。しかし、進んでいけばいくほど、プシュケの足は何度も止まりそうになった。

老婆が住んでいたアパートでは、最近、奇妙な噂が流れているという。

それを教えてくれたのは、そのアパートから少し離れた場所の街路の住人たちだった。アパートの者たちは何も語ろうとしないが、アパートの付近の住人たちから出回った噂が、巡り巡って様々な場所に流れていっているらしい。

噂は奇妙かつ物騒だった。

夜な夜な悲鳴のようなものが聞こえるのに、アパートの者たちは聞こえていないとの一点張りであったというものであったり、アパートの裏手から時々異臭がするという苦情であったり、転居人が相次ぎ、その転居人たちの行方が分からないというものである。

プシュケが噂を聞けば聞くほど、ランを連れていくのは間違っていると思うようになっていた。

でも、向かう足を止めることは、もう出来なかった。

「ラン、あなた、宿に戻りなさい」

プシュケはアパートが近づいた時に、ランに言った。

しかし、ランはプシュケを見上げ、首を振った。

「わたしもそのアパートに何があるか知りたい。何だか放っておいてはいけない気がするの」

プシュケは呆れた。これが、他人の弓だけが攻撃手段のような者の台詞でなければ素直に引き下がれるのだが。しかし、ランが戻る気がないのなら、連れていくしか選択肢はない。

「そう言う事は、自分で自分の身を守れるようになってから言いなさい」

ぐっと手を握り、プシュケはランを連れて、アパートへの道を歩き出した。

58. EYEWITNESS

58.

バステトは一人で町を歩いていた。

町がどのように賑わい、どのように栄えているのかに興味があったからだ。ディアナでも誘おうかと思ったが、この集団は、全体的に個人主義なようで、団体行動でなくてよい限り、皆一人でいたいらしい。かくいうバステトもまた、誰かに合わせるよりも、一人で気ままに出歩く方が好きだったりする。

しかし、近頃はプシュケに不満を訴えられることもしばしばだった。ディアナや自分がさっさと出かけてしまうために、ランを看なくてはいけないという責任が圧し掛かってくるというものだ。それは少し悪い気もしたが、バステトはいつも外に出て、しばらく経ってからプシュケからの不満を思い出すのだ。

だから、結局、プシュケにランを押しつける形で外出してしまう。

「冗談じゃねえぜ」

その都度バステトは開き直ることで、自分を正当化していた。

頼みやすいのが自分しかいないという事が十分に分かっている。人間だといっても、猛獣に変身するディアナや、自分を食べようとしていたサファイアに、プシュケが馴れ馴れしく頼みごとを出来るわけがない。だから、バステトにばかり不満を漏らすのだ。

「アリスさんよー、たまには自分で子守りをしろってんだ」

バステトは溜め息混じりに漏らした。思えば、アマリリスがランを気に入り、旅路に加えた時から、全くの放任主義だった。獣の血が騒ぐのか、ランはディアナに心は開いても、甘えたりはしない。一番匂いの近い、バステトばかりに懐いたものだったし、ディアナもまた、ランに過干渉はしなかった。もしも、バステトまでもがア

マリリスのように放任主義だったら、とっくにランは死んでしまっているだろう。それくらい、アマリリスの放任は酷い。

それが、プシュケが加わってくれたおかげで、やっとバステトの負担も軽減されたわけだ。もうこのままプシュケにプレゼントしてやりたいくらいなのだが、そもそもランはバステトのものでもない。アマリリスさえちょっとでも自分が連れていくと決めた者の様子に興味を持ってくれたら、と、バステトはさらにアマリリスへの不満を抱えていた。

「まあ、頼まれているわけじゃねえんだし、放っておいて何かあっても私のせいじゃねえだろ」

バステトはそう自分に言い聞かせていたが、何処か腑に落ちなかった。

放っておけないのは、周りからの圧力を感じているからとかいうものではなくて、もっと単純に、そうしなければならないと無意識に思っているからなのだろうとバステトは自覚していた。だからこそ厄介だった。

自分は自由に動き回りたいのに、彼らの存在を忘れてさえいればそれが出来るのに、一度思い出してしまえば、そして、目撃してしまえば、こうして見守らずにはいられないのだから。

バステトはつくづく嫌になった。

不吉な予感ばかりが頭の中をぐるぐると回っている。プシュケがまだまだ子どもであることは分かっていたけれど、思っていた以上に子どもだ。ランよりも少しだけ大人と言うだけで、まだまだ保護者は必要なのかもしれない。

「だからって……もう、アリスのせいだぞ……」

旅路に加えたのはアマリリスだ。それに、この集団の中で一番の権限を持っている者がいるとすれば、それもアマリリスになる。彼女が何かを命令することがあれば、背くものなんていないだろう。勿論、それをつかえばランやプシュケに身を守らせる事だって可能なはずなのだ。

バステトは、見るからに怪しげなアパートに向かっていくプシュケとランを見つめながら、いよいよどうするかを迷いだした。止めるべきか、否か。しかし、何と言って止めればいいのだろうか。具体的な理由が思いつかない。しかし、ともかく、彼らをアパートに行かせるのはよくない気がした。

「それはそうね。あんなに小汚いアパート、何もないわけがないもの」

心臓が止まるかと思った、というのはこういう時なのだと、バステトは生きてきた中で一番よく理解出来た。プシュケとランを尾行している間に、尾行されている事に気づかなかったのだ。

そこにいるのが誰か。もし知っている者だとしたら、声ですぐに分かるものだが、バステトにはすぐに分からなかった。あまり声が記憶になかったのかもしれないし、まさかここにいるわけがないと無意識に思っていたのかもしれない。

ともかく、バステトが振り返った時に目に映り込んだのは、二つの青い宝石。

サファイアの目だった。

59. LURK

59.

アパートは古ぼけていて、まるで廃墟のようだった。人が住んでいるらしいのに、まるでその気配がない。アパートの傍で無邪気に遊んでいる子どもたちの姿が不釣り合いで、それもまた不気味だった。

プシュケはここに来て迷った。

自分が探ろうとしているのは、ここにいる皆が早く忘れたいのに忘れられない事なのだと思う。そんな複雑な物事に、余所者が軽々しく首を突っ込んではいけないという気がした。けれど、アパートを目にした途端、プシュケはその違和感に気付いた。

「ねえ、ここ、アマリリスは知っているのかな……？」

ランが呟いた。

「ラン、戻りましょう」

プシュケは声を潜めて言った。関わってはいけない。これほど危ないことだとは思わなかった。ただ物騒なだけの場所ならばと思ったが、これは違う。余所者がたった二人だけで来ていい場所ではなかった。プシュケはランの手を引っ張って、来た道を戻ろうとした。

その時初めて、目の前に一人の少年が立っているのに気付いた。さっきまでアパートの脇で遊んでいた子どもの一人だ。いつの間にか、プシュケ達の背後に回り込んでいたようだ。少年が口を開く。

「お姉さん達、ここに何しに来たの？」

他愛ない子どもの質問だったのだろうか。プシュケにはそうは思えなかった。彼の言葉の裏には、もっと切実な何かが秘められているという気がした。しかし、プシュケはそれでも、気付かなかったということにしておきたかった。

「たまたま通りかかっただけ」
すぐに答えられなかったプシュケに変わって、ランが答えた。プシュケはランの手を強く握ると、その先を続けた。
「これから、もう戻るところなの」
だから此処を通して、という言葉を噛み締めて、プシュケは少年を見つめた。少年は両手をもぞもぞとさせてから、静かに肩を落とした。
「そう、そうか、お姉さん達、僕たちを助けてくれないんだ……」
「何があったかは知らないけれど、わたし達じゃ力不足よ。もっと相応しい人に頼みなさいな」
「相応しい人……か……」
少年は呟くと、突然笑い出した。歪んだ笑みに含まれる感情は、怒りでもなければ、嘆きでもない。笑うという皮を剥いでしまえば、中には何の感情も含まれていない。そんな印象の笑いだった。
プシュケは危機を感じた。けれど、彼の脇をすり抜けるには勇気が足りなかった。
「ねえ、町の人たちに言いふらすの？」
「言いふらすって何を……？」
何のことかは分かっていた。少年もまた、怖いのだ。ここに巣食う魔物よりも、民衆の方が。
「そうでしょう？　その方が手っ取り早いもんね。本当は、誰が人狼かなんてどうでもいいんだ。人狼さえいなくなってくれれば、この人達がどうなったっていいんでしょう？」
少年の形相が変わる。それは、子どもとは思えないほどの、恐ろしいものだった。
「恐いから、殺すんでしょうッ？」
少年が叫んだ途端、プシュケは堪らず、アパートの扉を開いて中へと逃げ込んでしまった。
逃げ込んだ後も、少年が追ってくるのではないかと不安で、暫く階段裏で隠れて様子を見た。プシュケもランも、少年の異様さに恐

れ、すぐに外に出ようなどと考えたくもなかったのだ。
しかし、幾ら待っても、少年が追って扉をあけることはなかった。

60. MURDER

60.

住人に見つかる前に早くこのアパートを出なくては、そうプシュケは思ったものの、扉の先にさっきの子どもがいると思うと、なかなか出ていく勇気が持てなかった。こうしている間にも時間は経ち、日が暮れてしまうというのに、プシュケはまだ階段裏から出ていくことすら出来なかった。

そして、今この瞬間の不安は、目の前、廊下を挟んで先の、扉にあった。

さっきから物音がする。住人が出てこようとしているのかもしれないと思うと、プシュケの緊張は最高潮に達した。ランが動く僅かな音でさえも、プシュケの緊張を悪化させ、苛立ちを生んだ。かちゃり、という音がした。プシュケの心臓が張り裂けそうになった。直後、足音らしきものが響き渡る。いつの間にか閉じていた目を恐る恐る開けて見ると、それは、目の前の扉からのものではなかった。上の階だろうか。

「そろそろ帰りたい……」

「しっ」

ランの呟きを制し、プシュケを身を潜めた。ここの住人だけには知られたくない。面倒には巻き込まれたくない。《恐怖》には巻き込まれたくない。そんな想いが、プシュケの身体を爆発させそうなほど膨らんでいった。

「狼の匂いがする……」

突然、ランの声が緊張を帯びたものになった。プシュケははっとした。このアパートにて《恐怖》をばらまいている犯人。さっきから鳴り響いているこの足音は、その張本人のものなのだろうか。い

や、もしかしたらプシュケは、部屋の何処かから漂う匂いに反応しているだけかもしれない。だが、いずれにしても、やはりここには――。

「どうしよう、どうやって帰ろう、どうしたらいいんだろう……」

プシュケの思考はもはや、口から漏れ出していた。

弓矢は宿。今のプシュケにあるのは、頼りないナイフと、己の足と、ランの治癒能力だけ。ナイフがあっても弓がなければプシュケは、ただの少女にすぎない。

その時、ランは声を殺してプシュケに縋りついた。プシュケがその姿に気を取られた直後、アパート全体が揺らがされた。悲鳴だ。それも、この上なく切羽詰まった声。まるで、断末魔の様なそれ。その途端、様々な場所の扉が開き、足音が響いた。

そして――。

「助けて！　開けて！　お願い！」

扉を叩く音、ドアノブを乱暴に回す音、扉のきしめく音、何処かの部屋の中にいる女性を呼ぶ声。住人達は、必死に彼女に呼び掛けていた。

「ここを開けるんだ！　鍵をあけてくれ！」

「誰だ！　誰が前にいるんだ！」

「窓から逃げろ！　軽傷で済むはずだ！」

どれも重なっていて、瞬時には把握できない。やがて、尋常でないほど激しい悲鳴が上がって、急に静まり返った。

部屋が静まった理由、プシュケにはすぐに分かっていた。

――人狼が……。

ここにいる。

61. HEARTLESS

61.

バステトとサファイアがアパートを訪ねた時、その中は静まり返っていた。

この中の何処かにプシュケとランが入りこんでいったのは間違いない。さほど広くもないアパートだ。すぐに見つかるだろう、とバステトは軽い気持ちでプシュケとランの名を呼ぼうと口を開いた。と、その時、サファイアの手が、バステトの口を塞いだ。

「静かに」

サファイアの鋭い囁きが、バステトに瞬時に物事を把握させた。サファイアが剣を抜く。まだ、帯刀していたのか、と問うまでもなかった。見知らぬ土地にて、禁止されていない限り得物を手放さないのは、当り前のことだ。それを忘れたバステトが愚かなだけのこと。

サファイアはちらりと各階の廊下を見渡すと、独り言のように呟いた。

「住人はいる。でも、息を潜めている」

バステトにしか届かないくらいの小さな声だった。バステトも今度は極小さな声でサファイアに訊ねた。

「プシュケとランはまだ此処にいるのか?」

「分からない。だけど、あの子の気配はする」

あの子、がプシュケのみを指している事、それが普通に考えたら不気味な意味を秘めている事は、明らかだった。だが、今の状況で、サファイアの力を借りずしてプシュケとランを見つけることは不可能だとバステトは思った。

ふと、サファイアは一方を見つめ、目を細めた。その先、二階右

奥の部屋。扉が開いている。
「誰かが私達を見ている」
何処かの扉が閉まった。注目していた場所の扉ではない。もっと違う場所だった。
サファイアは不敵な笑みを浮かべ、剣を光らせた。
「アマリリスが好みそうな目線」
その言葉の意味を、バステトはすぐに察知した。もしもその勘が当たっていたとしたら、ここはとんでもない場所だ。猜疑心に苛まれ、《恐怖》に固められる窮屈な場所。バステトはもう一度辺りを見渡した。この場所に、巣食っている者がいる。アマリリスの力なら、すぐに打ち破れるかもしれないものがいる。それまで、ここの者たちは、どれだけ苦しむことになるのだろう。
「サファイア、戻ろう」
バステトの声に、サファイアは首を傾げる。
「どうして？」
「どうしてって、アリスを呼びに行くんだよ。アリスがいれば、人狼なんてさっさと退治できるだろう？」
バステトの言葉に、サファイアは小さく笑った。
「彼女が話を聞いてのこのことこちらに向かうかしら」
「あいつは人狼を殺すのが好きなんだろ？　喜んで退治するんじゃないのか？」
「そうは思わない」
「なんで？」
「だって、まだ、環境が整っていないもの」
サファイアは笑みを殺し、冷たい声でそう言った。バステトには彼女の言っている意味が分からなかった。だが、サファイアはなおも言う。
「環境が整わないと、彼女は人狼に手を出さない」
断言。予想ではなく、確信をもった断言だった。バステトにはサファイアの考えている事が分からなかった。だが、サファイアは揺

らぎない確信を持っている。まるで、自分の気持ちを告げるようだった。

「どうして、そうはっきり言えるんだ？　言ってみないと分からないじゃないか」

「来ないわ。だって……」

サファイアは剣の矛先を床につけ、吐息交じりの喘ぐような声でぼそりと呟いた。

「ゆっくり殺せないから」

言葉に心臓を射抜かれる事があるとしたら、今の状況がそれだ。

バステトはそう思った。

もどかしいことに、サファイアのこの一言に、反論できなかった。アマリリスは来ない、何故なら、もっと事態が酷くなっていなければ、人狼をゆっくりと殺して楽しむ事なんて出来ないから。人に害をなす人狼を退治する事すら異端とされる世の中に置いて、安定した場所も得られずにそれを思う存分楽しめるという状況があるとしたら、それは、世の中自体が壊れている時。

圧力が、魔女を殺せない時。

――それでも。

バステトは唇を噛んだ。

「それでも……」

サファイアをじっと見つめ、バステトは言った。

「私はアリスを呼んでくる」

62. THERIANTHROPE

62.

ついに日が落ちた。

プシュケにとっては、一番来て欲しくない瞬間だった。ランにとっても同じだろう。いや、ランに至っては、そんな瞬間を考えるまでもなく、恐ろしさに震え続けていたかもしれない。

プシュケとランは、階段裏の倉庫に閉じ込められていた。人狼騒ぎがあった直後、住人に見つかってしまったのだ。そして、捕えられた。理由は分からない。住人達も錯乱していたし、怪しかったのは確かだ。しかし、もし犯人だと思っているのなら、プシュケ達では明らかに不可能であることに、誰も気付いてくれなかった。

倉庫の中は真っ暗だった。プシュケには、ランが胴にしがみ付いていることしか分からない。絶えず聞こえる震えた吐息がランのものである事しか分からない。この場所にいるのが、本当に自分とランの二人だけなのかすらも、プシュケには分からなかった。

「出して！　お願い！　あたし達は違うの！」

ランが震えた声で叫んだけれど、近づいてくる足音は聞こえなかった。

「どうしよう、あたし達、どうなっちゃうんだろう」

縋りついてくるランを、プシュケは手探りで撫でた。

外出しだした時は、ランがついて来た事を疎ましく思っていたのに、今はまるで反対の気持ちだ。暗闇の中で、プシュケはランの存在に感謝すらした。それに、この状況だからこそ、ランに宿る暖かな気が、いい具合に身に沁みてくる。閉じ込められているうちに、気力も体力も消耗してしまっているのだろう。ランから感じる暖かな気だけが、今のプシュケの光だった。

「大丈夫、きっと、誰かが助けてくれるわ……」
自分で言っていて、鼻で笑ってしまいそうな言葉だと思った。誰がここにいると気付いてくれるだろう。助けてくれるなんて、どうして期待できるだろう。誰も気づかないだろうし、住人の気が変わらない限り、この状況を打破するなんて無理だ。そんな事、分かっていた。
それでも、プシュケは、ランに言い続けた。
「すぐに助けは来てくれる。どんな形であれ、わたし達がここで野たれ死ぬはずがない」
だって、最期は決まっているもの、とプシュケはランをぐっと抱えた。真っ暗で見えないけれど、ランはちょうどプシュケの胸元にいる。このまま取り込んでしまいたい程、ランの身体は暖かかった。
そんな時だった。
すぐ扉の向こうで、物音がした。
「誰？」
プシュケの鋭い質問に、扉の向こうの者は、吐息を荒げ、やがて小さく嗤ってみせた。何の感情も窺えない動作だ。プシュケは不信感を募らせて、ランを抱いたまま、扉から少し離れた。
「誰なの？」
「誰、と名乗っても、君には分からないだろうね」
若い男の声だった。もしかしたら、プシュケともそんなに歳は変わらないかもしれない。どうであれ、プシュケには馴染めない声だった。少し聞いただけで、うんざりとする。
「でもまあ、名乗っても支障はないだろう。僕はロノア。ここの住人さ」
ロノアと名乗る少年がくすくすと笑った。その声を聞いて、ランは一層怯えた。その反応、もしかしたら、とプシュケは悟った。恐る恐る扉の向こうに訊ねてみた。
「あなたは、人狼？」
はい、と出るか、いいえ、と出るか。反応を見ようと思った。ロ

ノアは一瞬間をあけると、再び静かに笑い始めた。ごく自然な笑いだった。

「面白い質問だね。人狼は君じゃないのかい？」

「違う。わたし達はただここにいただけ。人狼は別にいるの」

プシュケの訴えに、ロノアは「うん」と頷いた。

「そうかもね。でも、明日にはそうじゃなくなる。明日、君達は町に晒されて人狼退治に乗っ取った方法で処刑される。死んだ後の君たちは人狼の一味という事になるのさ。そして、本物の人狼はひっそりと転居して、別の場所で狩りを始める」

「そんなバカな」

プシュケの叫びも、ロノアは嗤いで封じ込めた。

「バカみたいだろ？　だけど、そうなるって決まったのさ。君たちは不運だったんだよ。もっと違う場所に興味を持てば、巻き込まれずに済んだのにね。そして、僕は運がいい」

「あなた、やっぱり人狼なの？」

「人狼になりたい、そう思う事はしょっちゅうだよ」

ロノアは即答した。

「僕が言っているのは、君たちのおかげで、僕が処刑されずに済んだって事さ」

その言葉に、プシュケははっとした。人狼狩りがここで始まる。ロノアが殺されるはずだったのが、自分達になった。つまり、明日の朝には、決まってしまう。

「じゃあね、僕の命の恩人たち」

ロノアの声が響いた。

63. INFILTRATE

63.

この世で一番哀れな匂いのするアパート。

サファイアの持った感想は、そのようなものだった。この匂いに覚えがないわけではない。何度も何度も嗅いできた匂い。この匂いは、サファイアが求める快楽のすぐ隣に、いつも寄り添っているものだった。サファイアとは関係のない、取るに足らない匂い。

だが、今は違う。

違う事がよく分かる。バステトが去り、サファイアはただ一人でこの場所にいる。単身で森に追いやられた生活を送ってきたから分かる。この場所は、魔のうろつく野外と何ら変わりない場所だ。むしろ、これほど追手に優しい環境は、ここに巣食う魔物にとっても嬉しいものだっただろう。

――遊んでいるのか。

サファイアはアパートの空気を胸一杯に吸い込んだ。

まるで、この場所自体に漂うあらゆる者たちの感情までもを体内に取り込んでしまえるかのような幻想。サファイアはその奇妙な心地よさと、危機を察知する本能からの緊張を以て、静かにアパートを歩き出した。

確かにここに、プシュケがいる。確かにここに、ランがいる。魔物であろうと、人間であろうと、自分以外の者がプシュケに手を下すなど、サファイアには許せない事だった。彼女の命は自分のもの。そのためには、リヴァイアサンの息の根を止めることをも辞さない。

サファイアのその独占欲は、恐怖よりもずっと冷たく、そして、大きく燃え盛っていた。

――プシュケ、何処にいるの？

ここに住まう人々もいるはずだ。だが、実際の中は廃墟のようだった。いや、廃墟とも違う。この場所からは、生を感じられない。しかし、かつて生のあったものが朽ちたという感覚すらもない。まるで、ここは時を止めてしまったかのような、荒んでいく闇から逃れたいが為に、永遠に晴れない影の中に閉じこもってしまった世界。

サファイアの青い目には、そう見えた。

――何処かに隠れているの？

アパートの中を歩き始めて、最初に目についたのは、入ってすぐの大階段の裏のスペースだった。そこには物置のような小部屋があった。長い間使われていないというわけでもなさそうで、周囲は埃もなにも被っていない。ためしに開けてみると、中はすんなりと開いた。

――誰もいない？

剣を構えながら、サファイアはそっと物置の中に入った。閉じ込められる事はない。この扉、鍵が壊れていてしまらないのだ。錠前もなければ、扉自身、歪んでいてきちんと閉まらない。

「ん……？」

サファイアはじっと扉の下部を見つめた。傷がついている。これが原因で扉が閉まらないのだろうと推測できるが、その傷は異様に新しく見えた。

「最近開けられたばっかりってわけね」

サファイアがその傷にそっと触れた時だった。

空間自体がねじ曲がりはじめたかのように、視界が揺らぎ始めた。その揺らぎは、サファイアの身体を芯から突き上げ、何か熱いものを体中に送り出していく。徐々に意識が朦朧とし始め、黒くて大きな影が、自分を包み込んでしまうような幻想を、サファイアの瞳が一瞬だけ捉えた。

その幻想は、しかし、すぐに打ち消されてしまった。

嘘のように辺りは静まり返り、何事もなかったかのようにサファイアを取り囲んでいる。だが、代わりにサファイアの耳に届いたの

は、女の悲鳴だった。

64. JAILBREAK

64.

プシュケとランは、アパートの一室で荒くなった呼吸を必死に整えていた。プシュケはだが、この息が整う時は、まだもっと先の事だろうと理解していた。

「こんなことして、本当に大丈夫なの？」

プシュケは不安で仕方なかった。

過ぎるのは、さっき扉の前で冷やかしにだけきた狼になりたいとか言っていた青年の声。今この瞬間でさえ、彼の気配が消えた時からそれほど経っていないのだ。これで、本当に大丈夫なのだろうか。

プシュケが心配しているのは、自分達ではなく、寧ろ、目の前にいる男性の方だった。

「だって、あなたもここの住人なんでしょう？」

プシュケとランを連れだしたのは、見知らぬ男だった。中年に届くか届かないかくらいの、物静かな男。彼は説明もなしにプシュケとランを物置から出し、そのまま五階端の部屋へと導いた。導かれるままについて来たプシュケとランだが、彼がここの住人で、他の者たちに無断で自分達を連れだしたというのは、男から伝わってくる雰囲気ですぐに分かった。

だからこそ、男の部屋が五階にあるというのも、恨めしい事態だった。

何処かで何かの物音が聞こえるたびに、プシュケもランも心臓が止まってしまいそうだった。怖いのは住人だけでない。このアパートの何処かに潜んでいる人狼が一番怖い。

賢い人狼だったら、自分達を狙ったりはしないだろう。もっと関係のないものを餌食にして、その罪を疑わしい自分達になすりつけ

るはずだ。そう分かっているのに、それでも、人狼に出くわすと考えると、理性なんて吹っ飛んでしまう。

だから、落ちついて男の話を聞くまでには、結構な時間を要した。

「さて、誰かが外に出たな……」

男は小さく呟くと、扉越しに廊下を窺った。

せっかく落ち着いてきた呼吸が、さらに荒くなる。プシュケは嫌になった。

「……いな…ぞ……！」

微かに、声は聞こえた。

「お…い！　誰……あいつらが……ないぞ！！」

段々と声は近づいてくる。同時に、複数の扉が開く音もした。

「大変だ！　あいつらが、逃げたぞ！！」

やっとはっきりと声が聞こえた。

――もうばれたの？

プシュケは無意識に、ランの手を握った。

「あいつら、どうやって逃げたんだろう？　やっぱりあいつらが、人……」

その時、声が不自然に途切れた。遅れて聞こえたのは、階段中を共鳴し合う悲鳴。そして、乱暴に扉を閉める音と、何か水のようなものが勢いよく流れ出る音、そして、満足そうな笑い声だった。

外で何か絶対的に嫌な事が起きた。

音を聞いただけで誰にでも分かる事だった。

「狼狩りの魔女が立ち寄った……」

さっきまでと違う声がした。それは、比較的、若い声に聞こえた。

「姉さん、あいつの事なんだろう……？」

独り言のようだった。沢山の悲鳴を浴びながらその声は、新しい悲鳴を作った。プシュケとランがじっくりと聴けるのは、ここまでだった。

「隠れろ！　奴は皆殺しにする気だ！」

プシュケとランは、慌てて部屋の奥へと逃げ込んだ。

65. INDUCEMENT

65.

アマリリスは非常に不快だった。

何がどのくらい不快なのか、考えるだけで切りがない程の気持ち悪さだ。たった今帰宅したバステトがその張本人というわけではないのに、ついあたってしまいそうになる。すぐ傍にいるディアナだってそうだ。今のアマリリスには、自分を含めた全ての存在が腹立たしかった。

それもこれも、町を歩いていたときに、あんなアパートなんて見つけてしまったからだろう。

もしも、あのアパートを知らなかったら、こんな不快な思いはしないで済んだ。

「で？　サファイアは残ったわけ？」

アマリリスは冷たくバステトに訊いた。

「ああ、プシュケとランを助け出すって……」

「ランはついでね」

「そうは言っては……」

アマリリスの言葉に、バステトは否定しようとしたが、途中で口籠ってしまった。誰でもわかる。サファイアにとって今、一番大切なのは、プシュケ。それも、いずれ自らの手で殺すという事を前提に守るという狂ったような信念を持っているらしい。

「そりゃあ、他人に獲物を横取りされるのは無様ですものね」

アマリリスは吐き捨てるようにそう言った。

気に入らないのは、自分が見捨てたアパートに偶然とはいえ噛みつかれてしまったという事だけじゃない。サファイアの態度だ。どうせ来ないと彼女は言ったという。アマリリスの事を見通したつも

りにでもなっているのだろうか。とはいえ、確かにプシュケとランが迷い込んだくらいだったら、助けに行く気なんて起きなかったかもしれない。

だからこそ、気に入らないのだ。

――人食いのくせに……。

サファイアに見透かされた事が気に喰わない。そして、その予想を裏切るために、自分の意思を曲げるという事も気に入らない。なにより、あのアパートの住人達にまた会いたくないのだ。あの場所にいる人狼なんて、アマリリスは興味なかった。

しかし、このままだと、サファイアの言った通りという事になってしまうというわけだ。

バステトとディアナが見つめてくる視線が、今のアマリリスにはこの上なくうっとおしかった。

「悪いわね、バステト、ディアナ、でもあたしは、どうしても行きたくないの」

「どうして？」

ディアナが縋る様に訊いてきた。

「人狼でしょう？　あなたが求めている人狼なんじゃないの？」

「そうね、あれは人狼。だけど、あたしが殺したい程美しいものじゃない」

「そんな……」

バステトが震えながら拳を握った。アマリリスはその様子を冷静に見つめ、小さく溜め息を吐いた。

あのアパートにいる狼。あれは、最後の仕上げを整える前の狼だ。アパートを壊滅させて、そこから町のあちこちに被害を拡大させていく。あの人狼が美しくなるのは、もっと後。沢山栄養を付けて、毛艶がよくなった狼だ。

寧ろ、アパート全員分くらい栄養を付けて貰わないと、面白くない。

アマリリスはそうとまで思っていた。しかし――。

「でも行くわ」
アマリリスはつまらない表情で吐き捨てた。
「サファイアなんかにそう思われるのは、癪だもの」

66. TRAGEDY

66.

悲鳴が随分と止んだ。

そんな不吉な事実を、プシュケは捉えた。部屋の鍵はしっかりと締められているけれども、扉をぶち破る音も何度か聞こえた事が、ずっと頭に残っている。

プシュケはランと共に寝室の隅に隠れていた。この部屋の住人であろう男の姿は見当たらない。恐らく、プシュケ達とは別の場所で息を潜めているのだろう。廊下から聞こえる音に耳をそばだてて、プシュケはどうにか呼吸をしていた。自分とランの吐息と鼓動が、こんなに物音をたてるものだったなんて知らなかった。きっとこの音は、廊下にまで聞こえているに違いない、プシュケは何度も何度も自分に言い聞かせた。

そうしているうちに、足音が聞こえ始めたのだ。

足音はゆっくりと進み、部屋の端々から扉を叩く音、ぶち破る音、争う音、悲鳴、静まった音を作りだして、また廊下へと向かっていく。それを繰り返し、繰り返し、段々とこの部屋へと近づいている。

このアパートの中で、生きている者はあとどのくらいいるのだろうか。

何かが部屋の扉を大きく叩いた。

――来た。

何度も何度も扉を叩く。

扉はそれほど頑丈なものではない。人狼くらいの力なら、簡単に壊すことが出来るだろう。せめて、ここの扉が鉄で出来ていたら。

プシュケは思わずランを抱きしめて、恐怖した。今の彼女にはもはや、ここの部屋の持ち主や、どうやってここを回避し、どうやって

逃げるかという考えなど浮かんでいなかった。あるのはただ、パニック。

木材がねじ切られる音。プシュケにも、ランにも、それは怖い音だった。特に、樹と共に過ごしたランにとって、その音は、生きている者の肉をねじ切るようなそんな想像を掻き立てられる程恐ろしい音に感じた。

荒い吐息と共に、息を止めたくなるほどの生臭い空気が流れ込んできた。濃厚すぎる鉄の匂いが、部屋に充満していく。これが何物なのか、プシュケには痛いほど分かる。

――サファイアが好みそうな匂い。

プシュケは気付けば嗤っていた。自分に対して。この場所に対して。人狼に対して。嗤うしかない。もう、生きていられるわけがない。武器も持たずこんなアパートに迷い込んだ自分がバカだったのだ。それも、ランまで巻き込んで。

――あなたに食べられずに死ねるわ。

ざまあみろ、とプシュケは悪態を吐いた。もう死ぬのは怖くない。ランを道連れに自分はサファイアとの戦いに勝利するのだ。プシュケの思考は段々と固まっていった。

寝室の外で、動きがあった。

何者かと何者かが争う音。

きっと、ここに招いてくれた男と人狼だろう。プシュケは呻いた。彼が助かるわけがない。人間が人狼に敵うなんて思えない。そんな事出来る者がいたとしたら、それは、魔女に近い者。サファイアのように、人間でありながら魔を宿す者だ。もしくは、プシュケ自身のような、ヒトでない者。

しかし、そのような者は、ひと目見ただけで大体分かるものだ。あの男は、普通の人間にしか見えなかった。

「悔しい」

プシュケは呟いた。武器さえ持っていれば、彼を助ける事が出来る。武器さえ持っていれば、人狼なんて怖くない。武器さえ持って

いれば、武器さえ持っていれば……。
「悔しいよ、ラン」
ランは何も言わず、閉ざされた扉の向こう、物音の聞こえる方向を凝視していた。音と音がぶつかり合い、呻きと呻き、唸りと唸り、咆哮と咆哮が弾き合って空気の波を乱す。その様子を、見えない場所から、必死に見つめていた。
プシュケは背中からランを抱き、静かに寄り添った。
こうなっては、二人ともう駄目だ。プシュケはそう思っていた。プシュケに出来るのは、弓。ランに出来るのは、癒し。所詮、人狼に癒しの価値なんて分かりはしないのだ。
しかし、ランの放心は、プシュケの思っていたものではなかった。
「この匂い……」
ずっと黙っていたランが、小さく呟いた。
「この匂いは……」
扉の向こうを見つめたまま、小刻みに震える。
プシュケはその様子を見つめ、やっと扉の向こうの事態に気づき始めた。プシュケには匂いなんて分からない。見えない場所の様子なんて、しっかりと掴めない。けれど、気付いてから見つめると、目に見えなくとも感じられるものが、段々とはっきり輪郭を成していく。それは、プシュケだからこそ、素早く捉えられる、そんな存在だった。
見えない場所に光り輝くのは、真っ青な宝石。
「サファイア……？」

67. MONOPOLIZER

67.

「サファイア！」

その瞬間、プシュケは自分でも理解出来ない行動に出た。あんなに強く掴んでいたランの手を放し、人狼の居るはずの扉のノブへと手をかけたのだ。

「プシュケ、駄目！」

ランがすぐに飛びかかってきた。自分とプシュケを守るための必死の抵抗。この扉を開けることは、ランにとって、確実な死を意味する行為なのだ。しかし、プシュケはそんなランを押しのけてしまった。自分でも制御出来ない程の衝動が、彼女に扉を開けさせようとしていた。

「ラン、隠れていて。危なくなるわ」

「じゃあ、開けないで……！」

「それは出来ない」

プシュケはそう言うと、ノブをあっさりと回してしまった。自分でも制御出来なかった行動。目に映った人狼への恐れの反応だけが、今の自分のなかで一番理解しやすいものだった。《恐怖》そのものを身にまとった狼は、本来の姿でそこにいた。ただ、その姿は、絶対的捕食者の形ではなかった。

プシュケの目の前にいたのは、人狼よりも確実に自分の肉を狙う存在だった。かつて、他のどんな魔物よりも狡猾で残忍な方法で陥れようとした悪魔。そして、今でもプシュケの心を縛っている愛しい程憎らしい女が、其処にいた。

「サファイア……」

「プシュケ、中にいなさい」

重みを帯びたその声は、いくらかの疲れを隠せていなかった。手に持っている剣の血潮を払い、サファイアはそれを煌めかせ、人狼を威嚇していた。

――守ってくれている？

「プシュケ、死にたくなかったら中にいなさい。リヴァイアサンを倒す前に、お前を失う事態なんて、私は認めない」

人狼は唸り、新たな獲物であるプシュケに目をやり、薄っすらと笑いを浮かべた。

「なるほど、そのスケープゴートがお前の財産っていうわけか。そこまで守るからには、さぞ味に期待しているのだろう？　魔の者め」

「お前とお喋りするつもりはないの。今すぐここを去りなさい。腐るほどたくさん食べて、お腹は一杯になったでしょう？」

サファイアの声は、いつも以上に冷たく感じた。

だが、後ろ手にプシュケを庇うその手の温もりは、驚くほど暖かかった。

「残念だが、そうでもないんだよ。ただの人間ばかり食っているとね、喰っても喰っても満足できなくなるんだ。お前達のような、ひと癖ありそうな味が恋しくなるんだよ」

人狼の嗤い声はこの上なく不快なものだった。アマリリスさえも見向きしないような、美しくない狼。ただの魔物。こんな魔物に食べられて死ぬなんて、プシュケは嫌だった。

「隠れてなさい」

サファイアの二度目の忠告に、プシュケは息を呑んだ。

弓さえあれば、こんな敵、怖くもなんともないのに。

「ランもいるんでしょう？　あなたが守ってあげなさい」

サファイアの言葉の背後で、人狼の目がきらりと光った。

68．PREDATOR

68.

プシュケの頭の中は真っ白になっていた。

自分の弓、サファイアの剣、人狼という者は、もっとひ弱なものだと思っていたからだ。サファイアの剣は、プシュケにとって絶対的強さの象徴だった。町に害をなす魔を弑する太古から伝わる退魔の剣。それが、サファイアの持つ古ぼけた剣の名前だった。見た目はぼろいが、刃毀れもした事がない。どんなに頑丈で固い肉を切っても、血糊を払えば、元の輝きを必ず取り戻す不思議な剣。

そう、プシュケはこの剣さえあれば、サファイアは無敵だと信じていた。

だから、彼女がヒトの肉を好む人間の皮を被った悪魔だと知った時、逃げるという事しか考えられなかった。

「サファイア……」

プシュケの目の前に落ちている剣。それが、サファイアの命の要。一度、自分の命を左右した者の存在が、この剣にかかっている。しかし、プシュケは恐ろしくて動けなかった。この事態は、プシュケのせいなのだろうか。サファイアが、今、人狼に押さえつけられているこの状況は、プシュケのせいなのだろうか。

「プシュケ……ランを連れて逃げなさい……」

「サファイア」

「私以外の奴に喰われたら承知しないわ」

――ここで逃げる？

プシュケは答えに窮した。サファイアの事は憎かった。自分を騙し、殺そうとしたヒト喰いの事など、理解出来ない。けれど、このまま人狼に喰われるだけの彼女を放って逃げる事なんて、プシュケ

に出来るだろうか。
——だって、私は……。
「ラン、隠れているの？」
プシュケは背後に潜むランに声をかけた。吐息だけが聞こえる。人狼に怯え、震えているのだろうか。たまに嗚咽のようなものも聞こえてきた。無理もないだろう。ランにとって、この状況は、死に包まれている。彼女は自分よりも、ずっと無力なのだ。
「独りで逃げるか、このままそこで隠れているか、自由よ。でも、逃げるなら、私が奴の気をそらしてあげるから、早くしなさい」
返答はない。
プシュケはじっと人狼を見つめた。人狼も、プシュケを見つめている。彼にとってサファイアは、人質なのだろうか。それとも、サファイアのみが注意すべき敵と認識しているのだろうか。時空が端々から凍りつきそうな状況で、プシュケはそっとサファイアの剣を拾った。
「プシュケ！」
その直後、サファイアの怒声が、絶叫に変わった。人狼が彼女の腹を踏みつけたのだ。
——あの場所は、確か……。
「痛むのか？　ほう、冷徹な奴だと思ったが、弱点があったか」
追放された時につけられた古傷。あれでサファイアは野たれ死ぬだろうと誰もが思った。プシュケはその光景を目にしてから、かの町を去ったのだ。あんな事をするような者達の町に、これ以上住む事なんて出来やしない。
「サファイア……！」
プシュケは剣を握りしめた。剣なんて使ったこともない。けれど、自分が使うしかないのだ。人狼はそんなプシュケを見つめ、笑みを作った。
「お前のような小娘に何が出来るというのだ」
「やってみないと分からないじゃない」

プシュケは剣を払い、人狼を睨んだ。
「サファイアを放して！」
人狼は笑みを浮かべたまま、大きく吠えた。遠吠え。仲間を呼ぶ声。そうだ。処刑も粛清も何もまだ行われていないようなアパート。一匹だけでこの中に潜んでいるなんて思えないのだ。
「すまないね、お嬢さん。こいつも、お前も、奥に潜んでいる奴も、皆仲良く俺達の腹の中さ。さあ、それまでせいぜい楽しませておくれよ」
足音がする。それが複数なのか、単数なのか、聞きわける暇なんてプシュケにはない。ただ、怖さと緊張と怒りだけが、プシュケの身体を支配していた。
サファイアはそんな彼女を観て何か呟いていた。だが、何と言っているのか、プシュケには届かなかった。
「さあ、かかっておいで、どうせ、お前なんて一瞬でばらばらにされるしか道はないのだけどね」
プシュケは大きく息を吐き、震える足を踏み出した。サファイアに襲われた時はうまく動かなかった足が、しっかりと動いた。ただまっすぐ人狼を追って、プシュケは剣を突き出した。人狼も鋭い爪を突き出して、プシュケに襲いかかった。
その時だった。
プシュケの全身に、血しぶきが襲いかかってきたのは。
一瞬で視界は開け、目の前にふさがっていたはずの黒い物体は、跡形もなく消え去っていた。真っ赤な色と、吐き気すらする匂いの向こうで息を切らしながらこちらを見ているのは、辺りを染める血しぶきに負けないくらい赤い服を着た者だった。

69．DEPARTURE

69．

人狼騒ぎは瞬く間に広まった。こうなってはアマリリス達のいる場所はない。人狼を残らず躯にしたのはアマリリスだが、そんな彼女を魔女として偏見に満ちた目でしか見られない者が、人間の大多数を占めるものなのだ。特に、かつてここでは事件があった。魔女狩りの剣士に救われたという、事件。

アマリリスとて、町全体を相手にのんびりとしてはいられなかった。

「さあ、行きましょう」

ここにはもう居られない。比較的大きな町で起こった人狼騒ぎの噂は、伝染病のように広まっていくのだ。それを聞きつけた魔女狩りの者たちが来るのは、時間の問題。

アマリリスはこれ以上、あの者達と関わりたくなかった。

――だって、彼らは……。

「アマリリス、ごめんなさい」

ふと、裾を掴む者の頭を、アマリリスは無言で撫でた。ふわふわとした耳が手に当たる。ランの大きな目が、アマリリスを見上げていた。一足遅かったら、確実に喰われていただろう。あのアパートの殆どの者たちのように。

「あなたが謝ることないわ……ねえ」

アマリリスの言葉に、身を強張らせるのはプシュケだった。彼女は言葉に窮しながら、じっとアマリリスを見つめ、困ったような顔をしていた。プシュケが悪いとは、アマリリスは思っていない。運が悪かったそれだけだ。それに、あのアパートに人狼が潜んでいると知った時点で、次の日には去る予定だった。今のこの世の中では、

人狼がいる事と、魔女が狩られる事は、同一の事。そのくらいに考えておいて間違いはない。

「プシュケ、あなたもよ。ただ、もっと慎重になりなさい」

アマリリスはそれだけ告げると、さっさと歩き出した。この言葉がどのくらいプシュケに伝わったかという事は、アマリリスにとってはどうでもいい事だった。所詮、これ以上、アマリリスには何もできないし、するつもりもない。それ以上の必要性も感じなかったのだ。

今はともかく、先の事を考えるだけ。

何処へ向かい、何処へ消えるか。それを考えるだけ。

「アリス……」

ディアナの問いに答えぬまま、アマリリスは空を見上げた。

町から離れてすぐ、だだっ広い平原の端から見える蒼い空。滴が垂れるように着色されたそれら空間は、アマリリス達を囲むように見下ろしていた。その薄暗さは、町の近くのみ目立ち、平原より向こうは明るくなってきている。

早くこの場を去らねば、とアマリリスは思った。この薄暗さこそ《恐怖》なのだろうか。

「あなた達の身体を蝕む煙が、濃くなってきたわ」

アマリリスの瞳に、汚れた姿が映り込む。

彼女の求めているのは、もっと美しいもの。比べる事すら愚かな程、美しいもの。それは、もうここにはいない。もっと美しいものは、他の場所にいる。

「さあ、いきましょうか」

70. COBWEBBY

70.

ゲネシスが人狼に出会ったのは、なにも初めてというわけではない。けれど、今までゲネシスにとっての人狼とは、魔物の一つに過ぎなかった。人間の皮を被り、人間のふりをしているが、所詮は魔物。その思慮、観念など、どうでもいい事だった。

だが、今、目の前にいる人狼は、恐ろしい程違うものだった。剣を構え、威嚇の意を示すゲネシスの姿なんてまるで見えていない。その目に映っているのは、もっと遠くの何か。美しい容姿を凍りつかせ、恐ろしい配色で彩っている何者か。それを、怨みがましく見つめていた。

ゲネシスは剣を下げた。

目の前の人狼は動こうともせず、その美しい宝石のような目で、虚空を見つめている。ゲネシスの存在を知りながら、排除しているようなその意識。草原に無数に生える雑草に何の疑いも持たないように、ゲネシスの存在に疑いを持たずに無視を続ける。

彼女は、自分の目の前の事よりも、ずっと高次の物事に注目していた。それも、怨みの籠った目で。その唸り声は、まさに狼そのもの。彼女の美しさに相反しているが、それはそれで心苦しくない音色だった。

「お前、恨んでいる？」

ゲネシスの問いに、人狼の目がちらりと動いた。それはやはり、ゲネシスの存在にずっと気付いてたという目。敢えて無視をしていたという目だった。

「何かを恨んでいる。ニンゲン？　それとも、別の何か？」

ゲネシスの剣はすっかり闘志を失っていた。いかに人を欺く魔物

とはいえ、襲いかかって来ない者を切り捨てるなど、ゲネシスの剣の美意識に反する行い。それに彼女は、ゲネシスの心に訴える何かを秘めているようだった。

「どうしてそんなに恐ろしい目をしているの？」

ゲネシスの問いに、人狼は動じずにじっと見つめるという答えを示した。ゲネシスも同じく、じっと見つめるという答えをそれに返した。やがて、人狼の美しい口元が動き、笑みを作った。妖艶で、吸い込まれてしまいそうな、不思議な笑みだった。

「面白い事を訊くね」

人狼はやっと言葉を発した。美しい声。ゲネシスの心を揺さぶるような、透明で綺麗な声だった。

「私は人狼だよ？」

ゲネシスを見つめるその顔は、作られたかのような美しさだった。その美しさを上手に纏い、自分のものとしてさらに美しく着飾る。その人狼は、特別な力を持っていた。

「私はオーロール」

人狼は言った。

「あなた、誰？」

問いが、ゲネシスを包む。その瞬間、魔法のような力がゲネシスから言葉を引き出していく。意識的にしろ、そうでないにしろ、ゲネシスの口からが漏れたのは、自分の名前だった。

71. DISTORTION

71.

アマリリスが引き寄せられた場所は、とても見慣れた場所だった。知らない間に迷い込んでしまったのか、無意識に戻ってきてしまったのか、アマリリス自身にはよく分からなかった。ただ、ディアナとバステトが、いち早くそれに気付き、警戒の意を見せているのだけは気付いた。

そう、ここにはアレがいる。

アマリリスがひと目見た時から欲しかったモノ。目の前でそれを我慢しなければならなかった苦痛の源が、またこの先にいる。ディアナとバステトが警戒している気持ちは分かる。彼らはアレを傷つけたくない。人間という獣の本能が、警鐘を鳴らしているのだろう。けれど、アマリリスには分からない。アマリリスは魔女だから。

「ここ、知っている匂いがする」

ランが呟いた。

「とても落ち着く場所。穢してはいけない聖地。不思議な感覚。ベヒモスのいたあの場所にそっくり」

ベヒモス。それが何なのか、アマリリスは知っていた。それはこの場所の何処かに潜んでいる大いなる者と同じ位置に属する者。果てしなく這いずり、己だけの場所で足を休める大陸の覇者。それは、果てしなく彷徨い、己だけの場所にて泳ぎを止める大海の覇者、そして、果てしなく飛び続け、己だけの場所にて羽を休める大空の覇者と同じ存在。

この場所は、羽を休める場所。

そう、ここにいるのは、大空の覇者だ。

サファイアが、表情を渋らせた。

「どういう事、アマリリス。あなた、偉大な獣に加担するつもりなの？」

サファイアが彼らを嫌う理由。分かっていた。彼女はプシュケを食べたい程愛している。海の供物であるプシュケを、奪い返したい。大いなる生き物は、三体で一つ。つまり、ここにいる者は、いつかサファイアからプシュケを奪うであろう生き物の分身のようなものなのだ。

「サファイア、空にも供物はあるのよ、知ってた？」

アマリリスはぽつりとそんな事を言った。ディアナとバステトが警戒している相手。それは、すぐ近くでこちらを見つめている。アマリリスにとってそれは、可愛いくらい分かりやすいものだった。ディアナとバステトが、いよいよ表情を強張らせた。

「そんな顔しないで、二人とも」

アマリリスは言った。

「あたしはあたしを抑えられる。多分、今回は……」

そして、その視線は、自分の欲望を刺激して止まない対象へと移っていく。アマリリスは必死に自分の中の自分を抑え込んだ。単純で、暴れやすく、一点の穢れもない純粋な本来の自分。誰もが持っている本能という名の自分。

「出てきなさい」

アマリリスの声が響いた。

72. REVOLVE

72.

美しい狼。人を食わない狼。血の穢れから、その時まで静かに守られる存在。目の前の狼は、ある意味でプシュケと同じものだった。サファイアはその姿を見て、いつか自分がプシュケを奪おうとして、アマリリスに止められた事を思い出していた。

――なるとすれば、あの時と、逆。

アマリリスの平常心は、少しずつ蝕まれていく。

「お前、また来たのか」

人狼が喋った。真っ白な姿。その体毛はいつしか髪になり、爛々と光る狼の目は、真っ青なヒトの目へと変わっていた。襤褸切れを纏った、美しい娘。サファイアの目から見ても、その美しさは絶対的なものだった。狼でなければ、きっと食べたいと思っただろう。サファイアはそう思った。

人狼の澄んだ目が、アマリリスをじっと見つめる。警戒に満ちた瞳。しかしその様子は、何処か弱々しかった。

「何をしに来たの？　この私、ヴァラヴォルフの血と肉を欲してまた来たというの？」

警戒の向こうに潜む、諦めの感情。サファイアはそれを見逃さなかった。獲物を追い詰めて命を奪う者ならば、その光を逃すはずがない。恐らくそれは、アマリリスにも見えただろう。しかし、アマリリスは微動だにしなかった。

――違うわね。

サファイアの見つめるアマリリス。彼女は震えていた。必死に抑え込んでいた。ほんの少し鎖を緩めただけで、恐ろしい魔物が出来あがってしまうだろう。そして、そんな事をしてしまえば、目の前

のこの美しい狼に未来はない。
「それとも、ジズ様に用事でもあるの？　用事でもあったの？」
「ただ、様子を見に来ただけよ」
アマリリスがやっと答えた。サファイアの思った通り、アマリリスの声には張りがなかった。
人狼はアマリリスの姿を一頻り見つめると、いきなり俯いた。
「様子……？　何の様子……？　呪われた魔女がこの地に何の様子を見に来たっていうの……？」
人狼の様子は明らかに変だった。だが、襲ってくる様子はない。そうではない、サファイア達の意識を掴んで放さなかったのは、他にある。その人狼は、泣いていたのだ。
人狼は暫く泣き続けると、より蒼くなった目でアマリリスを見つめた。
「お前が……やったの？」
「何のことかさっぱりだわ」
アマリリスは静かに答えた。
だが、その答えで人狼が満足するはずもなかった。
「嘘、嘘だ……。お前が、お前が来てから、全てはお前が来てから狂い始めたんだ……。ここに魔女や人間が踏み込んでしまうなんて、ここにジズ様を穢す者が入りこんでしまうなんて、私は、私は……大地の供物なのにッ！」
「ツバキ」
アマリリスが呼びかけた。それが彼女の名なのだろうか。ツバキと呼ばれた人狼は、再び俯き、急に動かなくなった。
「ツバキ、本当なの。あたしには何のことかさっぱり分からない。ただ、変な予感がしてきただけなの。お願い、何があったか教えて。本当に、あたし達、知らないの」
「嘘……」
ツバキは俯いたまま、目をあわさずに呟いた。
「嘘……お前は私の事、食べようとしたじゃない。ジズ様にも恐れ

ずに、残酷な欲望をもって、私を生きたまま解体しようとしたじゃない。騙されない、お前には騙されない。誰が、お前なんかに、話すものか」

顔を上げたツバキの目からは、すでに涙は引いていた。

「一緒にいる奴らも同じ。そいつに味方する者は、すべて私の敵。騙されない。お前達には騙されない。お前達も、ここに来た人間どもも、皆、敵。私の敵……」

「ツバキ、待ちなさい」

ツバキの姿が消えていく。風に攫われるように、姿をくらまそうとしている。アマリリスの呼びかけなど、到底届くわけもなく、美しい白の姿はこの場所から消えようとしていた。

「待って！」

それに手を伸ばしたのが、ディアナだった。瞬時にクーガーとなった彼女は、他の者たちが声をかける前に、ツバキの後を追って、走りだしてしまった。

他の者たちが獣の足に追いつけるはずもなく、ただ立ち尽くしている他なかった間に、二人の姿は岩山の狭間へと消えていってしまった。

アマリリスはそちらをじっと見つめ、体中を刺激する醜い欲望の渦を抑え込みながら、肩を落とした。

73. MARIONETTE

73.

ゲネシスは思った。この世の中において、絶対あり得ないと信じることには、実は根拠がないという事。そして、生まれてから死ぬまでかかっても、自分を取り巻く世界の全てを捉えることなど不可能かもしれないという事。それだけ世界は広く、不安定な渦そのものだった。

ゲネシスが旅をする上でもう何十匹も斬ってきた人狼と共に今この場の空間を過ごしている事も、その一つ。不安定で捉えどころのない現実そのものだった。

オーロールと名乗った人狼の女。恐らく、彼女に目を付けられた人間は、男だろうが女だろうが逃げられないだろう。美しさの下に、爪と牙を持つ人食い。人間の皮を被っている彼女は、何処からどう見ても、狼には見えなかった。

無人小屋の暗がりの中で古ぼけた布を被り、濡れた身体を丸める彼女の姿は、森に迷い込んだ娘以外の何者でもなかった。

「ゲネシス」

オーロールが口を開いた。背を向けたまま、ゲネシスの姿は見ずに。

「どうしてあなたは逃げないの？」

「どうして逃げなくてはいけないの？」

ゲネシスはぽつりと呟いた。殺気を持つ人狼。人を見れば欺き、皮を被り、やがては狙った者の肉を喰らう魔物。しかし、オーロールは、他の人狼と何処か違った。食べるために人を襲うのではなく、怒りの為に人を襲っているという感覚。それも、目の前に現れたゲネシスよりも、ずっと遠くの何者か。それが誰なのか、どうしてな

のかは分からないけれど、ゲネシスには、オーロールが、自分に直接害を及ぼす魔物には見えなかったのだ。

「どうして？　呆れた。あなた、死にたいの？　私は人狼なのよ？　私の気分次第で、あなたの剣なんか圧し折って、唇を奪うついでに生きたまま喰らいつくことだって容易なことなのに。あなたは恐れないっていうの？」

「オーロールといったね？　私は自分から名乗って人に名を訊ねる人狼なんて初めてだ。普通、人狼っていったら、名前の先に騙すのではないの？」

「そうよ、私は人狼。騙すのが私の専売特許。所詮、あなたに名乗った名前だって、本当の名前なのか分からないじゃない」

月光を避けて、暗闇の中で縮まりながら唸るオーロールを、ゲネシスはじっと見つめた。意地になったかのように自分を怖がらせようとするオーロールの姿が、ゲネシスには何処か可愛く見えた。

「やっぱり君は、他の人狼と違うね、オーロール。君が私を食べるとしたら、もうとっくに襲いかかってきているでしょう？」

「言ったでしょう？　私は騙すのが売りなの。あなたの事だって、段々と信用させておいていつか酷い方法で食べてやるんだから」

オーロールがちらりとゲネシスを睨む。しかし、その目には、人狼にある恐ろしさというものが足りなかった。ゲネシスと出会った時は濃かった憎しみも薄れ、ただ、純粋な獣としての色だけが、その目には宿っていた。

「それは怖いね。覚えておくよ。君なんて信用しない」

ゲネシスは静かに微笑んで、視線を返した。

74. IMPLICITLY

74.

こうなったのはお前のせいなのか、アマリリスはそうツバキに訊かれた時、違うという言葉をはっきりと言えなかった。

だが、この場所で起こっている事を把握してからは、それが自分に出来るはずもないという事がしっかりと分かった。この場所において、アマリリスにとって、理性を崩される程、惹かれる相手はツバキのみ。相手が人狼でない以上、いかなる理由があっても、手を出してはいけないものに手を出そうなどという事をするわけがなかった。

そう、アマリリスには、大いなる空の生き物であるジズに手を出せるはずがないのだ。出すとすれば、ツバキに。ツバキを欲しいからと言って、ジズに手を出すという事も、考えられなかったし、欲求に支配された状態の自分が、そこまで頭が回るなどと思ってはいなかった。

だから、ジズに手を出した人間と、自分は関係ない。

アマリリスはそう思っていた。

ならば、ジズに手を出したという愚かな人間どもは何者なのだろうか。いかに人間とはいえ、手を出していいものといけないものの区別くらいつくはずだ。それが出来なかったのか、本能に逆らってまで倒すような理由があったのか。

「アリス……？」

怪訝そうなディアナの表情を見つめ、アマリリスはふと前を見た。いつの間にか自分は移動していたらしい。そこは、ジズの降り立つ場所だった。人工的でない自然な祭壇。見えない心の神殿。神聖なその場所。空全体を司る大きすぎる存在の居場所。しかし、アマリ

リス達が辿り着いた時、そこにいたのはその供物であるツバキだけだった。

ツバキは泣いていた。

ジズの降り立つその場所に伏せながら、泣いているようだった。彼女が何を見たのか、アマリリスには分からない。それに、アマリリスは、ツバキが自分に話してくれるとは思えなかった。自分はかつてツバキの命を狙った。そんな者を信用するような事があるわけがない。

泣いているツバキの傍へ、駆け寄る者がいた。

――プシュケ……？

プシュケは人狼であるツバキを恐れる事もなく、その傍に座り込むと、そっと肩に手を置いた。ツバキの目がはっと見開かれる。プシュケ、そして、ツバキ。お互いにしか分からない思いが、そこにあるのかもしれない。

「教えて、何があったの？」

プシュケの静かで落ち着いた声が、ツバキの耳をそっと撫でる。ツバキはプシュケの姿をまじまじと見つめ続け、そして、涙を浮かべた。彼女達にしか分からない交流が、行われている。アマリリスには一生かかっても分からない感情が、その場所で交わされている。

ツバキはプシュケの胸で一頻り泣き続けると、やがて、重たい扉を開くかのように、口を介して言葉を綴り始めた。

75. BLASPHEMY

75.

その人間達が来た時、ツバキは違和感を覚えなかった。
ここは様々な者が、様々な因縁に結ばれて、たまたま通りかかる聖地。それが偉大なる空の覇者ジズの地と知れば、どんな生き物も恐れをなし、ジズの怒りに触れぬよう相応な態度を示すもの。その理には、人間も例外でないのだ。ツバキの信じるそれこそが、この世の仕組み。そうとまで思っていた。
――それなのに、この現状はなんだろう。
その人間達が来た時、ツバキは気付かなかった。
気付かずに、忠告しかしなかった。
ツバキが気付かなかったもの、それは何だろう。人前で狼の姿を晒し、這う這うの体で逃げ出さざるを得ないこの状況を作り出したのは、いったい何だろう。それよりも、人間どもの狙いがツバキには分からなかった。狼狩りの者か、はたまた、自分を空の供物と知っての事なのか。
分からなかったから、己の主の場所へと向かってしまった。気付けなかったから、自ら道案内ともなるような行為をしてしまった。
後悔。
自分が空の供物だと知るまで、魔物として生きてきたツバキにとって、この言葉は無縁ともいえる存在だった。後悔するのは人間のみ。今のみならず、過去や未来をも生きようとする人間どもの奢りの言葉とさえ思っていた事があった。
しかし、この状況は何だろう。
後悔。
この言葉が、まさか、自分の頭に浮かんでくる日がくるなんて思

いもしなかった。
「ジズ様……」
人間は三人しかいなかった。だから、ツバキはジズならば、この人間を何とか出来ると信じていた。ジズは大いなる生き物。人間などに手を出せる生き物でないはずなのだ。ならば、自分がここへ導いてしまったこの三人の人間は、何者なのだろう。
人間の一人が剣を抜いた。全てを見透かすかのような真っ青な目。ツバキはこの目が怖かった。怖かったから、逃げてしまった。逃げてしまったせいで、こうなった。
「そんな……」
――ツバキ……。
ジズの言葉が、ツバキの頭の中で響く。
――逃げなさい。
三人の人間を前に、ジズは咆哮した。時をも揺るがすその咆哮は、とても悠々としたもののはずなのに、ツバキにはとても悲しい響きに聞こえた。そんなはずはない、ジズが負けるはずがない、そう思っていても、ツバキにはこれ以上、ジズの姿を見る事が出来なかった。
「ジズ様……」
ジズが再び咆哮する。
「来るがいい、愚かな人間どもめ！」
直後、ツバキの目に映ったのは、人間達の影の向こうで、この様子をじっと窺う別の視線だった。自分によく似た気配。
――あれは……。
よく似ているけれども、何処かが違う。そんな気配。
――人狼？

76. SUSPICTION

76.

ツバキの言葉の端々には、自身の主人たるジズへの敬愛の念がしっかりと籠もっていた。

ツバキがジズに持つ信頼と狂信的なまでの依存を目の当たりにしたプシュケは、その独特な不気味さのみならず、ちょっとした関心を引かれた。

ツバキは空の供物。そして自分は海の供物。

大いなる生き物たちの相違点は、自我と姿と住む場所ぐらいのものであるとされている。彼らは同じ魂を分け合って生まれた命。その体内（なか）には、色は違えども同じ輝きを放つ炎を宿している。

それは、昔、プシュケがごく普通の人間になる前、まだサファイアにも出会っていなかった頃、大いなる生き物たちを祭った神殿で聞かされた伝説だった。――もしもこの話が本当だとしたら。

主人がそういうものなのだから、供物も同じようなものなのかも知れない。いや、きっとそうなのだ。

かつては単なる伝承、伝説に過ぎなかった話が、こうして我が身に降り掛かると、一気に違って見えてくる。

神殿に遊びに行っていた頃に何気なく聞いた話は、もはやプシュケにとって、己の成立を示す書物にも等しかった。

――わたしも……。

プシュケの身を案じ、いつかその命の火を消すであろう存在、リヴァイアサン。

――わたしも、リヴァイアサンを敬愛する日が来るのかしら……？

「それで、ジズはその人間たちと人狼に……？」

アマリリスの問いに、プシュケは我に返った。アマリリスに対す

るツバキの警戒は近くにいるプシュケによく感じ取れるものだった。それもそうだろう。アマリリスは狼狩りの魔女。ツバキにとって、最も信用ならぬ者であるはずなのだから。

「妙だな……」

バステトが呟く。

人狼と人間が関わり合ってジズに手を出した。そんなことが有り得るのだろうか。人間だけでも想像しがたい事態なのに、人間以上に世の理に影響を受ける人狼が、そんなことをするなんて思えなかったのだ。

しかし、ツバキが嘘をつくようなことも同じく考えにくいこと。それに、ジズに起こったことの真偽など、この場を見れば明らかなことだった。それほどまでにこの場は荒らされていたし、今更ジズが何処にいるかを捜す気にもならなかった。

こんな場所、もはや聖地とは言えない。

こんなにも血で穢された場所など、聖地とは言えない。

「私は……どうしたら……」

ツバキの小さな嘆きが、この場を静かに揺るがした。ツバキはジズの祭壇の傍らで座り込んだまま、プシュケの胸から離れ、空虚にしかならないその目で大空を見上げた。その瞬間、ツバキの中で何かが着実に崩壊したのを、プシュケは感じ取っていた。

77. AMULET

77.

ゲネシスがどんなに関心を示さずとも、オーロールはついて来た。彼女の言う事は、どれも人間を惑わすような事ばかりだったため、ゲネシスにとって彼女は悪魔にも等しかったのだが、危害を加えてこない以上、追い払うことぐらいしか出来ない。そして、その事についても、オーロールに一言加えられるのだ。

当てもなく、ただ魔女を捜して放浪するだけの旅に、人狼がついてくる理由は何となく察していた。所詮、魔物同士、世間が言うように人狼と魔女は仲がいいわけではないのかもしれない。しかし、人間に危害を加える者とすれば、どちらも同じようなものだった。

当てのない独り旅。

同行者がいるとはいえ、それは空しいものだ。

「お前は本当に変わった討伐者だ」

暗闇から声をかけてくるのはオーロール。もはや彼女の声を聞いただけで皮肉と分かっていた。ゲネシスは剣を磨ぐ手を止め、ふと空を見上げた。満天の星空がゲネシスを見下ろしている。その懐かしい輝きを放つ星々は、だが、故郷にいた頃のものとだいぶ違うものに見えた。

「気付いているのか？　討伐者になるという意味について」

煌めく星達の包む世界の中で、様々な音が混じり合ってゲネシスの耳に入りこんでくる。けれど、その中で、ゲネシスの頭へと沁み込んでくるのはオーロールの声だけ。オーロールの言葉だけだった。

ゲネシスは星空から目を放し、暗闇の中で光る眼光へと目を向けた。

「君は知っているのかい？」

剣が月光に照らされて光る。もうすでにこの剣は人ならざる血を

多量に浴びているはずなのに、それを隠すかのように美しい輝きを放っていた。オーロールの視線は、その剣に向けられていた。

「その剣……」

低く、確信を持っているかのような声。

「その剣は、いつからお前の手元にある？」

「さあね」

ゲネシスは即答した。答えるつもりもなかったし、答えるために考えるのも面倒だった。ただ、事実として今があるだけ。ゲネシスはそうとだけ理解していた。いつ自分が他の討伐軍の者のようになったとしても、それはそれで構わない。ゲネシスには失うものなんてなかった。

ゲネシスにとって大切なのは、過去と今この時だけ。未来なんて、どうでもよかった。

「剣……」

ゲネシスはオーロールから目をそらし、芝生の上に寝転がった。次の町まではまだまだ距離がある。今日もまた星空を見上げながら眠りに就くことになる。

「剣が、関係しているのかい？」

ゲネシスは寝入る前の意識の中で、オーロールに訊ね返した。

しかし、オーロールは、返答しなかった。

78. COGWHEEL

78.

――これから何処に行くべきか。

ジズの聖域を後にした時から、アマリリスはずっと思考に耽り、プシュケもずっと黙ったまま。ディアナはその状況にうろたえながらも、皆の様子を窺い、口を開く事が出来ずにいた。プシュケは落ち込んでいるように見えた。

結局、ツバキはあの場所を離れようとしなかった。彼女の狂信的なジズへの敬愛が、彼女自身を縛っている。それが供物という事なのだろうか。

――どちらにせよ。

この不気味な状況が、自分達とは無関係なことならば、ディアナは介入したくなかった。自分の中のクーガーの心が、そう言っているのだ。獣としての本能が、ディアナに警告しているのだ。しかし、そうはいかないことをディアナは知っていた。

ジズの領域がどうして侵されたのか。どうしてジズだったのか。それが気になって仕方がない。

大いなる生き物は三体でひとつ。ジズにされたことは、他の生き物にも少なからずの影響を及ぼすものなのだ。一体これからどうなるのか、ディアナは不安だった。

何故ならここにはプシュケがいる。海の供物として生まれてしまった、プシュケ。

ジズを倒したという人間達が何処へ行くのか、ディアナには予想できた。嫌な予想だったけれど、確認しない理由もない。しかし、アマリリス達の様子を見ていると、その事は恐ろしくて言えなかった。

しかし、ディアナのほかにもそわそわしている者はいた。
ランだ。
「ラン、どうしたの？」
バステトの小さな問いに、ランはびくりと身体を震わせる。その様子は、何か言いにくいことを隠しているようにしか見えなかった。ランは皆の表情を窺うと、恐る恐る口を開いた。
「あの……」
ランの声には戸惑いもあった。その近くには小鳥が数羽、小さく鳴いている。その声が、ディアナの耳に入りこんだ瞬間、ランが何を言いたいのかがはっきりとした。小鳥たちがランに訴えているのだ。その言葉が、今のディアナにはよく分かる。
その小鳥たちが何処から来て、何を訴えているのか。力のありそうな者たちを縋り、プライドを捨ててまで希望を託すという状況が、どういうものなのか。
「森で……放っておけない事が……」
小鳥たちの悲鳴にも似た声が、ランの言葉を後押しする。
「この子たちの守っている領域が、大変なの……」
ランの言葉に、プシュケがはっと顔を上げた。彼女にも予想できたのだろう。やはり、ディアナの予想していた通りの事が、起きていた。
ジズは三位一体のもの。ジズのされたことは、他の二柱にされたことと同じ。
アマリリスは見越していたかのようにランを見つめると、極々小さな声で、呟いた。
「森ね……」

79. AGREEMENT

79.

ランが前にベヒモスに出会った森に辿り着いた。
だが、ここに祭壇があるとも限らない。ベヒモスは移動していたからだ。混乱しているらしい小鳥たちは当てにならないし、もしもベヒモスの祭壇がこの森でなければ、ラン達にはどうしようもない。
だが、ラン自身、ベヒモスにはもう一度会いたかった。彼女のおかげで狂ったサファイアをおとなしくさせることが出来たのだ。彼女に出会わなかったら、今頃こうして呼吸する事さえ出来なかったかもしれない。だから、ベヒモスに危機が迫っているというのなら、助けたかった。
森に入った途端、ふとサファイアが立ち止まった。
「ここでベヒモスに会った……」
確認するような呟きに、ランは小さく頷いた。
「うん、前にサファイアにあげた花、ベヒモスに貰ったの……」
「これのこと……？」
サファイアが差し出した花を見て、ランは驚いた。あれからもうどのくらい経っただろうか。前に確認した時、惨めな枯れ姿をみせてから、サファイアの手に渡ったあの枯花。しかし、サファイアの差し出した花は不気味なほど綺麗な姿を見せたのだ。
「これ、枯れたはずだったのに、いつの間にかこうなっていたの。確かに生きているらしい花なのに、枯れる様子もないの。復活してからはまるで時を止めてしまっているかのよう」
サファイアは花を胸に抱き、小さな声で呟いた。
「きっと私が落ちついていられるのも、この花のおかげね」
その様子からは、ちっとも彼女が人食いであるようには見えなかった。そう、この様子を作りだしてくれたのがベヒモス。ランは小

鳥たちを見上げて、一人呟いた。
——捜さなきゃ……。
「この森にベヒモスの祭壇があるかも知れないってこと？」
サファイアの問いに、ランはおずおずと頷く。確かではないのだ。小鳥たちの言葉は不確かで、しっかりと伝わってこない。小鳥たちが混乱しているからなのか、それとも、他の理由があるからなのか。しかし、ランの不明瞭な答えにも、サファイアは納得したようだった。
「そう、それなら分かったわ」
サファイアはしばし俯くと、アマリリスの方を向いて口を開いた。
「あなた、前に言ったわよね。私がプシュケを食べること、そんな勿体無い事は許さないって。でもこれだけは覚えていて。私はプシュケを諦めたわけじゃないの。ただ大いなる生き物に邪魔されたとなれば、私なんか手を出せるわけがないでしょう？」
「何が言いたいの？」
アマリリスの静かな問いに、サファイアは瞼を閉じた。白い花はその腕の中にある。けれど、その落ちついた心で考えている事は、とても穏やかでないことに違いなかった。
サファイアは小さく笑み、告げた。
「ベヒモスの祭壇に似た場所を知ってる。けれど、私にとって、三位一体の獣がどうなろうと知ったことじゃないの。何者か知らないけれど、その人間達が早い事リヴァイアサンを倒してくれればいいのにって思うくらいよ」
「で、でも……」
ランが恐る恐る口を挟んだ。
「でも、ベヒモスのおかげでサファイアは……」
「勿論、それには感謝しているわ」
サファイアの声は低く、静かなものだった。
「だから、アマリリスに約束してほしいの。そしたら、すぐに案内してあげる」

「何……？」
「私の邪魔をしないで。プシュケは私のもの。私だけのもの。邪魔するのなら、祭壇の場所なんて教えない」
サファイアの要求を聞きながら、アマリリスは澄ました表情のまま、じっとサファイアの姿を見つめていた。何の感情も読み取れない表情。アマリリスはそのまま、サファイアに一言返答した。
「そう」

80. ALTAR

80.

サファイアの案内した場所は、誰も覚えられなさそうなくらい入り組んだ所だった。サファイアがその場所を覚えていた事に呆れるほど、曲がりくねった道や道なき道を進む羽目になった。

サファイアの持ちかけた取引に、アマリリスはきちんと応じていない。けれど、サファイアはそれを承諾と取るといい、案内したのだ。プシュケにとっては、気が気でない事態だった。アマリリスが止めてくれるからこそ、サファイアの近くにいても気が済むという話なのに、もしもアマリリスが本当に承諾してしまっていたら、自分は何処へ行けばいいのだろう。

暗い想いが、プシュケを包んでいた。

「ここよ」

サファイアが最後の茂みを潜った。それに続くと、プシュケは奇妙な感覚に見舞われた。ジズのいた場所でも感じたものだったかもしれない。ともかく、初めてではなく、一度か二度経験した感覚だった。言葉ではとても表せない懐かしさと、魂を揺さぶるような音と匂い。それだけならば、この場所は好ましい場所に違いなかったのに、今、この場は違った。

《恐怖》と《嘆き》。

踏み込んではいけない者たちが、この場所を穢していた。ランについて来た小鳥たちが、一層けたたましく鳴き叫ぶ。プシュケには彼らの言葉はちっとも伝わってこないけれど、何を言わんとしているかだけは分かっていた。

彼らは嘆いている。この場所にかつていた偉大な存在を失ったことを。

「やっぱり、ツバキの言ってた人間達の仕業……？」
「お前達は、悪い奴ら？」
ディアナが呟いた時、突如、上から声がした。慌てて見上げても、そこには誰もいない。木々が空を覆っている以外は、何もない。
「答えて。悪い奴らなの？　違うの？」
それは、まだ幼い少女の声。まるで木が喋っているようにも感じた。だが、その声は、確かにそこにいる声だった。幻ではない。誰かが木の上にいる。バステトが木の一点を見つめ、窺うように声をかけた。
「お前こそ、誰だ？　怪しい奴には答えなくないんだけどね」
挑発するような口調だったが、木の上の声は特に気にする様子もなく、返答してきた。
「それは悪かったわね。あたしはここの住人。ここはベヒモス様の場所でもあって、あたしの場所でもあるの。だから、聞く権利はあたしにあるってわけなの」
その返答だけで、彼女が何者かが分かった。偽物ではないという事も、プシュケになら分かった。むしろ、そう言ってくれてやっと納得出来るような、そんな雰囲気を声の主は醸し出していた。
バステトは苦く笑い、さらに声に返答した。
「まあ、ここに踏み込んだ時点で十分怪しいだろうが、別にここを荒しに来たわけじゃない。私はバステト。他は、ディアナ、プシュケ、サファイア、ラン、そして、アマリリスだ。嫌な予感がしたからこちらの様子を見に来ただけさ」
「ベヒモス様にはお世話になったの……」
ランが力のない声で、付け加えた。
「嫌な予感……？」
木の上の声は少し窺うような口調でそう言うと、溜め息をついた。
「じゃあ、あなた達、あいつらとは関係ないのね」
「あいつらって？」

バステトの問いに答えずに、声の主はさらに言った。
「その嫌な予感について訊きたいわ」
「あいつらって誰だよ？」
「いいから、その嫌な予感について話しなさいよ」
バステトはやや翻弄されてしまった。飽く迄も自分のペースで話さなければ気が済まないらしい。呆れて返す言葉も出ないでいると、突如、アマリリスが口を開いた。
「話すわ。だから、姿を見せて頂戴」
「え？」
「姿を見せないと、話さないわ」
アマリリスの言葉の後、しばしの沈黙が過ぎ、やがて、木々が揺れた。枝と枝の間から木の葉を揺らしながら飛び降りてきたのは、ランとプシュケの間ぐらいの歳の、左右に対称的な色の目を持つ、少女だった。

81. COMPANION

81.

ゲネシスの目の前に、一人の少年が倒れていた。

別に行き倒れを初めて見たわけではない。こういう時、世話が出来るのは、自分に余裕のある強者だけだ。そして、その強者というのは、たいてい、付近に住む村人や町人達の事だ。しかし、彼らだって常に豊かな生活を営んでいるわけではない。《恐怖》に支配されるこのご時世、行き倒れた者が善意に固められた村人や町人に助けられるというのは奇跡でしかないという話を聞いたことがある。

ゲネシスも何度か、経験している。

猛獣に襲われて傷を負った時、或いは、行き倒れている者を発見したものの、ゲネシスにはどうしようも出来なかった時、人狼をはじめとした魔物が跋扈するこの大陸で、それらを疑いなく助けてくれる村や町なんて殆どないのだ。助けてくれる者がいたとしても、今度はその者が白い目で見られてしまう事がある。何故なら、村人や町人にとって、余所者は、人間であるという証明のない得体の知れない者だからだ。

それでも、疑い深い彼らが動いてくれる時がある。

金、或いは、その地方で手に入りにくい物だ。特に、町では金、村では物が大きな権力を握っている。それさえあれば、ゲネシスには直接的に支援できない者も、間接的に助けてやることだってできるのだ。しかし、それは、そのものを十分に所持している時に限ること。

ゲネシスにとって、その時は、タイミングのよくない時だった。

「行き倒れに構うのかい？　構ったところで命が数分延びるだけだろう？　心配しなくても、そいつが死んでも無駄にはならない。わ

たしの食料になるだけなんだから」
そう言ったのは、相変わらず付きまとってくるオーロールだった。
彼女が付かず離れずゲネシスの近くに潜み、度々声をかけてくる。
その言動はまるで、ゲネシスに付きまとう悪意と識別される心のようだった。
ゲネシスは膝を折り、その少年の傍に座り込んだ。まだ呼吸はしっかりとしている。今、助ける事が出来れば、もしかしたら。
「本当は見捨てたいんでしょう？　わたしの前だからいい子ぶっているんじゃないの？　これだから人間ってくだらないわ」
オーロールが言えば言う程、ゲネシスの中で迷いが晴れた。
「少し待ってろ。探してくる」
そう言って、剣で仕留められる食料と、水を探して森へと進んだ。
それは、ゲネシスが兼ねて持っていた人間としての善意だった。
行く手を阻む盗賊や、自分に危害を加えようとする者を斬る時には何も感じていない死という概念が、少年を見つめた瞬間に、突然恐ろしいものに思えてきたのだ。
だから、この時のゲネシスは、まさかこの弱々しい少年ラジカが、この殺戮の道の同行人になるなんて、思いもしなかった。

82. PIOUS

82.

「あたしに名前はないの。ただ、ニュンペーって呼ばれているだけ」
アマリリス達の前にて、その少女は言った。左右違う色の目が光っていた。
――ニュンペー……。
それは、精霊の総称。永遠の処女と呼ばれ、森に隠れ住む、ヒトとは決して交われぬ者。
本来、ニュンペーにも名前はある。そう、プシュケもニュンペーに近しい者。ニュンペーを従えし者は、多大な力を得られる。そういった噂さえもあった。
そして、この娘は、かなり高位の存在だった。
「ベヒモスは、あなたのことをニュンペーと呼んでいたの？」
プシュケの問いに、ニュンペーの娘は頷く。じっとプシュケを見つめ、円らな瞳でじっと伺う。
「あなたもニュンペーなの……？」
娘の問いに、プシュケは首を横に振る。
「ニュンペーではないの。でも……それに近い者ではあるわ」
プシュケの言葉に、ニュンペーの娘は意外そうな顔をした。が、すぐに表情を戻し、さきほどのプシュケの質問に答えた。
「ベヒモス様は、あたしの事、ニュンペーって呼んでた。ここいらのニュンペーはあたししかいないし、あたしも生まれた時に貰った名前を名乗れないから」
「名前を忘れたの？」
プシュケは柔らかな声で訊ねた。相手に安心感を与えられるのは、プシュケが一番得意なことかもしれない。特に、ツバキの警戒をも解いた供物となれば尚更だ。

ニュンペーの娘は、首を横に大きく振った。
「違うの。名乗ってはいけないの。ニュンペーの決まりよ。ベヒモス様に捧げられてしまえば、もうあたしは過去のあたしではないんだって。ベヒモス様は名乗ってもいいって仰ったわ。でも、あたしをここに連れてきた人達が、それを許してくれないの」
「連れてきた人達？」
「ええ」
ニュンペーの娘の目は鋭く光っていた。頑なな心が目に宿っている。押さえつけられているわけでも、そういう封印を施されているわけでもなく、自らの信じて守っているということであることが、よく分かった。
この娘にそれだけの影響をもたらした、供物をささげた人達。プシュケにとって気になる存在だった。
「それは、誰なの？」
ニュンペーの娘は一瞬返答に困ったようだった。しかし、これについてはタブーではなかったようだ。恐る恐るではあるが、彼女は答えてくれた。
「ベヒモス様の血を引き、ベヒモス様を祭る村の人たちよ……」
とても小さな声だった。
プシュケは不思議に思った。ベヒモスを祭る村があるというのなら、おかしくはないだろう。ジズを祭る村や、リヴァイアサンを祭る村、その三体全てを祭る村というのは、普通にあり得るからだ。しかし、プシュケが引っかかったのは、「その血を引く」と名乗っている所だった。
「そんな村があるの？」
ニュンペーの娘は答えない。
ただじっと下を向いているだけだった。
「教えて、何処にあるの？　ジズやリヴァイアサンの血を引く人達も、何処かにいるっていう事なの？」
ニュンペーの娘は困り果てた目をして、プシュケを見上げた。そ

の目を見つめ、プシュケはさらに出かかっていた質しの言葉をいったん飲み込んだ。

ニュンペーの娘は申し訳なさそうな顔をして、首を横に振った。

「教えられないの。教えてはいけない決まりなの。でも、あなた、大いなる海の御仁にやがて仕える者なのでしょう？　その御子孫に会ったことはないというの？」

「ない。だから、こうして、問い質しているんじゃない……」

「そう……」

ニュンペーの娘は俯き、視点を変えた。それは、穢された祠に向いていた。もとの岩肌をまだらに彩る錆ついた色は、まだ新しいのか鮮やかなものだった。

「ベヒモス様があたしを守ってくれた。あたしはここでベヒモス様を待つことしかできないの。だから、今も待ってる。ベヒモス様のあの大きな魂が、消えてしまうはずないもの。肉体は滅んでも、ベヒモス様そのものが滅んでしまうはずがないもの」

「何があったの？」

ランが口を挟んだ。ニュンペーの娘は、それに静かに答えた。

「狩り」

振り返る色の違う双眸は、どちらも同じ色に染まっていた。真っ暗な、絶望の色。

「力を持て余した怪物の、狩りよ」

83. SLAUGHTER

83.

狩り、と彼女は言った。

その状況は、魔物退治の場と変わらぬ、闘志、殺戮、雄叫びに溢れていたのかもしれない。だが、話を聞くアマリリス達には、ただ嫌な予感ばかりが付きまとった。体中の細胞が、危機を伝えてくる。何かを焦らせるそれらは、しかし、具体的なことをアマリリス達に教えてくれない。

「三人の人間……一匹の狼……」

ニュンペーの娘は、小さく言った。ベヒモスに何があったのか、アマリリスには予想できた。ジズの時と同じ事、何か、不可思議で奇怪であり得ないような災いが、起こっている。そんな気がした。

血で穢れたベヒモスの祭壇には、もうベヒモスは現れない。

「いいえ、ベヒモス様は出かけているの」

ニュンペーの娘は自分の思考を蝕むものを振り払うかのように、そう言い放った。

「ベヒモス様は出かけているのよ……」

かつてベヒモスが座っていただろう場所に、小鳥たちが止まる。ニュンペーの娘と同じくらい、ベヒモスの不在を嘆いているようだった。

アマリリスはニュンペーの娘を見つめ、呟いた。

「そうね、出かけているのね」

ニュンペーの娘はちらりとアマリリスを見上げた。木陰のせいだろうか、その表情はやや暗く感じた。三人の人間と一匹の狼。彼らが何をしたのか、わざわざニュンペーの娘の口を借りてまで問う事でもない。そんな事をしたとしても、今この場にベヒモスがいない

という事実は変わらないのだから。
――狼……。
アマリリスの心を掴むその狼。人間を喰しているのか、人間に喰されているのか。それは一体、どれほど狂った魔物なのだろうか。大いなる生き物を弑す力に加担する魔物。自然の流れというものに抗う魔物。それはもはや、魔物ですらない。
――喰されているにしろ、喰しているにしろ。
アマリリスの眼に、狼の影が映る。
――それは、どんな狼なの……？
「ねえ、あなた達……」
ニュンペーの娘が、ベヒモスの祭壇を見つめたまま、問いかけてきた。
虚ろな眼。この色の違う眼が、アマリリスにとって、一番印象的なものだった。ベヒモスの場所を必死に守る眼。もう帰ってこないかもしれない主を必死に待つ眼。そして、その《嘆き》と《絶望》と必死に戦いながらも、次第に衰弱していっているこの眼。
名前を言えない娘の視線が、アマリリス達に向いた。
「あなた達は、海の御方の場所に行くのでしょう？」
ニュンペーの娘の問いに、プシュケの目が揺らいだ。
「もしもそうなら、お願いしたいの」
答えを待たずに、ニュンペーの娘は続ける。
「もしも何処かでベヒモス様に会ったら。もしもベヒモス様に会えたなら。この聖域はしっかりとお守りしているので安心くださいと、伝えて欲しいの」
ニュンペーの娘の声が、言霊となってその場を舞った。

84. PONDERING

84.

そのニュンペーの娘の姿が見えなくなるまで、プシュケはどうしても彼女の事が気にかかっているようだった。それがどういう事か、バステトには理解できるわけがない。だが、とんでもない事に巻き込まれつつあることだけは誰にでも説明できる程理解していた。

そもそも、人狼のダミーとして殺されるはずだったところをアマリリスに救われたその時から、大変な事態に巻き込まれていると言っても過言ではない。アマリリスが何故自分を助けたのか、何故自分が離れるのをよしとしないのか。それまでアマリリスには理解できない要素しか見いだせずにいたため、あまりその事についても考える機会はなかった。

でも、今度は違う。

大きな勢力が魔女を狩りだし、大いなる生物達は命を消されていくこの世の中。アマリリスが向かっているのは、その渦の中央。渦を生み出している何かだと薄々気付いていた。魔女狩りの者たちも、聖域を侵した者たちも、その渦の外側にすぎない。アマリリスはその荒れ狂う渦から最後の聖域を守りに行くように見せかけて、本当はもっともっと攻撃的な衝動と共に行動を起こそうとしているのではないか。バステトはそう考えていた。

そして、それは少なからず外れてはいないようだ。では、それなら、バステト自身はどうすればいいのだろう。アマリリスから解放されたところで、ただでさえ自分に行き場はないに等しい。得意な盗みで生活を営む事が出来るわけがない。

かといって、余所から越してきてまっとうに暮らせる村なんて、奇跡でもない限り辿り着けるはずもない。ましてや、魔物の溢れ方

が尋常でないこの頃だ。余所者全てを魔物と思う人間がいて、当然だった。事実、これまでの旅で、バステト達も遠巻きに見つめられ、警戒されたことが何度もある。大いなる生き物が二柱も弑された今、その空気は病的なほどに濃厚なものになっているだろう。

プシュケは海の供物。サファイアはそれを認めたくない者。そして、アマリリスは彼らを征した者。自分はただ、偶然、アマリリスに拾われた人間の女。ランのような癒しの力も、サファイアのような狡猾なほどの力も、ディアナのような特異的な能力もない。

ただ身軽で、卑怯な手を使うのが得意なだけの、人間の女だ。

ふと、ニュンペーの娘の言葉が蘇る。もしも、プシュケがリヴァイアサンに出会えば、プシュケもああなってしまうのだろうか。もしも、リヴァイアサンが弑されてしまっていたら、残された供物達はどうなってしまうのだろうか。

――いざという時、自分はプシュケ達を守れるのだろうか。

アマリリスやサファイア、ディアナの足手まといにならずに、ランやプシュケを守る事が、そして、アマリリス達を手助けすることが出来るのだろうか。

バステトの心に、不安がよぎった。

――三人の人間と、一匹の狼……。

ジズ、そしてベヒモスとを倒したのだろう者たち。リヴァイアサンの場所を探すとアマリリスが告げた時、彼らと見えない糸で繋がったような予感がした。嫌な時ほどよく当たる、泥棒の勘だ。

バステトは体中に忍ばせる凶器の重みを感じながら、一息吐いた。

――当たらないでほしいな。

85. MONOTONY

85.

人狼を怖がらない気のおかしい子。

オーロールは、ラジカの事をこう評価していた。何よりも、ひ弱でいずれ食べることになるだろうものとしか思っていなかったというのに、ゲネシスの奇妙な偽善によってこの少年の体力が回復したという事が、オーロールにとって面白い事でもなかった。

――こんな子どもを食べるなんて、こっちから願い下げだな。

ラジカは世間知らずの子どもだった。普通、人間ならば、子どもでさえも人狼を知っているものだ。人狼は怖がる人間達を騙し、命を絞り取るその直前まで《恐怖》の餌食にさせるという行為を楽しむものだ。それなのに、ラジカはオーロールを怖がらない。まるで、ただの大人か、もしくは近所の犬かなにかのように接してきている気がしてならなかった。

もしそんな事を言えば、オーロールの牙が黙っていないものなのだが、かといって、怖がりもしない子どもを喰い殺しても何の楽しみもないし、誇り高いこの牙が錆つくだけだ。オーロールはこのことにうんざりしていた。

しかし、かといって、ゲネシスの傍を離れようと思うまでには至らなかった。

オーロールは初めて、日々の糧以外の視点で人間というものに興味を持ったのだ。剣に守られし若人。《恐怖》に支配されぬ不思議な人間。ゲネシスを見ていると、ふと違う顔が過ぎっていく。ゲネシスに感じる何かを、何処かでも感じたような気がしていた。

「ねえ、オーロール」

馴れ馴れしい声に、オーロールはちらりと目を向けた。目を向け

てやっただけでも感謝して欲しいものだ。ラジカの話しかけてくる事はいつも興味のない事ばかり。オーロールには関係のない事ばかり。だから、目を向けただけで、オーロールの返答は終わっていた。

「あ、待ってよ！」

本来の狼の姿を晒し、オーロールはラジカから離れた。辿り着くのは影の領域。ここなら、人間が、況してや子どもが関わろうとすることなど出来ない。不用意にこの場所から飛び出していたのもよくなかったかもしれない。

「ねえ、オーロール、出てきてよ」

オーロールは答えずに、じっとラジカの後ろに堂々と座る人間を見つめた。無表情、無感情に見えて、その身体の中では、沢山の複雑な情報の伝達を怠らず、誰の干渉も受けずに、綺麗に流している。己の意思で魔女を狩る討伐人。魔女狩りの剣士。

オーロールには興味があった。

その不可思議な目に。その不可思議な身体に。それらを宿している、崇高な魂に。そして、何よりも、冷静の裏にて静かに燃やし続けている、破壊と略奪を渇望する醜き欲求の堪えない怪物の心に。

――次は何処で魔女を狩るの？

オーロールは影の中で一人笑む。

面白いものを見つけた。とてもいい暇潰しを見つけた。この怪物が、自分の仲間を殺していった魔女たちを捕まえ、切り刻む姿を早く見たかった。あらゆる所で魔女に加担し、自身も魔女になりかけている者たちをこの怪物が捉え、全てを奪っていく姿をもっと見たかった。

馴れ馴れしい子どもなんて、いくらでも我慢できる。

こんなに面白い退屈しのぎがあるのならば。

86. SYMPATHIZER

86.

リヴァイアサンのいる場所なんてどうやって知ればいいのだろう。ジズの時も、ベヒモスの時も、ただ運命とでも言うべき名の鎖に引き寄せられただけの話。自ら近づこうとしても、まず、偶然では辿り着ける場所でもない。それは、アマリリスにとっての狼狩りと同じ事でもあった。捜そうとして見つけだしているわけではなく、見つけたから捜し出しているに過ぎない。アマリリスのその万能な千里眼にも似た感覚は、実際のところ万能なはずもなく、人狼以外のものとあっては悲しい程役に立たないものだった。

確かに、ジズの時の変化は嗅ぎとれた。

――しかし、それは、ジズの場所だけの話……。

アマリリスはジズを知っている。ジズのいる場所も、そして、ジズの持っているモノがアマリリスにとっては相当羨ましいものだったということも、覚えている。例えるならば、アマリリスにとってのツバキは、サファイアにとってのプシュケにも似ていた。どんなに欲しくても、どんなに手に入れたくても、大きな外壁がそれを妨げている。

――極上の人狼を手に入れている者。

ある意味、アマリリスにとって、ジズは特別な存在だった。ならば、リヴァイアサンは？　プシュケは？　残念なことに、アマリリスには、ベヒモスの場所が案内されるまで悟れなかったように、リヴァイアサンの場所もちっともぴんとこなかった。リヴァイアサンは何処にいるのか。声しか聞いた事のない相手を、どうやって捜すのか。

確かにここにはリヴァイアサンに捧げるべき供物はある。しかし、

プシュケはリヴァイアサンの場所など分からないという。恐怖から言っているのではなく、本心であることをアマリリスはきちんと見抜いていた。もしくは、《恐怖》が彼女の本能を刺激しているのか。どちらにしても、プシュケではどうしようもない。となれば、ここで役に立てそうな者は誰だろう？

「あのニュンペー……」

不意にサファイアが口を開いた。白い花を身につけているはずの彼女の目は、アマリリスを一瞬ぞっとさせるほど荒々しく光っていた。

「大いなる生き物たちの子孫がいると言っていたわね……」

その声は不穏なものだった。何を考えているにせよ、それはあまり好ましい事態でない印。とはいえ、サファイアの考えそうなことは、アマリリスの頭を何度も過ぎることである場合も多い。大いなる生き物たちの子孫。それが、何処にいるのか、何処で暮らしているのか、そして、それぞれの生き物との関係はどういうものなのか。

「リヴァイアサンの子孫……ね……」

アマリリスの言葉に、サファイアはそっと呟いた。

「そいつらの場所さえ分かれば、私……――」

何を言わんとしているのか、アマリリスには理解出来た。

87. ELITISM

87.

広い大陸の一つや二つくらい、ある種、閉鎖的な意識を持つ村があってもおかしくはない。

特に、ジズ、ベヒモス、リヴァイアサンなどの聖地の付近では、そういう意識を持ちながら排他的な独自の文化を築く村というものも隠されているものだ。

もう随分前、サファイアの元に冒険家の男が残した言葉だった。

――世界は自分が思っているよりも狭く、自分が信じているよりも果てしないものでした。

リヴァイアサンの子孫を名乗る者たちの村が、リヴァイアサンの聖地に最も近い場所にあるだろうことはよく分かっていた。ただし、その噂がどのくらいあるのか、そのうちのどれだけが単なる狂信に過ぎないのか、辿りつけたとして、プシュケを目の前にした彼らがどう動くのか、サファイアの意識を揺るがす要素は限りなく多かった。

アマリリスに言いかけたこと、そして、アマリリスが悟ったことは、実現することかもしれない。懐に仕舞う白い花が、一体いつまでその効力を残すのだろうか。

サファイアの胸の内が、燃えるように熱くなった。

アマリリスによれば、自分が放浪してきた中に、リヴァイアサンに関わるような雰囲気の場所は全くなかったという。むしろ、大いなる三つの生き物を否定するかのような信仰ばかりが渦巻いており、そんな場所の近くでリヴァイアサンが身体を休めるとも思えない、という事だった。

――海の綺麗な場所。

考えるのならば、そういう場所だ。今までだってそうだった。限りなく空に近い場所に居たらしいジズ。大陸のうちでもっとも深い森を広げる場所に居たベヒモス。彼らと繋がりのある生き物ならば、同じように特別な海の場所を気にいるのではないだろうか。

――特別な海……。

生憎、サファイアには海の事など分からなかった。海なんて、一生に一度行くかもしれない程度にしか考えたことがない。ただ、プシュケの事があってから、気になり始めたに過ぎない場所だった。特別な海の場所……。

「海神騙りの民草……」

ふと、サファイアの頭を過ぎる言葉があった。

己の信仰を深めるために旅をしているというある国の若者がぼそりと落とした言葉だった。彼の語る世界は、前に来た冒険家名乗りの者とは大きく異なり、大いなる生き物たちを崇める者たちを、まるで悪鬼か何かを崇めている罪深い狂信者かのように語っていた。その裏側には、彼自身の崇める神への愛の強さが感じ取れたのだが、あまりのギャップにサファイアは内心驚いたものだった。

そんな彼が呟いたのだ。

――海神……？

彼は何処でそれを感じたのだろうか。とても綺麗な海だったと彼は言っていた記憶もある。だが、それは一体、何処だっただろう？

88. COLLAPSE

88.

大きな町に行けば様々な人が集まる。つまり、様々な話を聞けるはずだ。

それは分かっている。分かっているのだが、アマリリス達にはそれを期待できない理由がいくつもあった。一つは行く先々に漂う人狼の気配。そして一つは行く先々に漂う魔女狩りの討伐隊の気配。自ら危険に飛び込んでいくしか道はないと言え、行く先、行く先ですでに滅んだ町や村、もしくは待ち伏せしていた討伐隊の者たち、もしくは人狼以外の魔物達しか迎えてくれないとなると、さすがに気力を失う。

旅の疲れを癒せず、それどころか戦いに巻き込まれる。特に、元々体力のないプシュケやランには辛いものだった。結局、確実にひと休み出来る所と言えば、人里離れた森の中ばかりだった。人を住まわせる機能を失った廃町廃村、よりも、鬱蒼と茂る森の中の方がずっと安全だった。

しかし、森の中に居ても、リヴァイアサンの事、そして、リヴァイアサンの子孫の事に関しての情報は得られない。途方に暮れるのも無理のない事だった。

アマリリスの苛立ちは頂点に達していた。既に形なきものになった人体ですら、アマリリスにとっては邪魔なものとなっていた。そのため、魔力が尽きるまでそれを解放してしまってもいいという具合に、亡骸を傷つけ続けていたのだ。

他の者たちも、もはやそれを見ないという事でしか自分を守れないまでに疲労していた。

食物を摂り、寝るだけではない。この先行くべき場所が見つかる

という事が、今の彼らには一番の栄養だった。アマリリスはふと、攻撃を止めた。やっとそれが死んでいる事に気付いたからだ。

「人を殺しても、何も面白くない」

アマリリスの心を掴んでいるのは人狼だけ。人を喰らう人狼を命の端々まで喰らう事だけが、アマリリスの深く黒い欲を満たしてくれる。

――最近、人狼に出会っていない……。

血だまりの中で佇むアマリリスの目に、うっすらと影が映り込んだ。

「アリス……」

呼びかける声に、影がすっと消える。

「これから……どうするの？」

ディアナの声だった。彼女の姿は黒いクーガーのまま。変身を解く気力さえも、ないというのだろうか。アマリリスとは目をあわさず、下を向いたまま座り込んでいる。真っ黒な毛並みに、べっとりとつく血糊。黒に赤という色合いでも、それははっきりと確認できた。

アマリリスはじっと他の者たちの顔も見た。皆、疲れているようだった。町よりも魔物が多い。村よりも討伐隊が多い。少し前ならば想像出来なかった乱れが、明らかに蔓延していた。

――これは、どうしてだろう？

討伐隊が現れ、ジズが消え、ベヒモスが消えた。その結果なのだろうか。それとも、もっと違う何かがもたらしたものなのだろうか。どちらにせよ、これ以上この状況が続く事が、どれほど恐ろしい事か、今のアマリリスには理解出来た。

「少し動きましょう。ここでは休むことも出来ない」

呼びかける声には、冷静さが戻ってきていた。

89．ELVES

89．

オーロールやラジカが共に行動するようになってから、何故か、ぱったりと魔女についての噂が入らなくなった。それまでゲネシスの元には、聞こうとしなくても勝手に耳に入り込んでくるかのように魔女の噂が絶えなかったものだった。

しかし、今や魔女の存在など忘れるほど、魔女についての噂を耳にしなくなっていた。

「魔女を討伐するだの大層なことを言っていても所詮人間。本物の魔女がそう易々と見つかるわけがない」

オーロールはそんな事を言った。つまりそれは、今までゲネシスが手にかけてきた魔女たちが、実は魔女でもなんでもないただの人間に過ぎないという事だろうか。いや、しかし、それでもゲネシスは、彼女達を殺さざるを得なかった。ゲネシスは、町の者たち複数に密告された者、そして、本人すらも自称する者だけを殺してきたのだから。

「何と言おうと、わたしは魔女を見つけ次第殺さなくてはいけない者さ」

影に潜むオーロールに向かって、ゲネシスは呟いた。ラジカはすっかり更けこんだ夜に吸い込まれるかのように眠っている。火を焚くその影からゆらりと見える人狼の影が、こちらを振り返った。オーロールはしばし黙ったのち、失笑するかのように息を吐き、捨てるように言った。

「別に殺すなと言ってんじゃない。魔女が減るのは私達にとっても嬉しい事だからね」

魔女討伐を目的に剣士として育てられていた頃、ゲネシスは常に魔女と魔物は親しい関係にある者として教えられてきた。特に、卑

劣な手で村や、時には町すらも滅ぼす人狼は、魔女が呼び寄せるものだというのが国で蔓延する通常の考え方となっていた。しかし、オーロールの様子を見ていると、どうやらそうでもないらしい事が分かる。オーロールは魔女を嫌っていた。

「その剣……」

オーロールの目が、こちらを見ていた。

「いつから手元にある？」

前にも訊ねられた質問だった。ゲネシスは俯く。常に持ち歩いているこの剣。片時もその身から離したことはない。剣士として育てられる前から、そして、剣士として育てられている間も、常にこの剣はゲネシスの傍にいた。

しかし、ゲネシスはその質問に答える事が出来なかった。

「知らない」

影の中で光るオーロールの目を見つめ、ゲネシスは小さく笑む。

「覚えていないんだ」

ごく小さな沈黙が、オーロールとゲネシスの間を通っていく。オーロールの目線は、ゲネシスよりもずっと剣に向いていた。前から、彼女は剣を気にしていたが、その理由は言わない。そして、今日も、言う事はなさそうだった。

「そう、か。ならいいわ。それよりも……」

と、オーロールは正面を見つめた。ゲネシスもはっとそれに気付く。何者かがすぐ近くにいる。獣ではない。魔物でもない。この気配は、人間のような気がした。それも、一人ではない。

「出てきたらどう？　そんな痩せ細った硬そうな肉など、さっき喰った猪肉にも劣る」

オーロールの声に反応してか、かさりと茂みが動いた。しかし、出てくるまでに気持ちは動かなかったらしく、その後の様子を見るかのように動かなくなってしまった。

「言っただろう？　お前らは喰いたくない。人間ならまだしも、お前らのような輩はまずいからね」

人間ならまだしも。ゲネシスは少し動揺した。この気配は魔物とは思えない。しかし、オーロールはそう言った。では、そこにいるのは一体何者なのだろう。

がさり、と茂みが大きく動いた。葉が大きく揺れて、散って、二人の人間らしきものが現れる。これが人間でなく、何だというのだろうか。しかし、人間だとしても、弱々しい双子の少女がその場所にいる事自体、不自然な事ではあった。

「あなた、人狼でしょう？　どうして人間と一緒にいるの？」

少女の一人。赤みがかった髪の長い少女が、オーロールに恐る恐る訊ねた。もう一人の赤みがかった巻き毛の少女は、じっとゲネシスとラジカを見ていた。

「変ね、あなた達。でも、どうでもいいわ。それよりもあなた達、食べるもの、持ってない？」

巻き毛の少女がゲネシスを見つめて言った。その目は信じられないほど深い色をしていて、何色と表現することも出来ないくらい混じり合っていた。

二人の少女はオーロールが言った通り、痩せ細っていて、そして、何処か人間離れした印象のある者たちだった。

90. FINGERPOST

90.

来るな。そう言われている気がした。プシュケの中で、もしくは、外で。早く来い。そう言われている気もした。プシュケは身震いした。二つの声が、それぞれプシュケに呼び掛けている。

――来てはいけない。

――助けてほしい。

この二つの呼び声が、プシュケの感覚を一方向に結び付ける。サファイアはそれを悟っている。プシュケの細やかな反応を見切り、何処に進むべきなのかを心得ている。少なくとも、プシュケはそう感じていた。

別方向に進もうとするアマリリス達を、さり気なく誘導するときも、或いは、勝手に先に進むときも、その直前には必ず、プシュケの様子を見ていた。

プシュケに訊ねてくるわけでも、確認するわけでもなしに、その方向は常に正しかった。

――早く来い。

――来るな。

声は段々強くなる。正しい。この先に行くのが正しいという事だ。では、呼んでいるのは誰だろう。拒んでいるのは誰だろう。どちらかがリヴァイアサンであることは確かだった。己が供物であるプシュケを待っている偉大な海の生き物。リヴァイアサンの声は、プシュケを呼んでいるのだろうか。では、拒んでいるのは誰なのだろう。

「こっち」

サファイアがプシュケの様子を見ながらアマリリス達を誘導して暫く、段々と不審感を増していったディアナが、ついに歯向かい始

めた。
「一人で先走らないでよ」
歯向かったのはディアナだけだった。元から読めないところのあるアマリリスはともかく、バステトも、ランも、不審に思いながらも特に異論を唱えず、黙ってサファイアについて行こうとしていた。ディアナだけが、進むごとに露骨に警戒を強めていた。獣としての本能が、彼女を苛立たせているのだろうか。変身してもいないのに、サファイアに不快を示す彼女はまるで、恐怖におびえて牙を剥くクーガーそのものだった。
「何があるっていうの？　そっちにリヴァイアサンにまつわるものがあるの？　お願いだから説明して。何があるかだけでも説明してよ」
「それは出来ないわ」
サファイアはゆっくりと、冷静に、微笑みを浮かべながら答えた。ディアナの感情を逆なでするかのような冷笑に、プシュケの方が緊張した。ディアナの猛禽のような目に反感が浮かぶ前に、サファイアは蒼い目をプシュケに向けて、抑揚のない声で続けた。
「だって私は、この子の反応を読んでいるだけだもの」
いきなり注目を自分の方に逸らされて、プシュケは動揺した。サファイアの事だから、いつか丸投げしてくるだろうと思ったけれど、まだ心の準備が出来ていない。興奮したディアナに問い詰められることは目に見えていた。
しかし、ディアナの目は、プシュケを捉えた瞬間、落ち着きを取り戻した。代わりに、怒りのような強い陽の感情ではなく、恐れのような強い陰の感情が醸し出されてきた。
「勘が鋭いだけあるわ。わたしよりもあなたの方がプシュケの感じているものを読み取ることが出来るでしょうね」
サファイアはそう言って、アマリリス達を見やった。アマリリスはじっと黙ってサファイア達のやりとりと観察していた。他の二人は、寧ろ、どうしていいか分からないといった様子だったが、アマ

リリスだけは明らかに違った。じっとサファイアの蒼い目を見つめた後、やがて、彼女の口が開いた。

「ディアナ」

淡々としているが、威圧的な声だった。

「落ちついた？」

ディアナはアマリリスを振り返り、何かを訴えようとした。けれど、威圧的なその存在に、何も言えないまま俯き、そのままゆっくりと頷いた。もしくは、何を言おうとしていたのか、ディアナ本人にすらも分からなかったのかもしれない。ともかく、アマリリスの一言で、ディアナはおとなしくなってしまった。

「落ちついたようなら行きましょう」

アマリリスの冷静な声が、プシュケとサファイアに向いた。

91. SCREAM

91.

呼んでいる声は強まり、拒んでいる声は弱まってきた。

むしろ、呼ばれている感覚しかないといってもいいかもしれない。プシュケを遠ざけようとしていた何者かは、衰弱しているようでもあった。弱々しく、果敢無げで、もはや先はないと思う程、絶望的な声。

プシュケはじっと耳を澄ましながらも、そちらに行くことに対する躊躇いも大きかった。拒んでいる声が恋しい。そちらが勝ってくれればよかったのに。無意識にそう思っていることに気づき始めていた。けれど、サファイアの足取りは容赦なかった。サファイアがどうしてそうするのか、プシュケは理解しようとも思わなかったけれど、確かなのは、サファイアのせいで嫌な思いが強くなっていくこと。純粋に敬愛していた時の感覚なんて、ほとんどもうなかった。残っているのは、裏切られた瞬間から今も確かに存在する傷跡と、恐れに支配される感覚。

だから、プシュケには、サファイアのすることに対して抵抗が出来なかった。

アマリリスはこの事態をどう思っているのだろう。彼女とて、サファイアに任せっぱなしというのは癪なはずだ。しかし、自分に何一つ期待できる要素などないということをプシュケは知っていた。アマリリスは魔女。本物の魔女なのだ。魔女は人間ではない。根本的に人間ではない。それは、善か悪かといった単純な話ではなく、価値観そのもののずれ。アマリリスがプシュケを守ってくれる可能性なんて、期待できるものでもなかった。

同情を期待できるとすれば、ディアナとバステト、ランがいる。

けれど、同情だけではどうしようもない。サファイアに勝てる相手がアマリリスしかいないというのは、プシュケにとってなかなか不穏なものだった。

当のアマリリスは、サファイアの導きに対して反感も、苛立ちも、驚きも、期待も向けていなかった。ただ、注意深くサファイアの宝石のような目を見つめ、言葉に従うだけ。簡単に返事をする時もあれば、ただ黙ってサファイアの行く道に進むだけ。時折、襲ってくる危機感に震えるディアナを、主よろしく嗜めるくらいで、サファイアに対しては何も言わない。

プシュケは不安だった。このまま進んでいくサファイアは、何を思っているのだろうか。アマリリスは何を思いながらついて行っているのだろうか。

進んでも進んでも、声の導きは終わらない。けれど、進めば進むほど、確実にその場所へ近づいていることは、プシュケにはよく分かった。

もうすぐ、広大な海とその産み落とした命から生まれた者たちが、プシュケ達を迎えるはずだ。彼らはプシュケを見て、プシュケをどうするのだろう。サファイアは彼らに出会って、彼らをどうするのだろう。これから先に起こるだろう混沌に、プシュケはもう混乱させられていた。

どうしたら、この不安と混乱などの雑然としたものを、解消できるのだろう。

その問いに答えられる物は、プシュケの中にはいなかった。

92. RETURN

92.

プシュケがおとなしくなった。

その身体の中は、少し前までは確かにあった畏怖も、恐怖も、躊躇いも、戸惑いも、すべて消え去って、別の感情に支配されている。

サファイアは深く息を吐いた。

そろそろ、というわけだ。ここから先、自分が魔と呼ばれるにも関わらず、人間から人間でしかない存在として生まれたことを呪うような未来や宿命が待っているだろう。すぐ近くにいて、とても遠くにいる愛しいものを手に入れたいが為に、命を賭けるという覚悟。

――おかしいな。

サファイアは静かに笑んだ。

どうして自分は、ここまで決意を固めているのだろう。どうして自分は、ここまでこの娘に固執するのだろう。初めてあった時も、標的と定めた時も、ただの娘にしか映らなかった。快楽目的で、すぐに消し去ってしまっても痛くない相手でしかなかった。そこまで固執するような相手でもなかったはずだった。それなのに、どうしてここまでして欲しいのだろう。

面倒な獲物なんて放って、手に入れやすい方に乗り換えればいいのに。

――どうしてなのかしら。

「そろそろね」

アマリリスが小さな声で呟いた。すぐ傍にいるサファイアですら聞き洩らしそうな程の声。他の者に聞こえたかは分からなかったが、サファイアはそっと頷いて見せた。アマリリスはサファイアには目を向けなかったものの、その頷きを確認したように、険しい表情を

見せた。
「空間がざわついている。さほど遠くない場所で、あたし達を警戒している者たちがいる」
木々の向こう、何があるか分からない場所へと、アマリリスは目を向けていた。
「あちらから、来るか、あたし達が、行くか」
「来るんなら、来るまで放っておくのもいいんじゃない？」
サファイアは同じく小さな声で答えた。確かに居る。近づいて来ている。プシュケに気付いたのか、ただ侵入者として認識しているのか、それは分からないけれども、こちらに段々と近づいて来ている。
「アリス……」
少し離れた所にいたディアナが、不安げにアマリリスを見た。彼女も気付いているようだ。彼女の中のクーガーが、危機を感じているらしい。アマリリスが彼女に対してどういう表情を送ったのかはサファイアには見えなかったが、それでも、ディアナの不安は消えずに残っていることだけは分かった。
「来た……」
その瞬間、プシュケが歩み出した。近づいてくる足音に向かって、プシュケはゆっくりと歩き出した。誰も、それを追えなかった。追っていいものかどうか、判断に困った。やがて、迷っているうちに、足音の持ち主たちは姿を見せた。
すべて、海の者の血を引くことを証明するヒレのある亜人たちばかりだった。
彼らはプシュケを見るなり表情を変えた。そして、一言、サファイア達には分からない言語で何かを呟きあった後、一番前に立っていた初老の男がこう告げた。
「お待ちしておりました。あなたが来るのを、ずっと」
サファイア達にもよく分かる言葉だった。

93. HAPPINESS

93.

長い髪の子がオフィーリア、巻き毛の子がルナと名乗った。
名乗ったと言っても、ルナは自分から名乗らなかった。オフィーリアは、ルナの名前について、自分が考えて付けたということを強調した。
ゲネシスは不思議に思った。
彼らはどこから来て、どうしてあの場に居たのだろう。名前にしても、オフィーリアは名前を貰っていると自称するのに、ルナはオフィーリア自身が付けたと言い張る。
しかし、二人はどう見ても双子だった。オフィーリアも、そうだと肯定したのだ。
ルナはやはり何も言わなかった。ルナが喋ったのは、最初に会った日だけだ。それも時間とともに、ルナではなくオフィーリアが話したのではないかと錯覚してくるほど、ルナは話さなかった。
ルナは滅多に話さないのだとオフィーリアは教えてくれたのだが、話せても喋れないのか、ただ単に話さないのか、ゲネシスには判断がつかなかった。
オーロールは何か知っているのだろうか、と、ふと考えたものの、彼女のような人狼が、ゲネシスに、人間に、本当のことを教えてくれるとは限らない。だから、聞いても無駄であることを、ゲネシスは弁えていた。
しかし、この二人の出現、とくに、話せないとはいえ、ルナがこの旅路についてくるということは、ラジカにとっていいことだった。
人間ばなれしているうえに、外見に似付かわしくないほど老いたような心を持っているオフィーリアはともかく、ルナは話さない代わりに、無邪気な振る舞いと豊かな表情でラジカと会話してくれる。

ゲネシスが与えられないものを、この人間によく似た少女は、与えることが出来るのだ。

オフィーリアは、そんなルナのことを《特別な力を持つ子》と呼んでいた。

「あの子は滅多に話さないけど」

オフィーリアは言った。

「本当は、偉大な力を持っているの」

オフィーリアの言葉には、彼女なりの確証が籠められていた。

「特別な力ねぇ」

オーロールは呆れ口調で呟いていた。

ともかく、オフィーリアとルナがついてくるようになってから、ゲネシスの魔女狩りはペースを落とした。というのも、魔女に出会わなくなったからだ。魔女が減っているとは思えない。なぜなら、討伐された魔女よりも、はるかに、反り討ちにされた戦士のほうが多いと聞くからだ。

実際、ゲネシスも苦戦したことばかりだった。多くは、剣に救われ、もしくは、運に救われ、何度も生き延びてみせたが、はじめは生還するたびに冷やかしたオーロールでさえも、次第に触れなくなるほど、魔女のしぶとさはゲネシスの生存を脅かした。

逃がしたり、逃げ帰ることも多かった。特に、付近の里にラジカを預けているときはともかく、茂みやうろに隠しているだけの時は、悟られないように気を付けるばかりだった。

最近は、魔女のほうも警戒して、あるいは、煩わしく思って、討伐軍を襲う。ゲネシスが望んでいようといまいと、魔女とのぶつかりは避けられなかった。

そんな日々だったから、オフィーリアとルナと行動を共にした途端、魔女と出会わなくなるというのは本当に奇妙なことだった。

しかし、この不思議な双子との時間が深まれば深まるほど、次第にゲネシスは、魔女を狩るという目的すらも忘れてきていた。

そして、そんな日々が続けばいいのに、と心の何処かで感じてい

た。

94. BANQUET

94.

海の血を引く者達の表情は読めないものだった。けれど、誰もそれを恐れたりはしなかった。道行く先で出会う魔物達の表情豊かな顔の方が、その内に秘める思考も、心情も読み取りづらく不気味なモノなのだから、亜人であり、襲ってくるはずもない彼らを恐れる理由などないというわけだ。

特に、こちらにはプシュケという存在がある。彼らにとってプシュケは、待ちに待った秘宝とでも言うべきものだっただろう。彼らの祖先、リヴァイアサンがプシュケを求めていないわけがないのだから。

アマリリス達が通されたのは、集落の中央。皆、プシュケをひと目見ようと集まっては、プシュケと目が合いそうなものは恐れて目を逸らしたりなどしていた。畏怖のような感情が、一気にプシュケに向けられている。この状況下で、アマリリス達など、神聖なる海の供物を載せる神輿の付属品にすぎなかった。しかし、だからといって、アマリリス達が邪険に扱われるという事もなさそうだ。

あとは、プシュケが捧げられる場所への同行を許されることを祈るばかり。

「リヴァイアサン様は大変苦悩されている」

この集落の長らしきものが、アマリリス達は振り返らずに静かに言った。その声は異様に小さく、異様に頭に響くものだった。もっと言えば、空間を介していない声。空気の振動によって伝わる声ではなかったような気がした。

「このところ、不穏な風が我々の世界を脅かしている。何かある前に、とかの御方は、供物を求めていらした。ご足労感謝する、魔女

よ」

アマリリスはそっと意識の幅を狭めた。礼を言われたものの、少し不快だった。気を抜いていたとはいえ、自分の意識の中に他者の声の侵入を許してしまったという事が、何とも気に喰わなかった。別に、この海の者が憎いわけではない。見落とした自分が許せなかったのだ。

アマリリスは男の声を追いだすと、目を細めた。

「礼には及ばないわ」

極々小さい声で、そう答えた。他の者たちには聞こえなかったのだろう、小声とはいえ、突然呟いたアマリリスをちらりと見つめてきた。集落の長らしき男は、そこでやっと振り返った。その表情からは、はやり何も読み取れない。魚の表情だ。もしくは、竜の表情とでも言うべきなのだろうか。血と肉への執着を振りかざし、醜い欲求と共に襲いかかってくる魔物達の方が、まだ豊かな表情をしている。その事実はアマリリスは何度もかみしめた。

だが、表情そのものは危険ではない。表情は読み取れずとも、非攻撃的な意図は読み取れる。やはり、ここが人間と魔物との違いなのだろう。

「それよりも、これから何処へ連れて行くつもり？」

一斉に、彼らの足が止まる。プシュケは少し怯え、傍にいたランを抱きしめた。魚の目のような鈍い輝きを放つ彼らの視線は、アマリリスから、ゆっくりとプシュケに向いていく。彼らがどうしてプシュケを求めていたか、求めた後はどうするのか、分かりきった質問ではあった。だけど、アマリリスには確認しておく必要があった。

「あたし達も、ご一緒出来るのよねえ？」

やや、アマリリスの姿を見つめる男の目の輝きが鈍った。元々、違う予定が組み込まれていたにせよ、もはや、誰もアマリリスの意思を曲げることなど出来ないだろう。そんな力のある者は、生憎、ここにはいなかった。

「ああ、いいだろう」

男はあっさりと告げた。異論もなかった。

「ついてくるがいい、客人」

95．EXTERMINATION

95.

ここが、プシュケの還る場所。

サファイアはその土地を踏みしめた途端、自分の心を揺り動かす大きな存在に気付いた。その者は、サファイアの心の中を見透かし、警戒して、大口を開けて威嚇していた。それの子孫たちは、亜人にしては随分と鈍い感性を持っているらしい。プシュケの手を引こうとする亜人達の手を、サファイアは掴んだ。突然の挙動に、手を掴まれた亜人はうろたえつつ、サファイアの目を見、そして、驚愕した。

サファイアは、人食いがばれてからというもの、自分が人間から後ろ指をさされるような存在であることをやっと自覚していた。気に入った者を籠絡し、心も体も捩じ伏せて、その獲物となる者が気付くより先に肉を喰らっていた時は、自分が何者なのかなんて深く考えていなかった。ただ、サファイアの一族には猟奇的な嗜好のある者ばかりだったから、それが断罪される事だとは知っていても、人間として不自然なことだとは思わなかったのだ。

でも、今なら分かる。自分は人間の身体を持った、魔の者であることを。

「サファイア、止めなさい」

魔の者を止められるのは、同じくらいの力を持った魔の者だけ。

アマリリスの言葉に、サファイアが気を取られた隙に、手を掴まれていた亜人は、渾身の力を込めてその場を離れていった。他の亜人たちは何が起こったか分からなかったようだ。それもそうだろう。これは、手を掴んだサファイアと、手を掴まれた亜人の間だけで交わされた出来事。第三者でこの事態に気付けたのは、魔女であるア

マリリスと、同じようにして心と体を貪られかけたプシュケぐらいだろう。

プシュケはがたがた震えながら、サファイアの姿をじっと目に映していた。ランを必死に抱き寄せるその姿は、悪夢を見た子どもが必死に柔らかい掛布にしがみ付いている姿そっくりだった。ランは自分を抱き寄せるプシュケが、どうして急にこんなにも震え始めたのか分からなかったらしく、小動物さながら、プシュケと、プシュケの目線の先にいるサファイアとを見比べていた。

「お前、人間じゃない……？」

手を掴まれていた亜人が、呂律の回らない調子でサファイアに言った。その落ち着きのなさは、どう見ても異常だった。

「何をされたんだ？」

他の亜人が訊ねても、その亜人は答えられない。答えられるはずもないのだ。とにかく、彼が感じただろうことは、自分の命が丸々噛みちぎられかけたという事。掴まれた手が、一瞬の後に引き千切られていたのではないかという、不確かな予感。

アマリリスはじっとサファイアを見つめていた。彼女にはどのくらい、サファイアの魂胆が見えているのだろう。サファイアにとって、アマリリスの魂胆が見えづらかった分、何処まで自分の心が見透かされているのかが気になった。

「静まれ。この場はリヴァイアサン様の場所。許しなく争っていい場所ではない」

亜人の長が言った。勿論、サファイアはそれを心得ている。争おうと思ったわけではない。ただ、邪魔な亜人の手を引っこ抜こうとしただけ。リヴァイアサンに対して、無礼を働こうと思っているわけではない。礼儀正しく、その命を貰いたいだけだ。

「騒がしいなあ。供物の気配がすると喜んでいたのに……」

その時だった。聞き覚えのある声がした。人間の放つ声ではない。空気の揺るがし方が大きく違う。深く、強大なその振動は、ここにいる者達全体を包み込んでいる。そう、これは、かのジズやベヒモ

スと同じような声だった。
「供物だけでなく、違う者も紛れてしまったとは……」
声だけで、姿は見えなかった。それでも、亜人たちが怯えるのには十分だった。
「申し訳ございません。ですが、この者たちは、大切な贄を遠い地より守りぬいて来られた者たちで……」
亜人の言葉を遮る様に、その者は大きく咆哮する。薄っすらと発生する霧の向こうにいるのは、長い体を持った、魚とも竜ともつかない姿の生き物だった。
「違う」
低い声で、その生き物は言う。
「私が見ているのは、影にいる者だ」
「影？」
亜人たちが聞き返した時、やっと、サファイアもアマリリスも、気付いた。この場に、最初はいなかったはずの者が、潜んでいる。

96. HATRED

96.

何が起こったのかすぐには分からなかった。

ただ、ディアナが見たものは、この場全体の揺らぎと、その揺らぎの中心より、強靭な意志を以て剣を突き立てて、まっすぐリヴァイアサンへと突っ込んでいく、人間の姿だった。

――人間？　まさか……！

ディアナはたった今見たものそのものが信じられなかった。このような大きな意志を、力を、風を以て、強大過ぎる相手に何の躊躇もなく突っ込んで行けるような者が、本当に人間なのだろうか。いや、寧ろ、生き物なのだろうか。

そこからがディアナにとって疑わしい所だった。

リヴァイアサンの子孫たちは、完全に冷静さを失っていた。大まかに分けると、怒る者、嘆く者、恐れをなして逃げる者などがいた。だが、ディアナにはどうでもいいことだった。あの人間は、彼らには危害を加えないだろう。

リヴァイアサンが咆哮する。人間は風変わりな剣を構え、その頭に叩きつけていく。だが、そう簡単に、リヴァイアサンのような存在を、斬り伏せる事が出来るわけがない。一瞬にして、偉大なる海の生き物の姿は消え去り、後にはその人間だけが残されていた。

霧が晴れ、段々と、リヴァイアサンに襲いかかる者の姿がはっきりとしてきた。剣士。魔女の討伐を担う剣士によく似た姿の者。そして、影より現れ、剣士に走り寄って行くのは、二人の少女。双子だった。彼女達は人間ではない。どちらかといえば、プシュケによく似た存在だった。

「貴様ら、何者だ……」

やっと混乱から立ち直った集落の長が、その人間達を問い詰める。

双子の少女たちは、おずおずと彼らの姿を見つめるばかりだった。
剣を構える人間の方は、じっとリヴァイアサンの血を受け継ぐ者たちを見やると、表情を変えずに低い声で言い放った。
「お前達には興味はない。私が欲しいのは、お前達の生みの親の命。悪いが、頂いて行くぞ」
男の声とは思えなかった。かといって、女であると断言も出来ない。ともかく、ゲネシスと名乗ったこの剣士の狙いは、リヴァイアサンにあった。もしかして、とディアナは思う。ジズ、ベヒモス、姿を消していった偉大なる生き物たち。そして、その場に残っていたのは、三人の人間と、一人の人狼の影。それは、この者たちなのではないのだろうか。
と、その瞬間、ディアナの嗅覚をくすぐる刺激があった。血の匂いでも、鉄や火のような嫌な匂いではない。どちらかと言えば、懐かしく、愛おしく、そして思えば思う程激しく憎らしい匂い。そして、憎らしいのは、その匂いの元ではない。その匂いと共に存在し、その匂いを無理矢理に己の一部にしてしまった禍々しい生き物。ディアナにとっては、存在自体が許せないような者。
影から注意深く、こちらを見ている視線を、ディアナのクーガーの目は、見逃さなかった。
「オー……ロール……」
違う。この名はディアナにとって大切な人の持っていたもの。彼女は死んだ。よって、この名を名乗れるのは、今、ディアナの視線の先にいる者の名前ではない。美しく笑むその顔も、死んだ旧友のものであって、この憎らしい魔物のものではない。彼女は、だが、ひっそりと笑みを浮かべ、ディアナへと向けて言葉を放った。
「そう、私はオーロール。村に拾われたあなたを手厚く介護した者……」
違う。これはオーロールじゃない。そう自分に言い聞かせた瞬間、ディアナの身体の中で、抗えきれない衝動が、生まれた。
「ディアナ」

その衝動をぴったりと止ませる声があった。
「来なさい」
それは、アマリリスの声だった。

97. WHOPPER

97.

久しぶりに魔女の目撃情報を耳にした。耳にした以上、それを追うのが討伐を命じられた者の役目だ。オフィーリアとルナと出会ってから、初めての魔女狩りだった。言うべきか、言わざるべきか。この双子にとって、ゲネシスの行う魔女狩りというのはどのように映るのだろうか。

どちらにせよ、隠し通せるものでもない。ラジカも、双子も、誰一人として、里に預けておくことが出来なかったからだ。

(安心しなよ)

オーロールの声が頭に響く。

(誰かが死んだ時は、私が跡形もなく掃除してやるよ)

人狼に相応しい励まし方だ。しかし、それを冗談と受け取ってあしらえる程、ゲネシスは冷静でなかった。ラジカ達は物陰に隠れていればいい。戦うのは、ゲネシスだけ。標的である魔女に、三人の存在が気付かれないことが一番だ。だが、それを期待できるような相手も出もないことを、ゲネシスは感じ取っていた。そして、かといって、オーロールを頼ることが出来るわけもないことを、よく知っていた。

ゲネシスは祈った。ここまで心をこめて祈ったのは、初めてかもしれない。どうか、無事にこの戦いが終わるよう。祈りつつ、祈りつつ、ラジカと双子を茂みに隠し、ゲネシスは気配を頼りに歩きだした。影を伝ってついてくるのは、オーロールの気配。

――頼む。

伝わらないことを覚悟しつつも、哀願せずにはいられなかった。

――三人を守っていてくれ。

くすくすと笑う声が、耳元で聞こえた。ゲネシスの小柄な体全体を、人狼特有の気配が覆い尽くしていく。ぴったりとついて離れないその匂いに、ゲネシスは思わず表情を濁した。

（私がそんなことすると本気で思っているのかい？）

分かっていた。ゲネシスには分かっていた。オーロールがそのような事をしてくれないことぐらい、よく分かっていた。けれど、この不吉な予感の付きまとう戦いの間だけは、例外であってほしかった。今から狙う魔女の命を完全に吹き消すまでは、或いは、それが己の命を潰すきっかけになったとしても、オーロールには、あの三人を守っていて欲しかった。

――駄目か……。

（忘れていないか？）

オーロールの気配が、ゲネシスの影の中で蠢く。

（私は人狼なのだよ。私は私の好きなようにさせてもらうよ）

――分かっているとも。

ふと、ゲネシスは足をとめた。風向きが変わり、人間には馴染みのない色の風が、向かい側から吹いて来た。ゲネシスは剣を握りしめ、その風の向こうを睨んだ。来ている。気配が近づいて来ている。あちらはもう、ゲネシスと戦う気なのだろうか。それとも、ただ様子を見に来ているだけなのだろうか。どちらにせよ、ゲネシスが戦うに十分な理由だった。

少しずつ、気配に姿が加わってくる。思ったよりも小柄で、思ったよりも幼い少女の姿。ゲネシスの姿を見つめているその目は、遠くに居てもよく光っていた。

影に潜むオーロールが、鼻で笑った。

（嫌なタイプの魔女だ。ぜひ仕留めて、私に奴の肉を貪らせてほしいものだよ）

ゲネシスは剣を解き、矛先を少女へと向けた。

――別にお前の為に仕留めるのではない、人食い。

（釣れないのは、相変わらずだね）

オーロールがけらけらと笑った時、少女の口元が少しだけ動いた。
「ねえ」
小さいのに、よく響く声だった。
「誰と喋っているの？」
ゲネシスが駆け出したのは、その時だった。

98．LOSS

98.

リヴァイアサンが襲われている。

剣を持った人間に、その首を狙われている。

そう思った瞬間、プシュケの中に、不思議な感情が芽生えた。それは、たった今見ただけのこの主に対する、慕情。今にも首を落とされそうなリヴァイアサンに向かって、プシュケは自分でも気付かない内に、大声で叫んでいた。

「逃げて！」

リヴァイアサンはその大きな眼を細めた。それは、剣を持った人間に対して嘲笑の念を向けているようにも見えたけれども、プシュケにとっては、自分に微笑みかけているようにも見えた。或いは、その両方。プシュケは段々、この人間が憎くなってきた。

「やめてよ！　やめて！」

人間に対して否定の感情をぶつけながら、プシュケは無意識的に背負っていた弓矢を取った。少しずつ、少しずつ、力を込めていく。やがて、その狙いを人間に迷うことなく向けたプシュケは、一気に、自分の中で今にも爆発しそうな感情の留め具を壊すように、矢を放った。

滑る様に、そして、空間を切断するかのように飛んでいく矢は、まるで糸で繋がれていたかのように、リヴァイアサンに夢中な人間の剣を持つ方の腕に食らいついた。人間が小さく呻き、剣を落とす。その隙に、リヴァイアサンは、その大きな存在を消してしまっていた。

「リヴァイアサン様……」

プシュケはじっと主のいた場所を見つめた。その大きな命は消え

てはいない。だが、求めた時に触れられるように、姿を見せてくれることはしばらくはなさそうだとプシュケは悟った。悟った瞬間、とてつもなく寂しい感情が押し寄せてきた。

この感情だけは、他の者たちには伝えられなかった。

きっと、ジズの供物であったツバキも、ベヒモスの供物であった名もなきニュンペーの娘も、この感情を味わったはずだ。いや、彼らはもっと苦しい思いをしたのかもしれない。ならば、それならば、どうして堪えられたのだろう。どうしてたった一人で己の主の場所を守る事が出来るのだろう。

自分はたった今、主となる生き物と出会ったばかりだ。それなのにもう、心の中の主の存在は、大きすぎるものになってしまっている。他の者たちはどうして堪えられているのだろうか。いや、もしかしたら、堪えられてなんていないのかもしれない。表面にはその悲しみと絶望が、半分も漏れていないのかもしれない。プシュケに見えなかっただけで、彼らの中身は、どす黒くて、渇ききっていて、ざらついていて、錆ついていて、感情だけで空間を破裂させられるぐらい壊れていたのかもしれない。もしくは、真っ白で、ただ広くて、広くて、何もなくて、空しさだけがその中を漂っている、そんな状態だったのかもしれない。

そのくらい、プシュケも苦しかった。でも、命は守れた。剣を持った人間は、リヴァイアサンを捜しつつも、弓を放ったプシュケを物凄く恐ろしい形相で睨んでいた。剣には黒い血。その頬も、黒い血で汚れていた。しかし、見つめられたプシュケは驚愕した。その剣士の整った陶器のような顔に。その剣士のガラス細工のような双眸に。そして、中性的な怪しさを漂わせる、その姿そのものに。

ふと、誰かに腕を掴まれて、プシュケは心臓が止まりそうになった。乱暴に立たされるその感覚で、それが誰かは分かった。

「プシュケ、来なさい。あなたは恨まれた。あの子の狙いはリヴァイアサン。でも、美しいあの子は邪魔をする者には容赦はしないでしょう」

サファイアだ。暗がりで光っているように見える彼女の目は、まっすぐ剣を持った人間に向いていた。挑戦的にも見えたし、諭しているようにも見えた。

「あなたを殺させはしないわ」

サファイアは静かに言った。

「だって、あなたを殺すのは、私だから」

サファイアの手に握られる剣が、光を反射した。

99．CYBELE

99．

物静かな雰囲気の少女の姿。

彼女がそっと微笑んだ瞬間、ゲネシスの全身を雷のようなものが貫いていった。そして、その感覚が、威圧からくる恐怖によるものだと悟るのに、しばしの時間を要した。

この魔女は、何かが違う。

「あなた、独りじゃないのね」

少女が首を傾げた。長い黒髪が、さらりと肩にかかる。美しい顔をしていた。整った顔立ちと、見れば見る程吸いこまれていきそうなほどの、綺麗な目をしていた。ただ、その幼さと美しさを湛える少女の姿は、冷たい印象を与えるものだった。

「狼と一緒にいる」

「お前は何者なんだ……？」

ゲネシスは恐る恐る訊ねた。訊ねずにはいられなかった。少女はもう一度首を傾げ、少しだけ目を見開いた。自ずと動き、喋り出すこと以外は、まるで、精巧につくられた人形のようだ。

「あたし？」

少女は聞き返し、ゲネシスを真っ直ぐ見つめていた。正確には、その影まで。オーロールの潜む影までを含めて見つめていた。

「あたしは、キュベレー。それだけがあたしの全て」

キュベレーと名乗った少女は、軽く辞儀をして、跳びはねるように一歩、ゲネシスへと近づいき、「それで？」と、子どもが大人に話を急かすように、無邪気な表情でゲネシスに訊ねた。

「あなた達は、誰？」

ゲネシスは覚悟を決めた。剣をゆっくりと動かし、まっすぐキュ

ベレーに向ける。キュベレーはほんの少し驚いたような表情を見せたが、すぐにくすりと笑って見せた。

「あなた、剣士なんだ。魔女を殺す剣士？　魔女狩りをしているの？　あたしを殺しに来たの？」

まるで、他人事のようなキュベレーの態度。ここまで得体の知れない者を相手にするのは初めてかもしれない。キュベレーを前にして初めて、今まで討伐してきた魔女が、人間のようにまともであったことに気づかされる。

「退屈していたの。ねえ、剣士さん、ゲームしようよ」

キュベレーは再び跳びはね、ゲネシスのすぐ近くにある大岩へと近づき、座った。座り込んだキュベレーは、肘をついて前かがみでゲネシスをじっと見ている。

「かくれんぼしよう。まずは剣士さんが鬼。あたしを見つけられたら、今度はあたしが鬼になるの」

「かくれんぼは出来ない」

ゲネシスは低い声で返答した。

キュベレーは本当に意外そうな表情で、また首を傾げた。

「どうして？」

「お前を殺したいからだ」

ゲネシスはもう隠さなかった。不意打ちをしても、返り討ちにされて終わりだろう。それほどの脅威を、このキュベレーという名の少女からは感じられた。ゲネシスの影の中で、オーロールが低く唸り始めていた。

「そんなの、つまらない」

キュベレーはわがままが通らなかった子どものように、不貞腐れた表情を見せた。場合が場合でなければ、普通に可愛い少女に見えただろう。しかし、彼女は危険な匂いのする魔女。ゲネシスの緊張は、限界に達していた。

「遊んでから戦ったっていいじゃない」

ゲネシスは無言で剣を振るった。

（あまり、刺激しない方がいいと思うわね……）
オーロールがひっそりとした声で言った。
キュベレーはまっすぐゲネシスの剣を見つめ、さらにつまらなさそうな表情を見せた。そして、大岩から降りて、ふらりとゲネシスの方へと歩み寄り始めた。
「そう。遊びたくないのね。なら、仕方ないわ。でも、あなた、本当に、今、戦いたいの？」
「悪いが、そうだ。今すぐ、お前の命が欲しい」
「あたしの命？　そんなに欲しがるような価値のあるものでもないと思うけどな。でも、あなたが戦う気なら、仕方ないわね。でも、あなた、本当にいいの？」
「何度も言わせるな。命が惜しいか？」
「違うわ」と、キュベレーはまっすぐ一方を指差した。それは、ゲネシスのいる位置よりも、ほんの少し左にずれた方向だった。オーロールの溜め息が聞こえた。ゲネシスは一瞬混乱したが、おずおずとそちらへと目を向けた。
「あなたが大切にしているモノ、壊れちゃうかもしれないけれど、いいの？」
キュベレーの声が、歪んだ。

100. APPEASE

100.

遠くで動きがあったのを、アマリリスはすぐに感じ取った。
無意識に、遅れてくるディアナの手を握る力が強くなる。バステトはすぐ近くにいる。ランもだ。姿が見えないのは、プシュケとサファイア。二人の姿は、人混みのなかで隠れてしまっている。何処にいるかは、まだ分からない。
ランが不安そうな顔でそっと振り返った。
アマリリスはゆっくりと息を吐き、ランの見ている方向をじっと見据えた。
「ディアナ、バステト……」
落ちついているけれども、低く険しい声。ディアナとバステトは、やや戸惑いつつアマリリスに目線で答えた。ディアナの手を放し、アマリリスはランの見ている方向を見たまま、言った。
「ランを守っていなさい」
「待って、アリス」
ディアナの声に、アマリリスはちらりと目線を動かしてその姿を見つめた。ディアナは再びクーガーの姿になっていた。自分達に迫っている危険を感じ取っていたのだろう。このあたりはまだ、安全地帯ではない。
「気を付けて」
引きとめるわけでもなく、ディアナはそうとだけ言った。
アマリリスは微かに笑み、去り際に言葉を残した。
「そちらこそね」
アマリリスは気付いていた。ディアナ達のすぐ傍に、纏わり憑いている影。さっき撒くことができなかった、飢えに苦しむ狼の危険な香り。アマリリスにとってはとても芳しいものだった。本当なら

ば、いますぐに彼女の潜んでいる場所へと魔力を向けて、その肉を引き千切ってしまいたい。彼女の痛む姿を思う存分目に焼き付け、少しずつ少しずつ魂と精神を喰らうかのようにいたぶりたい。隙あらば、そんな欲望がアマリリスの意識を支配してしまいそうだった。

けれど、アマリリスは堪えた。今行くべきは、そちらではないことを、理性がきちんと捉えていた。こんなことは初めてかもしれない。いや、そもそも、一人で行動している時は必要のないパターンでもある。

――1、2、3、4、5……。

アマリリスは心の中で数を数えた。この数唱はまじないのようなもの。これをしていると、不思議と攻撃的な興奮が治まっていくような気がする。数を数えているうちに、もう肉片が飛び散るのを見たいだとか、血が飛び散る感触を味わいたいだとかの異様な欲求は薄らいでいくのだ。

そして、代わりに現れるのは、いつも罪悪感だった。殺してしまった人を襲う魔物への同情の心。

しかし、今は罪悪感も同情も感じずに済んだ。オーロールは、何度も取り逃がした人狼だが、彼女を狙っている暇はない。今は、もっと違う事に時間を使うべきだとアマリリスは分かっていた。

――6、7、8、9……。

数を数えているうちに、貪りたくてしかたないような人狼の匂いは気にならなくなっていった。代わりに、意志がアマリリスの身体を支配しはじめる。

――サファイア、プシュケ……。

二人の居る場所は、何処か。

101. TRICKSY

101.

――何故だ。どうしてこんなことに。

ゲネシスが魔女と戦うようになって、どのくらい経っただろうか。

オフィーリアやルナと出会う前、ラジカと出会う前、そして、オーロールと出会う前から、ゲネシスは数え切れない《魔女》を殺してきたことになる。今でも鮮明に覚えている魔女もいれば、あまり思い出せない魔女もいたかもしれない。魔女と戦うように教えられて、魔女を殺すために国から出されたゲネシスにとって、魔女というものは鹿狩りの鹿、狐狩りの狐、熊狩りの熊のようなものだった。ゆえに、この状況など、あり得なかった。

――しかし、これは。

魔女を前に逃げなければならない状況というものの存在を、ゲネシスは改めて実感した。どうしてこうなったのか、どうして、あの場に、ラジカとオフィーリア、ルナが迷い込むような事があったのかは分からない。そして、どうして、キュベレーに見破られたのかは分からない。

もしかしたら、キュベレーがこの三人に目を付けたのは、偶然だったのかもしれない。もしかしたら、ただ人間同士というだけで脅しに使っただけなのかもしれない。だけど、天は悲しい事に、キュベレーに味方しているようだ。キュベレーの放った魔法が、ゲネシスも、オーロールをも避けて、ラジカにぶつかった時、それははっきりとした。

ほんの一瞬だけの悲鳴とともに、呆気なく倒れたラジカの姿を見て、ゲネシスは生まれて初めて頭が真っ白になった。それから、ラジカを抱えて逃げ出すまでの記憶はあまりない。

「落ちついて。あなたらしくない」
オーロールの声がゲネシスにそう告げたけれども、ゲネシスには響かなかった。
――落ちつく？　これが落ちついていられるのか？
キュベレーは追ってきている。オフィーリアとルナに事情を聞きたいところだが、それすらも出来ない。いや、事情を聞けたとしても、今のゲネシスの耳には入ってこないかもしれない。抱きしめるラジカの身体は冷たく、生き物の身体に感じる流動が、淀み、鈍っている。今のゲネシスにとっては、ラジカの様子がおかしいということを理解するだけが精一杯だった。
そして、その原因を作ったのが、キュベレーという事も。
「待ちなさい」
オーロールが影から何かを告げようとした瞬間、後ろから涼しげな声が聞こえた。と、同時に、ゲネシスの行く手の岩が砕け、道が塞がれてしまった。オフィーリアの小さな悲鳴が聞こえた。ゲネシスが一瞬、判断に迷ったのが、分かれ目だった。
氷のような視線を受けて、ゲネシスの全身から汗が噴き出す。
「そう、お利口ね」
ゲネシスが振り返った先のキュベレー。彼女は、道の真ん中にただ立っていた。微かに笑みを浮かべながら、じっとゲネシス達を見つめていた。
ゲネシスはそっと、オフィーリアとルナを自分の後ろに隠した。ゲネシス以外の者から狙うつもりかもしれない。ラジカだけでは彼女の欲求は満たされそうもない。
「あらあら、その子たちもくれたっていいじゃない」
キュベレーは不満そうな表情を見せて、首を傾げた。目線の先には、ゲネシスの抱きかかえるラジカの姿。
「その子、呆気なく止まっちゃったね」
幼子のように、キュベレーは無邪気な様子でそう言った。
「あたし、野蛮なのはいやなの。遊ぶわけじゃなくて、野蛮なこと

するだけなら、ちょっとのお痛も仕方ないでしょう？」
キュベレーは当り前のようにそう言った。
「だから、あなたの知り合いっぽいその子に、ちょっと悪戯しちゃったの」
「何をしたんだ……？」
ゲネシスはどうにか声を出した。焦りと緊張とそして、怒りで、ゲネシスの身体は震えっぱなしだった。
「あたしを見逃してくれたら、その子の治し方、教えてあげるよ？」
――治し方？
彼女に戦う気はないらしい。ただ、力の違いを見せつけるだけの為に、ラジカを利用した。どうして、あの場にラジカは来てしまったのだろうか。しかし、こうならなければ、あの魔術を受けて《止まっていた》のは、ゲネシスのほうだったかもしれない。
ゲネシスは荒い呼吸を整えながら、少しずつ少しずつ言葉を放っていった。
「どう……すれば……いい？」
その瞬間、キュベレーの笑みが深まった。

102. ASSAULT

102.

サファイアは剣を静かに振って、リヴァイアサンを探し続ける剣士の気を引いた。剣士はやはり、自分を煌々とした目で睨むサファイアの存在を捨て置くことができなかったらしく、その視線をプシュケからサファイアへとゆっくりと移した。それだけでも、サファイアの目的は達成されている。

鋭い眼差しだった。戦いぬいて来た人間特有の、猛禽類のような目。サファイアの闘争心を掻き立てはしても、食指は動かすことは出来ない目。その険しい表情が、整った顔立ちを際立たせていた。

サファイアは冷笑した。

その剣士がどう動こうとしているのか、サファイアに対して勝算はつかめているのか。サファイアにはどうでもいいことだった。ただ、この強そうな相手を前に、今から剣と剣をぶつけるという事に対しての嬉々とした感情が、彼女に冷たく静かな笑みという表情を作らさせる。

しかし、剣士は無表情だった。

ぼそりと独り言のように口元を動かし、そっと己の剣を持ち直した。変わった剣だった。サファイアが持っているものと似ていて、かなり違う。たった今、ひと目見ただけだというのに、まるで、その剣は、使用者のことを庇護するという意志をしっかりと持っているかのように思えた。

まともにぶつかれば、どうなるかは分からない。そう思った。

「あなた、どうしてリヴァイアサンを攻撃したの?」

サファイアの問いに、剣士は答えない。ただ、険しい表情を変えずに、サファイアを見つめているばかりだった。サファイアはその睨みに負けないように、じっと見つめ返した。しかし、ふと、剣士

の様子の違和感に気づいた。
あちらが攻撃できるタイミングというのは、もうすでに何十回も過ぎ去っているというのに、剣士はじっと睨み続け、攻撃しようという姿勢は保ちつつも、動き出す気配も見られなかったからだ。もしも、サファイアを切り捨てようという気ならば、すでに剣はぶつかり合っているはず。しかし、その音が聞こえるのも、だいぶ先だとしか思えなかった。
剣士は何を狙っているのだろうか。
そう考えを切り替えたサファイアが、危機に気づいたのはすぐのことだった。
――プシュケ……。
すぐに振り返り、サファイアは後退した。それを見計らったかのように、剣士は攻撃態勢に入った。サファイアが悟るのも計算済みだったらしい。ただし、サファイアはそんな剣士のことになどもう構っていられなかった。
プシュケの背後に見える二つの手。プシュケはまだ気付いていない。剣士の傍から、いつの間にか、エルフの双子の娘たちが消えていること。明らかに捕えようとしている手が、プシュケのすぐ後ろにまで伸びていること。
「プシュケ！」
間に合わないと気付いて叫んだ途端、サファイアの背中を、焼き付けるような衝撃が襲った。
「恨むなら恨むがいい。私にはそのくらいの覚悟はある」
空気を凍らすようなその言葉。剣士の声だ。サファイアの胸に秘める小さな花が、ぽとりと地面に落ちていった。

103. DETERMINATION

103.

自分の命を守りながら相手を貫く剣の光は、ゲネシスの研ぎ澄まされた心そのものを表しているかのようだった。

つい、数日前に、国に命じられた魔女狩りよりも遥かに大切な目的が、ゲネシスの中に芽生えた。魔女を狩るという役目は、やるべきことのないゲネシスにとっては、いわば、穴埋め。暇つぶしのようなものだったのだろうと、ゲネシス自身痛感した。

何よりも優先したい目的の出来た今、ゲネシスにとって魔女狩りは、放棄しても構わないほどどうでもいいこととなっていた。

そんなゲネシスに同行するのは、一匹の人狼と双子の娘達。ゲネシスの影に潜み続ける人狼と、ヒトに限りなく近い何かである娘たちは、ゲネシスの決断に口を出さなかった。

ただ、ゲネシスが決断を口にした時、自然と言う大きな理の中で生きている人狼であるオーロールは、やや硬い表情を見せていた。

「それで、お前が後悔しないというのならば、私は何も言わない」

オーロールはまるで人間のように、そう言った。

誰も反対しなかった。だから、ゲネシスに選択できる項目は、ひとつしかなかった。全ては、触れてはいけなかった恐ろしき魔女キュベレーに捉われた、たった一人の少年のため。ゲネシスは向かうしかなかった。

「共に来なくてもいいんだ」

ゲネシスはオーロールと双子にそう言った。

「私はきっと、生き物として最低の事をするのだろう。人間として生まれ、人間として生きた私にとってそれがどのくらい恐ろしい事なのかは、恥ずかしい事に分からないんだ。でも、もしかしたら、

皆には分かっているのかもしれない。もし、無理をしてついて来ているのだったら、そんな事はしなくていいと言っておく」

その言葉を聞いたルナが、じっとゲネシスを見つめた。何も言わないルナの瞳は、魔力の全てがこめられているかのように強く、ゲネシスはしばしその瞳に捉われた。訴えかけるような視線を送りつつ、ルナはずっと無言であった。代わりに口を開いたのは、双子の片割れのオフィーリアの方だった。

「わたし達は、別に、仕方なくあなたについて来ているわけじゃないの」

それは、ルナの代弁でもあり、自分自身の考えでもあるようだった。

「わたし達が見つけたのは、あなたという居場所。あなたの傍という居場所。だから、わたし達のことを気にする必要はないわ」

オフィーリアの言葉には、嘘がなかった。ゲネシスにはこの言葉が有難く、そして、怖かった。自分が他人を巻き込んでいるような気がした。けれど、どうしようもない。誰がついてこようと、誰を巻き込もうと、そうしなければ、ゲネシスの助けたい人は、助からないのだから。

オーロールは何も言わなかった。ただ、ゲネシスの影の中で黙り込んでいるだけだった。人狼には人狼の考え方があるのだといつかオーロールは言った。そうニンゲンに説明するのは初めてだとも、言っていた。オーロールはもはや、ゲネシスにとって、もはや、見たらすぐに切り捨てていいような魔物ではなかった。魔物がここまでヒトと交流できることもあるのだと知った初めての存在だった。

何も言わないオーロールは、ゲネシスの影の中に、居座り続けた。

ゲネシスは静かに剣を握り、自分の行く手を見つめた。

まず行くべきところ。キュベレーに指定された場所。その行く手には、とても美しい空が広がっていた。

104. RELATIVE

104.

アマリリスは、独り心を落ちつかせていた。目指す場所はすぐ傍にある。けれど、それはとても遠い場所でもある。鎖を外してしまった魔物と、尋常でない存在をすでに二体も倒してしまっている魔人とが、ぶつかり合っている。

サファイアと、突如現れた剣士。サファイアが理性を手放した理由を、アマリリスはすぐに見通した。目に見える前から、察していたことでもある。プシュケによく似た気配が二つ、プシュケの周りを取り囲んでいることは、それくらいすぐに分かることだった。

サファイアが理性をかなぐり捨ててまで剣士たちを相手にしているのは、そのためだろう。理性という重石を捨てたサファイアを前に、剣士も、エルフも、どのくらい太刀打ちできるかなんて、考える必要もなかった。

だが、問題はその後にある。アマリリスにとって、重要なのはそこだった。

剣士は倒していい。エルフだってそうだ。今の彼らはアマリリスにとっては邪魔なだけ。命は奪わないにしても、再起不能ぐらいにはして欲しかった。動くのは、その後だ。エルフたちと剣士が倒れた後、サファイアが目を向けるのは、経った今、自分が助けたプシュケであるだろう。

アマリリスには今のサファイアの心がよく分かっているつもりだった。

サファイアの心を大きく占めている、食肉の欲求。そして、プシュケに対しての強い支配欲。サファイアがプシュケを助けるのは、単純にプシュケが愛しいからではない。その愛しさには、複雑で、より官能的で、より残虐な欲求から生まれるたくさんの感情が、ま

とめられ、こめられている。
プシュケにぶつけられるそれが、今のアマリリスには堪えられないものだった。自分でも不思議なくらい、不快なことだった。サファイアが、理性を捨てて戦っている今のこの状況事態、とても不快なことだった。況してや、サファイアが、プシュケを襲って、そして食べてしまうという事。
止めなければ。
何処から生まれたかもわからないその想いが、アマリリスの心の根底にて、渦巻いていた。
「さて、どうするべきなのかしらね……」
サファイアと剣士が剣を交える。その光景を直接目にしたアマリリスは、ほんの少しだけ表情を歪めた。自分の中で、剣士を少なからずみくびっていたことを、経った今知ったのだ。大いなる生き物を二体も沈めたこの剣士は、やはり、只者ではないらしい。
サファイアと対等に打ち合う剣士のその姿は、光に対する影を思わせる雰囲気を持ちながら、どこにも穢れというものを持たないような、純潔の印象を見る者に与えるようなものだった。
今のサファイアに対して、正反対のもの。
それは、対等にぶつかり、対等に反発し得るものだった。

105. SKY HUNTING

105.

この世を覆い隠す美しい空の源が、ゲネシス達を包み込んでいた。
その美しさは、この場所をただ捨て置ける場所でないこと、そして、ゲネシス達のような人間達が踏み込んでいい場所でないことを、ひと目で知らせてくれるものだった。
美しさは、空だけではなかった。ゲネシス達の目の前に佇む、一人の白髪の女もまた、心が凍ってしまう程美しかった。白髪の女は、ゲネシス達を見据え、煌々とした目を向けて、透き通るような声でこちらに向かって言った。
「人間、精霊、そして……」
凛とした視線が、ゲネシスの影へと向く。ゲネシスは自分の影の中で、オーロールの気配が動いたことを感じた。
白髪の女は、目線をゲネシス達に戻し、言った。
「奇妙な組み合わせ。だけど、誰だって同じだ」
ゲネシスはそっと片手で剣に触れた。ここで間違いない。それは確かだった。キュベレーに指定された通りに来た場所。大いなる空の生まれる場所。そして、目の前にいるのは、恐らく――。
(間違いない。私と同じ種族の女だ)
ゲネシスには見破れなくても、オーロールの目は誤魔化せない。いや、むしろ、その美しさは妖魔の類に他ならないほどだ。ゲネシスにも、この目の前にいる女が、もしもニンゲンだったとしても、ただ者でないことぐらい分かっていた。
ゲネシスの中で、決意が生まれた。
ゆるやかな意識の変化。行動に全く現れない程度の、些細な変化。
しかし、ゲネシス達を見据える白髪の女は、それを鋭く察知した。
「立ち去れ。今すぐに！」

澄んだ高い声ではあるが、狼の咆哮によく似ている。ゲネシスはその声を合図に、走りだした。オーロールは影となってついて来ている。オフィーリアとルナがどうしているかまでは、把握できなかった。

白髪の女の姿が歪む。ゲネシスの突進を避けると同時に、彼女の姿は美しい白狼へと変化していた。

ゲネシスは剣を構え、その美しい人狼へ訊ねた。

「これが私の挨拶だ。この場所は私の剣が制圧するだろう。止めると言うのなら、私は容赦しない。かかってこい」

白狼の表情が怒りに満ちた。直後、白い矢のように彼女は突進してくる。ゲネシスはその速さに一瞬だけ翻弄された。道中で出くわすような人狼とは比べられない程、その動きは俊敏だった。しかし、ゲネシスはすぐに冷静さを取り戻した。

――所詮、俊敏さだけだ。

剣をはらって、その攻撃をかわす。矢のようだった白狼は、すぐに動きを変えて、ゲネシスの攻撃を全て避けて見せた。だが、ゲネシスは焦らなかった。

この美しい雌狼に足りないものを、ゲネシスは知っていた。

攻撃を続けながら、ゲネシスは白狼の動きを注意深く観察していた。

――今だ。

剣をわざと白狼から逸らす。白狼はそれを避けようと、一瞬だけゲネシスの近くへと寄った。待っていたのはこれだった。ゲネシスは素早く蹴りを入れた。賭けに近いこの攻撃は、どうにか当たった。まともに蹴ることのできた白狼の身体はとても軽かった。

白狼が地面に叩きつけられると同時に、ゲネシスは剣を構えたまま走り寄った。近づいてみると、いつの間にか、白狼は白髪の女に戻っていた。

「や……やめて……」

白髪の女がが弱々しく言った。さっきまでの凛とした目の光が、

しぼんでいく。そこには、猟銃を突き付けられた獲物しかいなかった。

「お願い、やめて……」

ゲネシスは剣を構えたまま、その矛先を、女の喉元に突き付けた。

女が息を呑む。その動きが、剣をつたって、ゲネシスにもわかった。ゲネシスは静かに女を見下ろすと、淡々とした口調で言った。

「悪いな」

剣の光が、ゲネシスの目に入りこむ。

「これが、私のやり方だ」

手に力を込めて、剣を動かす。頭で考えるまでもないその動作を、敢えて、ゆっくりとしようとしたその時、ゲネシス達を包む空間が、振動した。大きすぎる何かが、この場所を支配しようとしている。

ゲネシスの手がふと止まった。

女を殺そうとしているその行為を、怒りをもって押さえつけようとしている者がいる。

その者が、いま、ゲネシス達の前に降り立とうとしている。

空が割れて、その向こうから、鋭く、大きな猛禽の双眸が、ぎろりとゲネシスを睨んでいた。

「愚かな……者め」

深く、どっしりとした怒りの声が、ゲネシスの耳を襲った。

106. CONTROL

106.

アマリリスの影も、気配も、巻き上げられる砂煙の向こうへと消えてしまった頃、ディアナは改めて、自分の中で血が煮えたぎりそうな程の情緒の渦巻きが起きていることを実感しながら、今すぐにクーガーへと変わってその渦巻きを作る原因となっている者へ飛びかかって行きそうな衝動を、必死に抑えていた。

その存在に気付いているのは、ディアナだけではない。バステトもまた、自分達を包む影の気配に気付き、ずっと警戒を解かなかった。

ディアナは唸りつつ、その影を睨んだ。

ずっと纏わりついている、人狼の匂い。惨たらしい感情を、ディアナに与えた張本人。ほんの少しだけ姿を見せて、優雅にディアナを挑発した彼女が、影からじっと見つめている。

「ディアナ」

バステトは、ディアナの手を握った。クーガーの前脚へと変わりそうなその手を、しっかりと握った。どんなに人狼が挑発しても、どんなに人狼が危険な動きを見せても、応戦だけは避けたかった。不穏な挑発は買うべきないことを知っていたからだ。まるで、ディアナを誘い込むようにまとわりついてくるこの気配には、単純でない動機が付属しているはずだった。

しかし、ディアナの我慢はすでに限界だった。クーガーへと変身すれば、否が応でも影に潜む人狼へと飛びかかろうとするだろう。そして、もしもそれをバステトが止めようならば、バステトでさえも跳ね飛ばしてしまう勢いだろう。幾らなんでも、それだけは避けたかった。

「バステト……」
いよいよ我慢が解かれると感じた時、ディアナはついに口を開いた。
「お願い、手を放して」
冷たく、突き放す声だった。
アマリリスがひと声で封じたディアナの衝動は、バステトには大きすぎるものだった。しかし、バステトは手を放す気にならなかった。例え、跳ね飛ばされたとしても、ここで手を放して、みすみすディアナを行かせてしまうよりはずっとマシだと思っていた。
影からは、依然として、人狼が見つめてきている。
「お願いだから……」
ディアナが苦しそうに言った。
力いっぱい、変身への衝動を止めているのだ。変身という感覚すら分からないバステトにとって、その苦しさは全くの未知である。しかし、今のディアナの様子から、それは、とてつもなく苦痛を伴うことであるのは明らかだった。
影から、ぬるりと、目が、そして、手が出てくる。
「どうしたの？」
涼しげな声。正体の見破られた人狼が、次の犠牲者へ向ける、優しげな声。彼女が自分達を襲う気でいるのは、バステトにもはっきりと分かっていた。
「ディアナ」
人狼がディアナを刺激する。
「私が憎くないの？」
美しい顔が、影から覗く。ディアナがよく知っていた者の顔。バステトには想像も出来ない。親しかった者が、全く別の生き物に乗っ取られてしまうという恐ろしさと憎しみ。
「私が、憎くないの？」
ディアナが嗚咽を漏らし始めた。身体は震え、冷や汗まで出ている。限界であるのは、バステトにも分かった。そして、このままで

は、ディアナの自我すらも崩壊してしまうかもしれないことも想像できた。それなのに、バステトは手を放す事が出来なかった。

「ディアナ……」

人狼が、その外見に相応しい、美しい声で語りかける。バステトは、いよいよ覚悟を決め、手を握る力を緩めた。

ちょうど、その時だった。

遠くから、不思議な音が聞こえた。鐘を鳴らしているようにも聞こえた。けれど、よくよく聞いてみれば、それは、魂の宿ったものであると分かった。生きている者が発する、独特の波長。言うなれば、何かの声。そう、何かの鳴き声。綺麗なその音色は、この場全体を揺るがした。

バステトも、ディアナも、たった今までの状況をすべて忘れ去り、しばし、その音に意識を奪われ続けた。それは、この場にいる全ての者が同じだったらしい。ディアナを誘惑し続けた人狼もまた、この音の魔力からは逃れられなかった。

戦う者、逃げまどう者、怯える者、その全てが、呆然とこの音のする方向を眺めていた。

107. EXTINCTION

107.

記憶を遡る限り、自分の宿命をはじめて知った時からずっと、ツバキは疑うことがなかった。

大いなる空の覇者ジズの聖地を守るという使命の絶対性について、或いは、その場所が、ツバキ自身の揺るぎない安住の地であることについての、不動な信頼。ツバキにとって、ジズは絶対だった。ツバキのこれから、そして、ツバキのこれまで全てを支配する者。空の覇者であるジズは、空の供物であるツバキにとって、この世が続く限り、永遠にツバキを包み込む大きな存在だった。

しかし、今、信じていたものが、ツバキの目の前で、少しずつ剥がされている。惨い剥がし方だった。突如現れた見知らぬ生き物たちは、村を滅ぼす人狼のようだと、人狼であるツバキは思った。自分を襲ってきたのは、ただ、ジズをおびき出したかっただけ。彼らの本当の狙いは、ジズにあった。

――私のせいなの？

ツバキは呆然と、剣を持って舞う剣士とその剣士の相手をするジズとを見ていた。

精霊の血を引く双子に守護されているだけの剣士。片や、ジズといえば、世界の空を支配することを許された大きな存在である。しかし、なぜだろう、どうしてだろう、ツバキには、ジズの方が押されていることに、早々から気付いていた。

――私のせいだというの？

ツバキに助けに行く術はない。同じ人狼である女に拘束されている今、自由すらもない。悔しかった。ただただ悔しかった。ただの人狼の女に負ける自分が悔しかった。ジズを助けられないのが悔し

かった。そして、自分の敬愛するジズが、人間の剣士ごときに倒されそうになっているこの状況が、とても悔しかった。

「怖いの？」

人狼の女に問われ、ツバキは気付く。ツバキは泣いていた。涙を流していた。狼の唸り声と共に、たくさんの涙が溢れていた。

「自分の居場所がなくなるのが」

人狼の女の声には、奇妙なものが宿っていた。怒りでもなければ、嘲りでもない。憐れみでもなければ、喜びでもない。複雑に絡み合った何かが、女の声の向こうに宿っている。

ツバキはその得体の知れない何かを睨んだ。

自分を拘束する女の力は強く、ツバキには抜け出すことが出来なかった。しかし、それでも、唸り声の調子を変えて、煌々とした目で、女を睨むことは出来る。一人の人間に味方する奇妙な人狼。大勢の人間を陥れようとしている巨悪の人狼。

「私が居場所を失うということは……」

ツバキはこの美しい女を恨んだ。

「やがて、あなたの居場所もなくなるということ。あなた達は私達を巻き込んで、自分の首を絞めているのよ」

しかし、人狼の女からの視線の色は、変わらなかった。

ジズが叫び声をあげる。ツバキの目に映る空が、真っ赤に染まった。空も大地も染める赤。羽毛とともに飛び散るのは、その赤をまとった肉片だった。

真っ赤な雨が大地に降り注ぐ。その雨を全身で浴びながら、剣士の目が冷たく光っている。

ツバキは息をすることを忘れそうになった。たちこめる血と肉の匂い。ジズの咆哮には、憤怒だけではなく、痛みによる悲鳴も混じっているように思えてならなった。

剣士は剣を払って返り血を落とすと、まっすぐジズを見つめた。ジズもまた、剣士を見つめた。肉を削られ、血を流しているのは、どちらも同じ。しかし、生き物として致命的な傷を負っているのは、

ジズだけだった。残る力を振り絞り、ジズは剣士を睨みつける。
「……逃げてください」
ツバキは言葉を漏らした。
「……お願い！　逃げて！」
剣士の足が、地を蹴った。

108. COUNTEROFFENSIVE

108.

プシュケがその音をひとつの言葉だと気付くのに、少しばかりの時間を要した。

目の前でサファイアは斬られ、大切な意識そのものであったはずの白い花は、地面に投げ出されている。斬られたサファイアは、膝を折り、項垂れているばかりで、プシュケからはその様子がよく見えない。プシュケの頭に直接響くこの不思議な音が鳴り続けている間も、サファイアは項垂れた格好のまま、微動だにしなかった。

（愛しい我が子）

中性的な声が、プシュケの耳の中に響いた。紛れもなく、プシュケに向けられている声。リヴァイアサンの、深い声だった。彼の声はプシュケの耳の中で弾け、プシュケの言語能力を借りて、姿を現していた。プシュケはリヴァイアサン自身の声を感じつつも、いつの間にか自分の頭の中で自分の声が再生されていることに気付いた。

（お前はいつまでも私。）

リヴァイアサンの言葉は強かった。プシュケには理解しづらいものであったけれども、プシュケの身体には、その強い言葉がしっかりと沁み込んでいった。そのまま、リヴァイアサンの声は、プシュケを通り越して、俯いたままのサファイアへと向いた。

（我が供物を欲する魔を宿し者よ……。）

サファイアの身体はぴくりとも動かない。だが、リヴァイアサンの声は、なおも語り続けた。

（私は運命を受け入れよう。お前が私を真の意味で屈伏させた時、お前は我が供物を手に入れる事が出来るであろう。）

再び、言葉でない声が空間に響いた。プシュケやサファイアだけでなく、この場にいる全員に向けて発せられている声。その声の霧

の中から、リヴァイアサンの姿が、再び現れた。その時、プシュケを捕まえようとしていたことを忘れていた双子の精霊たちが、はっと我に返った。

「ゲネシス！」

双子の片割れがそう叫んだ時、ゲネシスと呼ばれた剣士が己の剣を持ち直し、その鋭い瞳でリヴァイアサンを睨みつけた。その光景を見た瞬間、プシュケは寒気を感じた。

今、この場で、誰かが悲鳴をあげている。その声は、何かを思い出す声。何処かで見てきた光景を思い出す声だった。例えば、大空の聖地にて嘆きに暮れていた人狼のツバキ。例えば、大地の聖地にて寂しさに身を焦がしていた名もなきニュンペーの少女。絶対的居場所を失った彼らを鮮明に思い出すような悲鳴が、プシュケの耳に届いていた。

そして、それがやっと自分の口から発せられているものであると気付いた時、剣士は剣を握りしめて、リヴァイアサンの元へと走り出していた。

「やめて……」

プシュケの手に力が籠る。

嘆くだけではいけない。叫ぶだけではいけない。それだけでは、あのゲネシスとかいう剣士の足は止まらない。それだけでは、居場所を失った供物達と同じ末路を歩む事となる。そんな思考が、プシュケの意識を冷やし始めた。

握りしめる弓と矢をなぞり、プシュケは真っ直ぐゲネシスを見た。さっきまでプシュケを拘束しようとしていた双子は、今やゲネシスとリヴァイアサンの衝突ばかりに気を取られている。

そう、プシュケに出来ることは、これしかない。そして、そうすることが、主を救う術でもあるはずなのだ。

「やめてって……言っているでしょう！」

プシュケの構える弓が、しなった。

放たれた矢は真っ直ぐ剣士へと突き進み、その片腕へと突き刺さ

る。それを見届けた瞬間、プシュケの意識は曖昧となった。自分に出来るのは、剣士の歩みを止めること。自分に出来るのは、それだけだという考えが、プシュケの頭で再生され続けていた。

109. SKY PERISHED

109.

一つの命がバラバラに解体されていく様子を、ツバキは見つめ続けていた。ついさっきまでは反抗し、ついさっきまでは抵抗し、ついさっきまでは唸り、ついさっきまでは眼光の鋭かったその命は、黒い血にまみれた剣を払う剣士の目を、じっと見つめたまま、いつのまにか事切れていた。

ツバキにとって大きな存在であったものはいつしかただの肉片となり、かつて聖域だったこの場所には、血と肉と臓物とが散り散りに巻かれていた。深手を負いつつ暴れ戦ったジズ自身の散らしたものである。ツバキはそれをずっと見つめ続けていた。どうしようもなく、ツバキにはどうしようもなく、ただ命を奪われていくジズを見つめていることしかできず、ただ死んでいくジズを見つめていることしかできず、こうして今も、自分よりも格下であったはずのただの人狼女に抑えつけられながら、それすらも必要としないほど項垂れながら、屍のすぐ横に佇む剣士を、じっと見つめていた。

憎しみよりも先に、恐れがあった。何故ならこの剣士は、女の身でありながら、肢体をひとつも失うことなく、ニンゲンとは比べ物にならないぐらい尊大な生き物の命を奪ってしまったのだ。確かに、精霊の血をひく双子の助けはあった。だが、彼らの力等微々たるものだ。並みの剣士が相手ならば、絶対にこうならない。こんな展開を予想もしない。追い風を得た蟻がたった一匹で象に勝てるだろうか。それも純粋なる力比べのみで。

この戦いは、ツバキにとってはそういうものだった。だから、始めのうちこそ、オーロールとかいうこの人狼女に拘束されつつも、何処かに油断があったのだ。その油断を見事に突かれてしまった。

もう二度と、ジズは甦らないだろう。この大空が生まれた時から共に生まれたというジズ。彼が死ぬなんてことを、一体誰が予想しただろうか。

「ゲネシス……」

ふと、オーロールが低い声で呟いた。それは、仲間が勝利した事への誉れではなく、驚愕と恐れの入り混じった相手を探るような声に近かった。同じ人狼であるから分かった。この人狼女は、目の前のゲネシスという一人の女剣士を恐れている。恐れているからこそ、取って食いもせずにその影に潜んで何処までもついて行き、まるで手助けでもするかのように振る舞うのだ。

――つまり、これは単なる確認。

ツバキの頭が真っ白になった。そこからの記憶はさらに断片的なものだった。体中がいきなり熱くなり、自分の輪郭があやふやに感じられ、触覚も、視覚も、聴覚もおかしくなってしまった。ただ、見えるのは、それまでゆったり構えていたオーロールの焦りにも似た目。そして、どちらのものかは分からない、狼の血の匂い。それらがツバキの身体全体に急速に廻って行った直後、ツバキの意識は突然暗闇の中に落とされた。頭部に感じる鈍痛。全身を駆け巡る激痛。心をかき乱す悲痛。それらに包まれながら、ツバキはゆっくりと、闇へと落ちていった。

そして、再び目が覚めた時、剣士たちはもはやおらず、聖地はただの岩山と化していた。

110. TERMINAL

110.

アマリリスはもはや手を出さなかった。

動いた所でこの事態を止められないということはよく分かっていたし、そうである以上、動く必要性も感じなかった。ただ、見守るということだけに集中していた。

精霊の血を引く双子の片割れが呼んだ、ゲネシスという名。アマリリスの頭に、その名が刻まれる。今、目の前で起こっているような出来事をやってのけた張本人。天変地異の出来事をほぼ一人の力で巻き起こしたその主。人間の分際で、世界に牙を剥けた愚かな強者。

アマリリスはじっと、削がれる側の命を見つめた。

――これから、どうなるの？

削がれる側の命は、剣士の背中ごしにアマリリスを見つめていた。

（我が娘を、頼む）

声として届いたか、言葉として届いたか、アマリリスには把握出来なかった。ただ、今からただの有機物となり果てようとしている偉大なる大海の覇者は、男とも女とも取れぬ表情で、じっとアマリリスの返事を待っていた。もうこの生き物に残された希望は、安らぎしかなかった。

アマリリスは小さく肩を落とした。

誰も、これから起こることを知らない。アマリリスにも、剣士にも、恐らく、剣士によって首を落とされようとしているリヴァイアサンにだって、誰にもこれからの事なんて分からないのだろう。アマリリスの目に、閃光のような剣士の姿が映った。貫かれた肩を引きずりながら、もう片方の手のみで剣を握り、大いなる海の生き物のその巨体へと飛びかかる姿。そして、それを勇猛と迎え撃たんと

構えるリヴァイアサンの姿。
この数秒先の展開で、この世界がどうなってしまうのか、そして、それを誰が望んだことなのか、今のアマリリスには予想も出来なかった。
サファイアも、そして何よりプシュケも、そのプシュケを心配して近づいて来たランも、この瞬間を見ずに済んだ。恐らく、ディアナやバステト、そしてリヴァイアサンの子孫たちも、ゲネシスとかいう剣士の仲間たちも、アマリリスほどこの瞬間を凝視してはいないだろう。アマリリスと同等に凝視している者がいるとすればそれは、ただ一人、ゲネシスだけだろう。
ゲネシスが片腕で振るう剣は、まるで、稲妻のようだった。音のない稲妻。素早い動きだけが、その衝撃を生んでいる。リヴァイアサンはもはや、その一太刀を浴びるためだけに、ゲネシスを威嚇していた。
――いいわ。
アマリリスは心の中で呟いた。
――あの子を守ってあげる。
リヴァイアサンの表情が、やや緩んだように見えた。その大きな首の間を、稲妻が過ぎっていった。空と大地と海が、真っ赤に染まった瞬間だった。

111. REPENTANCE

111.

（おめでとう）

ジズにつき従っていた美しい人狼が愕然とした表情で膝を折ったその時、ゲネシスの耳にそんな声が届いた。ここにいる者の声ではない。それは、遥か遠くにいるはずのキュベレーの声だった。

（これで、空が解放されたわ）

淡々とした少女の声。今のラジカの全てを管理する、絶対的強者の呟き。狩るはずの魔女に、絡め取られたと気付いた時にはもう遅かった。ゲネシスの頭には、ラジカを元に戻すこと、それだけしかない。ゲネシスがこのキュベレーという魔女を殺した瞬間、ラジカは元に戻らない。

（あとは二つよ）

ゲネシスに告げる少女の声は、まるで見世物を楽しんでいるかのようだった。そう。これはきっと、己の力を過信して自分を殺しに来た愚かな弱者を甚振るという暇潰し。蟻を一匹一匹潰すような残虐な暇潰し。ゲネシスがラジカの為に身を滅ぼしていく姿を、面白がっているのだろう。

それか、この行動に、何か期待しているのかもしれない。

（次は何処から責めるの？　誰を粉々にするの？）

ゲネシスは耳を塞いだ。この声が耳から入るのではなく、直接頭に届いていることは分かっていた。けれど、耳を塞がずにはいられなかった。うるさくて仕方がない。言葉が届けば届くほど、笑い声が届けば届くほど、ゲネシスの心と体が揺れ動いた。

辛い。自分が情けない。浅はかな判断で、そして、力を過信するあまり、大変な事態を招いてしまった。もっと注意深くなるべきだ

った。自分の力を信じなければよかった。いくら剣との相性が良くても、相手を見る目がなければ意味がない。力があっても、敵わない相手の前にあっては意味をなさない。そのことを理解しておくべきだった。そう、ゲネシスはまだ若かった。そこそこの力はあっても、判断能力は育っていなかった。その事を、苦しい程思い知らされた。誰が強者で誰が弱者か、正確に判断出来ていなかった。そういった後悔の全てが、ゲネシスの身体を押しつぶし、内部からはち切れさせようとする。ゲネシスはそれが辛かった。

（情けない、だと。過去に捉われて、前を見ない方がよっぽど情けない、と思うがね）

不意に、オーロールの声が頭をよぎったことで、ゲネシスはその苦しさから一瞬だけ解放された。

（魔女狩りのくせに、心まで魔女に狩られるつもりかい？　今はそれどころじゃないだろう）

オーロールの言うとおりだった。

ツバキと名乗り、ツバキと呼ばれていたジズに捧げられた供物が、死んだような目でゲネシスを睨んでいた。生気は宿らず、死気ばかりが漂っている。だが、攻撃ではなく、それは訴え。絶対的居場所を失った絶望を、ゲネシスにぶつけているようだった。

「殺せ。私を、殺せ」

狼の唸り声がこだまする。

（供物の血と肉……）

オーロールが震えるように呟いた。魔物は特に同種食いを嫌うとゲネシスは覚えていたが、そうでもないらしい。それとも、影に潜んでいるオーロールがゲネシスにも分かる程身もだえするのは、この美しい人狼が、供物と言う特殊な存在だからなのだろうか。

ともかく、オーロールのそれは、まるで、ゲネシスにねだっているようでもあった。

「私を殺せ。殺せ……」

だが、ゲネシスの剣は煌めかない。ジズを殺した瞬間の感覚、そ

して、あのキュベレーの笑みだけが、全身に纏わり憑いて離れてくれない。

「お願いだ、殺せ、殺してくれ、死なせてくれ……」

「出来ない」

ゲネシスは一言、それだけを呟くと剣を鞘におさめた。

ツバキは完全に生気を失っていた。真っ白なその狼は、生きているにもかかわらず、剥製のようにさえ見えた。ツバキはそれ以上、言葉を発せなくなったようだった。ゲネシスの一言によって、完全に絶望へと落とされていった。

オフィーリアとルナが、ゲネシスの両腕を引っ張る。彼女達にはまるで、ツバキが見えていないかのようだった。ゲネシスはもうツバキの姿を見なかった。ただ、双子に引っ張られるままに、ジズという大いなる生き物を殺した過去も振り返らずに、その場を去っただけだった。

112. VENGEANCE

112.

世界が真っ赤に染まった時、プシュケの意識は白い靄に捉われてしまった。

禍々しい赤からまるでプシュケを守ろうとするかのように、プシュケの視界は段々と白くなっていく。そして、こみ上げてくるのは吐き気。咳が止まらず、涙と鼻水で息をするだけでも苦しい。まるで、自分と世界をつないでいたものが音を立てて崩壊しているかのようで、プシュケの頭の中では、その原因が何かを理解しようとする力と、それを頑なに拒否する力とがひしめき合い、混ざり合い、反発し合い、プシュケの身体を内部から引き裂いてしまうかのような莫大な力へと変わっていった。

自分の吐瀉物と埃と砂と、少しずつ降ってくる赤い霧のような雨とで身体はすっかり汚れていたけれども、そんなことに構っていられる余裕もないほど、プシュケの頭は混乱していた。視覚を襲う赤と黒、聴覚を襲う怒声と悲鳴と雑音、嗅覚を襲う鉄と生ものと汚物の匂い、触角を襲う液体と固体と粘々とした物体、味覚を襲う胃液と鉄の味。そして、それらすべてを遮断しようとしている意識というものの狭間で、プシュケは苦しんでいた。

――この状況は何だろう？　この状況はどうして産まれた？　この状況は誰が産んだ？

これらの疑問が、一気にプシュケの意識を覚醒させた。見開かれたプシュケの目には、肌を赤斑に染めた剣士の姿が映っていた。猛禽のような目を血走らせ、整った顔にひとつの表情も浮かばせずに、ただプシュケの射抜いた片腕のみを引きずらせて、血にまみれた愛剣を払い、ひたすら狙い続けた獲物の変わり果てた姿を何の感情もなしに見つめているその姿を、プシュケは捉えていた。

――こいつが……。

もっと力を込めて、もっと狙いを定めて、もっと多くの矢を射れば、こんなことにはならなかった。そんな後悔が、プシュケをゆっくりと、立ち上がらせた。

――もっと力を込めて、もっと狙いを定めて、もっと多くの矢を……。

震える手を動かして、少しずつ弓を構えるプシュケ。

「ゲネシス！」

誰かが叫んだ。しかし、誰だって構わない。プシュケの眼中には入らない。プシュケが見つめるのは、この剣士のみ。ゲネシスという女のみだった。

ゲネシスがプシュケに気付いた。表情は少しも変わらない。無表情に剣を払い、空を斬る。すでにその狙いはプシュケに向いていることは、明らかだった。しかし、プシュケは少しも怖くなかった。むしろ、望んでいた。このゲネシスという剣士だけは許せなかった。切り込む前に、血管を貫いてやりたかった。切り刻まれる前に、心臓に穴をあけてやりたかった。

「危ない！」

誰がどちらに放った言葉なのか、少しも分からなかった。きっと、ゲネシスにもきちんと届いていないのだろう。ゲネシスはまるでそれが聞こえなかったかのように、剣を持ちかえて、一歩、二歩、軽く跳ねるようにプシュケへと向かってきた。

113. CURIOSITY

113.

気味の悪い気配がした。

豊かな緑の風の中を、小鳥の囀りと虫のさざめきの中を、小鹿のように駆ける名もない少女。ただ、主からニュンペーとだけ呼ばれる精霊の少女は、その気配の来る方向へと近づいていた。少女にとって美しくて愛しいこの森だけれども、その少女をも危険にさらすような存在は多々あるものだった。けれど、近づいてくる気配は、そのどれとも違って、根本的に異なるもので、それでいて興味深いものだった。

――ベヒモス様が知ったら、叱られてしまう。

そう思ったニュンペーの少女は、たった独りで気配に向かって走っていた。あれほど分かりやすい気配を醸しながら近づいてくるような者たちだ。こちらが気配を殺せば、そう目敏く見つけることもないだろう。そう思いながらニュンペーは、ぐいぐいと気配に向かって近づいていた。

それが、いかに危険な行為であったかを悟ったのは、もう姿が見えるかと思われる程、気配が近くなった時だった。

――ニンゲンの匂いがする。

ニュンペーの少女は首を傾げた。気配に向かって走ってきた時から、匂いはあった。けれど、それは、ニンゲンなどの匂いではなく、狼の匂いだった。だから、てっきり彼女は、人狼が紛れこんできたのだろうと思っていた。けれど、違う。当り前の人間の匂いがするのだ。狼の匂いは別にある。二つの匂いは、まるで、仲良く寄り添っているかのように、混ざり合っていた。

少女にとってこれだけで、異常なことだった。そして、奇妙で、

不吉なことだった。人狼が足を踏み入れたというだけでも警戒すべきことなのに、その人狼と一緒に何故、人間がいるのだろう。そして、彼らから漂ってくる並々ならぬ禍々しさは、一体何なのだろう。

――ベヒモス様に知らせなきゃ……。

そう思い、知られぬように引き返そうとした瞬間、少女の身体は固まってしまった。音も気配も匂いも、濃く目立っていたこと。もしかしたら、自分は、油断していたのかもしれない、と少女はやっと気付いた。少女の左手の、目と鼻の先、茂みの中から、美しい毛並みの狼が顔を出して、少女をじっと見ている。ただの狼でないことは重々分かっていた。そして、その目が血走り、飢えを訴えていることもよく分かっていた。

狼は茂みから這い出ると、一歩、二歩と少女へと近づいて行った。金縛りにでもあったかのようにじっと見つめる少女を、同じくじっと見つめ、狼は静かにニンゲンの皮を被った姿へと変わった。

「大人しく、言う事を聞いてもらおうか」

その狼は、女だった。美しい女。しかし、少女には分かる。この姿は、かつて他人のものであったはずだということ。哀れな人間の女を襲って、無理矢理自分の物にしただけだということ。

「荒々しいことはしたくない。お前は喰ってもまずそうだからね」

少女は気付いた。この狼だけじゃなかった。匂いはまだあった。人間の匂いがあった。そう、この近くに、他にもいるのだ。

「お前は取り囲まれているんだよ。名前もないお嬢さん」

少女の身は強張った。内面を見透かされるほど気味の悪いことはない。ともかくこの状況から抜け出したい。そのために出来ること、それはまず、冷静になること。

「そうだ。冷静になって……」

――そう、冷静になって……。

少女の足に力が籠った。

「私の言う事を聞くんだ」

――ここから早く逃げなくては。

114. VICTIM

114.

リヴァイアサンが滅んだ。

その衝撃は、オーロールにも伝わっていた。獲物であるディアナとバステトもまた、大きな存在がひとつ消えたことに対しての衝撃から逃れられていなかった。オーロールもまた、この二人が動けないでいることを確認することは出来ても、すぐさま攻撃に移れる程、意識が整理されていなかった。

まさか、人間の身で生まれながら、自然の摂理に逆らってしまうことを本当に成し遂げられる力を持つ者がいるなんて、オーロールには信じられなかった。それは、ジズが滅ぼされた時も、ベヒモスが滅ぼされた時も同じだった。しかし、リヴァイアサンまでもを滅ぼしてしまう事に、驚いていた。

心のどこかで、きっと負けるだろう、きっと喰われて終わるのだろうという気持ちがあったのかもしれない、とオーロールは思っていた。ともかく、リヴァイアサンは滅んだ。滅ぼされてしまった。

残されたのは、海の供物……獲物の仲間であるプシュケだけ。

今のゲネシスは、大きな玩具を解体して興奮している怪物のようなものだとオーロールは把握していた。それにちょっかいを出すプシュケが、哀れだった。

――勝ち目なんてないのにねえ。

きっと、泣きつくだけなら、絶望し立ち尽くし恨み嘆くばかりだったら、ゲネシスは無視しただろう。しかしプシュケは違う。偶然であろうけれども、一矢をゲネシスの身体に打ち込んでいるのだ。

その瞬間、彼女の運命は決まってしまった。

――惜しいな。

オーロールは苦く笑み、まだ放心しているディアナとバステトを見やった。

――実に惜しい。

誰も、プシュケを助けになんていけない。あの人狼狩りの魔女、アマリリスでさえも、ゲネシス達に近づけないでいるのだから……。否、アマリリスは本当に、近づけないでいるのだろうか。ふと、オーロールは、独りだけ離れた場所で佇んでいる赤い魔女を見つめた。

アマリリスは、陶器のような皮膚に包まれた整った顔を、赤く染まった空に向けている。

まるで、そこに何かが現れるのを待っているかのように。プシュケとゲネシスの戦いに興味がないといった様子で、空をじっと見ている。

その直後だった。オーロールの持っている感性全てが、危機を伝えてきた。アマリリスによるものではない。それよりもずっと強く、危険で、関わってはならないような種類のものだった。アマリリスがじっと見ているのは、それ。

「……これは」

オーロールはすぐさま気配を殺した。現れようとしている者の目的。それは、まだ自分には向けられていない。今のうちに面倒は避けなくては、と本能が伝えてくる。幸い、誰もがこの状況に呑まれていて動けないでいる。突如現れた強い殺気のようなものは、そのなかでも、ゲネシスとプシュケというぶつかりへと向いていた。

――惜しいな。

オーロールは影に呑まれながら、静かに思った。

――実に惜しい。

115. FACE DEATH

115.

ニュンペーの少女は、必死に走った。

逃げ切れないと知っていても、相手が悪い事を知っていても、逃げる以外にいい方法なんて思いつかなかった。ただ、逃げる方法はいくらでもあった。ここは森の中。彼女を守る迷宮でもある。侵入者がその迷宮を隈なく知っているはずがない。だから、ニュンペーの少女は逃げられるだけ逃げた。適当な道を、走れるだけの早さで、ぐるぐるとぐるぐると。追手の姿がみえなくなるまで。

そして、もう自分が追われているのかどうかすら分からなくなった頃、ニュンペーの少女は己の主、ベヒモスの待つ場所へと向かった。侵入者をベヒモスの元へと連れていくわけにはいかない。でも、十分引き離した。もうこれで大丈夫なはずだった。

しかし、いざ、ベヒモスの待つ場所へと向かおうとした時、ニュンペーの少女は気付いてしまった。

「まさか……」

自分を見つめる視線。殺気立った視線。それだけで命を縮められてしまいそうなほど、強い視線だった。ニュンペーの少女は慌てて周囲を窺った。しかし、何処に居るかが分からない。見られているのは分かるのに、相手の姿が見えない。見えないことで、自分が何に監視されているのか、彼女には分かった。

「人狼……？」

「ご名答」

物陰から返答があった。ニュンペーの少女の身が竦む。ニンゲンでないとはいっても、人狼が怖いわけがなかった。追ってくる剣士たちも剣士たちだ。何故、人狼と行動を共にしているのだろう。何より、何故、自分を追ってくるのだろう。物陰からすっかりと顔を

出した美しい人狼の女を見つめながら、ニュンペーの少女はひとつだけ理解した。それは、今、自分がとても危険な状況下にあること。

「言う事を聞かない悪い子はちょっと痛い目にあって貰わないと、だね」

人狼の女がくすりと笑った。その笑みが、ニュンペーの少女の身体を凍りつかせる。ニュンペーが人狼に勝てるはずがなかった。逃げることしか抵抗のしようはない。でも、もう存分に逃げた。ニュンペーの少女には、もう、成す術もなかったのだから。

ただ、心の中で、助けを求めて嘆くのみ。

――ベヒモス様……。

116. DELICACY

116.

ぶつかり合おうとしていたプシュケは、直前でそれを止めた。自らの意志ではなく、どちらも、もっと強大な力を持つ何かに動きを縛られたといった方が正しかった。今、この場での命の危機を体中で感じ取っていた。が、動くことも叶わず、ゲネシスを睨んだ状態で制止していた。

ゲネシスもまた、動くことが叶わないようだった。額には汗を浮かべ、睨んでいるのはプシュケだが、その警戒の心が向いているのは、別にあった。

たった今、リヴァイアサンが滅んだその場所に、この場に居なかった者が現れた。その者が現れた瞬間、逃げまどうリヴァイアサンの子孫達の悲鳴が、ぱったりと止んだ。何がどうなっているのか、動くことのできないプシュケには分からない。

だが、この状況が非常に危険なことだけが、よく分かった。

「お久しぶりね、ゲネシス。やっぱりあなたはすごいわ」

少女の声だった。とても幼く、ランよりも年下であろうとプシュケは思った。だが、それは上辺だけの事。この幼い声の裏には不気味なほど、警戒すべき何かが隠されている。

ゲネシスが睨んでいるのは、この少女だった。姿を見ることは、出来ない。プシュケも、そしてゲネシスも、今は、視線を動かすことすら難しい状況だった。

ただ、ゲネシスは力を込めながら、口を開いた。

「キュベレー……」

キュベレー。それが少女の名なのだろうか。プシュケの心にはじわじわと少女から発せられる気が入り込んできていた。只者ではない気配。それに似た気配を、プシュケはよく感じ取っている。そう、

それは、アマリリスのものとよく似ていた。アマリリスの醸す気配に、とてもよく似ていた。

本物の、魔女の気配。

それも、ただの魔女ではない。

「どういうこと……」

プシュケはぽつりと言葉を漏らした。それすらもかなりの体力を要した。

「キュベレー？　あの少女は、何者なの？」

「お前に教える義務はない」

ゲネシスはそう言った。苦しんでいることは、プシュケの目にも明らかだった。苦しいのはプシュケも同じだ。しかし、それだけでない。ゲネシスを苦しめる何かを、キュベレーとかいうあの魔女は、持っている。

「おまけに、供物もおびき出してくれるしね」

キュベレーの声が移動した。何処に行ったか考えるまでもなかった。プシュケの背後に、非常に冷たい気配と吐息が、瞬時に現れたからだ。うなじにかかる冷たい吐息に、プシュケは身震いした。腕を掴み、体に触れるその手は、生きているとは思えないほど冷たく、妖艶だった。

「美味しそうだわ。本当に、美味しそう。カニバリストのニンゲンの気持ちもよく分かる。だって、こんなに可愛くて、美味しそうなんだもの」

幼い声がいっそう不気味だった。サファイアとは全く違う捕食者の声。どう頑張っても動けないプシュケは、今すぐに助けを求めたかった。だが、声が出ない。

「あのニンゲンが起きる前に、ね、すぐ済ませてあげる」

キュベレーの手に力がこもる。プシュケの頭の中が真っ白になった瞬間だった。

117. HOSTAGE

117.

――だめ、だめです。

ニュンペーの少女は必死に祈っていた。殴られて、蹴られて、噛みつかれて、引っかかれて、地面に叩きつけられて、体がぼろぼろになっても、肉を噛み千切らんばかりの人狼の吐息を間近で感じながらも、ニュンペーの少女は必死に耐えていた。今の少女の心にあるのは、後悔。一瞬とはいえ、救いを求めたことへの後悔。

――絶対にだめ。

暴行を受け、痣だらけになりながら、血まみれになりながら、ニュンペーの少女は察していた。人狼の女が何を目的としているか。奇妙にもこの人狼の仲間らしかった人間達が、何故姿を見せないのかということも。ニュンペーの少女の体は、もはや動かなかった。いや、動かそうと彼女が思えば、動いたのかもしれない。だが、彼女にはもう、立ち上がって逃げるという余裕すらもなかった。

ただ、今の彼女を支配しているのは、祈り。

――どうか。

人狼の両手が少女の首筋を掴んできた。だが、このまま殺されたとしても、少女はもう助けを求めようなどと思わなかった。惜しむべくは、たった一度。たった一度、助けを求めてしまったこと。そのたった一度を見逃すような者ではないのだ。

――ベヒモス様。

「声も上げられないの？」

人狼の女が囁いた。やっている事とは裏腹に、水のように透き通った声だった。じわじわと人狼特有の力がニュンペーの少女の細い首にかかってくる。じっくりと襲い掛かってくるその苦しさと不安に、少女の体は強張った。

「助けをもとめてみなさいよ」
人狼の女は少女の耳元で囁いた。
「そうしたら、もっと楽に殺してあげる」
――ベヒモス様。
助けを求める。それこそが、この人狼達の狙いだとニュンペーの少女は察していた。彼らの狙いは自分の主。そう分かった以上、みすみす主を危険にさらすような真似は出来ない。だからこそ、少女は悔やんだ。助けを求めてしまったことを。その声が、ベヒモスに届いてしまったことを。
――……お逃げください。
ニュンペーの少女が一向に助けを求めないため、人狼の女は冷徹な眼差しで少女を見降ろした。少女はまっすぐ人狼の女を見つめている。怒りでもなく、恐れでもない。その目に映っているのは、焦燥。主を守るために、少女は急いで自分を殺そうとしていた。
人狼の女はそれを見て、今度は冷たい笑みを浮かべた。
「だめよ。それは反則。そんな悪いことする子は、生きたまま内臓を引きずり出して食べてあげるわ」
そう言って人狼の女はゆっくりと、ニュンペーの少女の腹部をなぞっていく。その感触によって、必死に自分を殺そうとしていた少女の意識は、一瞬にして恐怖と緊張に縛られてしまった。
その時だった。
遠くから地鳴りが聞こえ始めた。それが何者かの足音であることは、数回響き渡ってから理解出来た。ニュンペーの少女にも、人狼の女にも、それが誰の足音であるか分かっていた。
――ダメ。
人狼の女は音のする方向を見やり、両手で少女を地面に押さえつけた。
「来た」
動けない少女は懸命に首を動かして、その音のする方向へと目をやった。足音がどんどん近付いてくる。木々が数本倒れていくのが

見えた。そして、すぐ近くの木々が倒れると、少女にとって、この場に一番来てほしくなかった者の姿が見えた。

「ベヒモス」

人狼の女がほくそ笑んだ時、周囲の茂みに動きがあった。隠れていた人間達が動き出したのだ。それを感じ取ったベヒモスはちらりと周りを見渡してから、それでも落ち着いた様子で、じっと人狼の女とニュンペーの少女とを見比べた。

老婆のように溜め息をついて、ベヒモスは言った。

「私の可愛い娘を返してくれるかしら」

118. AWAKENING

118.

――何が起こったの？

プシュケの体のすべての感覚が、震えていた。襲い掛かる衝動。全身を覆う恐怖。肉を千切られて、噛みつかれて、バラバラに解体されるという緊張。それらが一瞬にして、止まった。だが、プシュケの視界は白いままで、何も見えない。ただ、感じるだけ。

すぐ傍で感じる恐怖はそのまま。じっと動かず、ただ吐息だけがプシュケの体に当たってきた。

「もう動けないの？」

聞こえてくる声は、目の前にまだ居るはずのキュベレーの声ではなかった。プシュケの耳に馴染みきった声。透き通る色に、切れ味のいい刃を持たせたかのような不思議な声。

「アマリリス？」

プシュケの問いに、アマリリスは答えなかった。だが、それは確かにアマリリスだった。プシュケを喰おうとしている魔女と、プシュケを殺そうとしている剣士の傍に、アマリリスの鋭い視線を感じた。

「とても面倒なことをしてくれたわね。抑えるのも大変なのに……」

アマリリスの言っている意味は、プシュケには分からない。だが、不穏なことには違いなかった。アマリリスの声に含まれている焦燥からも分かる。プシュケの体を抑えるキュベレーの手に力がこめられた。消えていた威圧的な気配が、また少しずつ漏れ始めている。

「あなた、誰？　仲間にしては面白い子ね。人狼を殺したくて仕方ない子。今のわたしには、あなたが好きそうな世界をあなたのために作りだすことも出来るのよ」

「それで買収しているつもり？」

「あなたはその欲望に抗う事も出来ない」

少しずつ、プシュケに闇が近づいて来ているのが分かった。それは、今話しているキュベレーではない。動けなくなっているはずの剣士でもない。もっと獣に近い何かが、プシュケを狙っていた。キュベレーも、剣士であるゲネシスも、さらにはプシュケを助けようとしているアマリリスさえもを敵視している闇が、少しずつ、少しずつ、プシュケに近づいて来ている。

そして、プシュケは、その闇が何なのか、すでに分かっていた。

119．SAPPHIRE

119．

大空として生まれ、大空と一体化し、大空を支配していると言われていたジズ。大地として生まれ、大地と一体化し、大地を支配していると言われていたベヒモス。そして、大海として生まれ、大海と一体化し、大海を支配していると言われていたリヴァイアサン。

人間の身でありながら、彼ら三大獣と呼ばれる存在を滅ぼしたゲネシスは、恐怖に慄いていた。人狼という人間と何ら変わらない程度の力を持つ生き物ばかりを狩るだけの魔女、アマリリス。自分では三大獣に手も出さなかった魔女、キュベレー。そして、今、目の前で繰り広げられている光景が、とっくに呪縛から解き放たれているはずのゲネシスの身を、雁字搦めに縛っていた。

リヴァイアサンを敬愛し、リヴァイアサンに食され、一体化するために生まれた少女。さっきまで、ゲネシスに向かって憎しみの籠った弓矢を放ってきたプシュケという名の娘。アマリリスは彼女を守ろうと動いていた。キュベレーから？　プシュケの血と肉を狙う彼女。

きっと、とゲネシスは淡々と感じていた。ジズを敬愛していた美しい人狼の女。ベヒモスを敬愛していた無垢なニュンペーの娘。キュベレーに言われたターゲットでない彼らの命を、奪う必要はなかった。だから、見逃した。けれど、とゲネシスは感じていた。

――彼女達は、きっと……。

だが、一人で動けないプシュケを得たのは、キュベレーではなかった。

「プシュケ！」

アマリリスが悲鳴を上げた。不思議なほどに、違和感のある声。それは、悲鳴というものに慣れていない声だった。その直後、ゲネ

シスには何が起こったのか、分からなかった。目が追いつかなかった。空高く、飛び上がる黒い影が見えたのは確かだった。人間の物とはとても思えない眼光と、その素早さ。いや、もしかしたら、そんなに急速なことでもなかったのかもしれない。

ただ、ゲネシスが気付いた時、アマリリスが必死に守ろうとしていたプシュケは、血に染まっていた。

そして、ゲネシスの目に映るのは、プシュケを彩る血と同じくらいの赤の衣に身を包むアマリリスの姿。青ざめた顔と、宝石のような目で、真っ直ぐ、呆然と、プシュケを見つめ、そして、呟いた。

「サファイア……」

【120】　DEATH

120.

思えば、生まれてこの方、あたしを包み込んでいる色はさまざまあったけれども、その中でも一際青い光が始終あたしの心を掴んで放さなかったような、そんな気がする。新鮮な血潮が煮えたぎったような情熱的な赤も、沢山の命が生み出したような美しい緑も、どれも好きだったけれど、それでもあたしの心にずっと引っかかる色は、青だった。

けれど、その色は、あたしの色ではない。あたしの色と呼ぶのは躊躇われるくらい、あたしはその色に惹きつけられていた。あの色は、あたしとは違う。もっと高貴で、もっと畏怖すべきもの。あたしのすべてを渇望させ、あたしのすべてを崩壊させる色。

その色がどんどん、どんどん、あたしの存在を侵していることなんて、とっくに気付いていた。あたしの奥深くまで侵して、あたしを内部から腐らせていくこの色のことが、とても怖くて、とても不気味で、大嫌いで、けれど、どうしようもないくらい愛していた。

あたしを包み込むこの色。大空の色でもなければ、況してや、あたしに縁のあるはずの大海の色でもない。もっと違う青。輝く青。あたしの心の奥深くを捕えて、あたしを壊していく青。

その青が、あたしの目の前に姿を現した時のことを、あたしは永遠に意識がなくなってしまうその瞬間まで、忘れないと分かっていた。その色が、その最期の時まで、あたしの目の前で輝き続けているのだろうことも、分かっていた。

だけど、その日が本当に来てしまうなんて、思いもしなかった。あたしの目が、あたしの涙に混じって、赤く染まっていくのを呆然と見つめながら、段々と迫ってくる永遠の闇を感じながら、貪られる感覚に身を委ねて、その先に、希望も絶望もなにもない真っ白な

世界があたしを待っている事を知った。
苦しかった。痛かった。きっと、あたしは泣き叫んでいたと思う。声にならない声を張り上げて、最期の時まで悲鳴を上げていたと思う。
でも、その一方で、この痛み、この苦しみが、まるであたし自身に起こっている事ではないような気がして、まるで他人事のような気がして、ただただ悲しいという気持ちと共に、あたしは死にゆくあたし自身を見つめていた。
その終わりの瞬間まで、あたしの目に映っていたのは、青。
サファイアの目だった。

121. BE MISSING

121.

これまで、アマリリスが一番恐れていたのは、自分だった。人狼を見つけた時の自分。人狼を殺す時の自分。そしてそれを想像している時の自分が、そして人狼に引っ張られるままに歩いている自分が、一番怖かった。その恐れは、ある時は意識的で、ある時は無意識的なものだが、確実であり、かつ唯一のものだった。しかし、今、この瞬間、アマリリスの恐れは、変容した。

アマリリスの目に映る、赤。そして、その赤を貪る、宝石のような青い目。あの赤が、さっきまでアマリリスのよく知る、命ある存在だったなんて、想像もつかなかった。辺りに飛び散る精霊の血が、時すらも凍りつかせる。大いなる力を持つ魔女であるはずのキュベレーでさえも、その光景に目を奪われていた。

サファイア。ただの人間であるはずの彼女が、今のアマリリスには人狼とは比べ物にならないほどの、凶悪な怪物に見えた。

リヴァイアサンの最期を見届け、守ると誓った命が、ほんの数十分の間に消えてしまったという喪失感が、アマリリスの中で生まれた。それは、初めての喪失感だった。人狼を殺し続けたいという欲求が満たされた時の喪失感とは全く違う。守りたかったものが、壊されてしまった。そして、今も、壊され続けている。その喪失感が、アマリリスの動きを封じた。

「ニンゲンのくせに……」

呟いた声に、朦朧としていたアマリリスの意識が戻った。呟いたのは、キュベレー。青ざめたその顔は、憤慨の心に満ちていた。そう、サファイアが貪っているものは、キュベレーが狙っていたもの。彼女にとっては、横取りされたも同然。それも、人狼のような魔物でも魔女でもなく、ただの人間に横取りされたのだから、想定外か

つ腹立たしかったのだろう。その魔女の怒りは、アマリリスにとって、警戒すべきものだった。

――逃げなければ。

アマリリスの頭に、真っ先にその選択肢が浮かんだ。この場はもう取り返しがつかないほど危険だった。目があったただの人間であるゲネシスも、同じことを考えているような素振りを見せていた。

アマリリスはすぐに辺りを見渡した。

探しているのは、連れ逃げるべき者達。

――みんな……。

アマリリスの目に、黒いクーガーの姿が映った。それに乗るバステトの姿も。見つけたのはその二人だけ。もう一人。もう一人がいない。バステトを乗せて高く跳躍したクーガーが、アマリリスの目の前に着した。その獣の目に促されるままに、背中に乗るバステトの手を取る。

「逃げよう。なんだかヤバいことになってきた！」

バステトがクーガーの背中を軽く叩く。

――もう一人。

アマリリスの目が、移り変わる景色を捉え続ける。

――何処にいるの？　ラン。

122. A FIND

122.

もうここはだめだ。ゲネシスはすぐに理解した。キュベレーが女を睨んでいた。サファイア、と呼ばれていたあの女を。サファイアの体はその名とは裏腹に、真っ赤に染まっていた。いや、赤ではない。もはや、茶色に近い赤。その色が何なのか、三体の大いなる獣を倒してきたゲネシスはよく知っている。だが、獣を倒した時とは全く違う感情が、ゲネシスの中でうごめいていた。

キュベレーの目が光った。その瞬間、ゲネシスの体は自然と動いた。

――逃げなければ。

キュベレーの「怒り」に少しでも触れてはいけない。そう本能が告げている。己が目的をあと少しという時に邪魔された彼女の「怒り」が、魔力となって溢れだしてきている。それが破裂して、周囲に飛び散る前に、この場から遠く離れた場所へと逃げなければいけない。ゲネシスは、そう判断した。

「オフィーリア、ルナ、どこにいるんだ?」

ゲネシスの声が、姿の見えない彼らに届くわけがなかった。血の匂いのする霧が、ゲネシスの行く手を遮ろうとする。その霧は、音すらも混沌とさせ、どこかにいるはずの双子を探す手掛かりすら残させない。

ゲネシスは、自分がどこを走っているかも分からない状態で、ただ前へと逃げていた。とにかく、前へ。キュベレーの「怒り」から遠ざかる場所へ。そうしなければ、双子と合流するどころじゃない。ゲネシスにとって、今の状況では、双子が各々の本能通りにこの場を逃れていることを願うことしか出来なかった。

(こっちだよ)

その時、声がした。頭の中で響く声。人外の女の声。間違いなく、オーロールの声だった。ゲネシスが振り返ると、また声がする。

（そっちじゃない）

はっきりとした声。彼女にはゲネシスのいる場所が分かるのだろうか。ただ、今は、自分の影にオーロールが潜んでいるわけではないことは、ゲネシスにも感じ取れた。

（そうだ、こっちだよ）

再び前を見るゲネシスに、オーロールはそう言った。　声のする場所へ慎重に向かっていくうちに、濃霧の間から少しずつオーロールの姿が見えてきた。

さらに近づくと、オーロールの隣には双子の姿が。そして、もうひとつ、見慣れない影が、ゲネシスの目に映った。

「それは？」

ゲネシスはすぐに、オーロールに訊ねた。

オーロールは呆れたような表情で、双子を横目で見て、答えた。

「双子が連れてきたんだよ、双子が」

「わたしは違う！」

即座に反論したのは、オフィーリアだった。オフィーリアは隣に佇む双子の片割れを指差し、強い口調でゲネシスに言った。

「ルナが勝手に拾ってきたのよ！」

ルナは無表情と言ってもいいくらい感情を無くした顔で、ゲネシスを見上げていた。その瞳は虚ろで、何もかも吸い付くしてしまうかのようにゲネシスには思えた。

ゲネシスは、改めて、ルナの拾ってきた、《それ》を見つめた。

がたがたと震え、どう見ても羊のものにしか見えない耳を、ぴったりと顔にくっつけている。

その円らな瞳は、この場にいる誰もから逃れるように、ただ地面を見つめており、緊張と恐怖がゲネシスにも伝わってくる。

「おい」

ゲネシスは、がたがたと震える《それ》に、短く声をかけた。し

かし、その声が届かなかったのか、《それ》は全く反応しなかった。
「おい！」
強い口調で声をかけると、《それ》はやっとゲネシスを見上げた。大きな目は、獣そのもの。《それ》は、亜人のなかでも、より獣に近いようにゲネシスには思えた。
「お前、名前は？」
ゲネシスの問いに、《それ》はじっと見つめるばかり。言葉は通じないのだろうか。
しかし、《それ》の瞳の映す虚空は、やがて、ゲネシスをしっかりと映した。
ゲネシスは気づいた、いま、やっと、《それ》の頭に自分が刻まれた。
《それ》は、呆然とゲネシスを見つめると、俯き、吐き捨てるように呟いた。
「……ラン」
涙と汗が、ランと名乗った亜人の影を濡らしていた。

123. GUIDE

123.

ディアナは黒いクーガーのままで、アマリリスとバステトに寄り添うように座り込んでいた。その黒い毛皮に身を潜めて、アマリリスとバステトは息を殺しながら、周囲の気配を窺っていた。

かつて大いなる海の覇者と呼ばれていた生き物、そして、その子孫達の住んでいた村のあった場所は、いまはもう無くなっていた。そこを取り囲むのは、黒い霧のような瘴気。付近の里々で、そこに迷い込んだものはたちまちのうちに体の内部から命を奪われていってしまうと噂されるようになるのにもさほど時間はかからなかった。そんななかで、ぼそぼそと呟くように話していたのは、バステトだった。

「……ともかく、ランを探さなきゃならない……違うか……わたし、間違ったこと言ってるか……？」

バステトが憔悴したように言っていたのは、話しかけている相手であるアマリリスが何も言わないからだった。何も言わず、感情すらも宿していないかのような顔で、バステトに寄り添っていたのだ。その様子には、クーガー姿のディアナも怪訝そうに窺う程だった。

「なあ、アリス……返事してくれよ……アリス……」

バステトは俯いた。アマリリスの様子はまるで、魂の入っていない空っぽの人形のようだった。人形でさえも、今のアマリリスよりも魂の入ったモノがあるというのに、アマリリスは屍と表現するよりも、ずっと無機質な存在だった。自分がどんなに呼びかけてもアマリリスの様子が変わらないことを悟ると、バステトはますます落ち込んだ。どうすればいいのか、バステトにも分からない。だから、アマリリスの傍にいるしかないのだ。ディアナと共に寄り添ってい

るしかない。
　ふと、クーガー姿のディアナが、一点を見つめ、唸りだした。こんな場所に誰かいるとすれば、誰であろうと敵である。バステトは焦った。アマリリスはそれでも動こうとはしないのだから。しばらくすると、ディアナが唸っていた方向から、こちらへと近寄ってくる影が見えてきた。
「ディアナ、どうしよう……ディアナ？」
　バステトが呼びかけた時、ディアナが唸りながらその影に走っていった。追いかけようと思ったが、バステトはそれを留まった。今のディアナはクーガーなのだ。後を追いかけたところで、何になるのだろう？　それに、バステトは恐ろしかった。クーガーのままの姿でいると、時々ディアナは人間としての感覚を失ってしまっている気がしたのだ。ともかく、手癖が悪いだけのただの人間であると実感しているバステトにとって、この状況は一番恐ろしく破滅的なものだった。
「どうしよう……どうしよう……」
　しかし、どうしようもない。ただ、見守っていることしか出来なかった。しかし、バステトの心配をよそに、ディアナはしばらくするとヒトの姿で戻ってきたのだった。しかし、その目はとても鋭く、獣の感性が強く残ったままの目をしていた。
　ディアナの後からついてくるようにやってきたのは、彼女よりも随分背の低い影。よく見ればそれは、魔物だった。バステトは顔をしかめた。その魔物は野牛と虎を足して二で割ったような姿をしているくせに、二足歩行をしていて、立派な毛皮があるというのに服まで着ているのだ。それはとても滑稽で、バステトにとって、何故かとても不快な感情をもたらすものだった。
「そいつは何なの？」
　バステトは思わず強い口調で言ってしまった。しかし、ディアナは声をかけられて少し人間の感性が戻ってきたのか、獣としての荒々しさがやや治まった目で、その魔物を振り返り、呟いた。

「分からない」
それは、バステトにとって、得とならない情報だった。
だが、バステトが再び口を開く前に、その魔物の方が口を開いた。
「ニンゲンに魔女、半獣……君達はどうしてこんな所に居るのかね？」
まるで、富豪の紳士のような口調で、その魔物は言った。バステトはますます顔を引き攣らせた。どうしてここに居るか、それはバステトの方が彼に聞きたい程だった。その姿はまるで、町の絵師が描く夢魔のようでもあるのだ。ともかく、不快だった。
ディアナはじっと警戒した目で見ていた。
「あっちで気配がしたから様子を見てきたの。人狼じゃなかったけれど、勝手についてきたのよ」
「勝手にとは失礼な。突然クーガーがやってきたと思ったら、目の前でニンゲンの姿に変わって去っていく。ワタクシは、それを追わない程、冷静な人間でもないのでね」
よたよたと歩くその姿は、とても奇妙だった。
「ともかく、君達はどうしてこんな場所にいるのかね？　ここがどういう場所か知っているのかね？」
「知っている」
突然、アマリリスが口を開いたので、バステトは驚いてしまた。そんなバステトを余所に、アマリリスは何かを諳んじるかのように、ぼそぼそと話しだした。
「海、陸、空の覇者が死んだ。それに捧げるモノも壊された。それだけでも歪むというのに、肉を手に入れたただのニンゲンの女に、全てをめちゃくちゃにされた」
バステトには、やはりよく分からなかった。ディアナもまた同じだった。
「キュベレーはたいそう御怒りよ。かつて女神と讃えられた面影は、もはや残ってはいないでしょうね。貴方は知っているのかしら。こちらの世界で、今、何があったのかを」

「知っていた。だから、ワタクシは貴方達を見つけた。だが、あちらの世界でそんな事があったのは知らなかった。しかし、疑問だ。ただのニンゲンと君は言ったね、魔女。どういう事かね、それは本当にニンゲンなのかね？」

紳士風の醜い魔物にそう問われ、人形のようだったアマリリスの表情が微かに動いた。青く透き通るような眼が、魔物へと向いた。さらりと動く金の髪が、とても綺麗だった。

アマリリスはじっと魔物を見つめ、淡々とした様子で答えた。

「分からないわ」

124. FIND A CLUE

124.

ランは純粋な子どものような雰囲気を持った者だった。だが、年齢などゲネシスに分かるわけもない。オーロールは彼女を非常食程度にしか思っていないようだったが、普段は大人しいルナが頑なに守るため、誰も手出しできない状況に居た。ルナの片割れであるオフィーリアでさえも、勝手にランに触れることすら出来なかったのだ。ランは何も覚えていなかった。ゲネシスが二、三、質問をしても、全く答えない。ただ、無垢な瞳をじっと澄ませてゲネシスを見つめるばかりである。ゲネシスは早々からこのランに質問をするという事を諦め、これからどうすべきかを考え始めた。

「子どもは諦めろ。魔女も人食いももはや手がつけられない」

それがオーロールの意見だった。所詮、人の血を啜る人狼の意見だ。そう分かっていても、ゲネシスの頭にも限界という二文字は過ぎっていた。たった一人の少年のために、この世の成り立ちを壊そうとした罪を感じながらも、それでも、少年を救いたかった己の気持ちは無駄にしたくなかった。だから、ゲネシスは静かに剣を握っていた。

「魔女を探す。彼のために」

ゲネシスの重たい言葉に、オーロールは苦笑を浮かべた。しかしそれは、まるで、最初から分かっていたかのような笑みだった。

「どうせ、世界は壊れてしまったのだ。お前が壊したようなものだ。命尽きるまで、同行させてもらうよ」

オーロールの言葉を、ゲネシスは黙したまま受け止めた。人に成りすまし人肉を喰らう人狼の考えなど、ゲネシスには分からない。だが、そんな事、どうでもよかった。誰がついてこようと、誰が離れようとも、ゲネシスには、時を止めてしまったラジカと、そんな

魔術を彼にかけたキュベレーのことしか頭になかった。キュベレーの行方は分からない。あの人食いとともに何処かへ行ってしまった。離れるべきだととっさに判断した自分が憎かった。そして、見失ってしまうまで気付かなかった自分のことが憎かった。

「ゲネシス、あなたは人間なのに、人間以上のことをやっているのよ」

オフィーリアが突然口を開いた。

「だから、仕方ないことなの。本当ならば、ラジカだって、諦めるべきなのよ」

「そんな事……」

ゲネシスは思わず反論しそうになって口を噤んだ。自分と、自分を守る剣が、この世界の秩序を乱したという事態が現に起こっている。魔女に従わざるを得なかったとはいえ、この世界を守っていた三体の神を壊し尽くした事は、紛れもない事実だ。たった一人の少年のためだった。しかし、その約束すらも守られなかった。あの魔女たちのせいで。

はっと、ゲネシスはルナが守っている獣、ランへと視線を移した。

「お前、ランといっかな、お前は確か、赤い魔女たちと一緒に居たね？」

問いかけるも、無駄なようだった。ランはじっとゲネシスを見つめたまま、震えている。その様子をじっと見つめて、ゲネシスは肩の力を抜いた。それはそうだろう。自分を対等に扱わない目線でじっと見つめられて安心出来るはずもない。それに、この場には人狼までもいるのだ。ゲネシスは出来るだけ、優しさを込めて、ランに話しかけた。

「怯えなくていい。攻撃手段のない者に、無駄に危害を加えたりはしない。約束する。この狼も、お前を食べたりしない」

勝手にそう言われて、オーロールはちらりとゲネシスに視線を送ったが、ゲネシスはそれを無視し続けて、ランだけを見つめていた。

「赤い魔女の事を教えてくれ。お前達が何をしていたかを教えて欲

しいんだ」
ゲネシスの真っ直ぐな視線に、ランの瞳が揺らいだ。

125. CLIENT

125.

ディアナとバステトがこの事態を把握するのにはかなりの時間を要した。それでも、なお、理解しきったとも言えず、二人はただアマリリスの判断に全てを委ねるしかなかった。だが、突如現れた紳士風の魔物はそんな二人の理解を待たずに、三人を誘い始めた。

「陰が覆い尽くすこの世界へようこそ」

魔物の声は深く、おどろおどろしいものだったが、アマリリスは全く動じていなかった。魔性のものを半分引いているディアナでさえもこの世界は恐ろしいものだった。歪んでしまった、とアマリリスは言ったが、ディアナもバステトも、それを理解することが出来なかった。まず、ここは何処で、どういう場所なのか、この魔物は何者なのか、それを説明して欲しかった。だが、アマリリスも魔物も全く説明をしてくれない。ディアナとバステトは、仕方なしに彼らについて行った。

辿り着いたのは、村のような場所だった。だが、人間は一人もおらず、ここへと連れてきた魔物と同じ種族の者達が住んでいるようだった。いわば、魔物の村だ。こんな場所があるなんて、ディアナもバステトも信じられなかった。村の住人たちにしてみれば、ディアナ達のような人間が来ることが珍しいといった様子で、三人とも、刺さるような視線を避けることが出来ずにいた。

「しばしの辛抱を。村長を紹介するのでね」

紳士風の魔物はそう言ったが、ディアナもバステトも全く安心出来なかった。この場で一番肝が据わっているのは、黙ったままついて行くアマリリスだろう。だが、アマリリスの心情も伝わってこない以上、二人が安心出来る瞬間など到底なかった。紳士風の魔物が消えてすぐに、別の魔物達が数人やってきた。ディアナとバステト

は、その魔物達の異質さに違和感を覚えていた。魔物にしては、あまりに人間くさいのだ。自分達が戦ってきた魔物達と、何かが違う。こうして彼らを見ていると、魔物もまた人間と何ら変わりないようにすら見えてくるのだ。

「あなたがたがあちらから迷い込んだ者達ですね。わたしがこの村の長です」

そう言って会釈したのは、魔物達の真ん中にいる白い魔物。恰幅のいいかなり大柄のその魔物は、アマリリスをみて、眉を潜めた。

「ふむ、人間に半獣に魔女ですか。変わった組み合わせだけれど、生き延びれるのも納得がいく」

「それで、貴方達は、あたし達に何を求めているの？」

村長の話を遮る様に、アマリリスが口を開いた。彼女の余裕のある態度は、相変わらずだった。ディアナとバステトは怪訝にそのやりとりを窺っていた。無駄に口出しは出来ない。どうせ、アマリリスが決めた事について行くしか道はないのだ。

村長はアマリリスをしばし見つめ、ふむ、と顎を掻いた。

「なるほど、さすがは魔女。察しの早いことですね。あなたの思っている通りです。わたし達は、この世界に迷い込んだあなた達に縋らなくてはいけない。縋らなくてはいけない事があるのです」

廻りくどい言い方をして、村長は目で他の魔物に何かを命じた。その魔物が去るのを待ってから、村長は再び口を開いた。

「あの混沌を生き延びてこちらに迷い込んだあなた方の力を見込んで相談しましょう。こちら側とあちら側の崩壊を避けるためにも。あなた方の力をお貸ししていただきたい」

「あたしに出来る事なら」

アマリリスの短い言葉に、村長はゆっくりとひとつ頷いた。

「簡単な事。この地を抑える杭を見つけ出し、壊してくれればそれでいいのです」

126. STRANGER

126.

ゲネシス達は、大いなる海の生き物が没した地から遠く離れた場所にある町へと逃れていた。結局、ランは何も思い出せないのか、赤い魔女について一言も喋らず、さらにあまりにも問い質せば、ルナが怒りだすので、ゲネシスも手を出すに出せないのだ。

「連れていれば如何にもなるだろう？」

そう言ったのはオーロールだった。彼女は彼女でランを非常食としか見ていないのは相変わらずだったが、それでも、ゲネシスの肩を持っているのか、無闇にランに襲い掛かるような事はなかった。オフィーリアは、ルナの意思を尊重しているようだった。いつもならばルナの決定権すらも握っているように思えるオフィーリアだったが、今回のこのルナの強い意思には、驚いているようだった。

町の中でも、ルナはランの手を握ったまま放さなかった。行きかう人々の全てからランを守っているかのように、ルナの目は煌々と輝いていた。そうして、町の宿に着くまでずっと、ルナはランを守り続けた。

「そいつが何を感じているかは知らないけれど、気味の悪いことね」

オーロールがゲネシスの影の中からそう言った。人狼がそんな事を言うのも変な話なのだが、そのくらいルナの頑なな意思は異様だったのだ。そして、宿に着いて、部屋へと辿り着いても、ルナはランの傍を離れようとしなかった。ゲネシスはランに訊ねたい事が山ほどあったのだが、構っていても時間の無駄だろう、というオーロールの助言もあり、諦めて、オフィーリアとルナ、ランを部屋に残して、買い出しに行くことにした。なんせ、リヴァイアサンを倒して以来、ずっと旅を続けていたのだ。消耗品も底を突きている頃だ

った。それに、資金も絶えてきている。キュベレーに翻弄され続けて気にしていなかったのだが、国の者や他の討伐軍の者達をあまり見かけなかったのだ。今、国がどうなっているのかなどの情報も、特に入らなかった。

「入らないってことは、何ともないってことなんじゃないのかい？」

オーロールは影からそう言った。

確かにそうかもしれない。だが、ゲネシスの心はなかなか晴れなかった。不穏ばかりが包み込んでいる時勢に、心が晴れ切ることなんてあり得ないのかもしれない。

「それに、この町になら、他の連中もいるかもしれないじゃないか」

オーロールはのんきにそう言った。もしもそうならば、オーロールもまた、討伐されかねないのだが、彼女は彼女で余裕があるのだろう。そして、オーロールの言う事は確かだった。オーロールと密かに話しながら町を歩いていたゲネシスが見つけたのは、国に仕える討伐の戦士の姿だったのだ。

127. HEKATE

127.

この世を支える杭を探し出し、壊す。その何がどう簡単なのか、ディアナとバステトは疑問に思っていた。まず、この世の事をよく分かっていない二人にとって、この依頼は未知そのものだった。けれど、アマリリスが断らない限り、彼女達には決定権もなかった。もはや、彼女について行かなければ、どうにもならないのだ。つまり、アマリリスが引き受けるのならば、ディアナもバステトも、それに抗う事なんて出来なかった。ここは何処で、自分達は何に巻き込まれているのか、しっかりと理解する前に事は起こっている。

「この世界を支える杭は、地底の奥深くにあるといわれている」

魔物の長はそう言った。もうすっかり、杭を壊しに行くという事になってしまっているようで、ディアナもバステトも話についていくのに必死だった。アマリリスだけが、冷静に聞いているようだった。

「杭は一つだけではなく、三つあるとか、五つあるとか言われている」

「つまり、定かではないのですね」

アマリリスの甘く妖艶な声が、魔物達の影に反響していく。魔物達の肌の色で薄暗くなっているこの空間が、仄赤く染まっているかのようだった。

魔物の長は、地図と羅針盤を机の上に置いて話をしていた。今いる村には、ピンが刺してある。ディアナもバステトも見たことのない形のピンだった。炎のような光が揺らめいていて、燃えているかのようだったが、触っても熱くないのだ。魔物達にとっては当り前の代物らしい。そして、アマリリスもまた、さして興味を持つこと

はなかった。村を示すピンからは、三本の赤い線と、二本の青い線が、均等に伸び、四方に真っ直ぐ引かれていた。それぞれの線が突き当たるのは、いくつかの土地。赤い線は、山、海、森に、青い線は、地図上からは何があるかも分からない場所に続いていた。

「一番近いのは、森。だが、その森も広大で、杭が何処にあるかなんて分かりもしない」

魔物の長は澄んだ目でそう言った。

「でも、必ずその場所に一つある」

アマリリスの言葉に、長は深く頷いた。

「魔女の貴女の力は、我々のような一介の魔物を遥かに凌駕するのでしょう。杭のある場所はきっと貴女を導くに違いない。もしも貴女がお告げに出てきた異世界からの魔女であるのならば、杭は必ず貴女を呼び寄せるでしょう」

「杭を壊すには、どうしたらいいの？」

アマリリスの問いに、魔物の長は、他の者達に指示をして、何かを持って来させた。それが何かは考える暇もなかった。目の前に出されたのは、一つの剣だった。それは、ディアナとバステトが見ても、明らかな異様さを含むものだった。アマリリスはそれをじっと見つめ、一つ頷いた。

「剣……ヘケートの剣？」

アマリリスが驚きを隠せない様子でそう言った。

「収められているのは、エンプーサ……」

そう呟くアマリリスを、魔物の長はまじまじと見つめた。品定めをするような目つきから、段々と敬意の籠った目付きへと変わっていく。剣を手にとって恍惚としている彼女をじっと瞳に映すと、魔物の長は静かに頭を垂れた。

「やはり、貴女のようですね。エンプーサは長くこの地に留まっていました。この剣をここへ持ってきたのは、女神ヘケート様の使命を受けたと自称する旅人でした。彼はヘケート様からの愛を受けたと言い、この村に剣を隠すことが命であると、時の村長にエンプー

サの封じられた剣を託したのだと言います。貴女に託されるためにここへ来たのでしょう。どうか、持っていってくださいませ」

剣を持ったアマリリスの目は、まるで、人狼を殺す時のように鋭かった。

「確かに引き受けましょう。この剣と共に」

128. HUNTSMAN

128.

ゲネシスはすぐに戦士の元へと歩み寄った。戦士の目は死んだようになっている。それは相変わらずだ。実際、死んだような心の持ち主などざらだった。あいにく、その戦士は見覚えのある者ではなかった。だが、ゲネシスが近寄っていくと、その死んだような目に突如光が宿った。ゲネシスは少し驚いた。国に仕える戦士にしては、あまりに活き活きとした目だったからだ。

「君は、国に仕える者か？」

戦士がゲネシスに訊ねた。爽やかな青年の声だった。ゲネシスは頷き、自分の懐をちらつかせた。国の紋章が刻まれている札を見せて、戦士に答えた。

「私の名はゲネシス。各地に散らばる悪しき魔女を狩るために野に放たれた猟犬だ」

「魔女狩りの、ゲネシス……」

戦士はそう呟くと、己の懐もちらつかせた。ゲネシスと同じような札が見える。だが、その形と色は若干違った。

「私はミヒャエル。狼を狩るために呼ばれた猟師だ」

「狼？」

ゲネシスははっとした。もしもこの男が聡いものであるならば、ゲネシスの影に纏わりついているオーロールの気配すらも読み取ってしまうかもしれないと思ったからだ。そして、この男の真っ青な目は、それすらも可能なように思えたのだ。ゲネシスは警戒心を密かに強めながら、男を探った。

「では、あなたは魔物狩りのミヒャエル」

「そうなるな」

ミヒャエルはくっくっと笑うと、ゲネシスをじっと見つめ、首を傾げた。金髪碧眼という美しさの定番ような特徴を持っている彼だが、ゲネシスにとっては、その美しさよりもずっと、身体の内側に含まれている威圧的な気配のほうが気になって仕方なかった。肉体の力以上の何かが、彼に宿っているような気がしてならないのだ。

（思い過ごしではないようだ。この男、全てを見通しながら、それをただ見ているだけだろう。時が来るのをじっと待つのだと思う）

オーロールの声が、ゲネシスの頭の中で聞こえた。その事すらも、彼は見通しているかのような目をしていた。だが、オーロールの言うとおり、彼は何も言わなかった。

「ゲネシス、といったね。君がここにいるということは、魔女がここにいるという事？」

「同じ事をあなたにも訊ねたい」

ゲネシスは慎重にそう言った。気の動転など、悟られるような事は今まであまりなかった方だが、今の時ばかりは緊張が拭えずにいた。ミヒャエルは飽く迄も涼しげな雰囲気を崩したりしない。ゲネシスにとって彼は、敵に回したくないタイプの人物そのものだった。

ゲネシスは俯き気味に、付けくわえた。

「私がここにいるのは、別に、魔女を狩りに来たというわけではない。探しているだけだ」

質問の答えを得られて安心したのか、ミヒャエルは溜め息混じりに笑みを崩しながら、ひとつ頷いた。

「そうか。回答を得られて嬉しいよ。ならば、こちらとは事情が違うらしい。私は依頼されてこの地に来たからね」

「依頼？」

ゲネシスが問い返した時、ゲネシスの影に潜むオーロールが、納得したかのように低く唸った。

129. IVY

129.

アマリリスに導かれて、ディアナとバステトは魔物達の村を後にした。一番近いのは森と言われていたが、それがどのくらい近いのか。この世界における近いがどの程度のものなのか、ディアナもバステトも一抹の不安を感じずにはいられなかった。

森はとても静かで、ディアナやバステトにとって、自分達がよく知っている世界と代わりのないように見えた。ただ、そこに住む動物達は、魔物が大半で、当り前の鳥や動物達は、見かけることがなかった。もしかしたら、いないのかもしれないと思うようになったのは、森を突き進み始めてから半日以上経った時だった。森は広大で、進んでも進んでもどこまで進んでいるのか分かりもしない。だが、アマリリスの歩みに戸惑いはなく、ディアナもバステトもそれだけが救いだった。

アマリリスは剣を手に何度も精神を集中させては、道を決めているようだった。もしかしたら、この魔の剣が、彼女を導いているのかも知れないということは、ディアナにもバステトにもすぐに分かった。ただ、それについて触れることが出来なかったのは、剣とアマリリスの間に、入りこむ余地がなかったからだ。

「杭って、どういうものなのかしら」

森を進み続けてもう何日経ったのかも分からない。ディアナはぽつりとそう言って、そういえば、ここ最近ろくに声も発していなかったことに気づいた。アマリリスだけが、剣の介入によって杭について知っているに違いない。だけれど、アマリリスは何も語ろうとしないのだ。ディアナはそれが心細かった。

「ねえ、アリス。杭って何本あるのかな?」

五本とも三本とも言われている杭。その曖昧さは、どうにかはっきりとさせておきたい要素の一つだ。けれども、アマリリスはやはりなにも言わなかった。ただ剣にのみ集中を高め、黙して進み続ける。ディアナはやがてアマリリスに回答を求める事を諦めて、肩を落として後に続いた。バステトも何も言えなかった。今のアマリリスに何を訊ねても返答は来ないだろうとわかっていたからだ。

黙して進み続けていたアマリリスが立ち止まったのは、蔦の絡む鬱蒼とした地帯だった。今まで進んでいた涼しげな森とは一線を逸しており、その蔦の先にはいかにも何かが隠されていそうな場所だった。見るからに怪しいという場所。アマリリスはその場所をじっと目に映すと、やがて、吸い込まれるように蔦の向こうへと入りこんでいった。ディアナもバステトも一瞬戸惑ったが、すぐにアマリリスの後を追った。

「アリス。ねえ、アリス……！」

ディアナが呼ぶ名前も蔦の間に絡められる。アマリリスは後からついてくる二人の存在など忘れてしまったかのように、どんどんと先へ進んでいった。

130. LIVE BAIT

130.

ゲネシスが訊ねると、ミヒャエルは眉を潜めた。まるで、当然のことを訊ねられたかのようなその態度に、ゲネシスは唇を噛んだ。魔物狩りの戦士であるミヒャエルに舞い込む依頼と言えば、その内容しかない。だが、ゲネシスが気になったのは、ミヒャエルが狩ろうとしているのが、狼なのか、狼じゃないのかだった。魔物狩りといっても、戦士である彼らにも魔女狩りの要請は来る。民衆にとってみれば、魔女も魔物も同じようなものという事だろう。

ゲネシスのそんな気持ちを察したのか、ミヒャエルは顎を掻きながら答えてくれた。

「そうだね。君は知らないらしいから、教えてあげるよ。この町の住人達は正体のつかめない者に畏怖している。それが魔女なのか、魔物なのかは分からないが、確実に町に潜んでいるらしい」

「正体がつかめない？」

聞いた事もない事例だった。大概の要請では、犠牲者の状態で何が原因なのかが分かる。すなわち、獣によるものなのか、否かである。食い荒らされていれば、大体は狼の所為になる。そういうものだった。特に目立った外傷がない場合、魔女が疑いをかけられる。いずれにせよ、疑わしい者から隔離され、処刑されていくのが常だった。

「もうすでに、五人の犠牲者が出て、四人の被疑者が処刑されたらしい」

ミヒャエルの一方を指差した。ゲネシスにはそれが何かが分かった。魔女にしろ、人狼にしろ、処刑が行われるのは同じ方法。吊るされ、バラバラにされ、燃やされるのだ。吊るされるだけで死ねればまだ楽だろうに。バラバラにされるまで生き残ってしまうことも

あるらしいと聞く。沢山の罪のない者が、人狼や魔女の所為で殺されてしまうのだ。

（私からすれば、勝手に疑って身内を吊るす貴方達が悪い）

オーロールがゲネシスの影でそう言った。人狼の立場的にはそうなるのだろう。彼らも生きるために人間を狩っているに過ぎない。人間が野の獣を狩るのと同じだ。

魔女ならば、魔女と噂されている者を次々に質せば終わる。人狼ならば、被害者の状況を照らし合わせていけば、自ずと容疑が絞られていく。でも、今回は正体がつかめないというのだ。それならば、この町に潜んでいる犯人をどうやって見つけ出すというのか。

「手口は分かっている。若い娘が被害者だ。娘達は皆、忽然と姿を消し、三、四日後に無残な姿で発見されるのだ。全て、食い荒らされた遺体だが、その食い荒らし方が普通の人狼のそれとは少し違う」

「違うと言うと？」

「噛み痕が、人間のものに似ているのだ」

「それは――……」

人狼が人間の姿で噛み荒したからじゃないかと言おうとしたゲネシスだったが、それを真っ先に否定したのは、オーロールだった。

（姿は人間でも、本性は狼なのよ。噛み傷はどうしても狼になってしまうもの）

他ならぬ人狼が言うのだ。ゲネシスは口を噤み、言葉の続きを待っていたミヒャエルに首を振った。ミヒャエルは、やや怪訝そうにしていたが、気を取り直して続けた。

「娘達は生きている間に散々弄られ、生きたまま臓物を引っ張り出されて果てている。猟奇殺人にしても、娘を攫う方法が掴めないのだ」

「なら、どうやって突き止めるんだ？」

「次に犠牲になりそうな娘を見張るしかない」

ミヒャエルの言ったことは効率の悪い事だった。しかし、今のこの状況ではそれをするしか方法はないのかもしれないとゲネシスは

納得した。若い娘というと、どのくらいの娘なのだろうか。ゲネシスは犠牲者たちのことが少し気になった。食い荒らしているという事は、魔女であれ、魔物であれ、もしくは人間であっても、人食いに他ならない。人食い。人食いには苦い想い出しかない。世界を滅ぼしても、救いたかったラジカ。その命運を握ったままのキュベレーを狂わせたのは、赤い魔女と一緒にいた人食いだった。

（面白そうな事だ。退屈しのぎに手伝いましょうか）

静かな笑いを漏らしながら、オーロールが言った時、ゲネシスはまっすぐミヒャエルを見上げた。

「で、その娘は？」

131. GENIUS OF THE FOREST

131.

アマリリスが引き寄せられるように蔦の向こうへ行った時、思わず呼びとめてしまったのは、本能的に恐怖を感じたからかもしれない、とディアナもバステトも同じように思っていた。明らかな異様さという点で、この場所の雰囲気は、かの大いなる生き物たちの住処のそれによく似ていた。だから、そんな主のようなモノがいてもおかしくないと二人とも思っていたのだ。そして、それは的中した。

アマリリスだけが、冷静にそれを見ていた。森の主であろう獣。黄金の気に覆われた、剣のような牙を持つ虎のような獣だった。獰猛な目付きには、理性など宿っていないかのようで、それは、猛獣に変身できるディアナでさえも、畏怖すべき獣だった。だが、アマリリスだけはそれを涼しげな顔で見つめていた。

アマリリスは獣の前で、剣をかざした。まるで、そうしろと誰かに指示を受けたかのように。その剣を、虎のような獣はじっと見ていた。じっと見つめ続けて、やがて、ゆっくりと唸りだした。ディアナには、この獣がなんと言っているのかが分かった。ディアナの獣の性が、察知したのだ。

獣の目は、鋭かったが、まるでアマリリスの事を探っているかのようだった。ディアナとバステトの見守る中、アマリリスが剣を下した。そして、彼女は真っ直ぐな瞳を獣へと向け、ぼそりと口を開いた。

「そう。あたしは頼まれただけ。それがあたしなのかは分からないけれど、頼まれて引き受けた。それが全てよ」

獣への返答だった。バステトには何が何だか分からなかったが、ディアナには分かっていた。全てのやりとりが理解出来たのだ。ア

マリリスの返答の直後、ディアナはクーガーの姿へと変身した。それを見て、バステトはどうにかこれから始まる戦闘を予感した。

アマリリスが剣を構えた瞬間、獣は咆哮し飛び上がった。その巨体からは想像も出来ないほどの速さに、バステトは怯んだ。この大きさを誇る獣を相手に、助太刀など出来るのかという疑問がバステトの脳裏を過ぎっていた。しかし、ディアナは迷わずに飛び込んでいった。獣の肉体を得た彼女は、相手も獣である以上、同じことなのかもしれない。バステトも、意を決して獣へと近づいていった。

獣が見つめているのは、アマリリスだけである。その目を盗んで、そっと足元へと忍び寄ることは出来なくもなさそうだった。だが、飛び上がった獣が着地をすると、バステトには立っていることも困難な程の衝撃が生まれた。金の毛並みを振りかざし、獣はアマリリスにだけ向かっていった。ディアナもバステトも、すぐさま助太刀に入ろうとしたが、なにぶん、先程の衝撃の所為で二人とも行動が遅れた。追いつけるとすれば、ディアナだが、それを遥かに凌ぐ大きさと速さを獣は持っている。そんな怪物が突っ込んでくるというのに、アマリリスの涼しげな表情は相変わらずだった。

獣の鋭利な爪が、剣に軽々と弾かれた。アマリリスの魔力なのか、剣の持つ魔性なのか、見ているディアナとバステトには分からない。だが、弾かれた瞬間の隙に、ディアナが、そしてバステトが、獣とアマリリスの元へと近づくことが出来た。ディアナは近づくなり、獣の足の腱へと牙を打ち込んだ。その直後、獣の怒声に混じった悲鳴を聞いて、バステトも忍ばせていたナイフで、反対側の足を切り刻んだ。これだけで、アマリリスの方が有利になるはずだった。

そして、アマリリスは、今の瞬間の好機を逃すような魔女ではなかった。

「ホント……」

アマリリスの構えた剣が、真っ直ぐ、獣の胸部へと突き刺さる。

「杭って、どういうものなのかしらね」

剣はそのまま天へ向かって突き上げられる。獣の体内から空へと

舞い上がった剣の周りでは、噴水のような血飛沫が空気を赤に染めていた。鮮血はそのまま地面をも色どり、緑が占めていたこの空間を赤く、赤く染め上げていった。

獣はもう何も言わなかった。その目はただ、驚いた表情でアマリリスを凝視したまま、濁っていった。

132. DELICACY

132.

端麗な容姿は、ゲネシスからすると、まるで人形のようだった。

ミヒャエルが示したその娘、カーミラは、際立った家の娘というわけではなかったが、その容姿のおかげで、只者ではない雰囲気が存分に醸し出されていた。ミヒャエルによれば、カーミラが狙われているという噂される影には、カーミラ自身の体験が大きく関わっているという。それは、目撃。彼女が唯一人狼が一人の娘を殺害する現場を目撃した娘だった。だが、ゲネシスは疑問だった。どうして、カーミラは疑われていないのだろう。犠牲者や人狼を目撃したと騒ぐ人こそ、注目を浴びやすいものである。特に、殺害された時点で犠牲者の傍に居た人物ほど、吊るされかねないものである。

しかし、ミヒャエルもまた、カーミラを疑ってはいなかった。それには、いくつかの理由があった。一つは、カーミラが人狼にしては、あまりに目立ち過ぎていること。そして、もう一つは、カーミラこそ人狼にとって最高の御馳走になり得ること。

「どういう意味だ？」

（簡単なこと。あの娘は羊なのさ。私ですら喉から手が出るほど味わいたいくらいのね……）

オーロールの渇望的な声に、ゲネシスは眉を潜めた。人間には分からない魅力が、カーミラにはあるのだろうか。いや、人間にもそれは通用しているのかもしれない。現に、カーミラは、今まで殺されずに成長できているのが不思議なくらい、誰かに殺されそうな魅力を放っていた。そんな魅力があるなんて、俄かには信じがたいことだが、実際にその目でカーミラを見たゲネシスは、よく分かった。

「他の町がそうであるように、この町にも、集中力を高めれば、特

定の人物の正体を見破れる霊媒師が複数いるらしい。その誰もが、カーミラを無垢の羊であると評価しているそうだ」

誰一人として、カーミラを疑う者はいないというのだろうか。それはそれで、奇妙な話だった。しかし、ゲネシスもまた、カーミラは狼ではないという確信があった。オーロールの所為である。そして、自分自身の直感の所為である。カーミラは、どうあがいても、殺す者ではなく、殺される者であることは確実だった。

「依頼を受けて以来、カーミラの様子は度々見ている。実際に、人狼らしき怪しい影が彼女の近くに忍びよった事もあった。きっと、この町に巣食う人狼達は、カーミラを狙っている。そして、他の犠牲者である娘達のように、散々弄んで喰い殺すつもりに違いない」

淡々とミヒャエルはそんな事を言った。

黙したままカーミラを見つめるゲネシスの影の中で、オーロールもまた妖艶な笑みを浮かべていた。

（ああ……それが出来たら、どんなに素晴らしいだろう）

その声は、ゲネシスにしか聞こえなかった。

133. DESTROY

133.

真っ赤に染まった剣が、その少し前まで白刃であったことを、ディアナとバステトはそれぞれ思い出していた。同じくらい赤い衣に身を包んだアマリリスが見つめるのは虚空。血飛沫が霧のように立ち込め、ディアナとバステトの鼻に、まとわりつくような匂いが辺りに漂っていた。今さっきまで動いていた肉片には目もくれず、アマリリスはじっと虚空を見つめた表情のままで、たった今殺した命が守っていた場所を見つめた。血に塗れた剣を握りしめているその拳。何かを決意したかのようなその姿に、ディアナもバステトも何も言えないまま見つめていた。

アマリリスはやがて、静かにそちらへと近づいていった。何も言わないまま、引き寄せられるようにそちらへと向かっていく。ディアナはどうするべきか迷った。共に近づいていいものか。しかし、バステトが歩み出したので、ディアナも恐る恐るそれに続くことにした。二人がついて来ることに対して、アマリリスは特に気に留めなかったのか、それとも、気付かないほどにその場所に気を取られていたのか、全く振り返らなかった。

獣が守っていた場所に何があるのか。考えるまでもなく、それは見えていた。木漏れ日を受けて輝いているそれは、アマリリスが近づいてくるのを待っているかのようだった。ディアナとバステトはその場所への入り口となっている地点で止まり、後はアマリリスを見守ることにした。今となっては、輝いているそれが、杭と呼ばれていたものなのかと問うあてもない。だが、アマリリスは分かっているようだった。そして、その確信が何処から来ているのかは、ディアナには分かった。獣とアマリリスの会話を耳にしていたディア

ナには、よく分かった。
アマリリスが杭らしきそれに到達した時、何故か、ディアナもバステトも、身震いした。とても怖いモノを見ているような気分になった。それは、獣がアマリリスによって八つ裂きにされた時には感じなかったものだった。どうしてそんな気持ちになったのかは分からない。だが、今、行われようとしているこの儀式が、ただ事ではないと言う事だけが、二人にはよく分かった。
そして、きっと、アマリリスもまた、感じているのだろうとディアナは察した。
「そうなのね……」
アマリリスはぽつりと言葉を漏らした。そして、振り上げられたのは、赤く染まったままの剣。あれだけの無理づかいをされていながら、特に痛んでいる様子もない不思議な剣だった。
「あなたが、要なのね」
アマリリスの言った意味が、ディアナにも、バステトにも分からなかった。分かろうと思う事さえも、愚かに感じるほど、アマリリスとこの世界は一体化していた。
そして、アマリリスは、剣を振り下ろした。

134. GROUNDLESS

134.

カーミラを見守り続けて暫く。人狼の被害がゲネシスの耳に入ることはなかった。カーミラに怪しい者が近づく気配もなければ、その他で誰かが人狼に襲われたという噂も聞かない。オーロールはそれを、単に警戒しているだけだと説明した。ゲネシスとオーロールの気配に怯えているに過ぎない、と。だが、ゲネシスはどうも腑に落ちなかった。

しかし、ゲネシス達が町に到着して五日目の朝、人狼の被害が久々に出てしまった。犠牲になったのは、町のパン屋の女だった。共に暮らしている夫が発見した時には、誰だったのかも分からないくらいに喰い荒された後だったという。しかし町人達に疑われたのは、妻の死に嘆いている夫だった。一番身近にいたこと、そして、妻がたびたび夫の暴力を友人に漏らしていたことが原因でもあった。無論、夫は必死に反論していた。それは、ゲネシスが見ていても痛々しい程の姿だった。だが、彼に明日はないこともゲネシスにはすでに分かっていた。

（私なら町を去る前に家族を喰い殺すけれどね）

オーロールがそう言っている中で、パン屋の夫の処刑は決まってしまった。この惨いやりとりは、ゲネシスが来る前から行われていたのだ。狼に間違われて殺されていく者の死を見るのは、気持ちの悪いことだった。だが、ゲネシスが止められるような事でもなかった。

「誰かが大地主にでも掛け合って、御触れを出させるしかないのさ。だが、そんな御触れを出す地主なんて、この大陸に居る事もないだろう」

ミヒャエルはそんな事を言った。魔女狩り、狼狩りを率先してやるのがこの大陸に点在する国々に共通していることだった。現に、狼は何処かに居る。だから、疑わしいモノを殺してしまう事は、仕方のないことだとでも言うのだろうか。ゲネシスは明日の朝に殺される事が決まったパン屋の男を見つめながら、一人で考えた。一つだけ明らかなことは、オフィーリア、ルナ、そしてランは宿から出すべきでないこと。そして、オーロールの存在を知られないこと。自分の身を守るためにも、それはとても大事なことだった。

（私は私で勝手にやらしてもらうよ。お前だって、それを止める程不器用な人間でもないのだろう？）

オーロールに問われ、ゲネシスは黙したまま考えを巡らせた。カーミラを見守るのは、見返りを求めているからに過ぎない。善意ならば、今も人を襲って肉を食べているはずのオーロールをもとっくに切り捨てている。だが、それをしないで、オーロールを野放しにしているのは、誰もオーロールを退治してくれと言っていないからに過ぎないのだ。ゲネシスはそんな自分を時に嫌悪しては、開き直っていた。

「どうしたんだい？」

ミヒャエルに問われた時、ゲネシスはカーミラの住まいの傍にいた。ここを張っていれば、いつかこの町を襲っている人狼を見つけ出せる。そうすれば、ミヒャエルの受け取る報酬の半分ほどを譲ってもらう約束になっていた。旅をする以上、金は必要である。金さえ受け取れば、この町も去る事になるだろう。狼狩りなんて、ゲネシスにとっては、その程度のものだった。

ゲネシスが探しているのは、魔女。

キュベレーの居場所だ。

「まあ、いい。昨日はパン屋のおかみをやったばっかりだからね。今日は現れないかもしれないな」

ミヒャエルがそんな事を言った時、カーミラが洗濯籠を持って家から出てきた。

「追うぞ」
ミヒャエルの言葉に、ゲネシスは従った。

135. HAILED

135.

ディアナも、バステトも、杭を壊した時、アマリリスの何かもまた壊れてしまったかのようになってしまったように感じた。二人とも杭には手を出さなかった。それに手を出してはいけないような気がしてならなかったからだ。しかし、ディアナだけは、感じていることがあった。

次の杭。杭があるところは、自分だけが知っている。自分だけが分かっている。そんな気がしていたのだ。そして、アマリリスは、それを理解しているようだった。アマリリスの静かな視線を受けて、ディアナはそっとバステトに漏らした。

「次の杭は、もしかしたら……」

ディアナが感じている場所は、深い海の底。地上の者が辿り着けるのかと疑うくらいの深海に、ディアナは杭の存在を感じていた。守っている何者かが身を潜めている、暗い、暗い、海の底。ディアナが行かなくてはならない場所。ディアナを呼んでいるのは、確かにその杭で間違いなかった。

「引き受けたのは、あたし」

アマリリスが鋭い声で言った。

「けれど、杭が選んだのは、あなた」

アマリリスの目は、まるで人狼のようだった。正体を現す時の人狼の目にとても似ているとディアナは思った。きっと、バステトもまた、ディアナと同じような恐怖を覚えていることだろうとも、ディアナは想像した。そのくらい、アマリリスの目は狂気的だったのだ。しかし、アマリリスは狂ってなどはいなかった。ただ、頼まれた事をやっているに過ぎない。そして、次の杭がディアナを呼んで

いることを理解し、その協力をディアナに仰いでいるだけの事だった。

ディアナはそれをゆっくりと理解し、そっと頷いた。

「アリスは、海の潜り方を知っている？」

「海……」

アマリリスは一言そう呟くと、少し考えてから返答した。

「あなたを呼んでいるのなら、あなたが行ける場所なのでしょう」

その通りだと信じたかった。だけど、不安を解消するには、その場所まで行かなくてはならない。ディアナは途方にくれた。その場所に辿り着くまで、自分の勘を頼りに進むしかないというのだろうか。これが、アマリリスの勘だったら、不思議と疑いなく従えた自分がいた。しかし、自分に委ねられてしまっては、いきなり不安が襲ってきた。不安は不安を呼び、ディアナを身体の底から苦しめる。これが、杭の呼ぶ声によるものならば、さっさと壊してしまいたいほどだった。

だけど、杭の呼ぶ声は、今、ディアナ達がいる森から程遠い場所からだった。

「あなたについていく」

アマリリスが言った。

「それが、あたしの引き受けた仕事だから」

その言葉が不思議とディアナの緊張を解した。

136. POTHUNTING

136.

ゲネシスが追わなければ、と思ったのは、第六感のようなものだった。それがミヒャエルも同じだったことは言うまでもなく、その事にゲネシスはとても安心していた。国に仕える者達の無機質さと言ったら、同じ国に仕える者であるゲネシスにとっても気持ち悪いものだったからだ。それを、ミヒャエルからは、全く感じられない。それがどれだけ安心出来るものか、ゲネシス自身計り知れない。第六感がある時点で、ミヒャエルは他の者達とは違う、とゲネシスは信じ始めていた。

そして、ゲネシスとミヒャエルの第六感が正しかったことは、町中、そして、白昼堂々といった感じで、カーミラの悲鳴があがったことで証明された。通常ならば、悲鳴が上がった時点で人狼をはじめとする魔物達の仕事は終わっていることが多い。今回もそうであろうと町の者達は思っていただろう。だが、今回は違う。ゲネシスとミヒャエルはこの瞬間を狙っていたのだ。それが、カーミラを助けるかどうかは、二人とも目的から外していた。二人の目的は、人狼の命だけ。そして、その獲物は、駆けつけたゲネシスとミヒャエルの前に姿を現していた。

人狼は本来の姿ではなく、人の姿をしていた。人の姿で、朦朧としているカーミラを抱きかかえている。顔は一瞬で覚えた。ゲネシスもミヒャエルもこの町の者ではないので、その男が誰かなんて知らなかったが、それでも、忘れてしまうような無個性な顔ではなかった。人狼の男はじっとゲネシスとミヒャエルを見つめると、にやりと笑った。二人が駆けつけることなど、見通していたらしい。

「狼の匂いを纏った狩人が来るとは思わなかった」

人狼の男は、そう一言呟くと、すぐにその場を去ろうとした。ミヒャエルは少し出遅れたが、ゲネシスはそれを見逃さなかった。そして、ゲネシスの影に隠れている者もまた、何の気紛れか、ゲネシスに力を貸したのだった。人狼の男はオーロールの存在に気付くと、忌々しそうに唸り、纏わりつくオーロールの気配に対して牙を剥いた。ゲネシスは急いだ。オーロールが何を目的としているかは分からない。だが、オーロールもまたカーミラを狙っていてただ単に横取りのために助太刀してくれている可能性もあるから、安心することは出来なかった。もしもオーロールの存在がばれ、彼女と自分が共に現れた事をミヒャエルに知られれば、この仕事は徒労に終わってしまう。それは避けたかった。

「鬱陶しい女だ。女と見て油断した」

人狼の男は立ち止まって、オーロールが潜んでいるらしい場所を睨んだ。最大の隙が生まれたことに、まだ彼は気付いていない。オーロールばかりに気を取られて、人間の存在をすっかり忘れているのだ。それだけゲネシス達は舐められているのかもしれないが、舐められていようがいまいが、チャンスはチャンスであるのだから、変わりなかった。

ゲネシスは己の剣に精神力を集中させながら、静かに人狼の男へと近づいて行った。

137. GENIUS OF THE OCEAN

137.

潮風にあてられながら、ディアナは血で染まった景色を想起していた。大地を染める血は、かつての仲間が散らかしたもので、その血の主もまた、かつての仲間。仲間が仲間を喰い殺すという残虐な現実は、確かにあったことなのだ。それはいかなる獣の残虐死よりも惨い事で、悲しい事だった。

また、この潮風のべたつきは、アマリリスの表情すらも曇らせるものだった。偉大なる海の覇者に向けた誓いを、単なる人間に破られ、最悪の結末へと繋がってしまったことは、いかに人狼を虐殺し続ける赤い魔女でも、気持ちが沈んでしまうようなことだった。

ディアナはプシュケの事を想い出していた。精霊の血を引く彼女と、それを喰い殺した青い目の美しい女。二人の存在が、世界そのものを歪ませてしまった事が、いまだに信じられなかった。

ふと、バステトが海を見つめ、目を凝らした。

「何かが……」

いる、と言おうとしたのだろうか。その途端、アマリリスが動き出した。海に近づこうとするバステトを突き飛ばし、託された剣を構えて海を睨みつけたのだ。いきなりの事に、ディアナもバステトも驚いた。だが、次の瞬間、ディアナはその理由が分かってしまった。

アマリリスの睨む海面が盛り上がっていく。その大きさに、ディアナもバステトも怯んでしまった。何かとんでもない生き物が出てこようとしている。気色悪い八本の足が、うねうねと動いている。その巨大蛸は、まさに魔物のようだった。柔らかそうな身体をしている反面、海面からの光を照り返している皮膚は、まるで鋼の様で

もあった。蛸の足がアマリリス達をめがけて伸びてきた。すぐさま、アマリリスはそれを剣で払った。

「アリス、引いて」

ディアナの言葉にかぶさる様に、剣と蛸の足がぶつかり合う音がした。それは、生身の蛸の足とは思えない音だった。鋼と鋼がぶつかり合うような固い音。そう、蛸は生き物とは思えないほど鋼鉄な身体を持っていた。アマリリスはそれを確認すると、ディアナの言葉に従って退いた。

「森の時のようにはいかないみたい」

そう言うアマリリスの表情は、何故か楽しそうだった。

ふと、ディアナは耳をそばだてた。蛸が自分達に話しかけてきているのだ。やはり、バステトには通じていないようだが、アマリリスとディアナ自身には通じている。アマリリスはますます笑みを深め、剣を構えなおした。

「そう。それなら、遠慮なく楽しませてもらうわ」

まるで、人狼を狩るときのような表情。仲間さえも不気味がらせるその表情。ディアナは蛸とアマリリスのやりとりをしばし見つめると、意を決してクーガーの姿へと変わった。

138. A COUP DE GRACE

138.

恨めしそうな眼光が、ゲネシスの目に焼き付いた。道端で倒れ伏すのは、四肢を失くした人狼の男。怯えるわけでもなく、ただ痛みによる苦しさと怒りだけが、その表情として現れていた。ゲネシスの影で、オーロールが不敵な笑みを浮かべていた。ミヒャエルは、そして、カーミラは、どんな表情でこの姿を見ているのか、ゲネシスはふと考えた。

辺り一帯は狼の血で染まっており、ゲネシスの剣も、視界も、その赤に染められていた。

「化け物……」

人狼の男が呟くように言った。

「人間の皮を被った、化け物……」

ゲネシスはそれを聞いて、ふと笑みを浮かべた。人間の皮を被った魔物にそんなことを言われるとは思っていなかったからだ。返り血に塗れた顔で、ゲネシスはその男を見つめ続けた。剣をつきつけても、人狼の男は怯まない。ただ、まっすぐ、死を見据えているかのようだった。

「どうせ、歪んだ世界だ」

痛みをも忘れたのか、男は突然笑い出した。力ない笑いではあったが、その奇妙さはゲネシスの笑みを曇らせた。

「これ以上生きていたとしても、希望すらも無くす世界に用はない」

人狼の男の目が見開かれた。

「さあ、刺せ。殺せ。この歪んだ世界から俺を解放しろ」

――狂ったのか？

ゲネシスは疑問に思いつつ、剣を喰い込ませた。すぐに男の笑み

はやみ、その口から血泡が噴きでてくる。ゲネシスはそのまま剣を横に払い、男の首を切り落としにかかる。しっかりとした人狼の首である。何度も力を入れなければ、首を刎ねることが出来ない。時間をかけて骨を砕き、その首を地面に落した頃には、四肢の断面に滲む血も乾いてしまっていた。

全てが終わり、ゲネシスがじっと狼の首を見つめているところへ、やっと声をかけたのは、もはや存在すらも忘れていた、ミヒャエルだった。

「見事だ」

ゲネシスの闘志の消えぬ眼差しが、ミヒャエルを映す。ミヒャエルはこの惨劇にさほど驚いていないようだった。ゲネシスにしてみれば当り前だ。主に魔物狩りをしている兵ならば、このくらいのことは日常茶飯事だろう。ミヒャエルは、やや苦笑いを浮かべ、続けた。

「ただ、狩りにしては、無駄が多いな」

「……歪んだ世界とは、何の事だと思う？」

ゲネシスはミヒャエルの笑みには答えずに、そう訊ねた。人狼の男の最期の言葉が、ゲネシスの頭に引っ掛かっていた。希望すらも無くす世界。それが、自分のしてきた獣狩りに繋がることであるような気がしてならなかったのだ。

ミヒャエルは首を傾げ、しばしゲネシスの表情を見つめた。だが、すぐに目を逸らすと、剣を鞘に戻し、答えた。

「知らんね。だが、ここ最近、狼が狼らしくないのは確かだ。他の魔物の様子も何処か弱々しく感じる。奴らは何一つ変わってないかもしれないがね。ただ、奴らから伝わってくる魔力に、物足りなさを感じるのは確かだよ」

そう言って、ミヒャエルは狼の首を拾った。

139. PRECOGNITION

139.

殺戮が楽しいと思い始めたのはいつからだっただろうか。アマリリスも、最初はそんな自分の本性が分かってしまう瞬間が恐ろしくて仕方なかった。だから、人間達が自分に人狼退治を求める事が疎ましかった時さえあった。そう、確かにそんな時はあったのだ。アマリリスはそれを覚えている。それなのに、今はどうだろう。人狼を始めとした殺してもいい魔物が目の前にいると考えるだけで、血が滾り、胸躍る悦びを感じてしまうのだ。

いつからだろう。もう分からない。それに、もう抗う気もない。殺戮に殺戮を重ねていくうちに、アマリリスの心も身体も、黒く濁っていってしまっていた。そして、巨大な蛸を目の前にした今のアマリリスもまた、そんな殺戮の欲求に取り憑かれた哀れな怪物だった。

アマリリスは蛸をじっと見上げた。殺したい。バラバラにしたい。引き千切りたい。そんなサディスティックな欲望が、アマリリスの身体の中で渦巻いていた。蛸はそんなアマリリスの中身すらも見通しているのだろう。しかし、それでも蛸は、己の使命を投げ出したりはしなかった。

蛸の言葉を胸に受け、アマリリスは静かに頷いた。剣が煌めいている。アマリリスにとってその煌めきは、今にも蛸の身体を刻みたいと言っているかのように思えた。

「心配しないで。すぐにあなたをバラバラに引き裂いてあげる。そうすれば、あなたも安心して杭を託せるでしょう？」

蛸はじっと見つめて、アマリリスの声に答えた。それが、戦いの幕開けだった。この会話が通じていないのは、バステトくらいだ。

だが、アマリリスにとっては問題ない事だった。今回の相手は、バステトの力もディアナの力もいらないくらいだった。杭の場所が分かればそれでいい。今のアマリリスは、助けを受ける事が無性に許せなかったのだ。

「あなた達は下がっていて」

鋭い声に、クーガー姿のディアナが戸惑う。だが、アマリリスはそれに構っている暇はなかった。砂浜を蹴って、剣を握りしめたアマリリスは真っ直ぐ蛸へと向かっていった。とにかく、今すぐに、この蛸に一太刀浴びせたい。そんな欲望がアマリリスの動きを支配していた。蛸もそれを察知し、八本もある腕でアマリリスの動きを阻害しようとする。ディアナが動いた。蛸の足に噛みつこうとしたのだ。だが、アマリリスはすぐさま一喝した。

「ディアナ、バステトと一緒に下がりなさい」

ディアナの戸惑いは一層深まったが、アマリリスに逆らうようなことはなかった。ディアナが下がったのを感じると、アマリリスはじっと蛸を見上げた。素直にディアナとバステトの助けを受けるのが楽だろう。しかし、アマリリスは一人で倒したかった。この蛸だけは、ディアナとバステトに手出しさせたくなかったのだ。

だが、それで勝機はあるのか。それぱかりはアマリリスにも分からなかった。

140. SURPRISE

140.

宿に戻ったゲネシスを、オフィーリアが不安そうな表情で出迎えた。話によれば、ルナとランの様子がずっとおかしいのだという。不吉なことを感じ取っているのだとオフィーリアは懸命に主張した。それに対し、ゲネシスの影に隠れるオーロールも不敵に笑いながらも、その主張に肩入れをした。

「精霊の血を引く者は、特に気配に聡い。獣人のことはよく分からないけれどねぇ。こんなご時世だと不吉でない場所のほうが少ないだろうけれど、そのなかでもとびきり不吉な事がこの付近で起ころうとしているのだろうよ」

オーロールの言葉は確信的だった。それを見過ごす程、ゲネシスは鈍感な剣士ではなかった。

「この町を出よう。報酬は貰ったから、次の町を目指す事にする。そっちでもあの魔女の情報は十分得られるはずさ……」

誰もゲネシスの決定に異論を唱える者はいなかった。善は急げとばかりに、ゲネシス達はその後すぐに荷物をまとめ、宿を出た。急な旅立ちだったが、誰も不審がる事はなかった。ただ、何が起ころうとしているのかは分からない。ルナとランに聞く事も不可能に近しい。オフィーリアでさえも、彼らから聞きだすことに苦労しているようだった。

「まあいい、町を出てしまえば一緒さ」

ゲネシスのその言葉と共に、皆が町を出ようとした時、その行く手に一人の男が立っていた。それが誰なのか、ゲネシスとゲネシスの影に潜むオーロールは分かった。ミヒャエルだ。彼は偶然を装ってその場に居た。装っていることはゲネシスにはすぐに分かった。

表情と雰囲気という何となくの勘だったが、剣士の勘を侮ってはいけない、とゲネシスは自負していた。
「やあ、魔女狩りの」
「魔物狩りか？」
ゲネシスの問いに、ミヒャエルは「まあね」と軽く頷いてからからと笑った。
「全然狩れなかったけれどね」
「この辺の魔物も退治したあの人狼に怯えて逃げてしまったのかもしれないな。他を当たったらどうだ？」
ゲネシスはそう言って、ミヒャエルの横を素通りした。すぐにルナ、ランも続いた。オフィーリアはミヒャエルのことを怪訝そうな顔で窺っていたが、すぐにルナとランの後からついてきた。ミヒャエルはそんなゲネシス達を横目で見送り、呟いた。
「それもそうだね……」
そんな声がゲネシスの耳に届いた時、ゲネシスは静かに剣を抜いた。オーロールもゲネシスの影の中をすっと動いた。辺りに金属音が響く。ゲネシスもミヒャエルも、お互いの顔を無表情で見つめ合っていた。やがて、ミヒャエルはゲネシスの目を見つめ、苦笑を浮かべた。
「さすがは国の使いに選ばれるだけの事はあるよ。勿体無いな。そんな奴をここで斬り伏せなきゃならないなんて」
「さて、斬り伏せられるのはどっちかな」
ゲネシスは静かな笑みを返し、剣を払った。

141．RATIONAL

141．

アマリリスが圧倒的な力が自分にある事に気付いたのは、絶望に打ちひしがれていた少女時代だった。人間と自分の間にある壁に辟易し、人間達からの蔑視と畏怖を一身に受ける彼女は、ずっと孤独だった。そんな彼女が自分の絶大な魔力と能力の高さを認識するようになったのは、見境なしに他者を襲う魔物や、可憐な容姿に惹きつけられて集まってきた山賊達を薙ぎ払っているうちのことだった。

その時に殺戮が楽しいと思っていたかは自分でも分からない。ただ、人間を騙し絶対的な強者であろうとする魔物達を追い詰める事で、アマリリスは全ての鬱憤を晴らしていた。

――それが悪い事だと誰が言えるだろうか。

実際、アマリリスの力を頼って魔物や猛獣の退治を申し込む人間は多かった。人間達に頼まれる度に、アマリリスは獲物の返り血を浴び続けた。その血が自分の身体に沁み込み、少しずつ穢れを集めていると分かっていても、殺戮から得られる恍惚が堪らなく心地よかった。

アマリリスが観ていたのは、命を宿す器が壊れていく様。とりわけ人と狼の姿を成す人狼は並べて美しく、アマリリスはその美しさを壊し尽くす歓喜の味を覚えていった。

――ダメ。これ以上は。

アマリリスを呼びとめる声。その存在を、アマリリスは覚えている。命ある物を殺す度に、この声は再生された。自分を引き留める声。人間達の願いを無視するように助言するこの声。アマリリスは覚えている。だが、それは消えてしまった。いつ消えたか。いつから、自分は躊躇い無く命ある物を殺す様になったのか。アマリリスは蛸を見つめ続け、その命の破壊についての独占欲を感じて、しば

し、剣を持ったまま呆けた。ディアナとバステトの声がアマリリスにとっては耳ざわりだった。なんて言っているかは分からない。アマリリスには、蛸しか見えていなかった。

アマリリスの様子を見つめていた蛸が、何かを判断して海辺へと戻っていく。アマリリスにはそれを追う気力すらもなかった。殺したい。殺したい。殺したい。あの蛸をばらばらにしてしまいたい。ディアナの助けも、バステトの助けもいらない。一人で味わいたい。

そんなアマリリスの動きを縛っていたのは、薄れていたはずの引き留める声だった。

142. DUELIST

142.

執拗に斬りかかってくるミヒャエルの剣を受け止め、ゲネシスはにやりと笑んだ。

ミヒャエル。この男は魔物狩りに奔走している男。国に仕えるものにしてはその自我に目立った歪みはないけれども、ゲネシスにとってミヒャエルのその動きは、魔物並みに分かりやすいものだった。魔女、そして、三大獣に比べたら、このような男は取るに足らないものだった。

だが、やがて、ゲネシスは、ミヒャエルの真っ直ぐな目が捉えているのが、自分ではない事に気付いた。気付いたと同時に、ゲネシスはいったん、ミヒャエルから離れた。すかさず繰り出されるミヒャエルの追撃をかわし、ゲネシスは口を噤んだ。彼が狙っているのは、ゲネシスではない。その影だ。

（鬱陶しいものね。人間というものは）

オーロールが嘲笑しながら言った。ミヒャエルにもその声は届いているのだろうか。猛り声を上げた彼は、まっすぐゲネシスの影の中、つまり、オーロールを狙って斬りかかってきた。ゲネシスは驚いた。自分の影と化したオーロールを正確に認識する人間なんて今まで出会わなかったからだ。

ゲネシスは剣で自分自身と共に影をも守っていた。ゲネシスにとって、影に剣を突きたてられるという事は、自分の心臓を貫かれる事とほぼ同義だった。そして、ミヒャエルが、オーロールともどもゲネシスを葬ろうとしているのは明らかだった。

「悪い奴じゃないと思っていたんだけれどね」

ゲネシスはそう言って、ミヒャエルの剣を弾いた。

「私もまだ死ぬわけにはいかなくてね」
ミヒャエルはとても有能な男のようだった。国に忠誠を誓いながらも、他の者のように精神を喰われずに魔物狩りをしながら生きている彼。興味はあった。オーロールに言われて以来、何故、他の者達が精神崩壊とも思えるような変貌を遂げてしまったのかが気になり始めていたからだ。
だが、そんな彼が自分の命を奪うような男であっては、意味がない。
ゲネシスは溜め息混じりに剣をもう一度、叩きこんだ。力で負けていようと、素早さと動きでは負けているなんて微塵も感じなかった。そして、それはやはり正しかった。呆気なく剣を飛ばされたのは、ミヒャエル。彼は驚いた表情を見せつつも、その目に宿っている敵意は消えようとしなかった。
――殺さなくてはならないのか、人を。
ゲネシスは剣を握りしめた。
――せっかく、いい男に会えたと思ったのにな。

143. HELLHOUND

143.

アマリリスが蛸を逃がした事に、バステトもディアナも驚いた。いずれは殺さなくてはいけない存在を目の前で逃がしてしまうなんて、アマリリスらしくないからだ。いつもの彼女なら、蛸が姿を現したが最後、次の瞬間には細切れになっているはずだった。それなのに、今日のアマリリスはおかしい。蛸に飛びかかれる機会をみすみす逃してしまうなんて、信じられなかった。

「アリス？」

ディアナの問いかけに、アマリリスはなかなか答えなかった。ただじっと蛸の消えた方向を見つめて、何かを考えている。こうなってしまっては、ディアナにもバステトにもどうする事も出来なくなる。物思いに耽る人形のようなアマリリスを脇目に、二人は空と共に色の変わっていく海を見つめていた。

「あの……」

いつまでこうしていればいいのだろう。ディアナがそう思った頃、三人の後ろから、声がした。ディアナとバステトは即座に振り返った。声は青年の声だったが、そこにいるのが青年なのかどうかは分からなかった。人間の様にしゃべるそれは魔物。最初に訪れた村の住人たちと同じだ。そう、ここは彼らの世界なのだ。

「もしかして、ここに住んでいる蛸をやっつけに来たの？」

それとも、少年なのだろうか。そんな疑問を抱いているのは、ディアナだけだろう。アマリリスがゆらりと振り向いたのは、今だった。彼は、犬が人間になったような姿をしていた。謂わば、二足歩行の犬が服を着ているようなもの。アマリリス達の生まれ育った世界にもこういった魔物はいたけれど、それらとは比べ物にならない

ぐらいの穏やかな目をしている。
「どうしてそうだと思うんだい？」
バステトが訊ねると、彼は、子犬のような目を向けて答えた。
「そうじゃなきゃ、あなた達みたいな人達がここをこうやってうろつくわけがないもの」
「たまたま流れ着いたのかもしれないじゃない？」
ディアナがそう言うと、彼は困ったような表情を見せた。
「でも、赤い服のお姉さんは、エンプーサを連れている」
そう言って指差したのは、アマリリスが持っている剣。精霊エンプーサが封じられているという女神ヘケートの剣。アマリリスを全ての杭に導いてくれるというこの剣を、声の感じから年端もいかなさそうな魔物の彼はまっすぐ指差した。
「エンプーサを連れられるのは、あちらから来た選ばれた人だけだって言われているもの」
そう言って、彼はまっすぐな瞳をアマリリスに向けた。
「お姉さん達がそうなんだね？　いや、答えなんていらないよ。剣を持つ者は剣を見せるだけでその全てを語るものなんだ。ねえ、僕達の村においでよ。海の杭を壊す前に、海の話を聞いておくれよ」
犬のような魔物は意気揚々と喋り続ける。ディアナとバステトは顔を見合わせた。相手の強引な態度にどうすべきか迷いが出たからだ。だが、全てはアマリリスの一存で決まると言っても過言ではない。なんせ、ディアナもバステトも反対する理由もなかった。
「どうする？　アリス」
アマリリスはじっと犬の魔物を見つめ、そして、ちらりと蛸の消えていった海を見つめた。このまま進んだとしても、海の中に潜る蛸とどう戦えというのか。そんな壁にぶつかっていることすら分からないほど、アマリリスは冷静さを失ってはいなかった。
アマリリスが小さく頷いたのを見て、ディアナは犬の魔物に言った。
「分かった。案内して」

144. PUPPET

144.

ゲネシスとオーロールに襲い掛かる男を前に、オフィーリアはすぐさま敵意を表した。ルナはランの手を握って端に引っ込んでいる。きっと、この状況に怖がっているのだ。ミヒャエルは今までゲネシス達に牙を剥けたどの者たちとも違う覇気を持っていた。大きすぎる生き物でもなく、ただの人間であるというのは、ゲネシスと同じ。だからこそ、不気味だった。

オフィーリアの魔術での加勢に、ミヒャエルはすぐさま反応した。

「下がってろ、オフィーリア」

ゲネシスに言われるも、オフィーリアは従わなかった。幾ら覇気があるといっても、人間ごときに引けをとるなんて思っていなかったからだ。だが、ミヒャエルはやはり、ただの人間ではなかった。ゲネシスと同じ人間であることは、もっと大きな意味を含んでいた。

ミヒャエルの姿が瞬時に消えたと思ったのは、オフィーリアもゲネシスも、そして、ゲネシスの影のように存在するオーロールも同じだった。オーロールの目すらも惑わすその力は、人間でありながら人間でない力を得た証の様なもの。オーロールはすぐに危険を察知し、咆哮した。

「オフィーリア、さがりなさい！」

ミヒャエルは国に仕える者としては珍しく、自我を失っていない戦士だった。そして、ゲネシスにとっては、好ましい人柄でもあった。だが、その好ましい人柄の中に秘めている圧倒的力については、気になるほど感じてはいなかった。ゲネシスは自分の力にばかり目を向けていたことを認め、反省した。大いなる生き物たちを滅ぼした力を、魔女に利用されてしまった力を信じ込んで、ミヒャエルの能力を測る目を濁らせてしまっていた。

ミヒャエルの姿が再び現れた時、ゲネシスの目に映ったのは、オフィーリアの見開かれた目だった。人外なる能力が成せる力は計り知れない。その未知の力の全てが、オフィーリアの頬を強打した。美しく可憐な顔に、魔性とも思える力は容赦なくぶつかっていく。

「オフィーリア……！」

オフィーリアは人形のように倒れ、地面にぶつかって跳ね、そして動かなくなった。目は見開かれたままで、指の先が少しだけ動いているように感じられた。だが、意識はない。もしくは、あっても動くことが出来なくなっている。

「この子どもも人間じゃない。俺には分かる。魔物の子どもに亜人、人狼……国に仕えながら魔性に足を突っ込むお前は、危険人物以外の何者でもない」

ミヒャエルの声に、ゲネシスは目を向けた。オフィーリアの安否を確認するには、この男をどうにかするしかない。オフィーリアがこうなってしまったのも、自分の責任だとゲネシスは思っていた。この男をもっと警戒していれば、こんな事にはならなかった。

（全く、厄介な奴だ。ゲネシス、この男を殺そう。オフィーリアの弔いだ）

オーロールの声が耳元でした時、ゲネシスの拳に力が入った。

145. WHITE HELLHOUND

145.

アマリリス達が少年に案内された先は、やはり犬の魔物の村だった。正式な名前はないが、彼らは自分達の暮らす村を「遠吠えの原」と呼ぶらしい。群れを作り森で暮らしているうちに、里を開いていったのが村の出来た元だと犬の魔物の少年は説明した。

彼の名前は、バハンといった。つい最近大人になったばかりだが、子どもの頃から漁をしているらしい。だが、天変地異とも言える大地と海の異変が起こってしまい、海底の奥深くで杭を守っている蛸が暴れ出し、漁が出来なくなってしまったのだと言う。アマリリス達を見つけた時は、蛸の様子を確認しに来ていたのらしい。

「あなた達が異世界の人だって言うのはすぐに分かりました。特に、あなた」

バハンはバステトを指して言った。

「見たところ、シーフに見えるけれど、人間のシーフなんて伝説上の存在だって思っていたもの」

この世界における人間は、伝説に近い。魔物達が村を作って大地を支配しているような世界だ。人間が生きていけるはずもない。人間はいるのだろうかとアマリリスは考えたが、すぐに考えを辞めた。どちらにせよ、自分とは関係のないことだ。

「わたしも人間よ。ただ変身できるだけで」

ディアナが訂正するかのように言ったが、バハンはけたけたと笑った。

「何よ、何がおかしいの！」

ディアナが憤慨した時、村の中でも一際豪勢な作りをしている建物の中から、白い犬の魔物が現れた。バハンはそれを見るとすぐさ

ま笑うのを止めて頭を下げた。建物の階段で立ち止まった白い犬の魔物はバハンには目もくれずじっとアマリリスの持つ剣を見つめた。
「エンプーサ……やはり、その時が来たのか」
低い女の声だった。
アマリリスはじっとその女を見つめた。白い犬の女。何処となく人狼に似ている種族だが、全然違うのは本能的に分かる。この者達に対しては、殺害欲求が湧かなかった。どうやら人間に対して湧かないのと同じらしい。
「赤い御なりをしている魔の嬢様は、沢山の血の匂いが染みついているね」
「ランザ様、この方々が……」
「言わなくてもいい、分かっている」
ランザと呼ばれた彼女は、バハンの言葉を遮った。
「その剣を見ればわかる。森の杭が消滅したのならば、海の杭も同じく滅ぶべき時なのだろうて……」
そう言って、ランザは手に持つ杖で、建物の床をこんと叩いた。
「ついて来なさい、異界の方々。あなた方の持つエンプーサを待っている者の所に案内しましょう」

146. LOSE CONSCIOUSNESS

146.

ミヒャエルがこんなに強いと思っていなかった自分を、ゲネシスは恥じた。オフィーリアの援助すらも無駄にし、オーロールと二人がかりでも尚も、決着はつかない。それどころか、容赦ないミヒャエルの攻撃は、脇で怯えているルナとランにも及ぼうとしていた。

もはや隠遁する事も辞めたオーロールが、唸り声でゲネシスに囁いた。

(勝ち目がない。ここは引こう)

オーロールのその言葉に、ゲネシスは動揺した。

「そんな、オフィーリアは奴の足元だぞ?」

(それを取り戻せるのか?)

挑戦的にオーロールに問われ、ゲネシスは口を噤んだ。ゲネシスは、ミヒャエルの元に倒れ伏すオフィーリアを、もう何度も助け出そうとしているのだ。それなのに、その全ては防がれてしまう。ミヒャエルの攻撃を避けるので精一杯なのだ。人質を取られて動揺しているせいだろうか。こんなに自分が鈍足だと思えたのは初めてだった。

(お前のそんな姿は初めて見た)

オーロールが言った。

(たった一人の少年のために世界の規律すらも破ってしまう程の力を持ったお前が、たった一人の少女を人助けるのに、こうも手間取ってしまうとはね)

「何をごちゃごちゃぬかしてる。魔物同士の会話か?」

ミヒャエルの挑発にすら、ゲネシスは乗れなかった。ゲネシスと共に戦火をくぐってきた剣が、こうも獲物を捉えられないのは久しぶりだった。それも、相手は人間。ただの人間なのだ。世界そのも

のの分身とさえ言われている生き物たちを滅ぼしておきながら、たった一人の人間にこうも手間取るなんて、自分でもおかしかった。

「私は魔物じゃない。人間だ……！」

（ゲネシス！）

オーロールの言葉等、耳に入らなかった。オフィーリアを救出することだけは忘れてはいけないとずっと思っていたからだ。だが、ゲネシスがそう決め込んでミヒャエルに飛びかかった時、眩い光が辺りを包んだ。ゲネシスは勿論、オーロールやミヒャエルもしばしその光に気を取られ、そして、皆、その光に驚愕の声を漏らした。ゲネシスは光の中で薄っすらと目を開いてみた。白い光はまるで霧のようになっていて、ミヒャエルも、オーロールも見えない。だが、ゲネシスの目には、誰かの目の光が見えていた。赤く光る両目。魔術を発動している目。それが誰の目なのかゲネシスが気付いたのは、段々と意識が遠のいていった時だった。

――オフィーリア……無事だったのか……。

147. SIRENA

147.

ランザに案内されたのは、海を一望できる岩の洞窟だった。そこはまるで天然の城のようで、石柱の合間から見える海の輝きは、アマリリス達に馴染みのある世界の海と同じくらい綺麗だった。この海の何処かに、アマリリスが殺したくて堪らない蛸が潜んでいる。

ランザの白い身体がすっと洞窟の奥へと向かっていく。海の見える場所から、光も届かないほど暗い洞窟の奥へと向かっていく。ランザの身体は薄っすら輝いているかのようだった。実際に輝いていたとしても、アマリリスは驚かない。魔物というものは、所詮動物とは違う生き物なのだ。

だが、ランザの身体が輝いて見えた理由は、すぐに分かった。

輝いていたのは、洞窟の中だったのだ。それも、一か所だけが銀色に光っている。アマリリスは目を凝らしてみて、そこに置かれている物が光を放っていることに気付いた。真っ直ぐそれに向かって近づいていくランザについて行くと、さらにそれが弓であることが分かった。

「シレーナ」

ランザが口を開いた時、アマリリスの持つ剣が光を放った。まるで、弓の光に反応しているかのようだった。剣から漏れる黄金の光は、蝙蝠の羽の生えた女の様な姿をしていた。アマリリスはそれをじっと見つめ、そして感じた。

――これが、エンプーサ……。

剣の黄金の光に連動するかのように、弓の銀色の光は強くなっていった。そして、その光の中から現れたのは、半鳥姿の女の影だった。シレーナ。ランザの口にした言葉が、アマリリスの頭に甦ってきた。これが、シレーナという者の正体なのだろう。

「時が来た。エンプーサを携える者が、異世界より現れた……」
諳んじるように呟くランザを見つめ、シレーナは弓の上空から離れ、アマリリス達の方へとふわふわと漂いながら近寄ってきた。最初にエンプーサの周りを飛び、アマリリス、バステトの順にシレーナは飛び回った。そして、ディアナの前に来た時、シレーナはそこで止まり、消えていった。
「選ばれた方、どうぞ、ペルセフォネの弓をお取りください」
ランザに丁寧に言われたのは、ディアナだった。
――ああ、そうか……。
アマリリスは理解し、静かにディアナを促した。自分達がここへ飛ばされてきたわけが分かったわけではない。だが、求められている理由は存在している。アマリリスの持つヘケートの剣と、今、ディアナが手にするペルセフォネの弓、それらが導くものこそ、杭の崩壊なのだろう。
ディアナは恐る恐る弓へと近づき、それを手にした。

148. ALONE WITH

148.

暗闇から這い上がるような感覚で、ゲネシスは目を覚ました。辺りは見知らぬ場所。一体どうして寝ていたのかすらも覚えていない。だが、ゲネシスに寄り添うように寝ている狼の毛を触っているうちに、段々と意識がはっきりとしていった。

「オーロール？」

ゲネシスが起きあがると、狼もまた顔を上げた。美しい毛並みを持つ狼の目は、オーロールのものに間違いなかった。周囲を見ても、近くにはオーロールとゲネシス以外の者はいない。ゲネシスは次第に、記憶を失う前の出来事の記憶を取り戻していった。襲い掛かってくるミヒャエル。斬り伏せられたオフィーリア。怯えているルナとラン。そして、彼女達を救おうと必死に戦った事。

「想い出した？」

オーロールの声がした。狼の姿のまま、彼女はゲネシスを覗きこんだ。

「オフィーリアに秘められていた力のようだね。まったく困ったもんだ。この私でもここが何処なのかなんて分からない」

オーロールは狼の鼻で小さく息を吐くと、まっすぐゲネシスを見つめた。綺麗な獣の目は、人の姿の時と変わらないはずなのに、ゲネシスの目にはとても妖艶なものに見えた。

「オフィーリアとルナ、ついでに、ランも、あの男とやりあった場所に残したままだよ」

「ああ……そのようだな……」

ゲネシスは寒気を感じた。自分の元から大切なモノがどんどんと零れ落ちていっている気がしてならなかった。キュベレーを捜し出して、ラジカさえ救えればいいと思っていたのに、この事態は一体

何なのだろう。ただの人間の男にさえ負けて、仲間と引き離されてしまうなんて、全くの失態だ。

「ここでは、獣匂いがしない。もっと無機質なモノの匂いしかしないの」

オーロールが何処か遠くを見つめて、そう言った。

「とても嫌な匂い……」

オーロールの呟きは、そのままゲネシスの心に馴染むものだった。剣士として命を受け、町を旅だってからずっと、この身体で少しずつ感じていった匂い。同じ兵士達の心は、まるで、機械のようだった。オーロールの言うとおり、自分の愛剣が守ってくれているのなら、少しは心の足しになる。けれど、それさえも覆ってしまう程の寂びれた風が、国どころか大陸全体を覆っているかのようだった。

国に仕える剣士たちよりも、魔物の方が、魔女の方が、生き物らしさを失っていない気がする。

「あの男……ミヒャエルとかいうあの男には、何かある」

オーロールが言った。

「魔女狩りよりも先に、あの男を捜した方がいいと思うわ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4148m/

Ａｍａｒｙｌｌｉｓ

2011年11月2日03時11分発行